愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第 10 集

廻間遺跡

1990

財団法人　愛知県埋蔵文化財センター

序

濃尾平野南部に位置します西春日井郡清洲町は、平野部のほぼ中央を流れる五条川下流域に属し，町内には弥生時代の大集落である朝日遺跡、あるいは織田信長・豊臣秀吉などと関連が深い清洲城が存在し、愛知県の歴史を代表する遺跡が数多く見られます。このようなことから解りますように、清洲町周辺地域は、交通の要衝として、あるいは文化・歴史の中心地域として、また多くの海産物・農作物の集まる市場として、古代より濃尾平野五条川水系の大変重要な地点を占めていたことがわかります。清洲の町を中心とする地域には古代より人々の往来がたえることなく続き、濃尾平野の歴史を具体的に形作ってきました。こうした歴史的遺産の上に現在の私たちの生活が成り立っていることをここで改めて考えて見る必要があると同時に、子供たちへとこの優れた文化遺産を受け継いでいくことが大切であると思います。

またこのたび清洲町西部に位置します廻間遺跡の調査において、古墳時代初頭の集落が確認され、さらにその内に愛知県下初の発見となりました前方後方型墳丘墓が存在していることが解りました。弥生時代から古墳時代にいたる歴史の大きな節目という重要な時代を考える時，本書に掲載する廻間遺跡の調査成果は学術的にも大変重要な資料として地域の歴史研究に大いに活用されるものであると考えております。

最後になりましたが、廻間遺跡の発掘調査につきまして、各方面の方々に御配慮を賜り、関係機関及び関係者の御指導と御協力をいただいたことに対し、厚く御礼申し上げる次第であります。

平成2年3月

財団法人　愛知県埋蔵文化財センター理事長

松　川　誠　次

例　言

1．本書は愛知県西春日井郡清洲町大字廻間に所在する、廻間遺跡の調査報告書である。

2．調査は名古屋環状２号線（一般国道302号）建設に伴う事前調査として実施し、愛知県教育委員会を通じての委託事業として、昭和60年（1985年）４月～昭和61年（1986年）５月まで財団法人愛知県埋蔵文化財センターが行った。

3．調査にあたっては次の各関係機関の御協力を得た。愛知県教育委員会文化財課・建設省愛知国道工事事務所・日本道路公団名古屋建設局・清洲町教育委員会。

4．本書の執筆は、第Ⅳ章１をパリノ・サーヴェイ株式会社が行い、その他は赤塚次郎が担当した。

5．遺構図の作成については枝廣千代子氏、整理作業・実測図作成については多田富代・山田律子・加藤明美・国井成子・中村いつ子諸氏の御協力を得た。

6．調査区に使用した座標は国土座標第Ⅳ系に基づくものである。

7．挿図・図版に掲載した遺物実測図の縮率はすべて1/4である。

8．出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターにて保管。

9．編集は赤塚が担当した。

目　　次

Ⅰ　調査概要 …… 1

1　経　　緯 …… 1
2　概　　要 …… 2
3　環　　境 …… 4

Ⅱ　遺　　跡 …… 8

1　層　　位 …… 8
2　遺　　構 …… 10

Ⅲ　遺　　物 …… 26

1　古墳時代初頭 …… 26
2　そ の 他 …… 34

Ⅳ　胎土分析 …… 42

1　重鉱物胎土分析（甕） …… 42
2　S字甕の胎土について …… 48

Ⅴ　考　　察 …… 50

1　廻間式土器 …… 50
2　土器・土器群の形成 …… 110
3　遺構の変遷 …… 118
4　ま と め …… 130

別表 …… 133

図　版　目　次

1　廻間遺跡主要遺構
2　遺構図(1)
3　遺構図(2)
4　遺構図(3)
5　SZ01出土土器実測図
6　SZ01出土土器実測図
7　SZ01・SU01・SU02出土土器実測図
8　SZ04出土土器実測図
9　SZ02出土土器実測図
10　SZ02出土土器実測図
11　SB01出土土器実測図
12　SB02出土土器実測図
13　SB03出土土器実測図
14　SB06・10出土土器実測図
15　SB13・14・17出土土器実測図
16　SB12出土土器実測図
17　SB18・19・20出土土器実測図
18　SB23・24出土土器実測図
19　SB26・27出土土器実測図
20　SB29・30出土土器実測図
21　SB32・33出土土器実測図
22　SB34・35・31出土土器実測図
23　SB38・46出土土器実測図
24　SB39出土土器実測図
25　SB40出土土器実測図
26　SB41出土土器実測図
27　SB45出土土器実測図
28　SB45(上)・48出土土器実測図
29　SB49出土土器実測図
30　SB50出土土器実測図
31　SB51出土土器実測図
32　SB51(上)・53・54出土土器実測図
33　SB52・55出土土器実測図
34　SB56出土土器実測図
35　SB59出土土器実測図
36　SB63・64出土土器実測図
37　SB60出土土器実測図
38　SB60出土土器実測図
39　SB65出土土器実測図
40　SB66・67出土土器実測図
41　SB68出土土器実測図
42　SB69・71出土土器実測図
43　SB75出土土器実測図
44　SK26・29・30出土土器実測図
45　SK50出土土器実測図
46　SK50出土土器実測図
47　SK50・51出土土器実測図
48　SK51出土土器実測図
49　SK18・19・20出土土器実測図
50　SZ06・05・SB22・16出土土器実測図
51　SU03・04・SD09出土土器実測図
52　その他出土土器実測図

遺構写真

53　SZ01
54　SZ01・02
55　SB27・12・SK30
56　竪穴住居群
57　竪穴住居群
58　SB80・52・畝状遺構
59　SE31・32・E 区

遺物写真

60　SZ01
61　SZ01・02・04・SB01・39・51
62　SZ02
63　SB02
64　SB17・03
65　SB06他
66　SB41・48・64・45
67　SB60
68　SB60・65・67・68・SD11
69　SB75・SK30
70　SK50・SZ06・SU03
71　SK51・NR01
72　廻間 SB02・廻間Ⅰ式
73　廻間Ⅱ式・Ⅲ式
74　文様・技法

挿　図　目　次

第１図　調査進行図……3
第２図　調査区位置図……3
第３図　古墳時代初頭の濃尾平野……5
第４図　廻間遺跡と周辺の遺跡……6・7
第５図　A・B区基本層序……8・9
第６図　C・D区基本層序……8・9
第７図　SZ01・02・03実測図　……16・17
第８図　住居（C区）……18
第９図　住居（D区）……19
第10図　SB80　……20
第11図　墓地……22
第12図　井戸（14世紀）……23
第13図　祖父江街道と町並の推定……25
第14図　井戸（江戸時代）……25
第15図　SZ01墓前祭の変遷　……29
第16図　砥石実測図……29
第17図　SK50遺物出土状況　……31
第18図　SB60遺物出土状況　……32
第19図　SB02遺物出土状況　……33
第20図　NR01出土遺物(1)……36
第21図　NR01出土遺物(2)……37
第22図　灰釉系陶器(1)……38
第23図　灰釉系陶器(2)……39
第24図　SD05・SE23出土遺物　……41
第25図　胎土グループ別重鉱物組成……47
第26図　甕分類別重鉱物組成……49
第27図　技法と形状……61
第28図　甕Aの変遷……64・65
第29図　甕B・Cの変遷……68・69
第30図　高杯Aの変遷……73
第31図　高杯B・Cの変遷……75
第32図　器台の変遷……77
第33図　壺Aの変遷……79
第34図　壺B・E・Fの変遷……81
第35図　壺C・Dの変遷……83
第36図　鉢の変遷……85
第37図　高杯Aの杯部上段角度……89
第39図　高杯Aの口稜比分布……89
第39図　甕の比率……90
第40図　器種構成比率……90
第41図　甕の口径比率……91
第42図　廻間Ⅱ式３段階……94
第43図　廻間Ⅱ式４段階……95
第44図　搬入・模倣品　……101
第45図　S字甕A類の分布　……105
第46図　S字甕の分類……112・113

第47図　山陰系の共鳴 ……115
第48図　廻間Ⅰ式期脚・台付の土器 …115
第49図　墳丘墓・住居等の変遷…120・121
第50図　住居区モデルの変遷 ……120
第51図　竪穴住居面積分布（時期別） 120
第52図　竪穴住居面積分布（分類） …121
第53図　竪穴住居等の変遷……122・123
第54図　墳丘墓の分類 ……126
第55図　墳丘墓の規模 ……127
第56図　廻間遺跡主要遺構配置図 ……128
第57図　土田遺跡と廻間遺跡 ……129

表　目　次

第１表　主要遺構時期区分……10
第２表　胎土分析試料表……45
第３表　重鉱物組成表……46
第４表　文様分類……61
第５表　技法の消長……96・97
第６表　器種の消長……96・97
第７表　編年対照表 ……106
第８表　Ｓ字甕形態・技法の消長 ……113
第９表　墳丘墓一覧 ……126
第10表　主要遺構存続期間 ……127

SZ01

Ⅰ　調査概要

1　経　　緯

廻間遺跡は（遺跡番号[1]21003北緯35°13′東経136°50′）愛知県西春日井郡清洲町大字廻間１丁目１～18に所在し、現在名鉄清洲駅北方0.7kmの名鉄名古屋本線と名古屋環状２号線と交差する地点を中心に広がる遺跡である。

昭和55年（1980年）３月に愛知県教育委員会が実施した環状２号線建設予定地内の水道管埋設工事に伴う発掘調査により新たに発見された遺跡で[2]古墳時代初頭を中心とする遺跡であることが確認され「廻間遺跡」と命名された。その後、名古屋環状２号線に伴う事前調査として南側に近接する土田遺跡の発掘調査が昭和56年から開始されほぼ連続して昭和60年から廻間遺跡の調査が始まり、昭和61年度をもって土田遺跡・廻間遺跡の建設予定地内の全ての調査が終了した。調査の進行上、廻間地内での調査を土田遺跡・松の木遺跡という名称で実施したが、昭和55年度の県教育委員会の調査成果及び名古屋環状２号線での調査成果を踏まえれば、湿地をはさんで南微高地に土田遺跡、北の微高地に廻間遺跡が立地しており[3]それぞれ別の遺跡であることが明らかである。土田遺跡には古墳時代初頭の墳丘墓が存在するものの、その主体は平安時代末～室町時代にかけての中世期を中心とする集落遺跡である。一方廻間遺跡は古墳時代初頭の集落遺跡を基本とする。松の木遺跡は、廻間遺跡北方に存在する弥生時代を中心とする遺跡である。

なお、発掘調査によりＡ・Ｂ区にて前方後方型墳丘墓が検出でき、東海地方初の発見として大きな話題となった。調査終了後、愛知県教育委員会の指示でこの前方後方型墳丘墓は山砂で遺構を保護した後に「埋戻し保存」されることとなった。

〔注〕

1）『愛知県遺跡分布地図(I)尾張地区』愛知県教育委員会　1986。

2）『廻間遺跡』愛知県教育委員会　1983。

3）『土田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第２集　1987。

2 概　　要

廻間遺跡の調査は60年度に「A・B・C・D」の4調査区を、61年度に「E」の1調査区を設定し、発掘調査を実施した。遺跡は古墳時代初頭の集落を中心に展開し、その他奈良時代の建物、鎌倉時代の墓地、そして調査区東側に集中する江戸時代の街道とその町並跡を付加することができた。

名鉄名古屋本線をはさんで南に設けたA・B区では、ほぼ中央を境に南に傾斜する地形が確認でき、それは南方に拡がる土田遺跡との間に存在する小谷状の窪地に連続する緩斜面と考えることができる。この微高地の端には古墳時代初頭の墳丘墓が3基存在し、その内の1基は前方後方形を呈するものである。また微高地から緩斜面となる地点には鎌倉時代を中心とする土壙群が存在し、溝により区画された墓地を形成している。

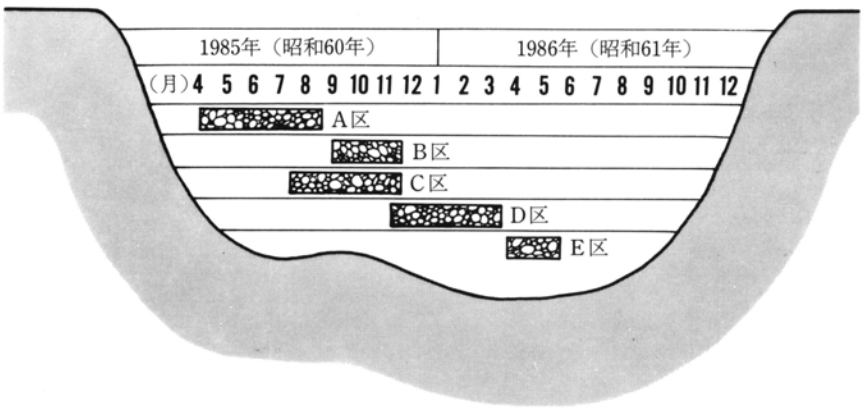
名鉄名古屋本線北側のC・D区は調査区北方に旧河道が東西に向かって伸び、この河道に沿う形で古墳時代初頭の集落が展開する。その南端に墳丘墓が3基検出でき、A・B区での状況をも考慮すると旧河道の南岸には住居がほぼ東西に配置し、その南側では（微高地の南端）墳丘墓が造営されているという集落構造が明らかとなった。

C・D区の北に設定したE区は旧河道をはさんで北岸に位置し、江戸時代前期の井戸・土坑が東西に配置された状況を確認できた。これらは祖父江街道沿線の町屋で、この町並みは東方の清洲城下町へと連続する。なおE区では古墳時代の遺物・遺構は存在していない所から古墳時代初頭の集落は旧河道の南岸に東西に幅広く展開するものと推定することができよう。

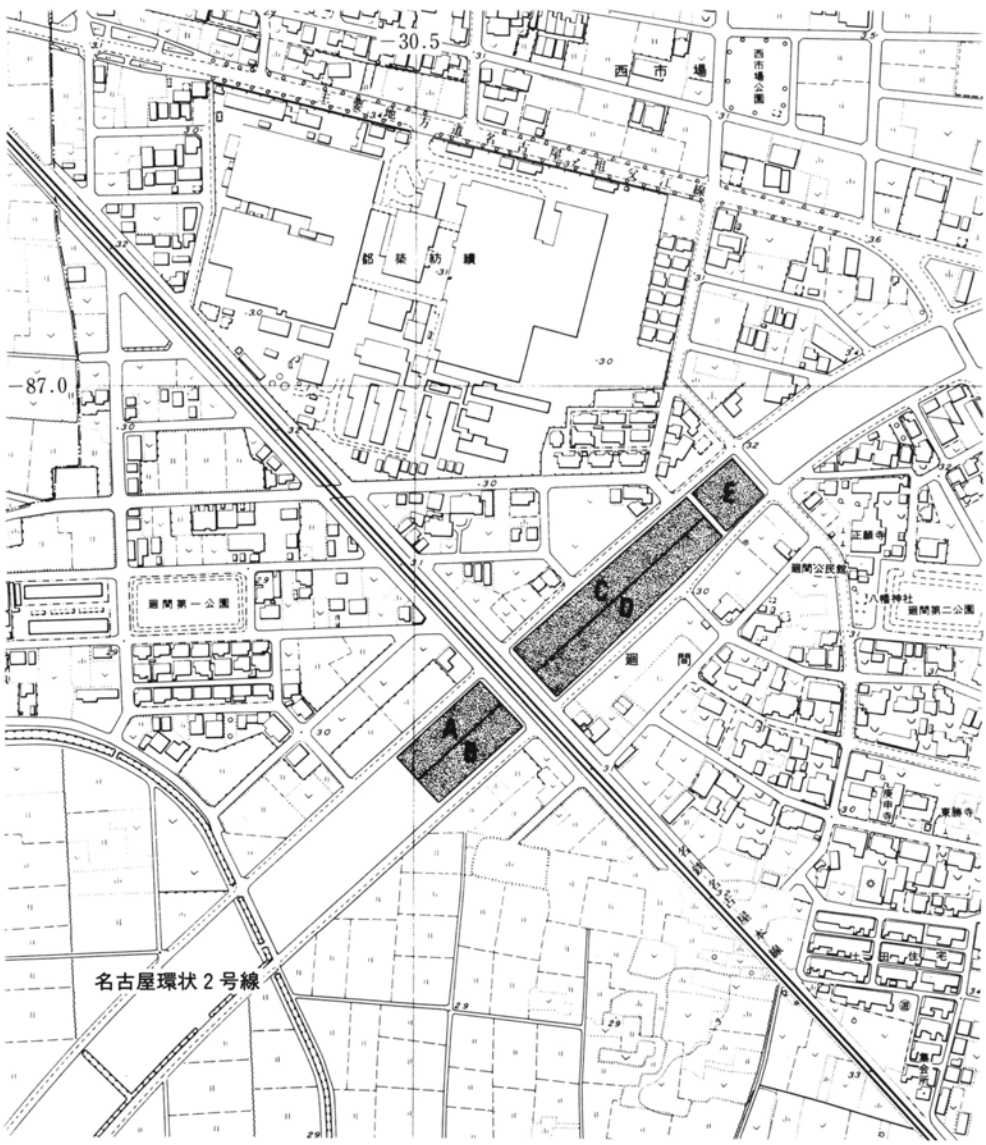
地区別担当者

	旧調査区	担　当　調　査　員	面積
A区	土田遺跡60A区	細野正俊*・平野　清**・赤塚次郎・服部哲也***	3,692㎡
B	土田遺跡60B区	梅本博志・小澤一弘・松田　訓	
C区	松の木遺跡60A区	清水雷太郎****・細野正俊・松原隆治・赤塚次郎 長島　広*****	6,354㎡
D区	松の木遺跡60B区	清水雷太郎・細野正俊・小澤一弘・長島　広 松田　訓	
E区	松の木遺跡61区	酒井俊彦・長島　広	1,545㎡
		計	11,591㎡

*　起小学校　教諭
**　津島高等学校　教諭
***　名古屋市見晴台考古資料館　学芸員
****　尾西第三中学校　教諭
*****　春日井南高等学校　教諭　（1990年3月現在）



第1図　調査進行図



第2図　調査区位置図（清洲町都市計画図　1：50000）

3 環　境

廻間遺跡の現在の標高は2～3m前後であり、遺構検出面はおおよそ1.7m～1.5mほどになる。遺構が存在する西春日井郡清洲町は現在では濃尾平野のほぼ中央やや東よりに位置し、標高5m以下の所謂海抜零メートル地帯に所属している。ところで弥生時代から古墳時代にいたる間の濃尾平野は第3図のような形状であったと推定される。これは国土地理院発行の土地条件図及び愛知県環境部の『愛知県環境利用適正調査』1979を基に地形を推定し、愛知県・岐阜県及び関係市町村の遺跡分布地図から遺跡の位置を取り出しそれを基本に海岸線を復原したものである。

濃尾平野を流れる河川は半径12kmという広大な犬山扇状地を形成した木曽川を中核としており、江戸時代に現在の木曽本流にまとめられるまでには5つの大きな支流となって扇状地部を南流していたものと考えられている[1]。その内中央を流れる日光川・三宅川が最も注目される所であり、その河口部は岬状に南方に突出している状況が復原でき、そこに古墳時代前半を中心とする時期の遺跡が集中する傾向が窺える。この津島市周辺から大垣市にかけて遠浅の海が北部に向かって大きく入り込み、入江状の海が存在したことが想定でき、旧味峰間郡にかけて干満の差が激しい遠浅の海が存在していた。この海こそ弥生時代から古墳時代の人々にとって最も重要な地帯であったと考えられる。そのことは大垣市から津島市にかけて集落が集中し始めることと、古墳時代で最も古い形を残す古墳の造営はこれら味峰間郡に広がる海の周辺部に認められることからも類推できる[2]。

遠浅の海

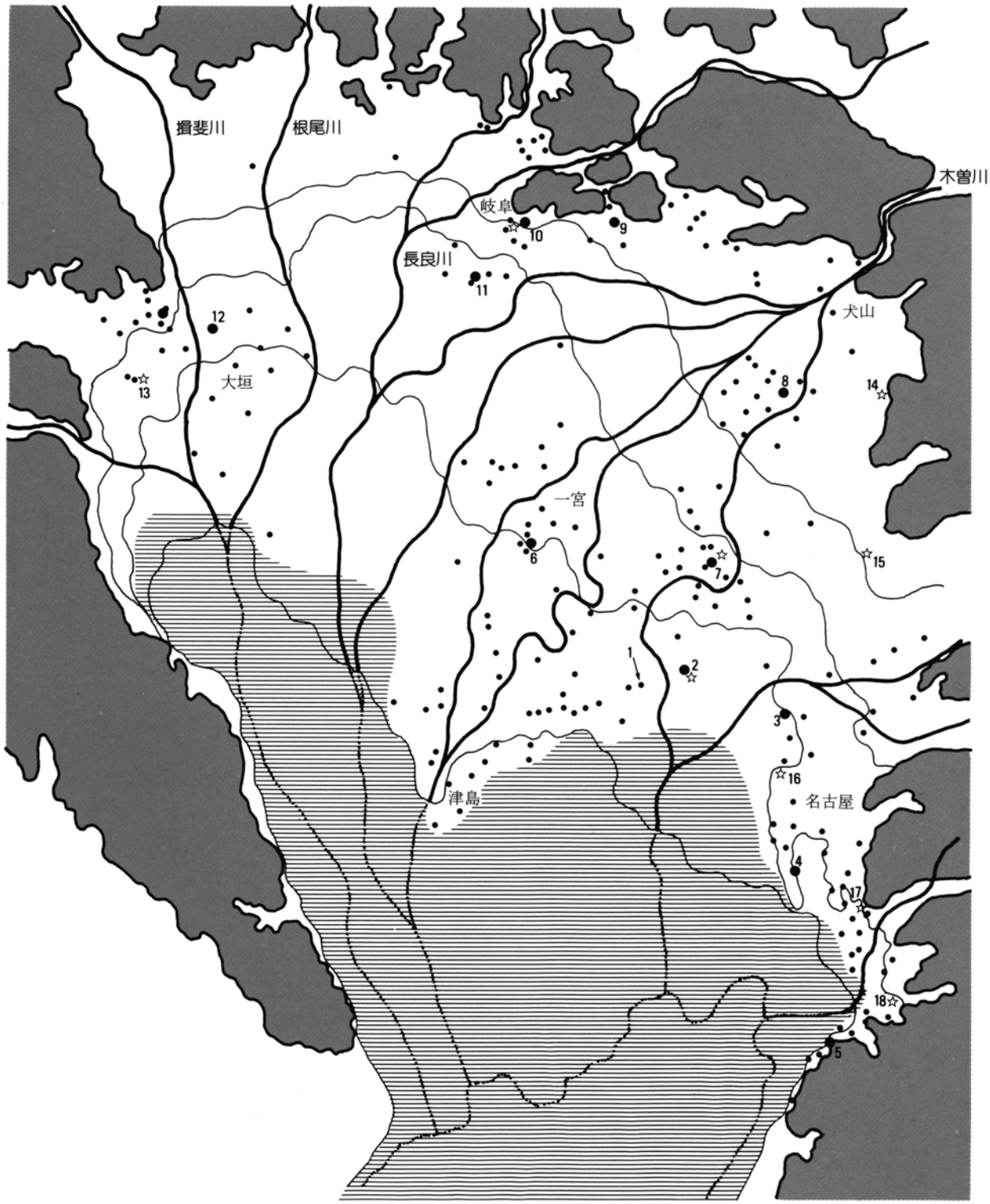
ところで廻間遺跡の位置は木曽川支流の最も東を流れる五条川水系の河口部の近くに存在するが、この五条川をはさんでその対岸には弥生時代の拠点集落、朝日遺跡が存在する。また廻間遺跡から津島市（日光川河口部）にかけて東西に遺跡が連なる状況が見られる。それはおそらく当時の海岸線に沿った遺跡の配列を推定してよいものであろう。すると伊勢の海に面した海岸砂堆状の遺跡群が五条川から日光川にかけて存在していた可能性が推定できよう。これはすなわち海岸部の「道」として後の甚目寺街道に連続するものと思われる。こうした河口部・海岸線周辺の遺跡の一つとして廻間遺跡をまず位置づけておく必要があり、今1つ海部郡に見られる弥生時代から古墳時代にいたる遺跡数の爆発的増加現象[3]により出現した代表的な遺跡の1つと考えることができる。

〔注〕

1）井関弘太郎「岐阜県の地形および地質」『岐阜県史』原史編　1972。
　井関弘太郎「岐阜市の地形および地質」『岐阜市史』通史編　1980。

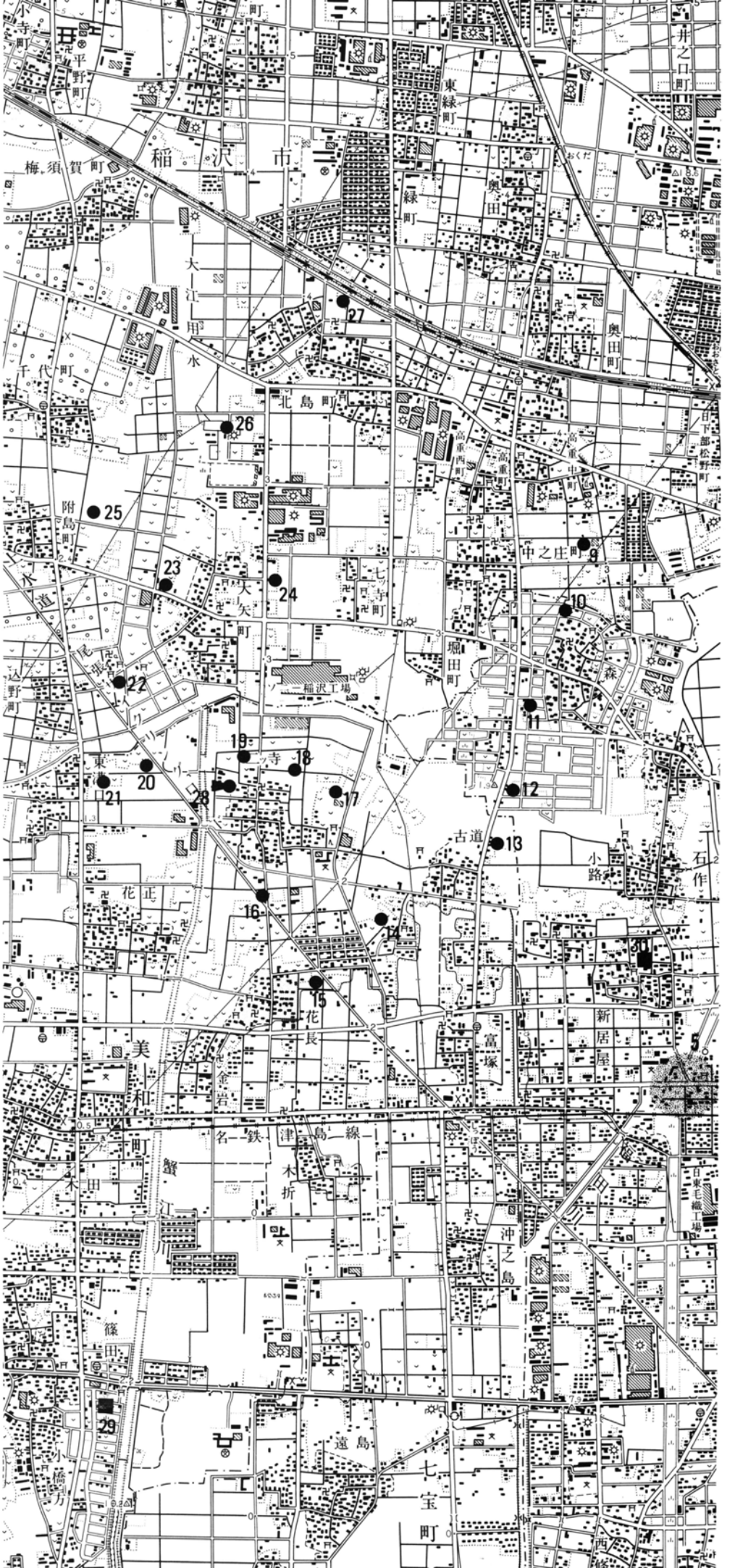
2）赤塚次郎「造墓への憧憬」『考古学の広場』　1986。
　旧當嗜・味蜂間郡内に大きく広がる海を「味蜂間の海」と呼ぶと、この海こそ古代東山道の東国への入口と考えることができる。現在の桑名・多度から南濃町をへて大垣にいたるルート、あるいはこの味蜂間の海を北上するルートこそ畿内から東国にいたる最も重要な道と推測できる。

3）津島市周辺の寺野遺跡・埋田遺跡・町方遺跡等は大変重要な遺跡であり古墳時代初頭の海部郡を代表するものである。これらの遺跡を中心に数多くの集落が海部郡内に集中する。



第3図　古墳時代初頭の濃尾平野（●遺跡、☆銅鐸出土地）

1 廻間遺跡　2 朝日遺跡・朝日銅鐸　3 西志賀遺跡　4 高蔵遺跡　5 大廻間遺跡　6 萩原遺跡　7 大地遺跡・伝上市場出土銅鐸　8 余野遺跡　9 桐野遺跡　10 瑞龍寺山南麓遺跡・上加納銅鐸　11 江東遺跡　12 南一色遺跡　13 十六銅鐸　14 二宮銅鐸　15 北外山銅鐸　16 伝名古屋城濠出土銅鐸　17 中根銅鐸　18 伝鳴海海底出土銅鐸



第4図　廻間遺跡と周辺の遺跡

1　廻間遺跡
2　土田遺跡
3　朝日遺跡
4　阿弥陀寺遺跡
5　大渕遺跡
6　西田中遺跡
7　松の木遺跡
8　増田南遺跡
9　清水遺跡
10　北浦遺跡
11　下西浦遺跡
12　森南遺跡
13　古道遺跡
14　鬼田B遺跡
15　三本松遺跡
16　揚山遺跡
17　五反地遺跡
18　上長遺跡
19　東高須賀遺跡
20　薬師寺遺跡
21　西屋敷遺跡
22　込野遺跡
23　池田遺跡
24　寺脇遺跡
25　柳前遺跡
26　流遺跡
27　中花の木遺跡
28　二ッ寺神明社古墳
29　篠田廃寺
30　法性寺
31　甚目寺
32　清林寺

（国土地理院
1：25000　清洲）

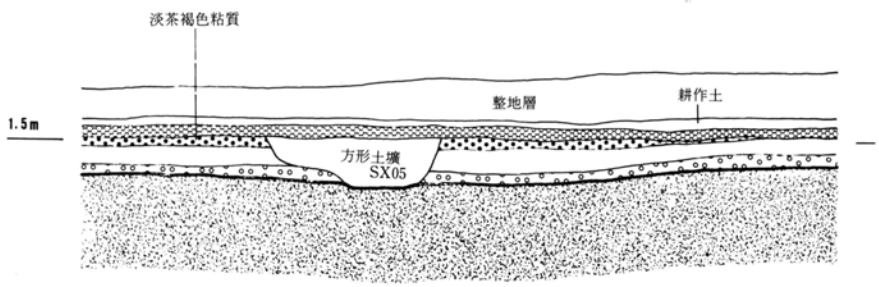
春日村
新田
西牧
分地
蓮花寺
井口
六角堂町
日下部北町
日下部中町
日下部東町
日下部西町
日下部花木町
日下部南町
北市場町
西市場
増田
清洲町
清洲
清洲城跡
上之切
中之切
下之切
下之郷
野田町
朝日
西田中
阿原
麒麟麦酒工場
新川町
新清洲
土田
上条
西今宿
甚目寺町
甚目寺
本郷
坂牧
長牧
浄水場
常花
須ヶ口駅前
須ヶ口
外町
鍋片
横町
東町
上河原
下河原
南松原町
南六軒町
芳野町
旭町
豊和
小場
西枇杷島町
枇杷島
名古屋市
名古屋市役所
十王町
高畑
菊水町
森巾
比津町
猪之越
高道町
新高町
橋詰町
問屋町
砂入町
押花町
花咲町
南大和町
古城
地領
助七新田
冷田町
原町
夏之宮町
木前町
中小田井
浮野町
西原町
平中町
野田町
野方町
野崎
山木
上之切
中之切
下之切
朝日
西田中
阿原
麒麟麦酒工場
新川町
新清洲
土田
上条
西今宿
甚目寺町
甚目寺
本郷
坂牧
長牧
浄水場
常花
須ヶ口駅前
須ヶ口
外町
鍋片
横町
東町
上河原
下河原
南松原町
南六軒町
芳野町
旭町
豊和
小場
西枇杷島町
枇杷島
名古屋市
名古屋市役所
十王町
高畑
菊水町
森巾
比津町
猪之越
高道町
新高町
橋詰町
問屋町
砂入町
押花町
花咲町
南大和町
古城
地領
助七新田
冷田町
原町
夏之宮町
木前町
中小田井
浮野町
西原町
平中町
野田町
野方町
野崎
山木
1
2
3
4
6
8
32
37

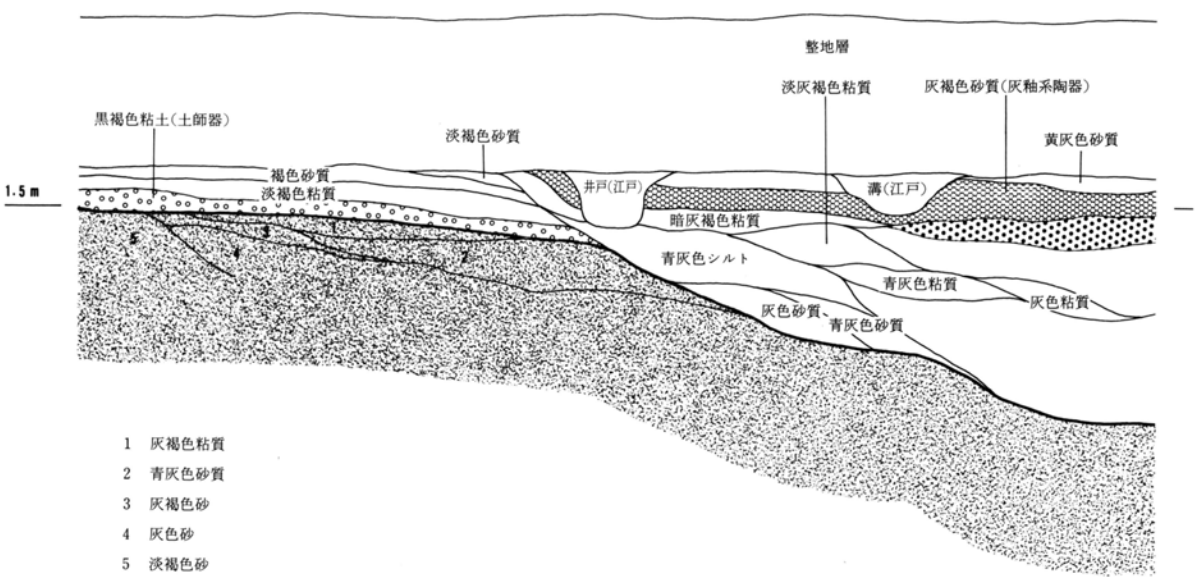
II 遺　　跡

1 層　　位

廻間遺跡が所在する現在の地表面は、名鉄名古屋本線の南側A・B区で標高2m、東側C・D・E区は区画整理事業に伴い1.5mほどの客土が存在するため標高3～4m前後を測ることができる。現状での基本層位は、整地層（現代客土）を除去すると、標高1.7～1.5mで遺構検出面になる。ただ基盤層の状況がA・B区とC・D・E区は異なるため2つに大別して以下概説しておく。

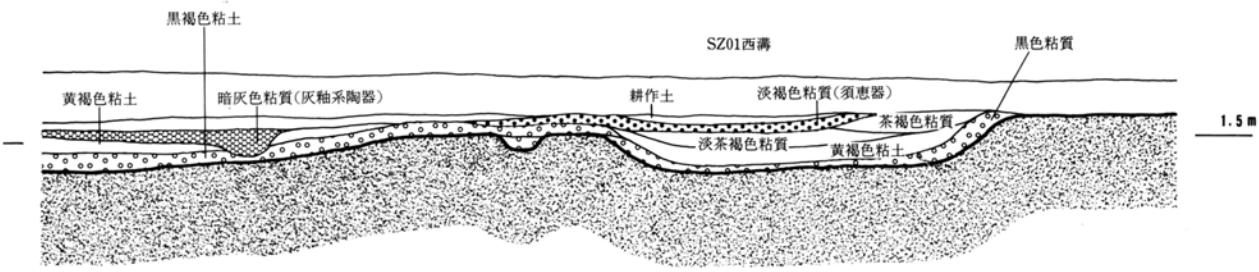
名鉄名古屋本線南側のA・B区は前述したようにほぼ中央で基盤層である黄灰色シルト層が南に傾斜する状況が認められ、この地点におおよそ5つの層序が確認できる。上位から第I層耕作土、第II層暗灰色粘質土（灰釉系陶器含む）、第III層淡茶褐色粘質土（奈良・



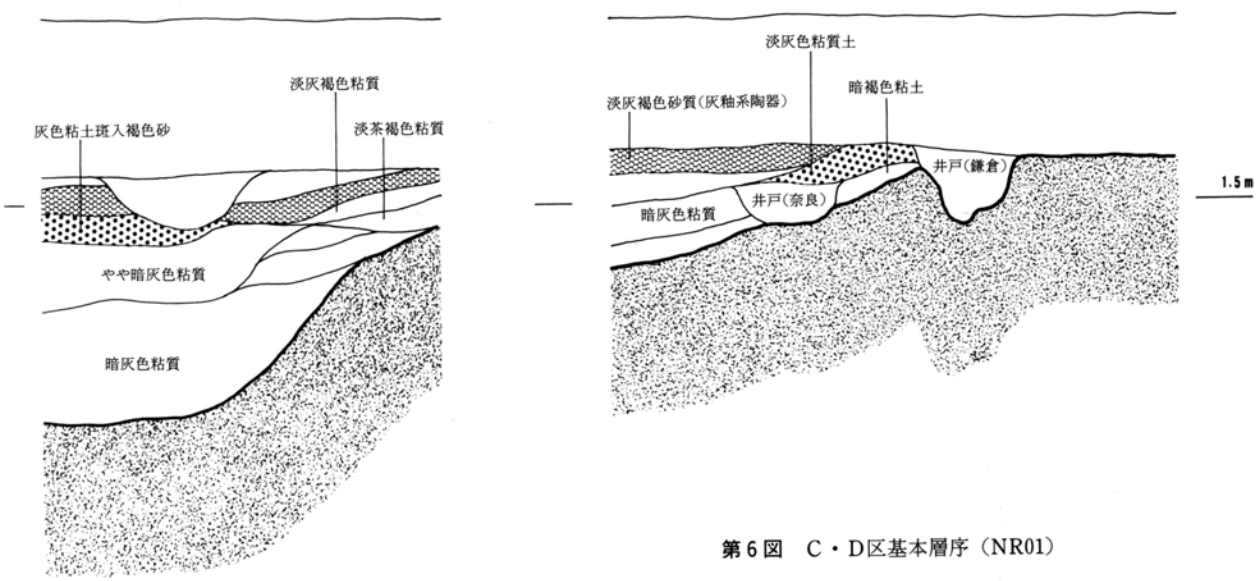


平安時代須恵器含む)、第Ⅳ層黄褐色粘土(無遺物)、第Ⅴ層黒褐色粘土(古式土師器含む)と堆積する。第Ⅱ層の堆積により古墳時代の以来の景観である微高地と窪地という地形環境が完全に喪失した。

C・D・E区では土壌掘削(現代)及びその後の客土が厚く堆積し、よってそれ以前の耕作土及び特にE区周辺に存在したと考えられる江戸時代の生活層が完全喪失していた。したがって客土を除去するとただちに黄灰色シルトが現れ、遺構検出面となる。ただし部分的に古墳時代初頭の遺物が混じる黒褐色粘土(遺物包含層)がわずかに残存する箇所も見られた。C・D区北には旧河道(NR01)が存在し河道南岸は確認できえたが、北岸は確認できていない、おそらく調査区北方に存在するものと思われる。ここに示した河道は古墳時代中期における再河道形成時のものである。すなわち旧河道(NR01)は所謂「埋積浅谷」と考えられ、古墳時代初頭の遺物を包含する黒褐色粘土がおおよそ水平堆積に近い状況であることから、この時点までに若干の窪みを残してほとんど埋没していたと思われる。その後古墳時代中期(TK23型式の須恵器が最下層より出土)に再び河道が形成され、奈良時代にはこの河道もほぼ埋没し、上層に平安時代～鎌倉時代の遺物が包含されるにいたる。旧河道NR01は14世紀をまたずに完全に埋没した。



第5図　A・B区基本層序



第6図　C・D区基本層序(NR01)

2 遺　構

廻間遺跡より検出しえた遺構を概観すると、ほぼ4つの時期にまとめることができる。それをここではA～D期とする。A期は古墳時代初頭を中心とする時期、B期は奈良時代、C期は鎌倉時代、D期は江戸時代以降のものを含めて考えることができる。このうちA期とした古墳時代初頭に所属するものが8割強を占めるのであり、B期（奈良時代）は名鉄名古屋本線沿いにわずかに遺構が認められるだけである。C期（鎌倉時代）は特に調査区西端部に集中する土壙群によって代表され，D期（江戸時代）は逆に調査区東端に集中する井戸・土坑群にほぼ限定できる。

ここでは各主要遺構を記述することに留め、古墳時代初頭を中心とする遺構の詳細な変遷は第V章で改めて述べる。

A期　竪穴住居75軒・掘立柱建物2棟・土坑25基・溝8条・井戸2基・畝状遺構1

B期　溝1条・掘立柱建物1棟・柵1

C期　井戸13基・土壙44基・土坑2基・溝2条

D期　井戸23基・土坑16基・溝7条

第1表　主要遺構時期区分

時期		遺構		
A（古墳時代初頭）	1	SB02・SB67		
	2	SB08・09・15・19・21・26・31・67・69・75		
	3	SB01・03・10・13・14・17・20・22・23・25・29・30・32・46・68	SK51・52	SZ01 SZ04・05
	4	SB09・18・34・35・40・41・45・48・51 SB81・82	SK50	SZ03・06
	5	SB16・33・38・49・58・59		SZ02
	6	SB07・52・55・60・64・65	SK30	
	7	SB06・SB50・SB45上層		
	8	SB12上層・SB24・SB53・SB56	畝状遺構	
B（奈良）		SB80・SD18		
C（鎌倉）		SE19・SE31・SE37　SK31　SX01～53 SE29・SE32・SE38　SK32 SE30・SE33・SE39　SD03 SE34　SD13 SE35 SE36		
D（江戸）		SE01～17　SE40 SE18 SE21～24		

A期（古墳時代初頭）

調査区東側に存在する旧河道に沿って展開する住居群と、その南西に近接する墳丘墓群によって構成される集落遺構である。1～8期に細分する。（第V章）

竪穴住居75軒・掘立柱建物2棟・土坑25基・溝8条・井戸2基・畝状遺構1ヶ所。

SK50（第18図）

C区西端部に位置し、径2.6mほどの円形の土坑であり、北側の一部を調査区外に置く。近接するSZ01の掘形を一部破壊する形で掘削され、内部には褐色シルト・灰褐色シルト・暗褐色砂質土の三層の堆積が確認された。その内第2層（灰褐色シルト）より大量の土器が廃棄された状態で出土し、廻間4期（廻間I式4段階）の良好な一括資料を提示した。 **土坑**

SK51

C区中央部に位置し、長軸7.5m、短軸2.5mの長楕円形の土坑である。掘形は緩やかな傾斜を保ちつつ浅いU字形に掘削され，褐色シルトが堆積する。土坑南半の西掘形傾斜部を中心に出土遺物が多く見つかっている。廻間3期新相（廻間I式3段階）の良好な資料である。

SK30（図版55　第8図）

C区西部，SB06・07・08に近接して設けられた、1.8×1.3mの楕円形の土坑である。深さ0.34mと浅くU字状に掘削され、炭化物を含む暗褐色シルトで覆われていた。S字甕を中心として廻間6期新相（廻間II式4段階）の良好な資料である。SK30はその状況からおそらく竪穴住居SB07に伴う土坑である可能性が高い。

その他C区西部にはSK30を初めSK26・27・28・29と径2mに満たない楕円形の土坑が点在し、それぞれの住居に伴う附属施設を構成している可能性が推測できる。

SU01（第7図）

A区のほぼ中央に位置し、前方後方型墳丘墓SZ01が立地する微高地西端から緩やかに西へ地山が傾斜する緩斜面上の遺物集積地点である。SU01周辺には廻間I式期に所属する土器が散在する状況が見られた。 **遺物集積**

SU02（第7図）

前方後方型墳丘墓SZ01西側に存在する土坑群（SK34・35・36）上部に散在していた土器を一括した。SK34・35・36は1m×0.5mほどの楕円形の並列する土坑で、その南側には土坑SK37～41が存在し、それらには重複関係が見られる。

SU03

D区東端、竪穴住居SB65の東側に位置する径0.5mの土器集積。SU03の東部は近世石組用水路SD02の掘形により破壊されその拡がりは不明である。

SU04（第9図）

D区中央部、竪穴住居SB36西に接して存在した土器集積である。1mほどの円形状の僅かな凹みが認められた。上記したSK30及びその周辺の土坑群と同様な機能を有するものと

推測でき、SB36に付随する施設と考えて良いであろう。

SB01

竪穴住居　C区西。北半分を調査区外に置く。壁溝は2重に巡り、重複関係が見られ、住居の拡張が推定できる。(a→b) また壁溝は西南隅で消失しており「戸口」を予想させる。住居面積は6.0×5.0m (推定) で30m²。柱穴を2ヶ所確認、遺物は外側の壁溝 (SB01—b) 内より出土。(廻間3期)

SB02 (第8図・第19図)

C区西。調査区設定上の関係から南東部不明瞭(D区)。西北隅はSK52と重複する。住居面積は5.2×5mで26m²。2ヶ所に柱穴を確認、貼り床直上に土器廃棄が認められる。(廻間1期)

SB06 (図版57・第8図)

C区西。南隅をSE09で破壊される。SB07・08と重複関係 (8→7→6) が認められる。住居面積は5.5×5.3mのほぼ正方形を呈し29.2m²を測る。四隅に4ヶ所主柱穴を検出しえた。出土遺物は東壁溝中央部周辺に集中して見られた。南側中央に焼土あり。(廻間7期)

SB12 (図版55・第8図)

C区西。中央に径3mの廃材投棄坑 (現代) が存在し大きく破壊される。SB11・SB14と重複関係 (11→14→12) が見られ、住居廃絶後中央に一括土器廃棄坑が営まれた。南側の主柱穴以外は検出することができ、壁高も0.4mと比較的良好な残存形態を呈している。住居面積は5.2×4.8mとほぼ正方形で25m²を保有する。(SB12は4期に土器廃棄坑SB12上層は8期に所属)

SB27 (図版55・第8図)

C区西。SB27a→b→cと3回の重複関係が存在し，規模の縮小が認められる。また近接する住居SB26・28と重複関係 (SB28→26→27a) が存在する。SB27aの住居面積は5.8×5.5mで31.9m²を測り、近接するSB29と同規模・並列 (主軸方向の一致) の状況が認められる。SB27aは廻間3～4期、SB27bは廻間7期、SB27cは廻間8期に所属するものと考えられる。

SB33 (第8図)

C区西、旧河道NR01に接して存在する。壁溝は片側L字状に検出でき、4つの主柱穴と中央に焼土及び径1.0mの正円状に踏みしまりが認められた。これら竪穴住居に伴う諸施設の関係から戸口を東側に推定することができよう。住居面積は4.8×4.3mで20.6m²を測り、やや長方形状を呈する。廻間5期古相に所属する。

SB45

D区西。同じ規模をもつ住居SB46と主軸を交えて大きく重複する。径30cmの主柱穴を確認し住居面積は4.2×3.5mの長方形プランをもち14.7m²を測る。SB45住居廃絶後、中央に一括土器廃棄坑(SB45上層)が存在する。SB46は廻間3期、SB45は廻間4期に所属しSB45上層の土器廃棄は廻間7期の長好な資料である。

SB39・40（第９図）

D区西。SB39は４隅にそれぞれ主柱穴をもち、壁溝は北東部で欠損する。住居面積は6.0×6.0mの正方形を呈し36m²を測る。SB40と重複関係をもつ。SB40は検出しえた住居の内最も大型の住居である。7.3×7.1mのほぼ正方形で51.1m²を保有する。主柱穴は確認できえていない。SB40は廻間４期に所属。 **竪穴住居**

SB50（図版・第９図）

D区西。SB48・49・51と重複関係が見られる。（48・51→39→50）径25cmの主柱穴が存在し、壁溝は全周囲を巡る。壁高は38cmと比較的残存率が良い。住居面積は5.0×4.0(20m²)と長方形プランをもつ。最下層は灰褐色シルト層の貼り床が存在し、その上位に遺物を多く含む茶褐色粘質層が堆積する。さらにその上部を暗茶褐色粘質層が覆う。こうした堆積状況は他の住居でも多く認められるものであり、基本的な層序である。（第９図下、土層断面図）なお住居の掘削は、ほとんどの場合その掘形に傾斜をもつ。

SB52（図版58・第９図）

D区西。他の住居と重複関係は認められない。長軸をほぼ東西におく長方形プランをもち、住居面積は6.3×4.4mと27.7m²を保有する。壁溝は全周し、径40cmの主柱穴全てを検出できた。その他中央やや南西よりに焼土が存在する。廻間６期。

SB56（図版56・第９図）

D区西、旧河道（NR01）に近接して営まれる。壁溝は認められるものの、主柱穴は一ヶ所しか検出できえていない。住居面積は6.6×5.7mで37.6m²を保有する。廻間８期。

SB60（図版56・第９図・第18図）

D区西、旧河道(NR01)に近接して営まれる。東南隅にはSE26が存在し、その他近接する住居SB61・62・63と重複関係が見られる。SB52と同様に廻間III式を特徴づける特色的な長方形プランをもつ。住居面積は6.7×3.8mで25.5m²を測る。壁溝は全周を巡り、主柱穴４を確認できた。東北の主柱穴上部にて完全な形状を残すＳ字甕が出土している。SB60廃絶後間もなく一括廃棄坑が設けられ、多量の土器放棄が行われた。その状況はほぼ東西列状に土器が配置された様子が復原でき、大型のＳ字甕の存在とともに特殊な施設を想定することができる。

SB65

D区中央、旧河道（NR01）に近接し、かつ調査区最南端に位置している。東西コーナーを調査区外に置く。壁溝が巡り、径35cmの主柱穴が存在する。住居面積は4.1×4.0m・16.1m²で正方形プランをもつ小規模な住居である。

SB67

D区西端。南側一部を調査区外に置き、SB66と主軸を交えて重複する（SB66→67)。SB66・67の中央に廃材投棄坑（現代）が存在し、床面を大きく破壊する。住居面積は5.2×5.0m（推定）・26m²のほぼ正方形をなす。壁溝が巡り、北側に２つの主柱穴を確認できた。廻間２期。

SB75

C・D区西端に位置する。SB75周辺部は上部が大きく土取りにより破壊され、残存状況はきわめて悪い。SB75はしたがって壁溝及びわずかに住居床面が残存するに留まる。しかしながら東北壁溝コーナーよりまとまった土器の出土が見られ、廻間2期の良好な一括資料を得ることができた。

掘立柱建物

SB81

C区西端に位置する掘立柱建物である。SB02・03・05・07・09に囲まれた状況を呈し、周辺に数ヶ所の柱穴が存在する。南北1軒（1.8m）東西1軒（1.9m）で柱穴の径は0.6m、深さ0.2mを測る。

SB82

C区西。SB34・36の北側にこれらの住居とほぼ主軸を同じくして存在する掘立柱建物である。南北1軒（1.6m）東西1軒（1.5m）で柱穴の径は0.4m、深さ0.2mを測る。

SD06・08（図版3）

C・D区西。SD06はC区西、旧河道（NR01）に近接して掘削された東西方向の溝で長さ11m、幅0.8m、深さ0.2mを測る。SD08はD区西、SB42・SK21と重複関係（SB42→SK21→SD08）が見られる。

SD06・08は平行する2条の小溝と考えることができ、これを廻間遺跡の住居区の北と南の境を区切る溝と想定することができよう。遺構の重複関係から溝の掘削は廻間II式期以降であり、住居区が西から東に時期をおって移動するにしたがい、設定されてくる溝と思われる。

SD09

溝

C区西。SB01・03・05・10に囲まれた空間に南北に細長く存在する小溝で、長さ9.5m、幅0.6m、深さ0.15mを測る。近接する住居と、遺構配置上関連が推定され、一つの小区画を表示する機能をもつものであろう。

畝状遺構（図版1・58）

畝状遺構

D区西部、SB45と23、SB68・67の空間に畝状遺構を検出することができた。畝状遺構はほぼ数条の小溝群を1つの単位として構成され、一辺6.7m（40～50m²）の方形の面積を占める形で存在する。少なくとも3回の重複関係が確認でき、畝の設定が数度にわたって実施されたことが判明している。小溝の幅は0.8m、深さは0.1mを測る。その所属時期は遺構の重複及び出土遺物から廻間III式期と考えられる。なお後述する遺構の変遷から、畝状遺構の主要な構築時期を廻間8期の中に置き、特に北側に存在するSB24との関係を注目したい。個別住居単位の屋敷地を構成する。

なお畝状遺構の土壌分析の結果からは、遺構周辺の環境が比較的乾燥した状態であったこと以外、明確な生産活動を推定する資料は得られていない。

墳丘墓

SZ01（図版1・53）

前方後方型墳丘墓

A・B区西部に位置する前方後方型墳丘墓である。墳丘を含めて上部は早くから削平をうけ、したがって主体部は確認できていない。また現代の水路及び中世の井戸により部分的に破壊されているものの、全体の形状を復原することは可能である。墳丘墓北半部は調査区外に置き、推定墳丘長約25m、後方部幅19m、前方部長8m、前方部幅9.5mを測る。周溝は前方部で屈曲する前方後方形を呈する。溝深は0.5～0.6mとほぼ一定し、東屈曲部に最深部が見られる。遺構検出面で標高1.6m、溝内で1.0m前後となる。周溝の掘削は墳丘側でやや垂直に、外側で傾斜を保ち、東溝東掘形は2段階となる。溝内の土壌堆積は4層見られ、上から淡褐色粘質・淡茶褐色粘質・黄褐色粘土・黒色粘質である。最上層からは奈良時代の須恵器が出土しているところから、奈良時代をもって周溝は完全に埋没したと考えられる。遺物は、最下層黒色粘質土より屈曲部周辺を中心に集中して出土している。

墳丘墓付属施設

SZ01の西には平行して掘削されている小溝SD15が存在し、その間には土坑群SK34～41が設けられている。特にSD15北部の屈曲とSK41で囲まれた空間はSZ01と深く関係する施設と考えられる。

SZ01の立地は、廻間遺跡が展開する微高地の西端部に位置し、その南西部は緩斜面に連続する。主軸はN—27°—W。造営時期は遅くとも廻間3期古相（廻間Ⅰ式2段階）。

SZ02（図版1・54）

B区東端部に位置し、耕作による削平と水路により部分的に破壊をうける。東半部は調査区外に置く。現状では一辺11m（推定）の方形の墳丘墓であり、周溝は北西コーナーで溝の掘削が浅く、陸橋部状を呈している。遺物の出土はほぼこの北西隅を中心に多量の廃棄が認められた。溝幅は3.5mと均一で、深さは最深部で0.5mを測り、U字形に掘削されるもいくぶん墳丘側の掘削角度が大きい。墳丘検出面は標高1.7mで溝最深部の標高は1.1mである。主軸はN—17°—W。造営時期は廻間5期新相（廻間Ⅱ式2段階）。

SZ03（第7図）

A区北東隅に位置し、墳丘の南西コーナー部のみを調査区内に置く。したがって墳丘規模・形態は不明であるが、主軸はN—70°—WでSZ06と同一方向を保つ。溝幅は2.5mで深さ0.3mとSZ06と同様に比較的浅い。出土遺物はほとんど見られない。

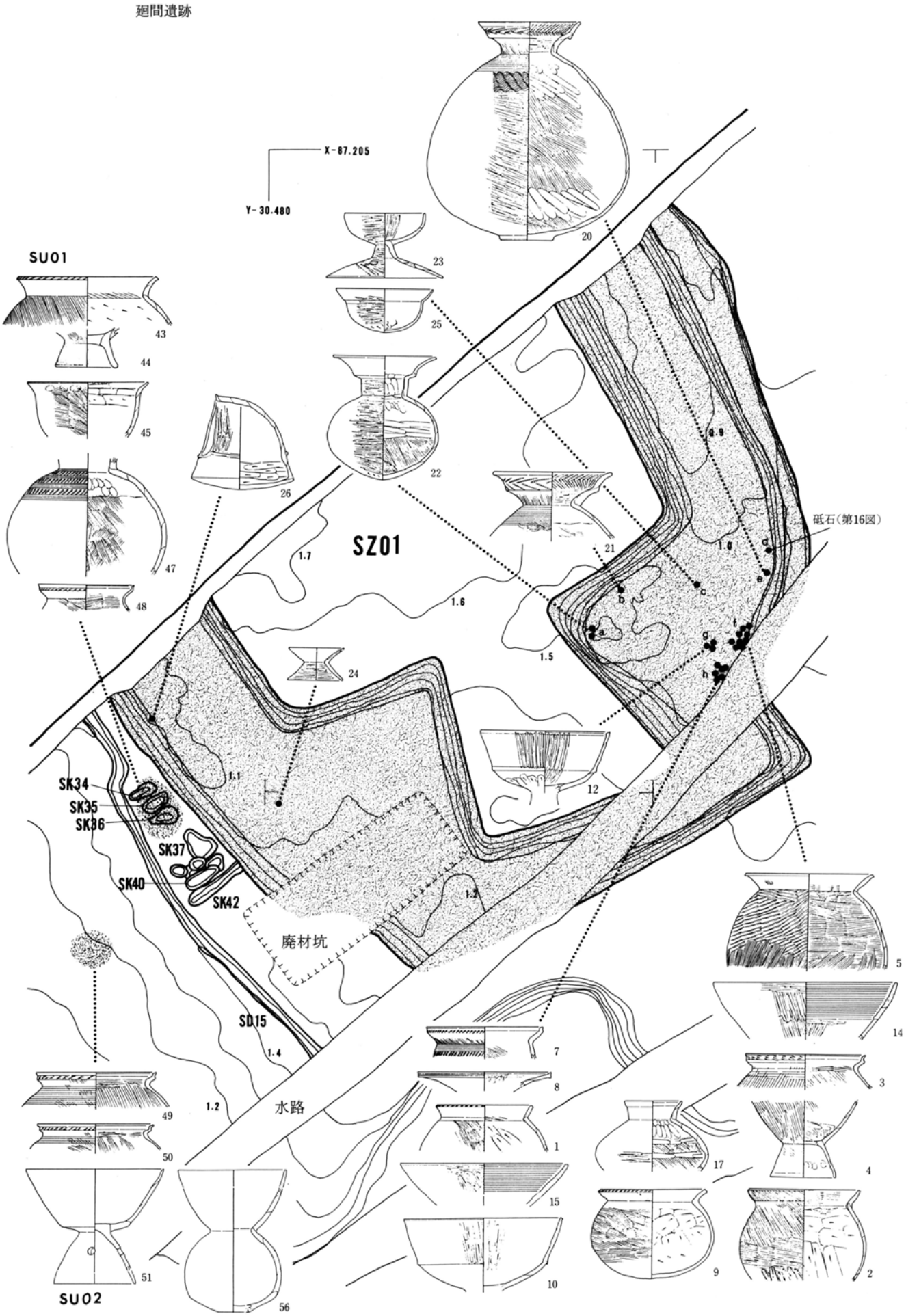
SZ04・5（第7図）

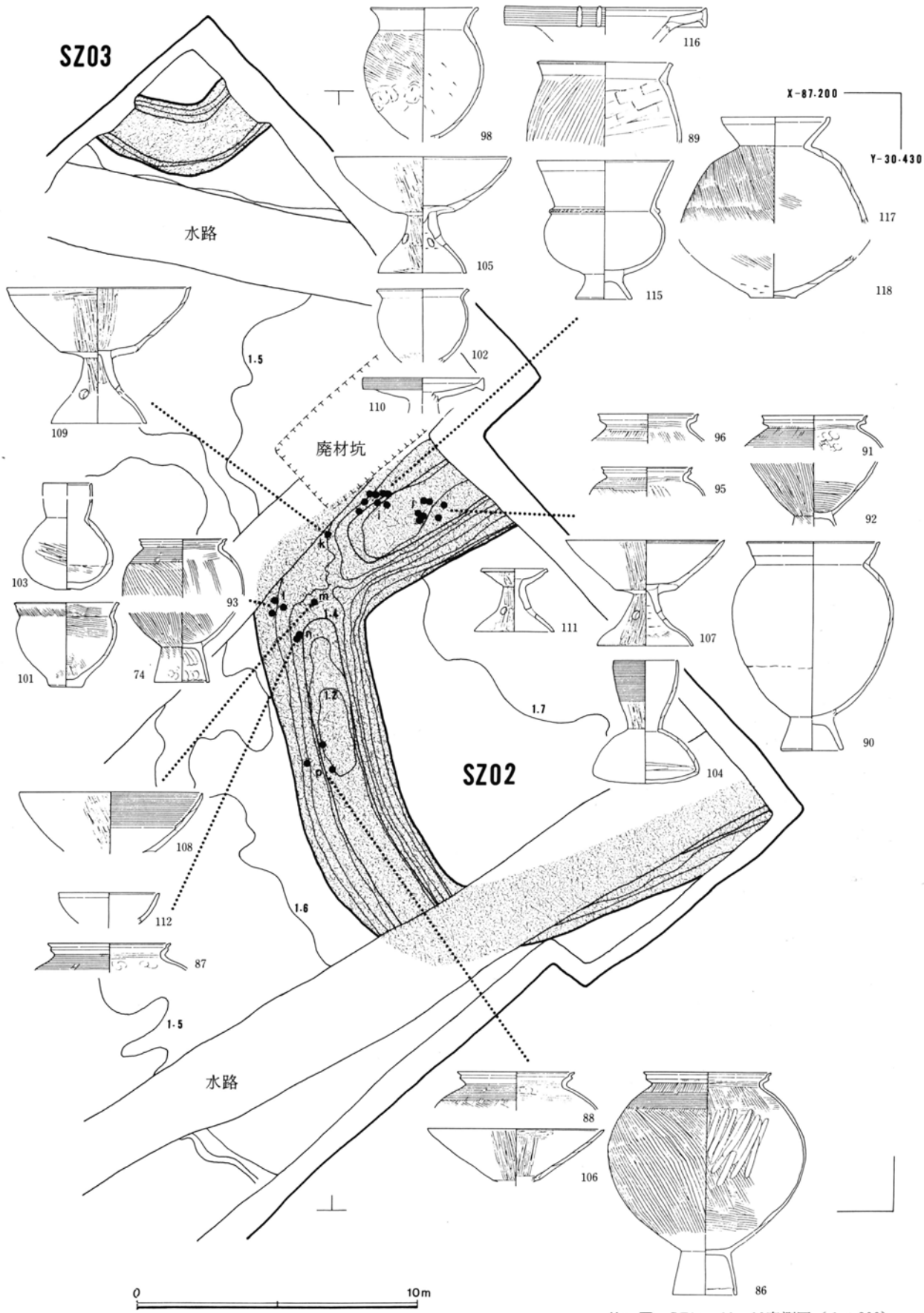
C区西端に位置し、その東側大部分を調査区外に置く。SZ04とSZ05とは近接して営まれた墳丘墓と考えられる。SZ04は溝幅3.3m、深さ0.6mと比較的深くU字形に掘削され構内には上位から灰褐色砂質・灰褐色粘質・黒褐色粘質が堆積し、最下層より遺物が出土している。主軸はN—35°—Wと推定できSZ01とほぼ同様な方位をもつ。造営時期は廻間3期古相（廻間Ⅰ式2段階）。

SZ06（第7図）

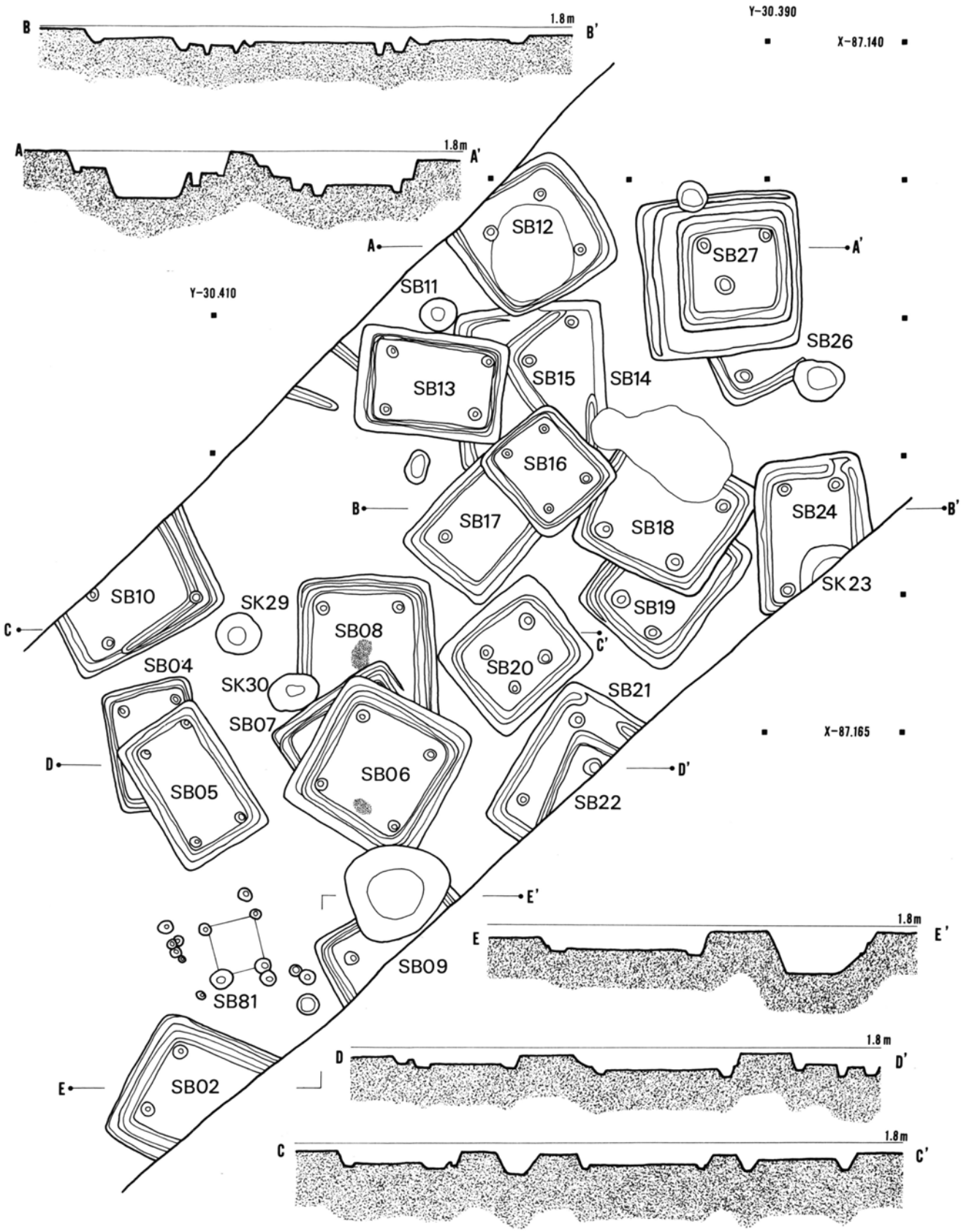
D区西端に位置する墳丘墓。東溝周辺以外は調査区外に置く。一辺10m以上の墳丘が想定でき、溝幅は4.5mと広く、深さは0.35mと比較的浅い。竪穴住居SB73・74を破壊する形で造営されている。主軸はN—73°—W。造営時期は廻間4期（廻間Ⅰ式4段階）。

廻間遺跡

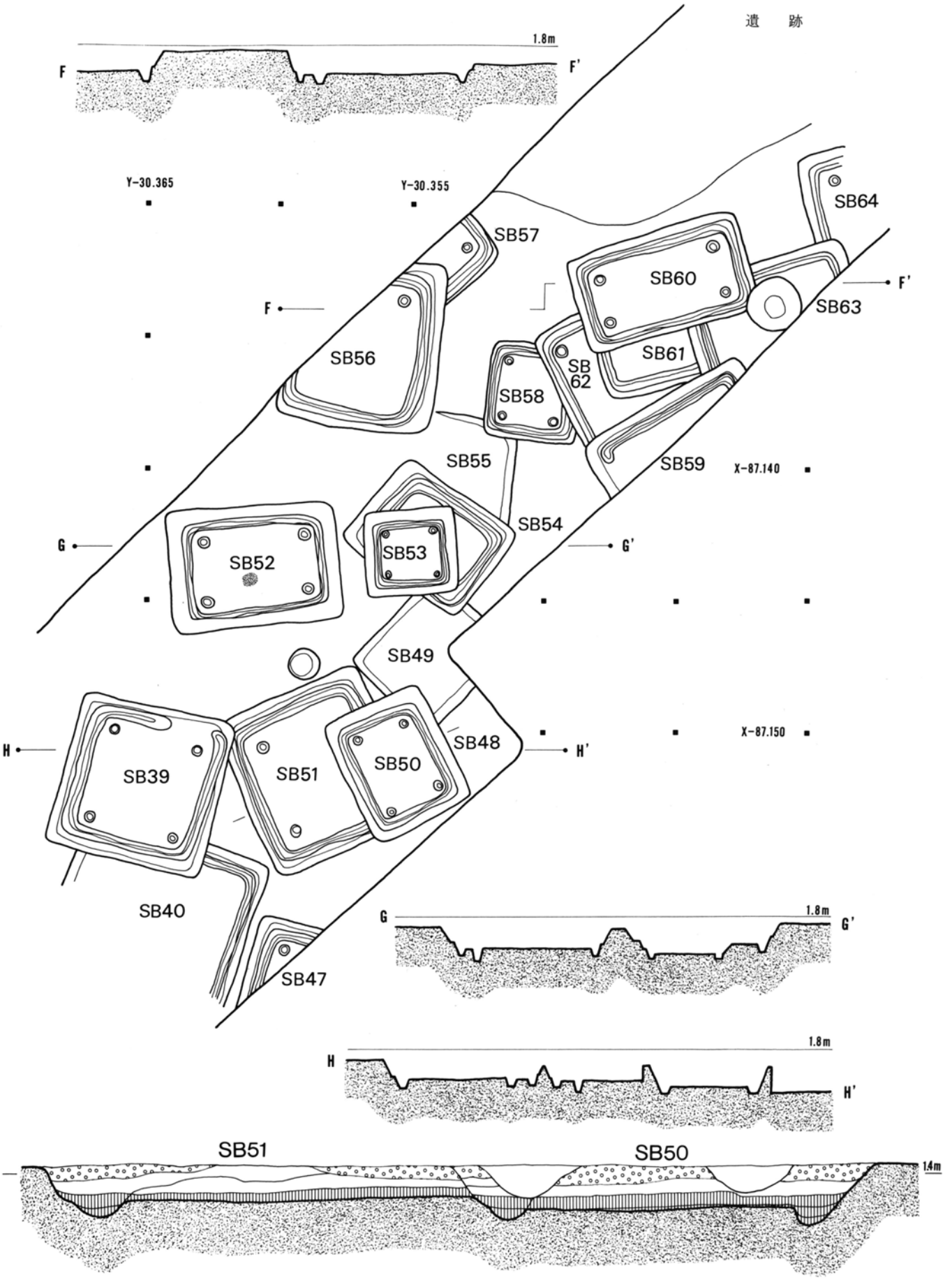

X-87.205
Y-30.480
SU01
SZ01
SU02
砥石(第16図)
SK34
SK35
SK36
SK37
SK40
SK42
SD15
廃材坑
水路
1.1
1.2
1.4
1.5
1.6
1.7
1.8
1.9
a
b
c
d
e
f
g
h
1
2
3
4
5
7
8
9
10
12
14
15
17
20
21
22
23
24
25
26
43
44
45
47
48
49
50
51
56



第7図　SZ01・02・03実測図（1：200）



第８図　住居（Ｃ区　１：200　住居内アミフセ焼土）



第9図　住居（D区　1：200　SB50・51土層断面図は1：50）

B期（奈良時代）

調査区西側の名鉄名古屋本線をはさんで両側部分に比較的集中して遺構が見つかっている。

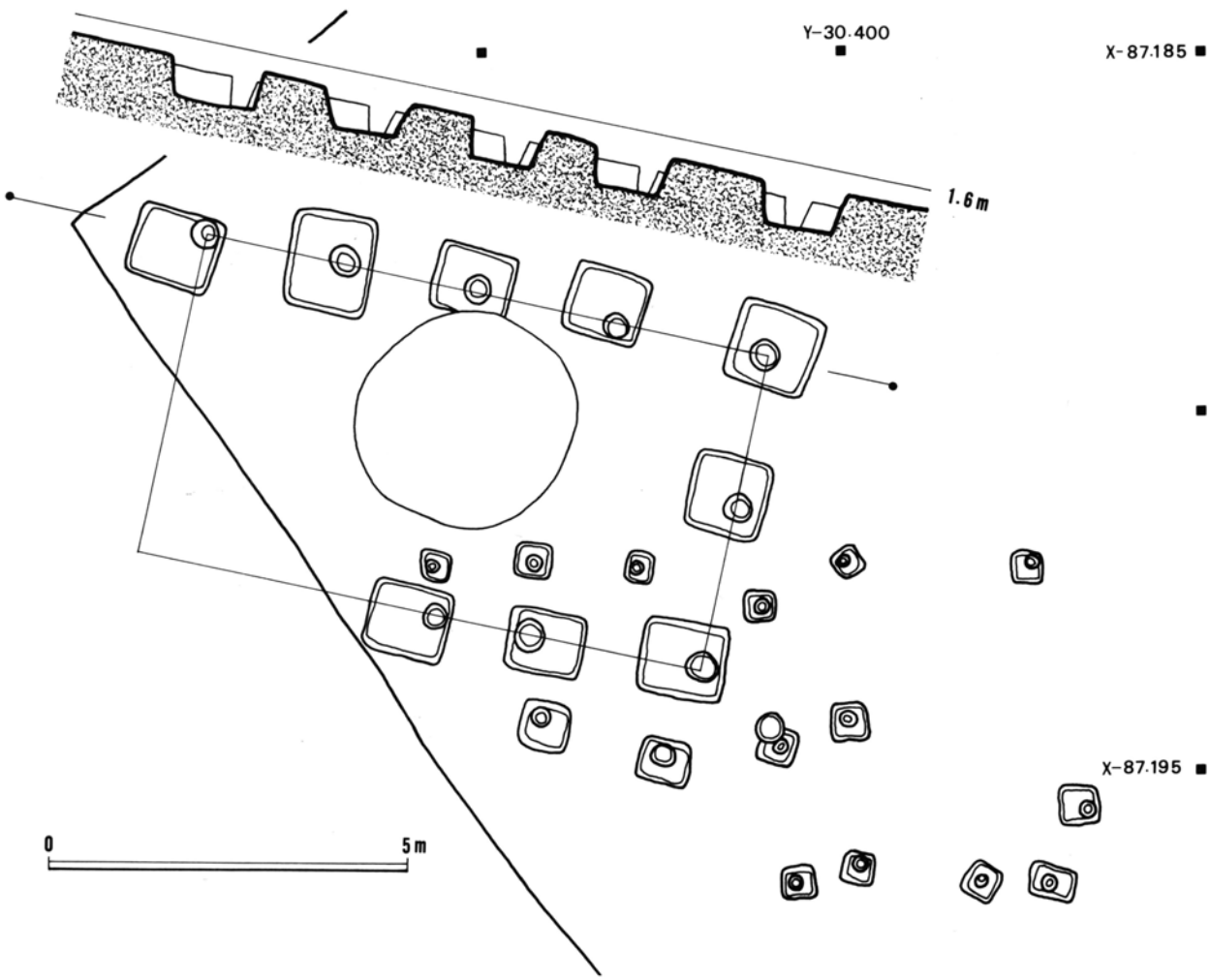
溝１条、掘立柱建物１棟、柵列一ヶ所。

SD18（図版１）

A・B区東側で検出した溝であり、廻間遺跡が立地する微高地の方向に合わせる形で掘削されている。方位N—30°—Wで溝幅1.3m、深さ0.15m。A区北端でSD18と平行する柵列（２度の建替え）を検出している。柱穴６ヶ所、長さ1.8m、柱穴の径0.15m深さ0.2mを測り、柱間ほぼ0.35等間となる。SD18より８世紀に所属する須恵器杯蓋片を確認することができた。

SB80

D区西端で検出した東西方向（N—76°—W）をもつ２×４軒（4.4×８m）の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行2.0m等間、梁行2.2m等間である。柱穴掘形は方1.2m、深さ0.6mを測る方形であり、柱根は残存していない。



第10図　SB80（１：100）

C期（鎌倉時代）

A・B区を中心に検出でき、特に廻間遺跡が立地する微高地西端から低地にいたる緩斜面に遺構が集中し、その他C・D区では一定の間隔をおいて井戸が数基確認できたのみである。また旧河道（NR01）は平安時代から鎌倉時代にかけて溝として活用されていた形跡があり、13世紀前葉をもって完全に埋没したものと推定される。

SE19

D区北端で検出した井戸。掘形長軸1.4m、短軸1.2mの楕円形を呈し、深さ0.5mを測る。上部を大きく欠損し、素掘りで施設の残存は認められない。灰釉系陶器の皿が出土している。 井戸

SE29

D区西側。掘形1.7～1.6mで深さ0.4mを測る。低部で曲物の残存を確認できた。灰釉系陶器椀・鉢が出土している。

SE31（図版59・第12図）

A区東端。1.2×1.1mの掘形で、深さ1.0mを測る素掘りの井戸。低部に一段の曲物が残存し、その上部に3層の土層堆積が認められた。その内第2層（灰色粘土）より灰釉系陶器等が出土している。

SE32・33（図版59・第12図）

A区東端。SE32の南東掘形を破壊する形でSE33が掘削されている。SE32は1.3×1.2mの掘形で、深さ0.9mを測り、支柱が見られない縦板組構造で内部に曲物を配する。SE33は1.8×1.7mの掘形で深さ0.9mを測り、内部に2段の曲物が認められた。

SE35・36（第12図）

A区東端。SE36の南東掘形を破壊する形でSE35が掘削されている。SE36は径0.8mで深さ0.7mの素掘りの井戸で、SE35は掘形2.3×2.1mで深さ1.0mを測り、低部に曲物1段が残存する。

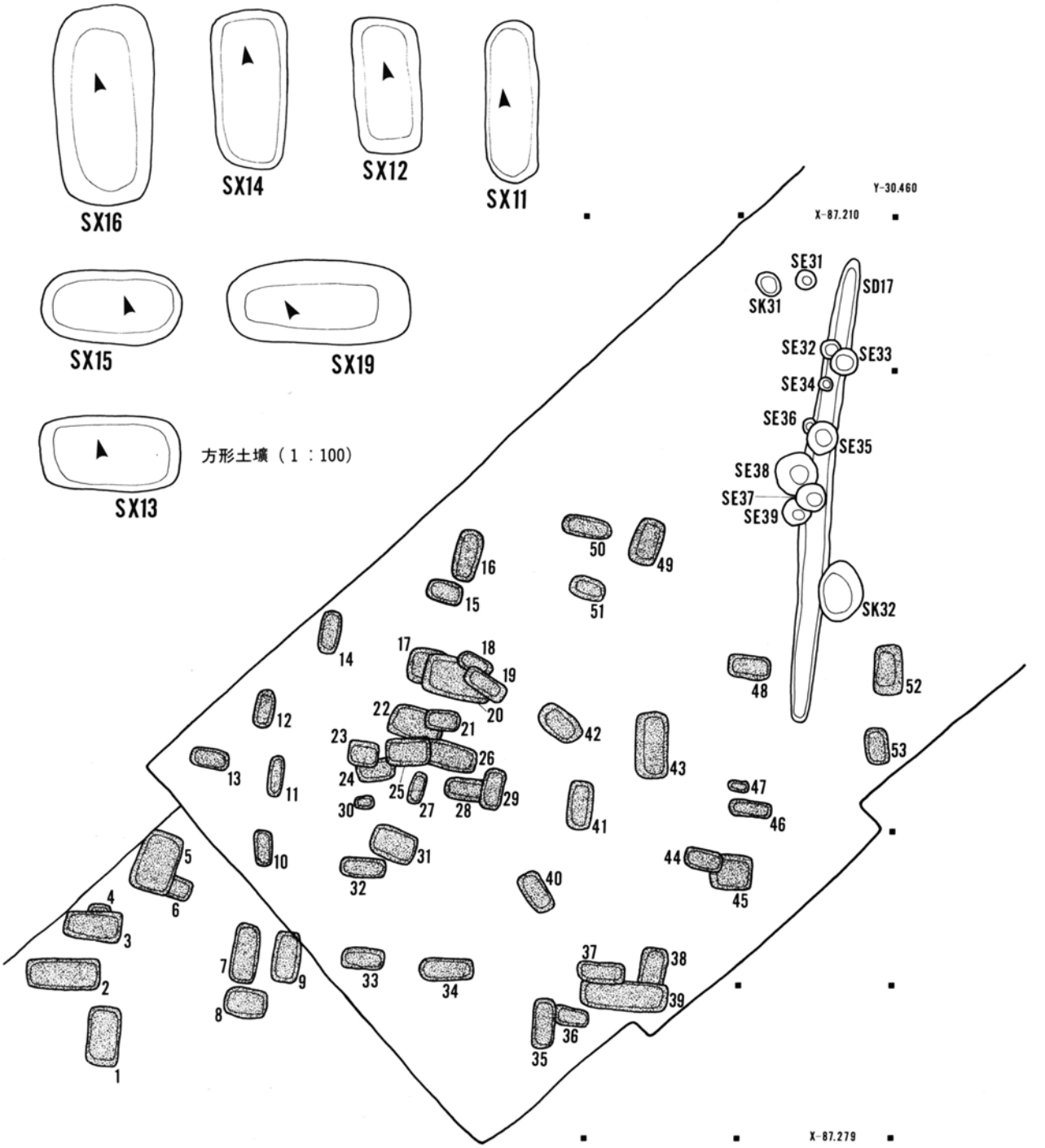
SD17

A・B区東側で検出した長さ28m、幅1.6m、深さ0.3mの南北溝である。SD17の北上半部に井戸8基が重複し、これらの井戸との関連が予想され、北から南に排水する機能を推定することができる。 墓地 溝・井戸・土壙による区画

A区東端に集中する井戸の重複関係及び出土遺物の検討から、第11図のような時期的な変遷が想定できる。

方形土壙群（第11図）

A・B区西端に集中する土壙群で、廻間遺跡が立地する微高地から低地に向かう緩斜面上に位置する。溝SD17及び井戸SE31～39をも含め一定の区画された空間を形成していたものと推定される。土壙は主軸を南北方向と東西方向に置く、2つのまとまりが認められる。規模の大小が存在するも、隅丸長方形状の平面形を呈し、垂直に近い状態で掘削され、基底部は船底状になる形状のものが一般的である。内部は層堆積をとらず、地山各層の斑土が充填され、人為的な埋戻し作業を伴う遺構である。



（井戸の変遷）

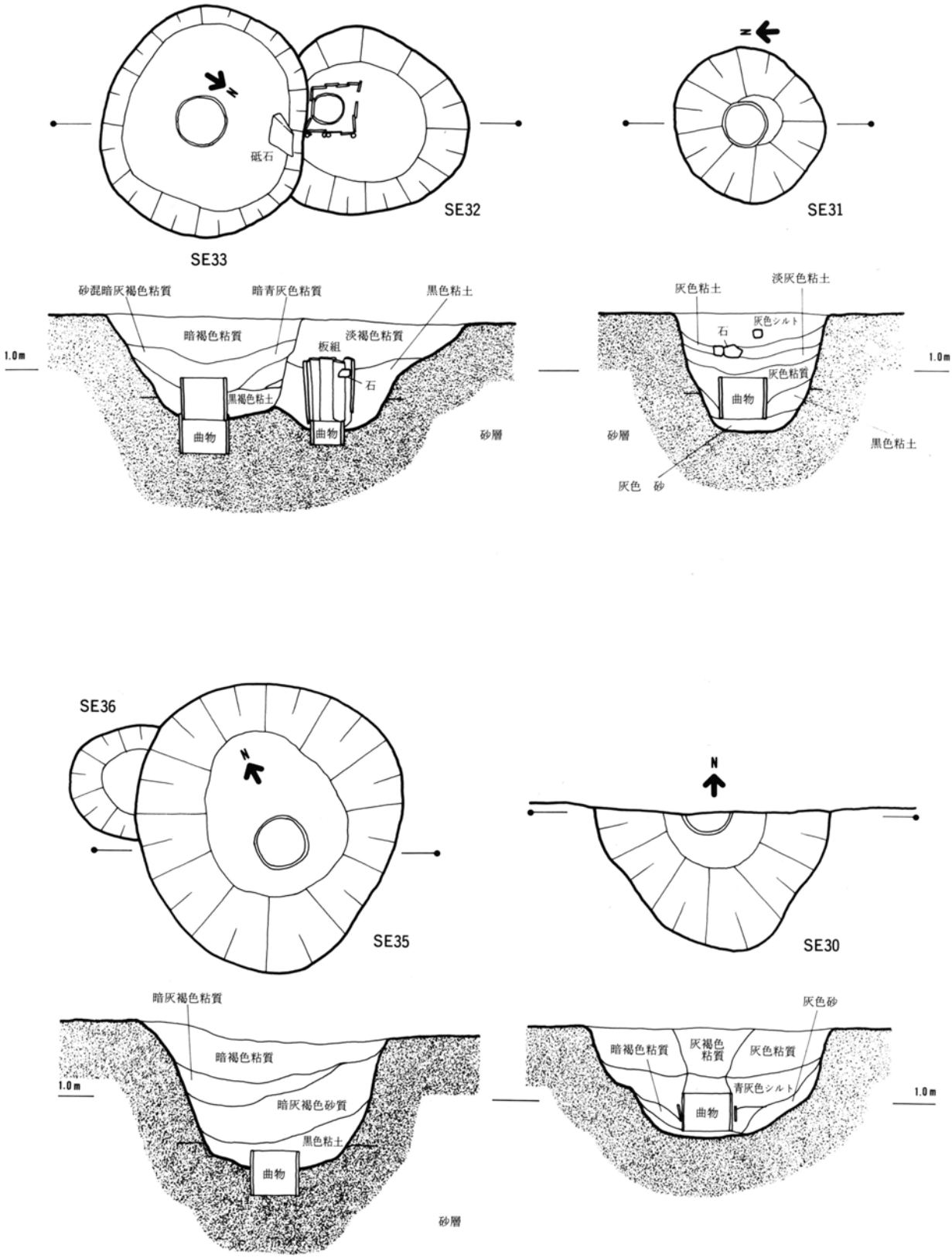
SE31

SE34 ⟶ SE32 ⟶ SE33

SE36 ⟶ SE35

SE38 ⟶ SE39 ⟶ SE37

第11図　墓地（13世紀後半～14世紀前半　1：400）



第12図　井戸（14世紀　1：50）

D期（江戸時代以降）

調査区東端部，旧河道（NR01）以北で集中的に認められた。江戸時代の遺構面が大きく削平をうけていたため、掘削の深い遺構、特に井戸を中心に検出できたにすぎない。井戸23基、土坑16基、溝７条。（図版59）

SE02

井戸　E区東端。掘形の径1.9mで、深さ1.7mを測る井戸で、ほぼ垂直に掘削され、タガの痕跡から内部に桶組の井戸枠構造が存在していたことが推定される。このタガ痕跡から径53cmの枠径が復原できる。

SE15

E区西端。掘形1.3×1.4mで深さ0.6mの井戸で、断面U字形に掘削されている。その中央に葦を立てて支柱にし、その内側をタガで固定した径0.6mの枠構造が認められた。

SE23

C区東端。SD05を中心にSE21～24の４基の井戸が集中する。その内SE23は旧河道NR01上部から掘削され、掘形2.2×2.4m、深さ0.7mを測る井戸である。内部の構造等は不明で、若干の遺物の出土が見られたのみである。

SE40（第14図）

D区中央。検出面における形状は長軸2.8m、短軸1.8mのやや不定形を呈しているが、径1.5mの桶組構造をもつ井戸と考えることができる。深さ1.3mを測る。２段の桶組が残存し、その径0.5m、長さ0.65m。

街道と町並　SD01・02・03

E区東端に、東西方向に平行して掘削された小溝群である。SD01は長さ16mを確認し、東部は調査区外に延びる。幅1.0m、深さ0.2mの断面U字形。SD02はSD01の南にほとんど接して設けられた溝で、幅0.4m、深さ0.1m前後と浅い。SD03は長さ17mを測り、幅0.4m、深さ0.1m前後とSD02と同様な規模をもつものである。SD02とSD03は溝中心部での距離が1.8～２mの間隔を保ち、SD01とSD02は1.2～1.0mの間隔を保つ。

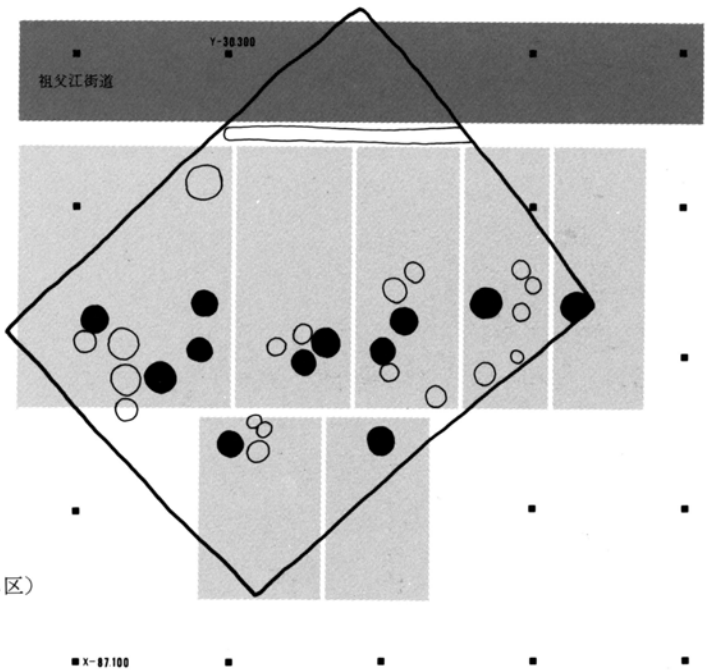
祖父江街道

旧地籍図を基にE区の遺構配置を照合すると、SD01を中心とする小溝群は旧祖父江街道にほぼ該当する可能性が高い。するとE区に集中して検出できた遺構群は、この街道を中心に展開する町並と関係する遺構と推定することができよう。これらの遺構群は出土遺物から16世紀末葉～17世紀前葉の間に位置づけることができる。すると調査区東方に存在する清洲城下町の趨勢と連動するようであり、城下町の形態が大きく整備される16世紀末葉にいたり、祖父江街道があらたにこの地に設定整備され、それに伴い展開してゆく街区の様子を、これらの遺構群は示しているものと思われる。

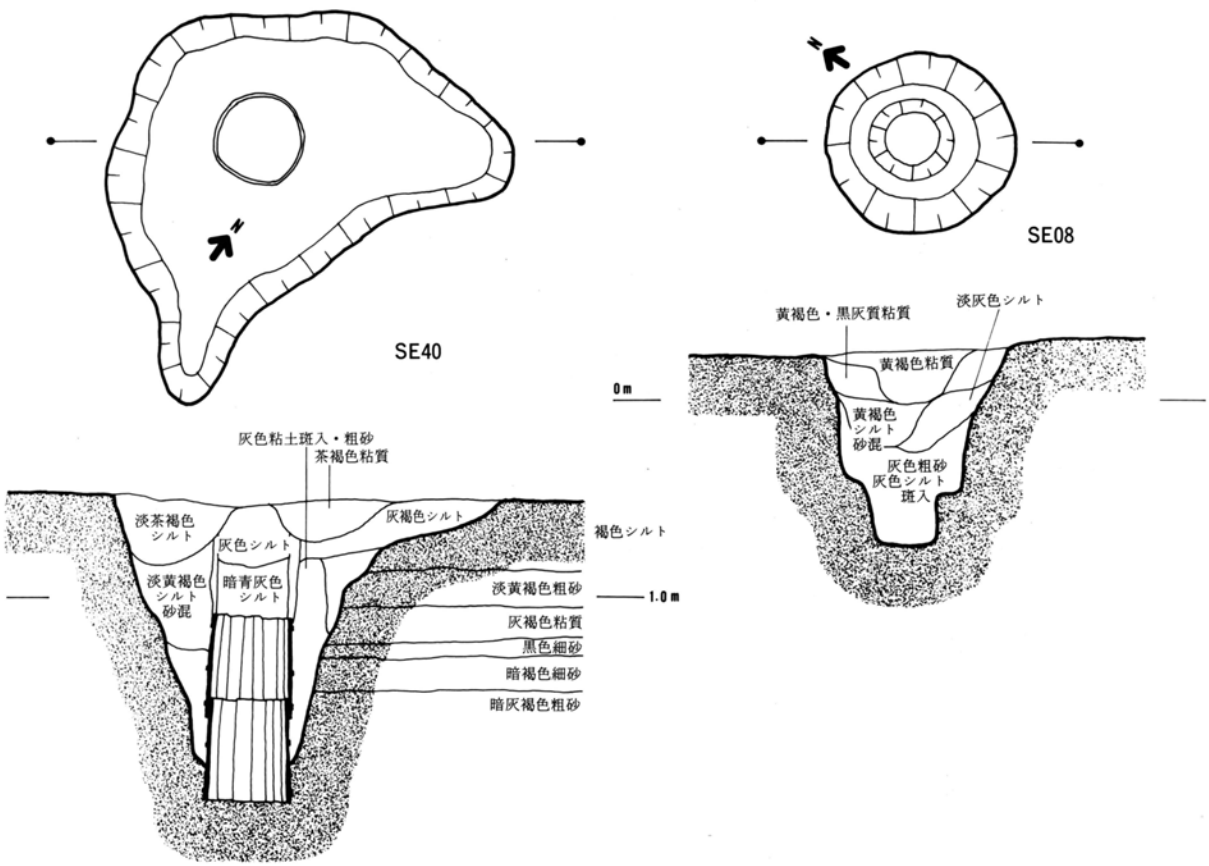
石組遺構（SD04・SD14）

C・D区東端に南北方向に延びるSD04及びA区東端で東西方向に延びるSD14は、同様な性格をもつ石組みの水路である。出土遺物から19世紀後半～20世紀前半の使用が確認でき

る。径10cmの丸太材を横に配し、杭で固定する基底部をもち、その上部を人頭大の河原石で構築する構造が見られる。近年まで廻間地区の水田耕作に利用された水路である。



第13図
祖父江街道と町並の推定（E区）
●井戸
○土坑



第14図　井戸（江戸時代　1：50）

Ⅲ 遺　　物

1　古墳時代初頭

廻間遺跡より出土した遺物の中で最も多いのは古墳時代初頭に所属する所謂古式土師器である。その多くは竪穴住居より見い出され、その他墳丘墓・土坑資料と続く。これらの資料の多くは比較的単発的に廃棄されたもので、中には良好な一括資料として提示できるものも含まれる。また竪穴住居内出土遺物においても比較的時間幅の狭い遺物群が多く見られるのであり、重複する下層住居内資料が混在する場合においても、その峻別は比較的容易な作業であった。また遺物自体の保存状況も良好であり、技法研究においても満足する資料が得られたことになる。

器種は大別すると量的比率の高いものから甕・高杯・壺・鉢・器台・その他の6種類となる。「その他」の中には濃尾平野以外の地域に形態の素形を求める資料である「搬入品」「模倣品」が含まれる。（第Ⅴ章　53頁参照）

出土量はコンテナ500箱ほどを数え、その内個体識別及び細い器種分類を可能にしえたもので、かつ遺構内資料は1,057点であった。以下これら土器研究の素材として利用できる資料を中心に話を進めることになる。

全体の土器に関する考察は第Ⅴ章で行うことになるので、ここでは出土状況において特に注目された資料のみを概観しておくことにする。

SZ01及びその関連資料（第7図）

前方後方型墳丘墓

前方後方型墳丘墓SZ01出土遺物にはその出土状況において図で示したように大きく4つのまとまりが見られる。まず墳丘外として地山緩斜面上に集積するSU02。SZ01と平行する溝SD15とSK41に囲まれた土坑群上に散在した土器、SU01。溝内資料としては東屈曲部に内側から投棄された資料（a・b・c・e）と外側から投棄された資料（f・g・h）が存在する。その他図版6の27～32の資料は前方部を巡る南溝より出土したものであり、図版7の33～42は後方部東溝北部の溝下層より出土した資料である。

SU02は49・50のS字甕A類古段階が見られ、高杯・器台の特色から廻間3期に所属するものである。SU01は43・44の台付甕は口縁端部が広い面をもち刺突文を施し、内面調整はケズリが見られる。山中様式を色濃く残す甕であり、47の体部球体のパレス壺が見られる等、総じて廻間1期にさかのぼる資料を含むと考えてよいであろう。東溝屈曲部内側投棄資料は、a地点より出土した二重口縁壺22、c地点の小型高杯23と鉢25はヨコ方向の細いミガキが施され同一製作者の手によるものの可能性が高い。またe地点の柳ケ坪型壺20はe

地点より口頸部が出土するも、体部はｃ地点に集積されていた。こうした一群の資料はその特色より廻間８期に含められる。またｂ地点の柳ケ坪型壺、西溝で出土した手焙型土器26及び器台24もほぼ同様な時期を考えてよいであろう。手焙型土器・器台の出土は外側からの投棄・転落状況を呈し、SU01を中心とした場所が一定の意味をもつ空間として長く意図されていたことを示す重要な資料である。次に外側よりの投棄資料であるがｆ・ｇ・ｈの資料には時期的にかなりの幅が認められるものの、おおよそ２つに区分できるようである。一つは３・４のＳ字甕、５・６のタタキ調整をもつ台付甕、14～16の高杯であり廻間４期の特色が見られる。もう一つは１・２台付甕・10～13の高杯を中心とする廻間２期～３期古相のものである。前者は総じてｆ地点から、後者はｇ・ｈ地点に集中する傾向をもつ。その他南溝及び東溝北部で出した資料も廻間Ｉ式期内に全て含まれるであろう。以上をまとめてみると、SU01が廻間１期にさかのぼる資料とすることができ、SZ01東溝屈曲部外側投棄資料及びSU02は廻間２～４期で、内側よりの投棄資料のみが８期に所属し、廻間遺跡の終焉時期に相当することになる。こうした遺物の出土状況から前方後方型墳丘墓SZ01の造営及び祭りの在り方をある程度推定することが可能である。とりあえず以上の諸点をまとめておこう。

出土土器の時期

1．出土遺物から見るとSZ01は廻間１期から４期と、その後の８期の大きく２つの時期が存在する。

2．SZ01には大きく２ヶ所の土器廃棄場所が存在する。一つはSU01及び土坑群が集中する西屈曲部西側。今一つは東溝屈曲部。

その他ここで遺構の特色について追加しておかねばならない。１つは東溝屈曲部北側が最も深く掘削されており、前方部西側と東側の掘形の角度が異なる。墳形の再整備を想定できる可能性がある。次に前方部の南周溝は現状では溝深に著しい変化は認められない、しかし南溝幅のみがほぼ後方部幅ほどの長さを保ち南側に突出した形態が見られる。同時に西と東で南溝屈曲の様子が異なる。こうした点から、南溝の再整備も否定できない問題である。図版６―28・29は南溝東南隅より出土し廻間Ｉ式２段階を降る資料とは考えられない。南溝の再整備（溝の深さの統一）が実施されたと仮定してもＩ式２段階ではすでに検出しえた状況に近い墳形と形状を整えていたものと考えられる。

以上を綜合するとSZ01の変遷には３つの段階を想定することができよう。

変遷

第１段階　SZ01が造営され、その主体者が葬送儀礼をとり行う。墳丘墓西側で祭が実施され(SK34～36)、使用された土器は放棄される。(SU01)また東側屈曲部においても土器投棄が行われた。（ｇ・ｈ地点）廻間Ｉ式１～２段階。

第２段階　墳丘墓西側及び東側で祭りが実施され、西側ではSU01の南に土坑群及びSD15を掘削し、SU02周辺に土器投棄を行う。東側での土器投棄はｆ地点を中心に見られる。廻間Ｉ式３～４段階。

第３段階　SZ01墳丘上で祭が実施されその時の道具が内側から東溝屈曲部へ投棄される。（ａ・ｂ・ｃ・ｅ）また同時に西側でも祭が行われた形跡があり、土器が放棄される。

廻間Ⅲ式２段階。

SZ01の被葬者

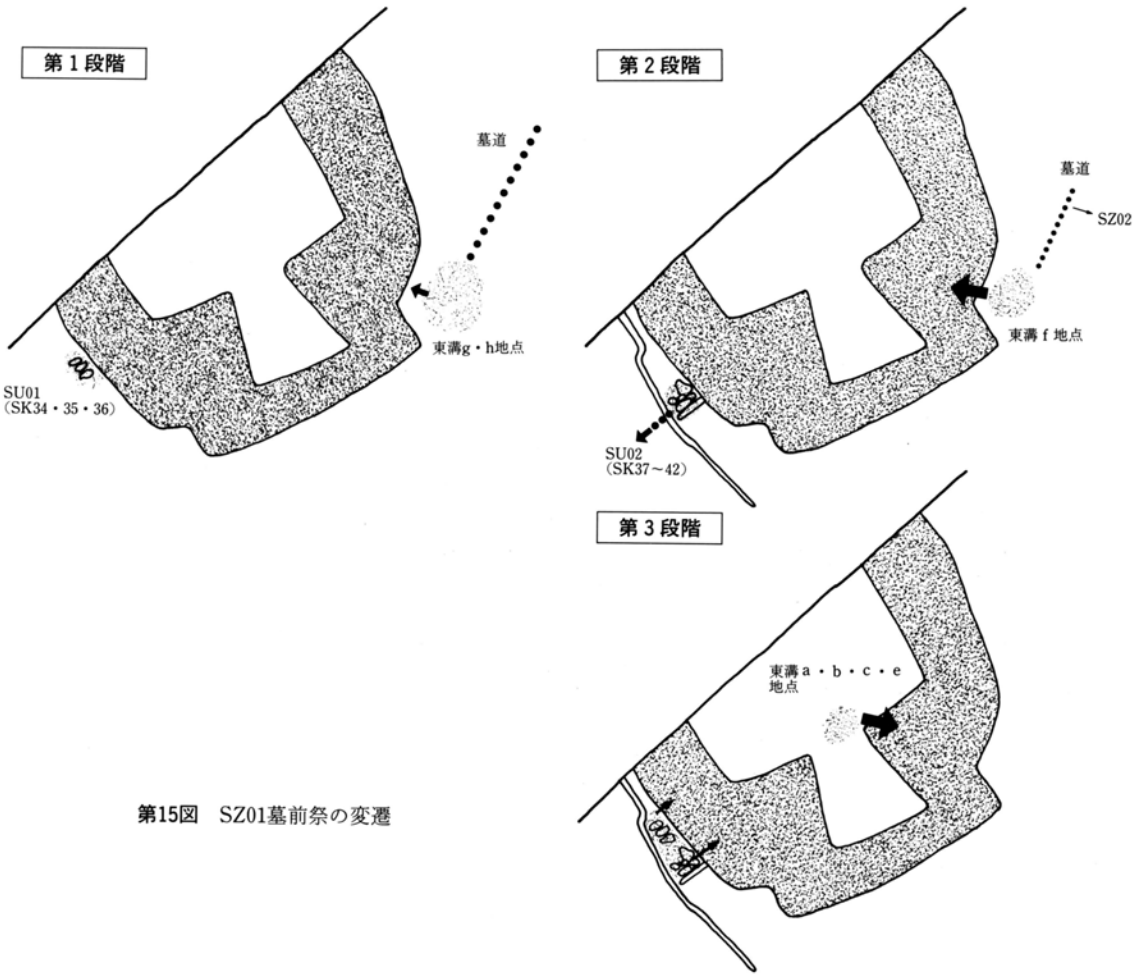
SZ01は西側に主要な祭の場所（土器の放棄を伴う）を設けると同時に東屈曲部溝内に土器投棄を行う現象が見られる。これらは廻間Ⅰ式期内継続して祭が実施されたことを物語る資料と思われる。その後Ⅱ式期にはほとんど行われず改めてⅢ式期になり急きょ墓前祭がとり行われたその意義は重要である。最後の祭が廻間遺跡そのものの終焉の時期と重なる点と、SZ01の造営が集落の定着段階に位置づけられしかも前方後方型を呈する事を考え合せると、初代開拓者のリーダーとしての被葬者の性格が類推できるかもしれない。

SZ02（図版９・10　第７図）

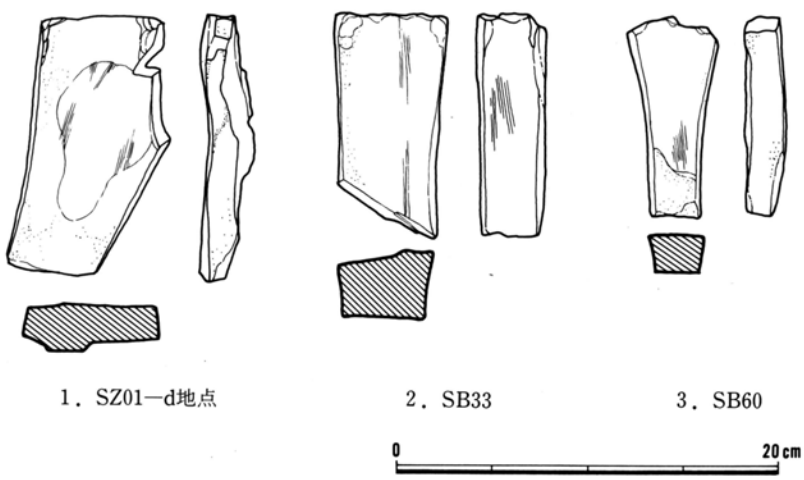
墳丘墓SZ02

廻間５期新相（廻間Ⅰ式２段階）の良好な一括資料がSZ02北西コーナー部周辺より出土している。甕15点、高杯７点、壺５点、鉢２点、器台２点で甕の割合が約５割と、器種構成においても廻間５期の在り方を反映しているものである。墳丘墓に使用された土器としての特色を見い出すとすれば、S字甕は全体に小型で、117の赤彩を施した線刻文土器(118はその底部の可能性あり)、115の台付壺、110の器台と組合わされたと考えられる104の内彎細頸壺等の存在を指摘することができよう。104は細頸壺の最終の形状を良く留めたもので、口頸部の多条沈線文と体部下半の著しい扁平化はその特色と考えてよいものである。117の線刻文土器は口頸部がく字状に大きく外傾し、端部は受口状に屈曲し面をもつ。体部の形状はその下半部に最大径を置き、上半にも明確な屈曲を伴うやや異質な形を保つ壺である。外面はハケメで整えるのみで、ミガキ・ナデは見られず、その上に直接体部¼の面積を利用して文様が刻まれている。Ｓ字甕はすべてＢ類古段階の資料で、体部の形状が球形を呈し、上半に見られるヨコハケは頸部から離脱することはなく、内面のハケメの残存も比較的多い。90の台付甕はく字内彎口縁を呈するもので、外面調整はケズリＢ（掻壁）を全面に用いる。ハケメからケズリＢへの変化を示す資料として注目されよう。高杯は脚部の形状の圧縮化が進んでいるものの、内彎脚は明瞭に留めている。杯部は直線化へ移行した資料（106、107）と内彎志向を残す資料（105、108、109）の２者が存在する。なお108は内面に段を残す多条沈線文が見られる。114の高杯は杯部が著しく屈曲し、口縁が外方へ大きく外傾するもので、杯部に透孔を穿つ。113は小型高杯の脚部で、杯部から柱状部を残しつつ外反し、底部付近にて大きく外方へ外反する形状のものである。２ヶ所に凸帯を巡らせ、その間を沈線文と刺突（クシ）波線文で飾る。115は中型の広口直口台付壺で、頸部に凸帯を有し、刺突文を施す。体部は球形でミガキ調整を用いる。

これらの遺物の出土状況はｉ～ｎ，ｐ地点に集中し、前方後方型墳丘墓SZ01の東側土器投棄地点と相対する位置にある。SZ02の北西隅は陸橋部的な場でもあり、SZ01･02への墓道を復原する手掛りをあたえてくれる資料であろう。また廻間５期の土器組成を反映する点と、出土位置・状況を綜合すると数次にわたる土器廃棄を想定するよりも、単発的な行為と解釈した方がよい。



第15図　SZ01墓前祭の変遷



第16図　砥石実測図（１：４）

SB02（図版11・12　第19図）

廻間1期標式資料

SB02出土資料は132～139と140～152に大別でき、後者はSB02床面直上で検出した一群の遺物である。床面上の資料は高杯6点、甕4点、壺4点。量的な問題は残るものの高杯の比率が高い点は注目してよく、廻間式土器直前様式の組成をある程度反映しているものと考えられる。

高杯は2類に細分でき、1つは140・142・144の資料であり、その変化の方向は口径の縮少と杯部の深さの増大にある。脚部は柱状から内彎脚に移向する形状を呈する。今一つは141・143の資料であり、杯部の深さの増大傾向は同様であるが、口縁は内彎し大きく外傾する。また口径と稜径（杯部上下段の屈折部）の比が増大する基本的な傾向を内包する。後者が廻間2期以降の主要な形態として発展してゆくことになる。甕は体部が球形で、端部に面をもち、刺突文を施すものも見られる。147は口縁部をヨコナデすることにより、彎曲化を意図した手法が見られるもので、廻間2期から出現するく字内彎口縁台付甕の素形と考えられる。149・150は内彎直口壺で、口頸部は大きく内彎して開口する形状に今だ発展していない。体部は中央部に最大径を置く算盤玉形を呈し、明確な広い平底部をもつ。151は尖底をもつ内彎細頸壺である。

廻間6期古相標式資料

SB60（図版37・38　第18図）

SB60出土遺物として取扱う資料は全て、住居廃絶後掘削された土坑状の凹みに放棄された一括資料を意味する。土坑内最下層である灰色砂質土から出土している。甕20点・高杯10点・壺9点・鉢4点・器台2点の廻間6期古相（廻間II式3段階）の標式資料である。

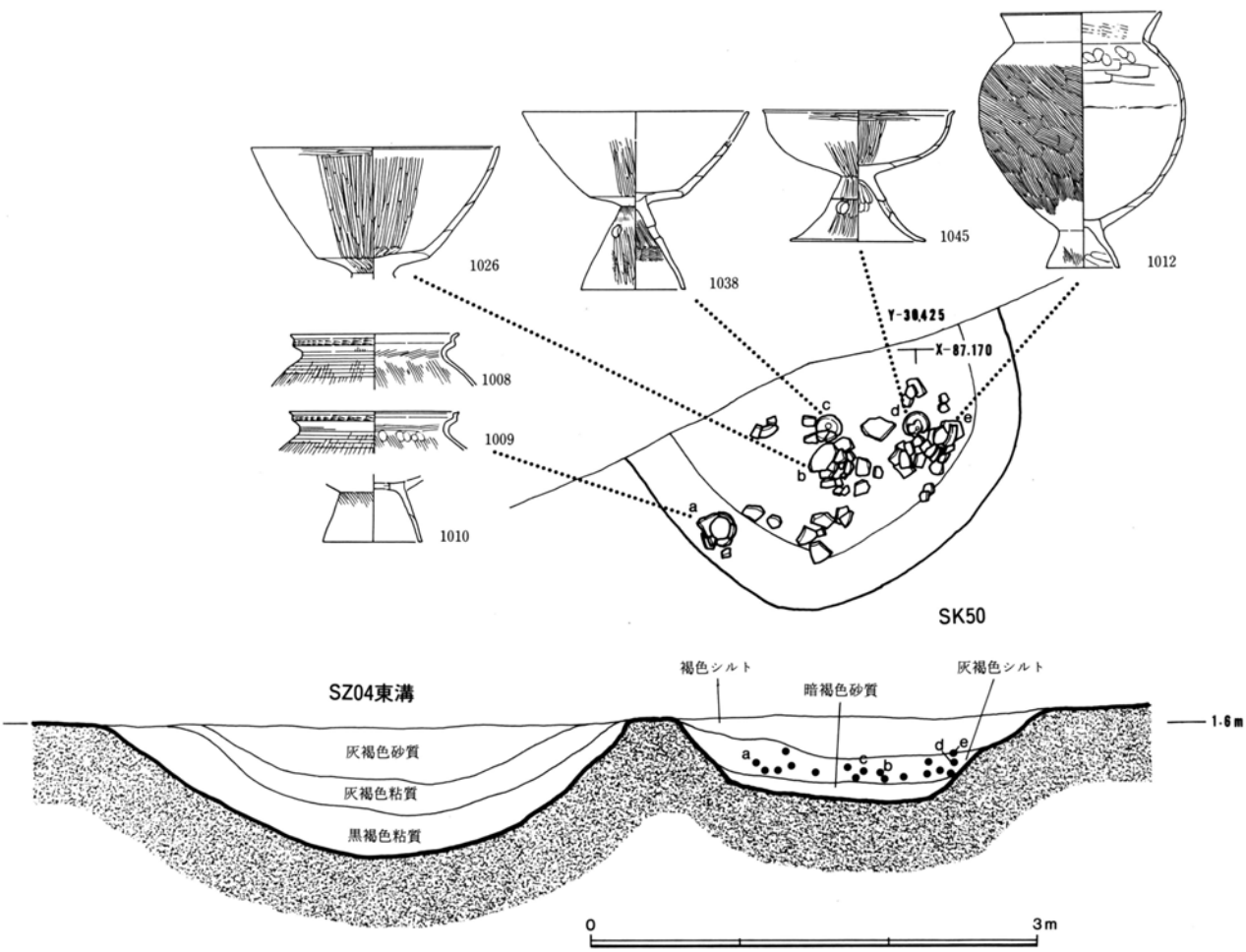
甕はほとんどがS字甕によって占められ、超大型品を含めて多種認められる。口縁端部に明瞭な面を留め、体部上半のヨコハケは頸部から完全に離脱し、内面のハケメは一部ヘラ状工具によるナデdに置換するものも見られる。S字甕B類中段階の良好な資料である。高杯は杯部が直線化し、深さも浅くなるものの、わずかな内彎を留める資料も存在する。脚部は904・907に見られるように内彎脚の影響を残し、その最終末の様子を表している。一方906のような強く外反する脚を用いた高杯が確実に共伴するようになる点もこの段階の一つの特色と考えられる。908は畿内系の高杯の模倣品で、器壁の厚いやや粗雑な作りのものである。壺は927、928といった短頸ヒサゴ壺が存在し、体部は著しくしもぶくれ状となり、最大径は体部最下位近くに置く。921～923のパレス壺は、口縁部の垂下拡張口縁が消滅し、有段口縁化したものとなる。器台は916・917と内彎脚を残し、917のような柱状化する傾向が認められる。鉢は929のように口縁部を肥厚し、段を有するものが見られる。

廻間4期標式資料

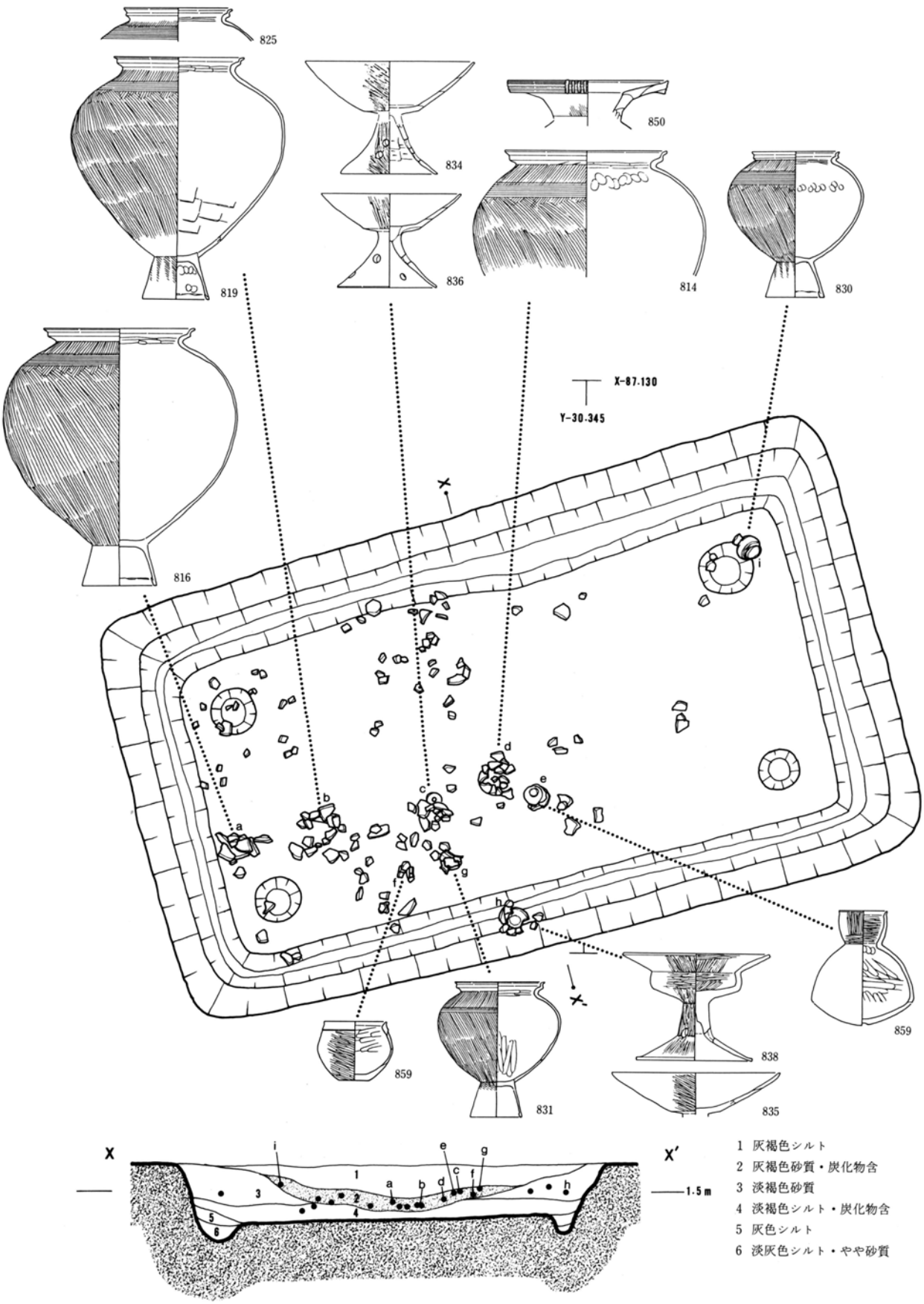
SK50（図版45・46・47　第17図）

第2層である灰褐色シルトより多く出土し、廻間4期（廻間I式4段階）の良好な一括資料である。高杯23点、甕20点、壺11点、器台2点、鉢1点。その他手焙型土器・手捏土器が出土。廻間4期の土器組成に比べ高杯の比率が高いのがSK50の特色であり、手焙型土器、手捏土器、土坑の在り方（SZ04に近接）を加味すると、特殊な性格をもつ土坑である可能性が高い。

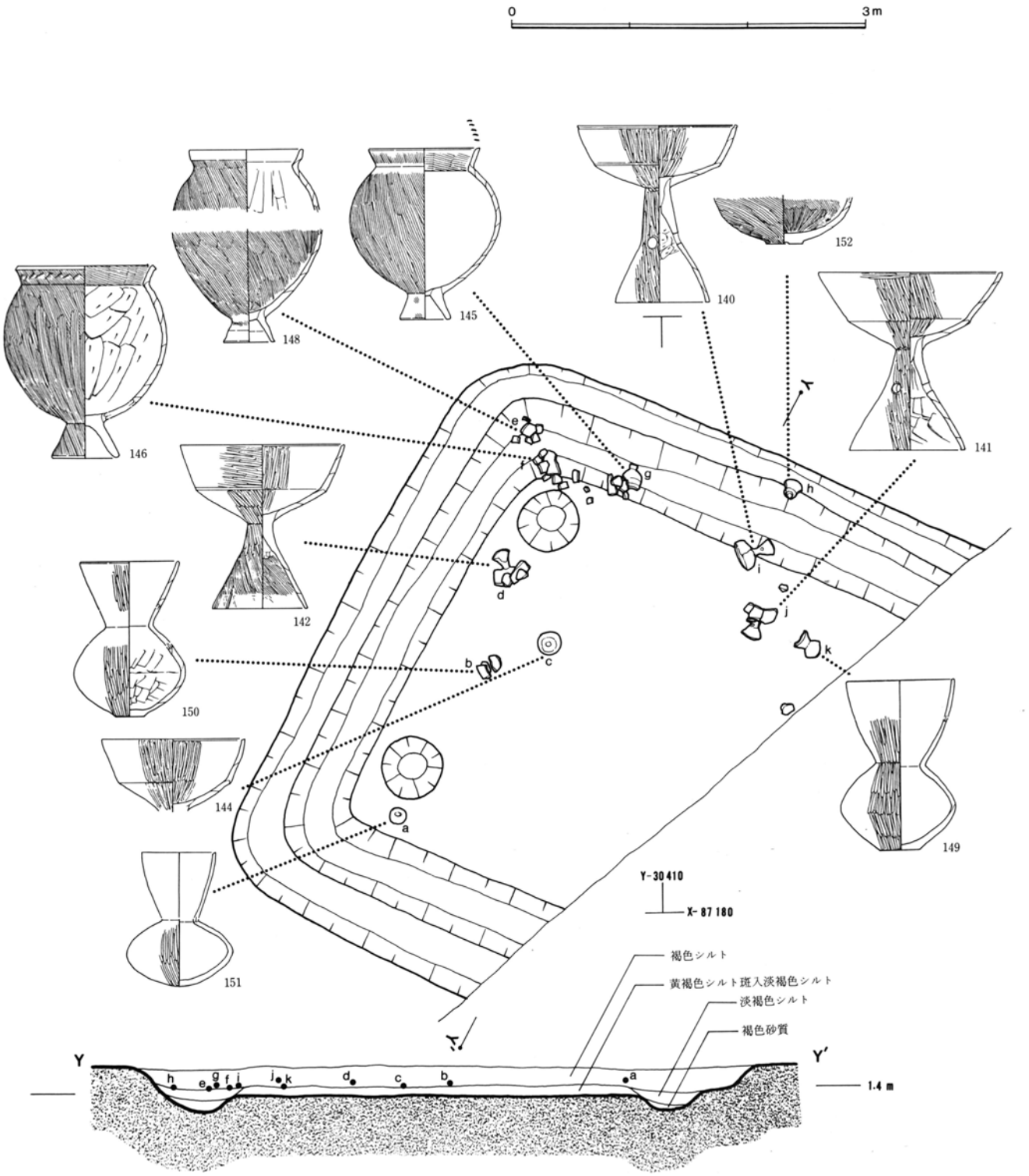
有段高杯は杯部が深いものと、比較的浅く外傾するものと２者が併存する。脚部もやや圧縮（器高低下）した内彎脚と、直線化へと変化する（1108）ものと２者が見られる。椀形高杯は口径が大きく浅い1115・1116と小型の1109が存在し、脚は大きく八字状に開口するものが主体をなす。1112は脚部に屈折部をもち、有稜高杯の脚部である。甕はS字甕の比率がやや多く、S字甕A類新段階の資料が存在する。台付端にも折返しは見られない。パレス壺の垂下拡張口縁には細い擬凹線文が施され1091は単位の細かい不連続波線文（貝殻）が見られる。1121～1126は広口壺で、1125は体部上半に一ヶ所逆U字形の彩文が認められる。



第17図　SK50遺物出土状況（１：50）



第18図　SB60遺物出土状況（1：50）



第19図　SB02遺物出土状況（1：50）

2 その他

古墳時代後期～奈良時代

第20図に示した資料は旧河道NR01より出土したものである。

C区東側に存在するSE33東方より出土したものとして第20図1・2・4・5・9・10があり、D区東端に位置するSE18・19付近より3・6・11・12の資料が出土している。また7・8はC区東端、SE22付近の下層（第6図暗灰色粘質土）より出土した資料である。

7・8は須恵器杯身で、8は口径11cm、器高5.1cmを測り、底部に径4.5cmの平担面をもつ。ケズリは体部½ほどに施され、口縁端部は斜面をもち、そこに一条の凹線が巡る。暗い青灰色を呈する。7は口径13cm、器高5.5cmで底部に径6cmの平担面をもつ。口縁端部には不明瞭な段が残る。淡褐色を呈する。8は東山11号窯期、7は東山61号窯期に属するものであろう。

6は須恵器杯身で口径12.6cm、器高4.8cmを測り、口縁端部にはわずかながら段を残す。ケズリはほとんど底部平担面付近に留まる。3は長頸壺で口径8.8cm、器高17.4cm、口頸部に2条の沈線が見られ、体部上半には上位1条、下位2条の沈線で区画された文様帯が存在し、その内部をヘラ描の斜線文が施される。底部はヘラケズリによって平底を呈し、ヘラ記号が存在する。11・12は土師器甕で、く字状の口縁部をもち端部はやや強くつまみ上げる。体部は球形の丸底で、外面はハケメ調整、内面はハケメ調整後、下半をケズリ調整を施す。なお内面下半部を中心に指頭圧痕が認められ、底部の「型」使用を類推させる。

型の使用

4・5は須恵器杯身で、小型化が著しく、1は長脚の有蓋高杯、2は無蓋高杯。10は須恵器甑、口径24cm、器高27.8cmを測り外面平行タタキで、下半部をその後タテ方向にケズリを施す。内面はナデ調整が見られる。

平安時代～鎌倉時代

13は土師器杯で、口径20.6cm、器高2.6cmを測り、内外面はヨコ方向のミガキを施す。内面には斜格子文状の暗文が見られる。赤褐色を呈する。

14は長胴の体部をもつ土師器甕で、外面調整はハケメ、内面は指ナデを施す。底部に「型」使用の痕跡が明瞭に認められる。

15～19・22～26は灰釉陶器であり、16・18・22・23ははけ塗。23・25は段皿で26は托である。27は緑釉椀で、断面は暗い青灰色を呈する。20・21・28・29・34～43は灰釉系陶器で、30～33・44は土器である。44は糸切り底をもつ資料。

加工円盤

45～80は加工円盤であり、全て灰釉系陶器をその素材として用いている。加工円盤の分類では灰釉系陶器の椀・皿を素材にした「A類」（45～68・74・75・80）と椀・皿類以外を使用した「B類」（69～73・76～79）の両者が見られ、A類の内、高台部を使用した「A_1類」が大多数を占め、「A_2類」は74・75のみである。

旧河道（NR01）が定全に埋没する時期を類推する資料としての土器群は、第21図の灰釉

系陶器及び加工円盤であると考えることができる。椀では底径が小さく、器高が高い、肥厚口縁をもつ瀬戸系の椀の流入が見られないことから、14世紀をまたずして河道の埋没が実施されたことが推察される。この年代は加工円盤の終焉する時期とほぼ対応しよう。

円盤の使用

また加工円盤の出土は中世期の遺構が集中するA・B区にほとんど見られず、旧河道を中心に点在する点は注目される所である。これは土田遺跡で見られた加工円盤の出土分布と類似し、墓域と推定される方形土壙群以外の居住区周辺に多く使用されているとする見解と符合する。

SE38（第22図）

灰釉系陶器椀８点、皿５点、土鍋１点が出土する。椀は口径15cm前後で器高5.0～5.5cmのものが多い。底径は6.5～7.0cmと13世紀後半期の法量の特色が認められ、端部は面をもつものが多い。皿は高台が欠損し、ヨコナデにより体部を２段構成した資料であり、口縁に向かって外反する形状のものが見られる。12～14は底径が４cmほどで、口径８cmを測る。９は伊勢型鍋の口縁部で折返口縁となる。

SE37（第22図）

灰釉系陶器椀６点、皿１点、土製皿１点。椀は口径13.5～14cmと小型化し、それに比べて器高は５～６cmとやや高くなる傾向が認められる。口縁端部は肥厚するものが存在する。（26～29）底径は６～７cmと比較的大きいものが見られる。26・27は明らかに瀬戸窯産のものである。SE38と比べより新しい様相が見られ、14世紀前半を中心とする時期が考えられよう。33は口縁部ヨコナデによって製作された小型の内型成形の土製皿である。

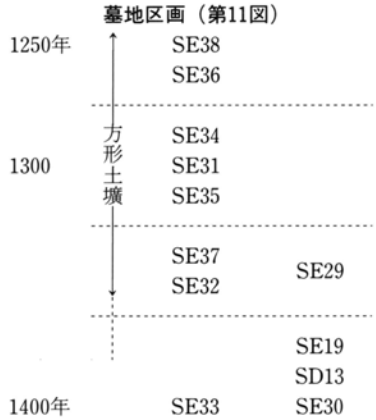
SE33（第23図）

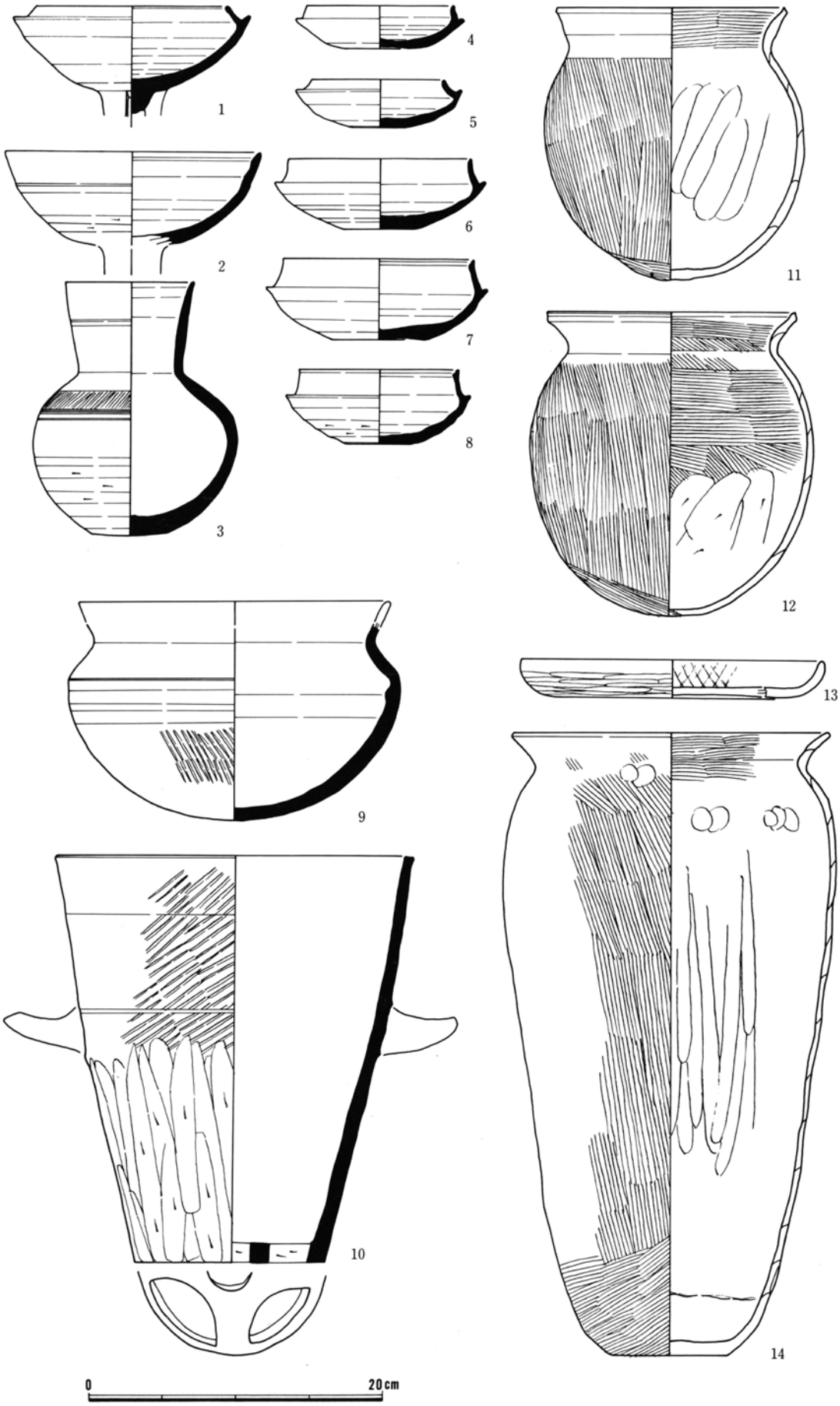
灰釉系陶器椀２点、皿３点、鉢１点、陶丸２点、施釉陶器皿１点。

41・42は美濃窯産の精製品。35・39の皿も同様な特色が見られるが、37の皿は粗製で口縁をヨコナデにより強く外反して製作し、端部に面取し、幅広い面をもつ。33は口縁端部が外方へ大きく突出して凹面を構成するものである。40は灰釉皿で、底部に「上」の墨書が見られる。25・26は陶丸。

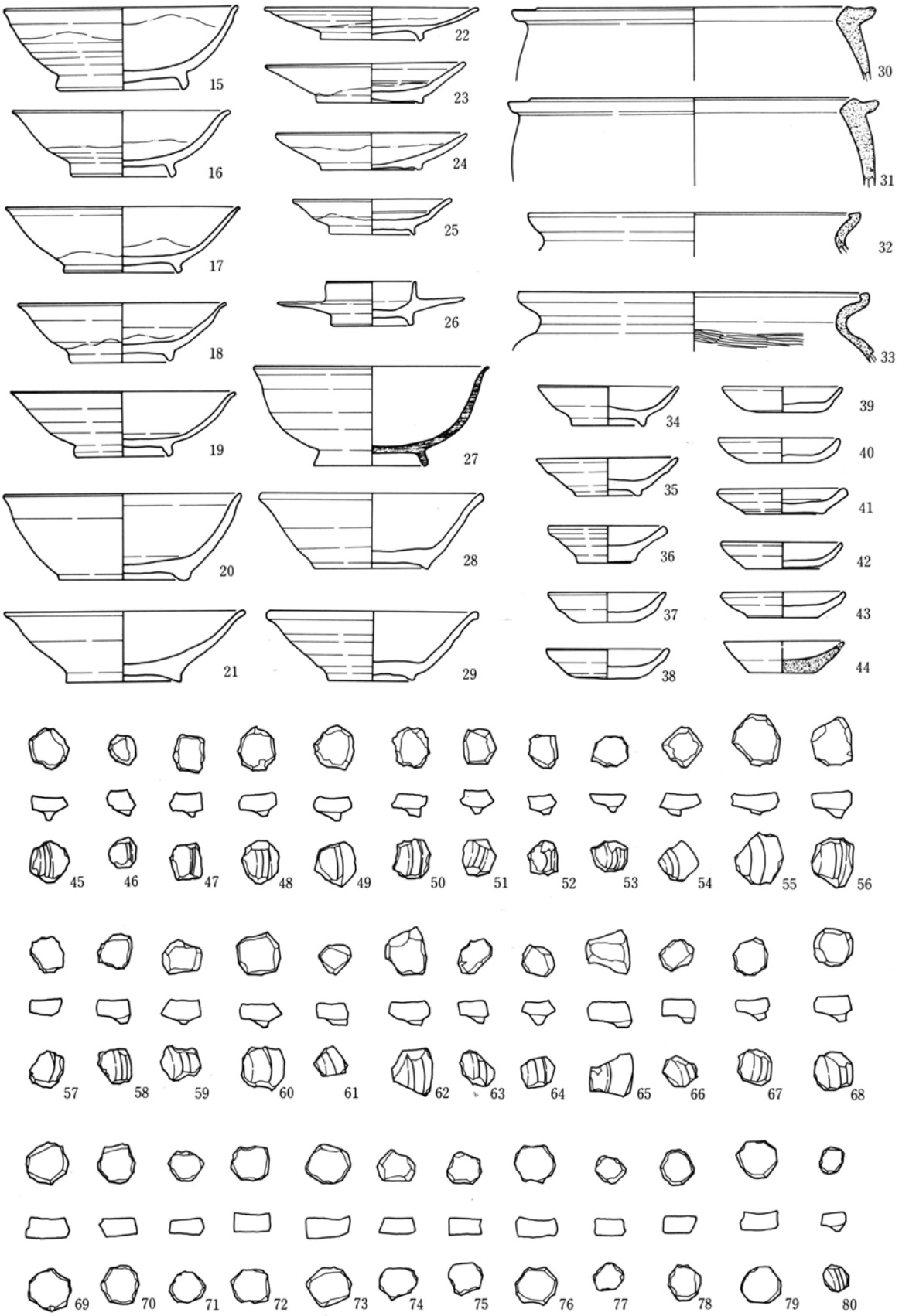
以上の主に井戸出土資料を中心にまとめてみると、廻間遺跡では13世紀後半から15世紀初頭にかけて遺構が展開すると考えてよいであろう。土田遺跡第Ⅲ期の画期以降の遺跡と位置づけられる。

墓地区画（第11図）

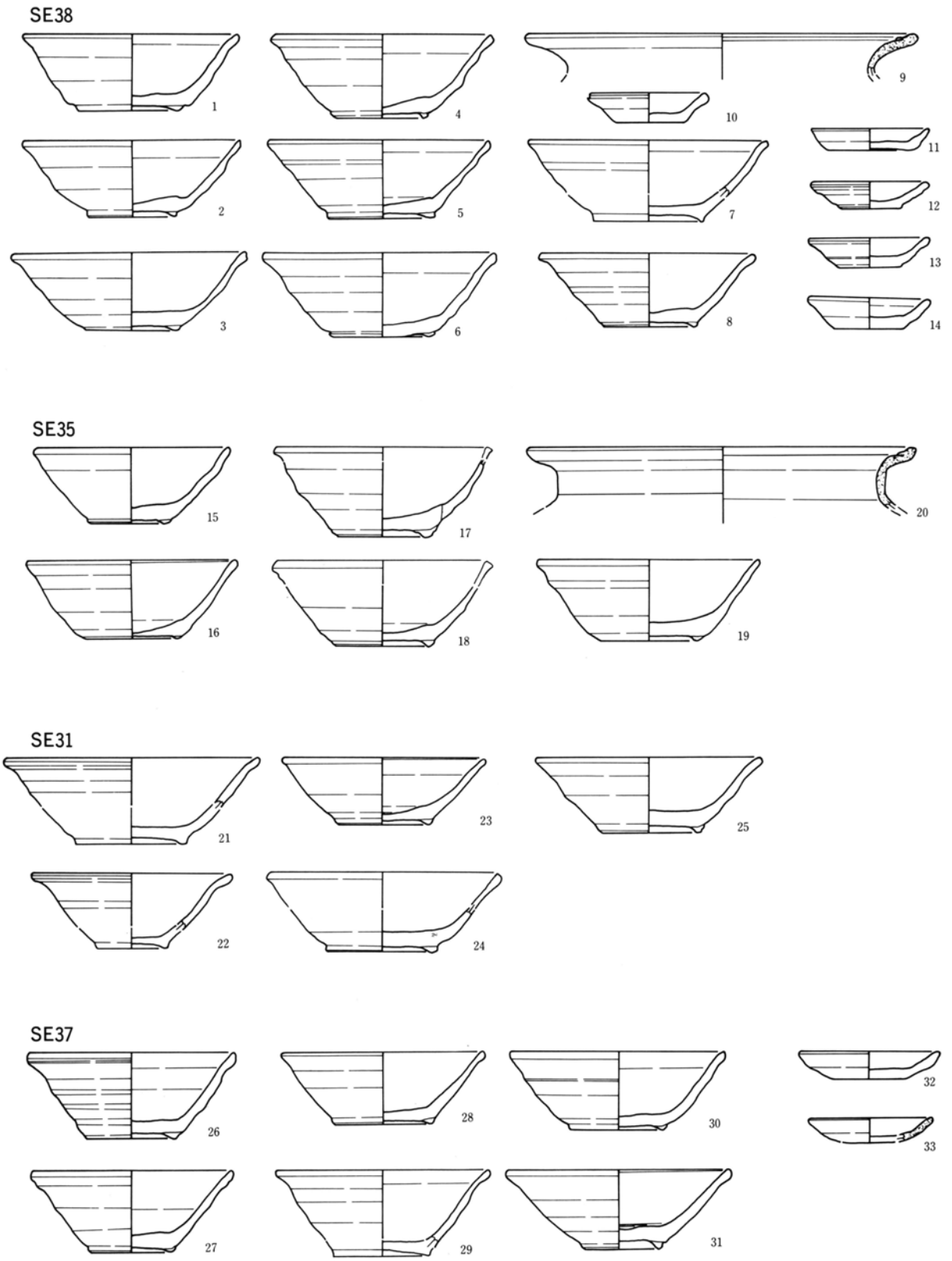




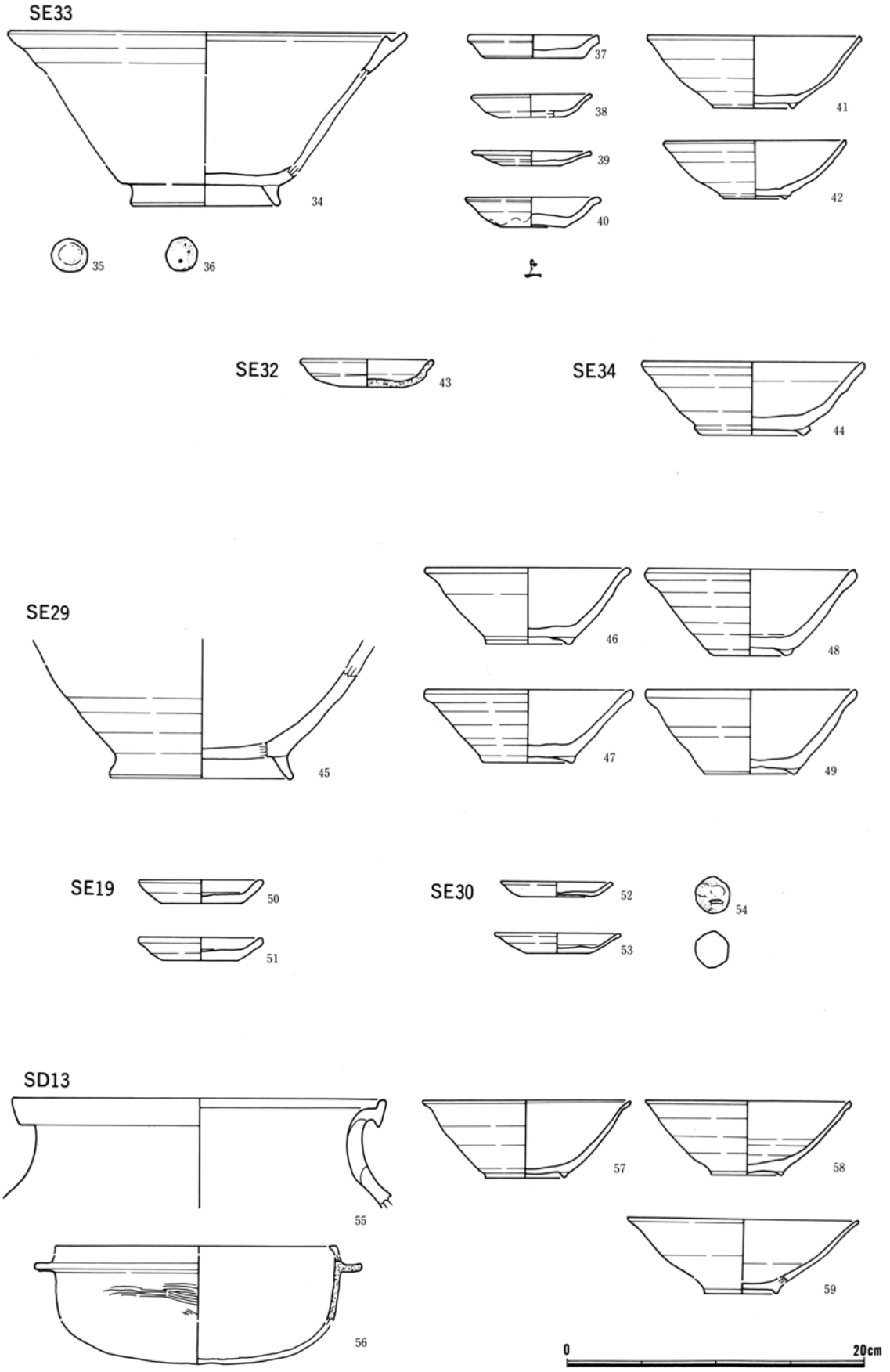
第20図　NR01出土遺物(1) 1 ： 4



第21図　NR01出土遺物(2) 1 ： 4



第22図　灰釉系陶器(1) 1 ： 4



第23図　灰釉系陶器(2) 1 ： 4

江戸時代

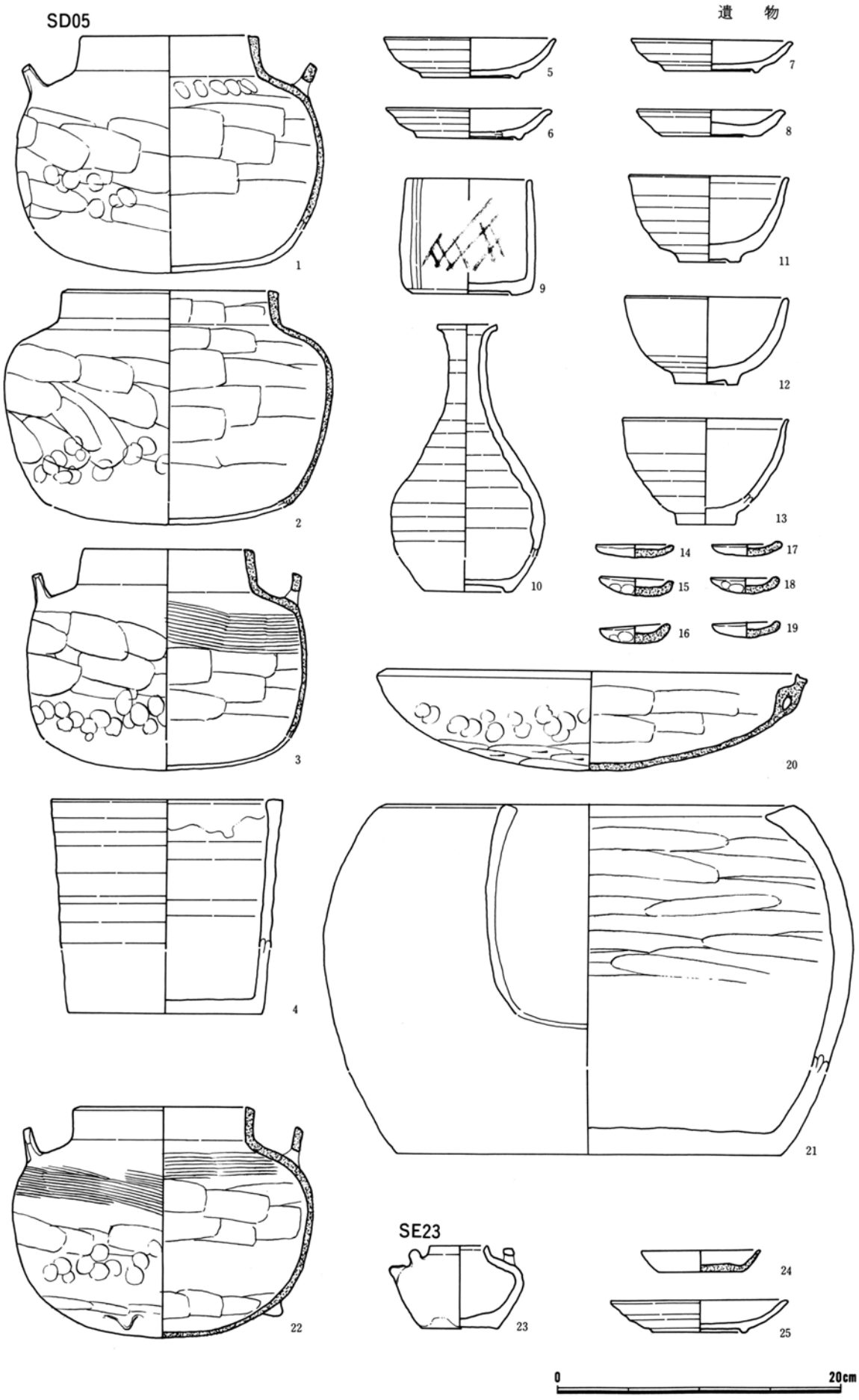
江戸時代の遺構はE区及びC・D区東端に集中して検出することができたが、まとまった出土遺物はほとんど見られない。

SD05（第24図）

1～3は土鍋で、底部を欠損する資料が多く全形を復原できないものの三足両耳を有する形式であろう。体部は肩の張りが強く、どちらかというと箱型を呈する。調整は外面に板状工具によるナデが明瞭に見られ、体部下半には指頭圧痕が著しく残り、内型成型を類推することができる。内面は丁寧なヨコ方向の板状工具によるナデ調整が見られる。体部外面には煤の付着が著しい。20は内耳鍋で口径29.2cm、器高7cmを測り、口縁端部は肥厚し、面をもつ。外面には内型成形時と考えられる指頭圧痕が著しく残り、底部はケズリを施して整えている。内面は丁寧な板ナデ、あるいはナデ調整を用いる。14～19は土製の小皿で手捏製と考えられる。外面に指頭圧痕が明瞭に残る。口径4.5～5cmのものが多く見られる。4は鉄釉水指しで、口径16.3cmを測る。5～8は長石釉を施した皿で、下絵の描かれた資料は認められない。9は四面に下絵が施されている長石釉の向付である。10は鉄釉の徳利で底部を欠損する。11は灰釉を高台近くまで施した椀であり、口径11.2cm、器高6.1cmを測る。12は長石釉を外面⅔まで施した椀で、口径11.5cm、器高6.1cmを測る。13は鉄釉天目茶椀で口径11.6cmを測る。21は無釉の赤褐色を呈する火鉢で口径28.8cmを測る。

SE23（第24図）

22は三足両耳をもつ鍋である。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、端部に面をもつ。体部の形状はやや球形を呈し、口径11.8cm、器高16.5cm外面には体部上位にヨコハケを用いる。体部中位にはヨコへの板ナデと指頭圧痕が多数認められる。23は灰釉を施した水注で、口径4cm、器高5.9cm、24は土製の皿で底部に糸切痕が見られる。広い底部から強く外方へ広がる口縁部をもつ。口径8.5cm、器高1.5cm。25は長石釉の皿、口径12.5cm、器高2.3cmを測る。



第24図　SD05・SE23出土遺物（1：4）

Ⅳ　胎土分析

1　重鉱物胎土分析（甕）

試料

試料は、清洲町にある廻間・朝日の各遺跡から出土した弥生土器70点である。今回試料とした土器は、主にS字状口縁台付甕であり、他に受口状・く字状口縁台付甕がある。各試料の出土した遺跡名、器形、種類、表面観察結果などは第２表に示す。

分析方法

土器片約10～15ｇを鉄乳鉢を用いて粉砕し、水を加え超音波洗浄装置により分散、#250の分析篩により水洗、粒径１/16㎜以下の粒子を除去する。乾燥の後篩別し、得られた１/４㎜―１/８㎜の粒子をテトラブロモエタン（比重約2.96）により重液分離、重鉱物のプレパラート作製、偏光顕微鏡下にて同定した。同定の際、変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とした。

分析結果

鉱物の同定粒数は、250個を目標としたがこれに満たない試料が13点あった。さらにこのうち100個に満たない試料が№37・№52・№60・№66の４点あった。これら４点の組成は、他の試料と同等に扱うことはできない。

試料は、全体的に「その他」とした粒が多い。同定できた鉱物の中では斜方輝石と単斜輝石の両輝石および角閃石・黒雲母・ザクロ石が主体となる。これらの鉱物の各試料における量比は様々である。他にジルコン・電気石・不透明鉱物などが試料により少量含まれる。各試料の鉱物組成を第３表・第25図に示す。

まとめ

(1)試料グループ

分析結果をもとに各試料の重鉱物組成において優占する鉱物、含まれる鉱物の組合わせおよびその量比などから以下（Ⅰ―１・２・３・４・５・６・７、Ⅱ―１・２・３・４・５・６、Ⅲ、Ⅳ）のような試料のグループ分けをおこなった。この場合、「その他」はまず除いて考える。

両輝石　Ⅰグループ

斜方輝石と単斜輝石の両輝石を主体とする。他の鉱物との組合わせから次の小グループに分けることができる。

Ⅰ―１（№３・７・18・19・24・69）両輝石がほとんどを占める。

Ⅰ－2（No.1・4・8・46・65・70）両輝石が多く、少量の角閃石を伴う。

Ⅰ－3（No.10・22・49）両輝石とほぼ同量の黒雲母を含む。

Ⅰ－4（No.31）Ⅰ－3によく似るが、角閃石と不透明鉱物がやや多い。

Ⅰ－5（No.15）最も多いのは黒雲母である。しかし、後述する他のグループの試料に比べて斜方輝石の量が多いのでⅠグループにいれた。

Ⅰ－6（No.57）・Ⅰ－7（No.67）「その他」が非常に多く、組成の特徴付けは難しい。しかし、他の試料との比較から組成の傾向としてはⅠグループに近いと考える。

Ⅱグループ

角閃石・黒雲母・ザクロ石の三つの鉱物を主体とする。それら三者の量比から次の小グループに分けることができる。

角閃石
黒雲母
ザクロ石

Ⅱ－1（No.11～14・26～28・34・36・43・47・48・50）角閃石が最も多く、少量の黒雲母・ザクロ石を伴う。

Ⅱ－2（No.2・5・6・9・35・45・62・64・68・79）角閃石とザクロ石が多く、少量の黒雲母を伴う。

Ⅱ－3（No.16・25・30・40・59・61・63）Ⅱ－2に比べて黒雲母が多く、ザクロ石が少ない。

Ⅱ－4（No.17・21・29・53）角閃石と黒雲母が多く、少量のザクロ石を伴う。

Ⅱ－5（No.41・55・58）Ⅱ－4に似るが、少量の酸化角閃石を含む。

Ⅱ－6（No.42・44）酸化角閃石が多く、少量のジルコンを含む。

Ⅲグループ（No.20・23・32・33・38・39）黒雲母が多い。

Ⅳグループ（No.51・54・56）ザクロ石が多く、少量の電気石を含む。

以上のグループを第25図に示す。なお、第25図におけるグループ内の試料の順番は、後の考察との関連から遺跡・器形・種類を考慮して並べかえた。また、同定粒数が100個に満たない試料は一応除く。

(2)胎土グループと土器の器形および種類との関係について

今回の分析では、器形と胎土との間に比較的明瞭な対応関係が認められる。すなわち、S字甕以外の器形の土器は、全てⅠに属し、他のグループに属するものは1点もないということである。

次に廻間遺跡のS字甕の種類における胎土の傾向についてみる。

A類：小グループの4・6を除くⅡとⅢ・Ⅳに分かれる。

B類：Ⅰ－1・2と小グループの5を除くⅡおよびⅢに分かれる。その中でⅡ－1・4とⅢに属するものが多い。

C類：Ⅰ－2・3・6と小グループの6を除くⅡおよびⅢに分かれる。

以上の状況から次のことがいえる。まず、A類では複数の胎土が混在し、中心となるような胎土のグループは認められない。また、Ⅰのような両輝石の多い胎土を持つものがない。C類ではやはり複数の胎土が混在するが、Ⅱ－1のような角閃石の多い胎土とⅢのよ

うな黒雲母の多い胎土を中心とする傾向が窺える。C類では最も多くの種類の胎土が混在し、しかもA類同様に中心となる胎土のグループは認められない。

ところで、S字甕以外の土器が主体となっているIに属するS字甕は、B類新段階以降の土器からなり、A～B類中段階のものは存在しないことがわかる。このことも胎土とS字甕の種類との関係において留意してよい点であろう。

次に朝日遺跡のS字甕A類の胎土について述べる。朝日遺跡のA類はすべてII－2・3に属し、よく似た組成を示す。これは、廻間遺跡のA類の胎土が多数のグループに分かれるのとは対照的である。朝日遺跡のA類をさらに多く分析しても同様の結果が得られるならば、朝日遺跡と廻間遺跡におけるS字甕A類のあり方の違いとして捉えることができる。現段階では、廻間遺跡のA類の中には朝日遺跡のA類とよく似た胎土を持つものもあるということがわかるだけである。さらに分析例を重ねることにより、両遺跡間の考察を進めることができるであろう。

(3)町田遺跡関連試料との比較

1988年報告の町田遺跡関連試料の土器は、本分析の試料とほぼ同時代のS字状口縁の甕である。それらの試料の中には、本分析の試料とよく似た胎土を持つものが多数認められる。

町田関連のグループは、いずれも一宮市・清洲町・八開村の濃尾平野中～西部地域の遺跡から出土した土器を中心とする。そして、そのグループの鉱物組成は、角閃石・黒雲母・ザクロ石の三者を主体とする。このような状況から、角閃石・黒雲母・ザクロ石の三者を主体とする胎土の鉱物組成は、濃尾平野中～西部の遺跡における弥生末～古墳時代にかけてのS字甕の胎土を特徴付けるものになることが考えられる。

一方、本分析でS字甕以外の甕が多かったIに対応する町田報告書によるVIIは、やはり本分析同様にそこに属する試料数が少なかった。両輝石を主体とするこのグループの組成は、これまでの愛知県における一連の胎土分析の中で、特に濃尾平野に分布する遺跡から出土した土器にしか認められない組成である。このことから濃尾平野における在地の可能性の高い土器の指標としてきた。しかし、現在までの状況では、濃尾平野のS字甕においてはこのような胎土のものが、かえって少数派に属する。このことは、愛知県におけるS字甕のあり方について考えていく上で重要な手がかりとなるのではないだろうか。

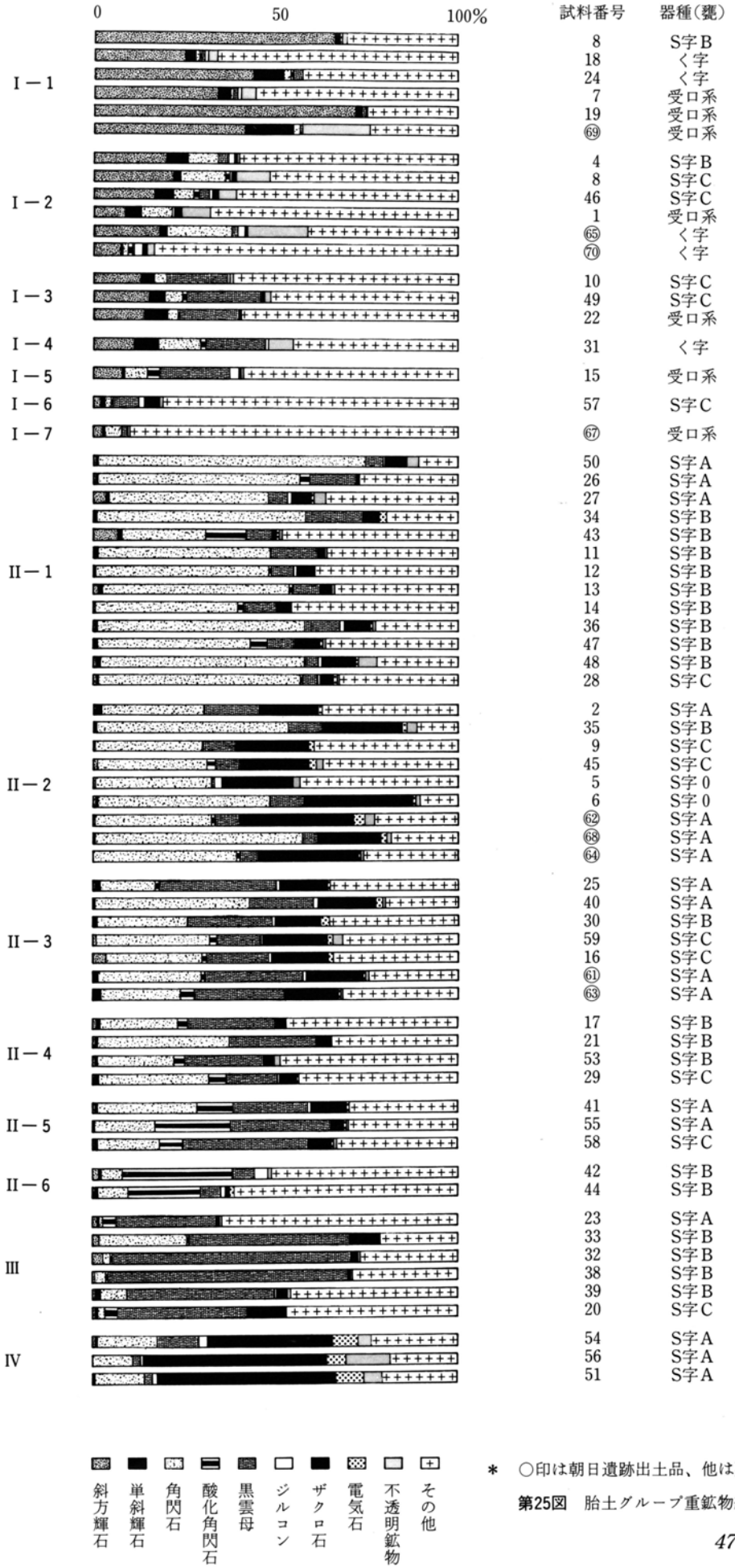
濃尾平野産の指標

第2表　胎土分析試料表

試料番号	遺跡名(調査区)	遺構	登録番号	図版番号	器種	部位	表面の色(表・裏)	表面の質感(表・裏)	表面観察結果(表・裏)
1	廻間（IKM60A）	SB01	E-10	123	受口	口縁	灰白・同	粗い―やや粗い	白色岩片多量、黒色斑晶少量含む。―灰色岩片・白色粒少量含む。
2	〃　〃	SB03	E-242	166	S字 A古	体部	灰褐・褐灰	やや粗い	黒雲母片・黒色斑晶多量、白色粒少量含む。
3	〃　〃	SB06	E-70	173	S字 B新	〃	灰白・同	粗い	灰色岩片・黒色斑晶多量に含む。
4	〃　〃	〃	E-71	174	〃　〃	体部下半	灰白～褐灰・灰白（こげ）	ややきめ細か―粗い	黒雲母片・灰色岩片少量含む。―灰色・白色岩片多量、黒雲母片少量含む。
5	〃　〃	SB75	E-193	1037	S字 O	体部上半	灰白～橙・にぶい橙	やや粗い	白色粒少量含む。―白色粒・灰色岩片多量含む。
6	〃　〃	〃	E-194	1036	S字 O	〃	にぶい黄橙・明褐灰	やや粗い―ややきめ細か	黒雲母片少量、黒色斑晶微量含む。―黒雲母片少量、黒色斑晶・白色岩片微量含む。
7	〃　〃	〃	E-196	1038	受口	体部	褐灰・にぶい褐	ややきめ細い―やや粗い	黒雲母片微量含む。―灰色岩片・白色粒少量含む。
8	〃　〃	SB12	E-120	245	S字 C2	口縁	灰褐・同	ややきめ細か	白色粒・黒色斑晶少量含む。
9	〃　〃	〃	E-103	239	S字 C1	〃	にぶい褐・にぶい橙	きめ細か	砂粒目立たず。―白色岩片微量。
10	〃　〃	〃	E-115	244	S字 C1	〃	灰褐・灰白	ややきめ細か―やや粗い	灰色・白色岩片・黒雲母片少量含む。―灰色・白色岩片多量、黒雲母片少量含む。
11	〃　〃	SK30	E-220	1064	S字 B中	体部	灰褐・灰黄褐	ややきめ細か―粗い	黒雲母片少量含む―黒雲母片少量、灰色岩片多量含む。
12	〃　〃	〃	E-218	1060	〃　〃	〃	橙～浅黄橙・灰白～灰	やや粗い	黒雲母片中量含む―黒雲母片少量・灰色岩片少量含む。
13	〃　〃	〃	E-221	1063	〃　〃	口縁	灰褐・明褐灰	ややきめ細か―やや粗い	砂粒目立たず。―白色岩片少量、黒雲母片微量に含む。
14	〃　〃	〃	E-219	1062	〃　〃	体部	灰白・同	やや粗い―粗い	白色岩片少量、黒雲母片微量含む。―白色岩片多量、黒雲母片少量含む。
15	〃　〃	SB27	E-295	330	受口	口縁	灰白～灰褐・浅黄橙	粗い―ややきめ細か	白色・灰色岩片多量含む。―白色岩片少量含む。
16	〃　〃	〃	E-285	347	S字 C	体部上半	にぶ黄橙・灰白	きめ細か―粗い	黒雲母片少量含む。―黒雲母片・白色岩片中量含む。
17	〃　〃	SB34	E-355	412	S字 B中	体部	灰褐・灰黄褐	やや粗い―ややきめ細か	黒雲母片少量含む。―黒雲母片少量・黒色粒少量含む。
18	〃　〃	SK51	E-430	1144	く字	〃	にぶ橙・橙	ややきめ細か	砂粒目立たず。―白色粒少量、灰色岩片微量に含む。
19	〃　〃	〃	E-341	1142	受口	口縁	褐灰・にぶ橙～灰白（こげ）	やや粗い―粗い	黒雲母片微量に含む。―白色・灰色岩片多量、黒雲母片微量に含む。
20	〃　〃	SK20	E-500	1195	S字 C1	体部	灰褐・にぶ黄橙	ややきめ細か―やや粗い	黒雲母片微量含む―白色岩片少量、黒雲母片微量含む。
21	〃　〃	SB33	E-359	395	S字 B中	体部	灰褐・同	ややきめ細か―やや粗い	砂粒目立たず。―灰色・白色岩片少量、黒雲母片微量に含む。
22	〃　〃	SB10	E-379	190	受口	〃	灰白・同	粗い	白色・灰色岩片多量含む。
23	〃　〃	SK50	E-146	1077	S字 A古	口縁	淡黄～灰白・灰白	粗い	白色・灰色岩片多量含む。
24	〃　〃	SZ04	E-178	70	く字	体部	灰褐・浅黄橙	ややきめ細か―粗い	砂粒目立たず。―白色・灰色岩片多量含む。
25	〃　〃	SK50	E-141	1072	S字 A古	口縁	灰橙褐・灰黄褐～灰白	やや粗い―粗い	黒雲母片微量含む。―白色岩片多量含む。
26	〃　〃	SK50	E-144	1078	S字 A新	体部	褐灰・淡黄	ややきめ細か	砂粒目立たず。―白色岩片微量含む。
27	〃　〃	SK50	E-145	1075	〃　〃	口縁	にぶい橙・にぶい黄橙	やや粗い―粗い	灰色岩片微量含む。―灰色・白色岩片多量含む。
28	〃（IKM60B）	SB56	E-238	804	S字 C1	〃	灰白～褐灰・同～同	やや粗い	黒雲母片少量含む。―白色岩片少量
29	〃	〃	E-242	805	〃　〃	〃	灰褐・黒	やや粗い―粗い	黒雲母片少量・白色岩片少量含む―白色岩片多量含む。
30	〃　〃	SB65	E-38	932	S字 B古	〃	灰褐・灰白	やや粗い―粗い	黒雲母片中量含む―白色岩片多量、黒雲母片少量含む。
31	〃　〃	SB64	E-50	880	く字 タタキ	体部	黒褐～灰褐・にぶい橙	きめ細か―ややきめ細か	砂粒目立たず。―黒雲母片少量、白色・灰色岩片微量含む。
32	〃　〃	〃			S字 B中	〃	灰褐・同	ややきめ細か―粗い	黒雲母片・白色岩片微量含む。―白色岩片多量含む。
33	〃　〃	〃			S字 B古	〃	灰褐・同	やや粗い―粗い	黒雲母片中量、白色岩片少量含む―白色岩片多量含む。
34	〃　〃	SB50	E-148	664	〃　〃	〃	黒褐・褐灰	ややきめ細か	砂粒目立たず。
35	〃（IKT60B）	SZ02	E-10	86	S字 B中	〃	明褐灰・褐灰	やや粗い―粗い	白色岩片・黒色斑晶中量含む。―白色岩片多量含む。
36	〃　〃	〃	E-7	95	〃　〃	〃	灰褐・褐灰	粗い	白色岩片多く含む。
37	〃　〃	〃	E-3	93	〃　〃	〃		きめ―やや粗い	砂粒目立たず。―白色岩片多量含む。
38	〃　〃	〃	E-4	87	〃　〃	〃	灰褐・明褐灰	粗い	白色岩片多量、黒雲母片微量に含む。
39	〃　〃	〃	E-6	88	〃　〃	〃	浅黄橙～明褐灰・灰白	粗い―やや粗い	白色岩片中量含む。
40	〃（IKT60A）	IIIF7t			S字 A古	口縁	灰褐・灰白	きめ細か―やや粗い	砂粒目立たず。
41	〃　〃	IIIF8c			S字 〃	体部	灰・灰褐	やや粗い	白色岩片少量、黒雲母片微量含む。―砂粒目立たず。
42	〃（IKM60B）	SB60	E-847	886	S字 B古	〃	灰褐・明褐灰	きめ細か―やや粗い	砂粒目立たず。―赤色粒多量、白色岩片少量含む。
43	〃　〃	〃	E-119	884	〃　〃	〃	灰褐・灰白	きめ細か―やや粗い	砂粒目立たず。―赤色粒多量、白色岩片少量含む。
44	〃　〃	〃	E-848	889・888	〃　〃	〃	灰褐～明褐灰・浅黄橙	きめ細か―粗い―やや粗い	砂粒目立たず―赤色粒・白色岩片多量含む―赤色粒多量、白色岩片少量含む。
45	〃　〃	SB45	E-589	573	S字 C1	口縁	灰褐(口縁)～明褐灰	やや粗い	黒雲母片・白色粒少量含む。―白色岩片少量含む。
46	〃　〃	〃	E-588	572	S字 C2	〃	灰褐(口縁)～明褐灰 灰白	やや粗い―粗い	白色粒多量含む―白色粒・白色岩片多量、灰色岩片微量に含む。
47	〃　〃	〃			S字 B新	体部	灰白・同	粗い	黒雲母片少量含む―黒雲母片少量、白色岩片多量含む。
48	〃　〃	〃			〃　〃	口縁	灰褐(口縁)～明褐灰 灰白	やや粗い―粗い	黒雲母片中量、白色粒多量に含む―黒雲母片・白色岩片少量含む。
49	〃　〃	〃	E-579	576	S字 C2	〃	灰褐(口縁)～にぶい褐	粗い	白色岩片多量、灰色岩片少量含む。
50	〃（IKM60A）	SB02			S字 A古	口縁	灰褐・灰白	ややきめ細か―やや粗い	砂粒目立たず。―白色岩片微量に含む。
51	〃　〃	SB03			S字 O	〃	褐灰・にぶい橙	きめ細か―ややきめ細か	砂粒目立たず。―白色岩片微量に含む。
52	〃　〃	〃			受口	〃	灰褐・灰白	きめ細か―ややきめ細か	砂粒目立たず。―白色岩片少量に含む。
53	〃　〃	〃			S字 B中	〃	浅黄橙・同	粗い	白色岩片多量、黒雲母片少量含む。
54	〃　〃	〃			S字 A古	体部上半	明褐灰・灰白	やや粗い	白色岩片少量含む。
55	〃（IKM60B）	SB59			S字 A新	体部	灰褐・明褐灰	ややきめ細か―粗い	黒雲母片少量含む。―白色岩片多量含む。
56	〃　〃	SB50			S字 A	口縁	褐灰・明褐灰	きめ細か	砂粒目立たず。―白色粒微量に含む。
57	〃　〃	SB56	E-239	810	S字 C	体部	明褐灰・灰白	やや粗い―粗い	灰色岩片少量含む―白色岩片多量、灰色岩片少量含む。
58	〃　〃	〃	E-254	806	〃　〃	体部上半	明褐灰・同	粗い	白色岩片多量含む。
59	〃　〃	〃	E-237	809	〃　〃	体部	褐灰・同	ややきめ細か	黒雲母少量含む。
60	〃　〃	SB59	E-188	833	S字 A新	口縁	淡橙・灰白	きめ細か	白色岩片少量、黒雲母片微量に含む。
61	朝日（IAS61J）	SD02	14g377		S字 A古	体部	褐灰・明褐灰	やや粗い	黒雲母片少量含む―黒雲母片少量・白色岩片少量含む。
62	〃（IAS61J）	SD02	14a73		S字 〃	〃	灰褐・明褐灰	やや粗い	黒雲母片少量、白色岩片微量含む。―黒雲母片・白色岩片少量含む。
63	〃　〃	SD02	14P363、474		S字 A中	〃	黒褐・灰褐	粗い―やや粗い	黒雲母片・白色岩片多量含む。―黒雲母片中量、白色岩片少量含む。
64	〃　〃	〃	16D219		〃　〃	〃	褐灰・にぶい黄橙	やや粗い	白色粒中量含む。―白色岩片多量、黒雲母少量含む。
65	〃　〃	〃	14t417		く字	〃	黒(こげ)～灰褐・明褐灰	ややきめ細か	白色粒少量含む。―白色岩片微量含む。
66	〃　〃	〃	14P535、525、536		受口	〃	明褐灰・灰白	ややきめ細か	白色粒少量、灰色岩片微量含む。―白色粒微量、灰色岩片微量に含む。
67	〃　〃	〃	17f446、418、419		受口		黒・灰～灰白	ややきめ細か―粗い	砂粒目立たず。―灰色・白色岩片多量含む。
68	〃　〃	SD02 上層	なし		S字 A古	口縁	褐灰・褐灰～明褐灰	やや粗い―粗い	白色粒・白色岩片多量含む。―白色粒・白色岩片多量、黒雲母片微量に含む。
69	〃　〃	SD02	14g314、41、310		受口	〃	黒～灰褐・にぶい黄橙	やや粗い―ややきめ細か	白色岩片・白色粒中量含む―灰色・白色岩片微量に含む。
70	〃　〃	〃	15b289 なし		く字	〃	灰白・同	きめ細か	砂粒目立たず。―灰色岩片微量。

第3表　重鉱物組成

試料番号	重鉱物組成															同定鉱物粒数
	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石		酸化角閃石	他の角閃石	黒雲母		ジルコン	ザクロ石	リン灰石	電気石	不透明鉱物	その他	
				緑色	褐色			緑色	赤褐色							
1		14	7	13	1					1	3			13	109	161
2		2	5	69			1	27	12		41		3		90	250
3		164	4	1										3	78	250
4		50	15	21				3	4	4	1			2	150	250
5		1		81				2		5	50			5	106	250
6		1	2	118			2	22	2		77		1	3	22	250
7		86	8	1	1			1	2	2				10	139	250
8	1	55	5	31		3		1			3			23	128	250
9		1		71	2		2	21	2		51		4		96	250
10		27	7	7				1	33	1				2	123	201
11		3	1	119				33	1		5			1	87	250
12			1	121		2		11	5	2	13				95	250
13		5	3	129		2		9	10	1	8			2	81	250
14		1		99		4	1	14	9		11				111	250
15		21	1	16		9		3	45	7	1			2	145	250
16		10		66		3		19	24	2	40		4		82	250
17		1	2	56		7		15	46		7				116	250
18		63	7	3		1		1	1	3				6	165	250
19		179	4					2	1	1					63	250
20		2	2	5		9		7	82		27				116	250
21		2	1	91				49	12		11				84	250
22		35	16	7		1		7	33	1	2				148	250
23		3	1	3		9		11	60		1			1	161	250
24		109	20	5		1		1	6						108	250
25		1	4	38		3		52	29	2	34		2		85	250
26		1	1	141		7		28	5		2				65	250
27		9	2	110				8	5	3	14		2	8	89	250
28		2	1	142		1		11	1	1	9		3	1	78	250
29		1	3	76		11		15	22	1	11		1		109	250
30			3	62				21	38	2	32		6		86	250
31		15	9	16		2		11	11	1				9	61	135
32			7	5		1		99	65		5			1	67	250
33			4	61		1		80	30		21				53	250
34			3	144				34	7		11	1	5		45	250
35			3	132				14	10		56		3	7	25	250
36		2	1	144				20	5	3	19		1	2	53	250
37		2		3				7	7		2	1		4	17	43
38		1		8		1		25	140		2		1		72	250
39		1	3	15				37	47	1	6			2	93	205
40			1	107				38	7	3	41		5	2	46	250
41		3	1	69		25		22	29	2	24		2		73	250
42		5	2	14		74		3	12	9	1			1	123	244
43		18	3	57		28		12	6		3		2	2	119	250
44		2	2	21		50		5	9	3	3		3		152	250
45		4		75		6		10	7		48		5	5	90	250
46		42	13	14		4		3	4	2	4			12	152	250
47		1	4	105		12		9	10		18		2	2	87	250
48		4	3	140		1		9	1	2	24		2	13	51	250
49		39	11	12		3		4	46	1	2			4	128	250
50		2	1	187				8	4	1	15			8	24	250
51			1	35				4	2	3	122		19	12	52	250
52		3	1	4				2	2					6	40	58
53		2	2	53		7		25	30		7			4	120	250
54		1	1	43				14	15	6	85		17	9	59	250
55			2	42		52		6	62		9		2	1	74	250
56				28				6		1	126		13	30	46	250
57		6	3	4		1		6	12	4	11			2	201	250
58		2	2	43		16		16	70		17		1	1	82	250
59		3		78		5		19	12	1	45		4	7	76	250
60		3	1	9				1	13	1	1			1	40	70
61			4	71		2		40	29	2	40		2	2	58	250
62		2		80		2		15	2	1	79		8	7	54	250
63		1	5	55		9		18	45		38		2	1	76	250
64				100		2		10	2	1	70		2	2	61	250
65		45	5	45					4	5	1			41	104	250
66		1	1	9				2		2				22	27	64
67		5	1	8					3					1	159	177
68		2		143		1		6	4	1	44		4	3	42	250
69		104	32	5					1					46	62	250
70		18	1	4		3			1	6	3			5	209	250



＊ ○印は朝日遺跡出土品、他は廻間遺跡

第25図 胎土グループ重鉱物組成

2　S字甕の胎土について

第V章で設定する廻間式土器の変遷という視点からS字甕の胎土を見直してみることにする。第26図は廻間Ⅰ～Ⅲ式期の区分に基づき分類した組成表である。

廻間Ⅰ式期　S字甕とく字甕・受口系甕と明確に区分できる鉱物組成が見られる。つまり胎土グループの（Ⅰ類）とされたものにはく字甕・受口系甕が含まれ、S字甕は存在していない。一方S字甕は（Ⅱ・Ⅳ類）とされたグループに属し、（Ⅱ類）の占める割合が約8割となる。Ⅰ式期のS字甕は角閃石・黒雲母・ザクロ石の3つの鉱物を主体とし、く字甕・受口系甕は輝石を主体とする。甕の形式別の差というより、S字甕のみが他と異質な「土」を使用していたと理解すべきであり、明確な胎土区分が出来上がっていたことが明らかである。

S字甕特定胎土

廻間Ⅱ式期　Ⅱ式期以降く字甕が急速に激減し、受口系甕はⅠ式期をもって基本的には終焉するため他の形式の甕との比較は困難である。Ⅱ式期の甕は8割以上S字甕と考えてよい。胎土グループでは（Ⅱ類）としたものがⅠ式期に続いて主体をなし、8割近くを占めている。Ⅱ式期においてもS字甕の土器胎土に特別な意識が働いているものと推測してよいであろう。

廻間Ⅲ式期　S字甕C類の登場により、従来まで続いた胎土の特別な選定が大きく崩れていくことが認められる。それは胎土グループ（Ⅰ類）とした輝石を主体とするS字甕がある程度の量を伴って製作されていくことである。しかしS字甕胎土の半数以上が、従来からの特定胎土を使用し続けている点もわすれてはなるまい。

前節の重鉱物分析の結果を今一度まとめてみると

1．濃尾平野中・西部のS字甕は角閃石・黒雲母・ザクロ石の3者を主体とする胎土をもつ。

2．両輝石を主体とするグループは濃尾平野における在地産の土器の指標として用いることができる。その意味からしてS字甕の胎土は異様である。特に廻間Ⅰ・Ⅱ式のS字甕はS字甕の誕生と普及期に相当し、この点から見てもこれらの指適は重要な問題を含んでいるといえよう。ともかく特定の選ばれた「土」による土器製作は、従来まで存在しえなかった新しいタイプの甕を生み出すことに成功した。それはきわめて軽量な独特の製作法を保有する台付甕である。

まとめ

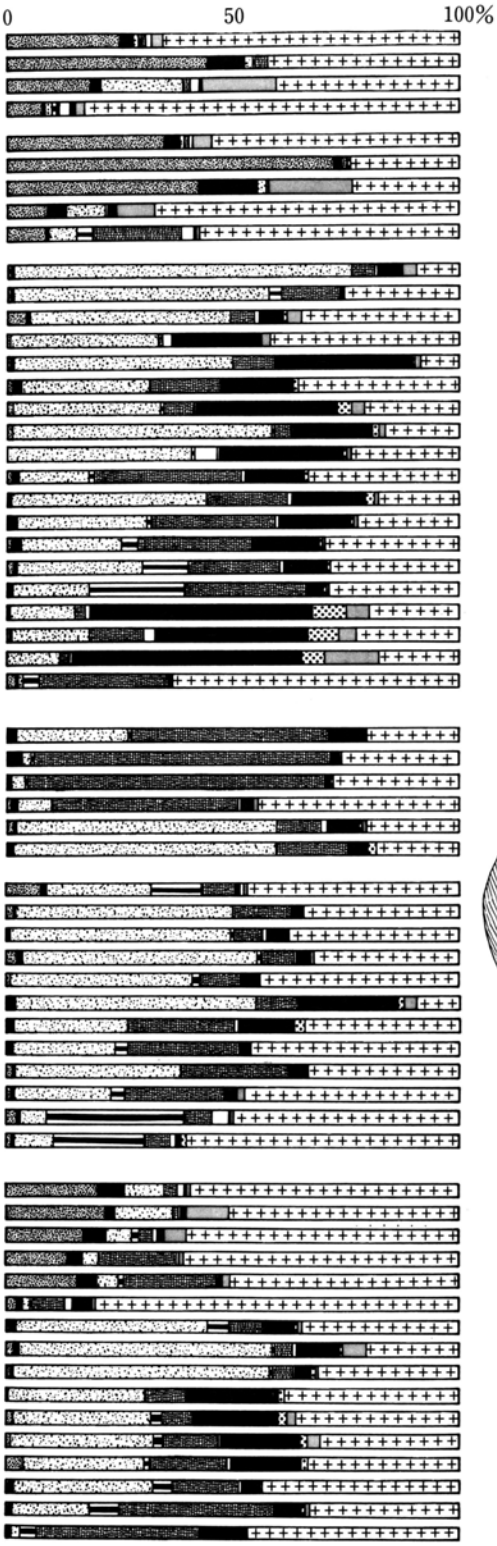
以上の諸点をまとめておく。

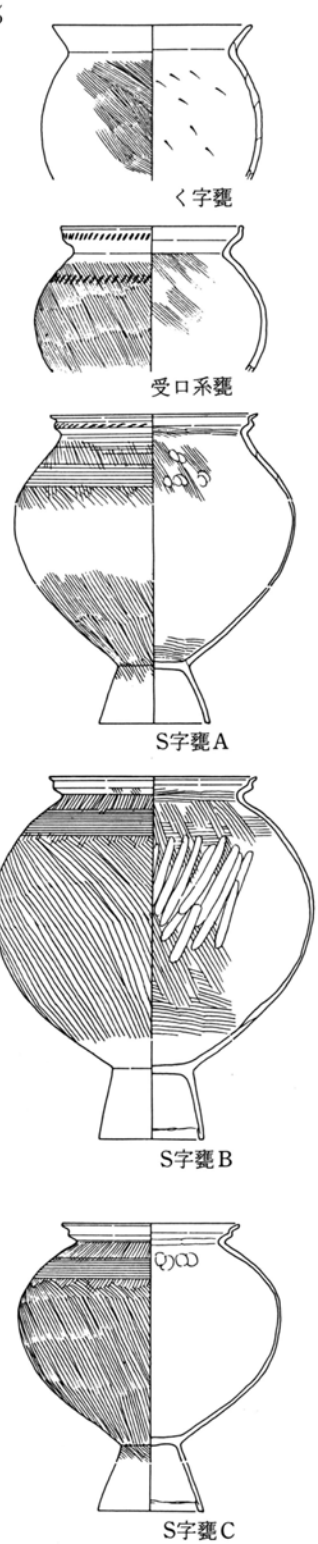
1．S字甕の製作には特別に選定された「土」を使用する。それは重鉱物的には角閃石・黒雲母・ザクロ石を主体とし、濃尾平野の在地産の土器に普遍的に見られる両輝石を主体とする一群のものとは明確に異なる。

2．特定な「土」の発見が軽量化を可能にし、独特な台付甕技法とあいまってS字甕が生み出された。

3．廻間Ⅲ式期にいたると、胎土の厳密性が崩れ、多様化する。

様式	胎土グループ		試料番号	品種(甕)
廻間I式	I	2	⑥⑤	く字
			⑦⓪	く字
		1	18	く字
			24	く字
			7	受口系
			19	受口系
			⑥⑨	受口系
		2	1	受口系
		5	15	受口系
	II	1	50	S字A
			26	S字A
			27	S字A
		2	5	S字O
			6	S字O
			2	S字A
			⑥②	S字A
			⑥⑧	S字A
			⑥④	S字A
		3	25	S字A
			40	S字A
			⑥①	S字A
			⑥③	S字A
		5	41	S字A
			55	S字A
	IV		51	S字O
			54	S字A
			56	S字A
			23	S字A
廻間II式 1・2	III		33	S字B
			32	S字B
			38	S字B
			39	S字B
			36	S字B
			34	S字B
廻間II式 3・4	III	1	43	S字B
			11	S字B
			12	S字B
			13	S字B
			14	S字B
		2	35	S字B
		3	30	S字B
		4	17	S字B
			21	S字B
			53	S字B
		6	42	S字B
			44	S字B
廻間III式	I	2	24	S字B
			8	S字C
			46	S字C
		3	10	S字C
			49	S字C
		6	57	S字C
	II	1	47	S字B
			48	S字B
			28	S字C
		2	9	S字C
			45	S字C
		3	59	S字C
			16	S字C
		4	29	S字C
		5	58	S字C
	III		20	S字C





＊ ○印は朝日遺跡出土品
他は廻間遺跡

斜方輝石　単斜輝石　角閃石　酸化角閃石　黒雲母　ジルコン　ザクロ石　電気石　不透明鉱物　その他

第26図　甕分類別重鉱物組成

V 考　　察

1　廻間式土器

濃尾平野低地帯における古墳時代初頭の土器様式を、あらたに廻間式土器として設定する。廻間遺跡では1～8期の区分を設け、これを踏まえて廻間式土器をⅠ式～Ⅲ式、さらに各々を4段階に区分する。

1）濃尾平野の土器編年について

愛知県を中心とする弥生時代から古墳時代にいたる土器編年については、すでに多くの論考が用意されている。その内で特に注目されるものとしては1968年3月に大参義一が発表した「弥生時代から土師器へ」[1]であろう。その内容は、1．山中・欠山・元屋敷・石塚期という編年案を確立し、元屋敷期をもって古墳時代前期の土器とした。2．「広口壺形土器」を基軸にした器種分類を提示し、S字甕の出現を基本的には元屋敷期の段階と想定した[2]。以上の視点はその後の土器研究へと踏襲され、大幅な修正はほとんどなされていないのである。ところがこうした視点に大きな問題が含まれていたことがしだいに明らかとなってゆく。第1の視点に関しては、その設定根拠となった基準資料自体への懐疑である。元屋敷遺跡竪穴状遺構を標式とする「一括資料」への批判が紅村・加納等[3]により発表され、同時に採集資料を基に設定された石塚期にも「器種構成にどうも混乱がある」という指摘がなされた。また欠山式土器が、欠山遺跡第Ⅱ貝塚出土品を標式とする限り、そこには東三河地域の土器様相が示されているだけであるという地域色の問題が残る。愛知県内を単一の土器様式圏と見なしえるかどうかは、まず濃尾平野における様式設定が前提として存在しなければならない。第2の視点としては、器種分類の基準が量的比率において最も多い甕を疎外視し、壺・小型品を中心に行われる傾向が強い。またS字甕＝古墳時代＝元屋敷期とした見方は東日本の古墳時代研究に過大な影響をあたえ、特に東国の古式土師器・古墳造営の年代観に必要以上に新しい年代観を想定する気風を作り上げてしまった点は免れえない所である。また欠山期はその後、飯尾・杉浦[4]の古新の細分に発展し、特徴的な形である高杯を中心とする分類へと発展し、そのことが分離しえない様式？としての「欠山式土器」の絶対的な定着へとつながってゆく。以上の先学の研究を踏まえつつ、ここでは以下の視点を重視し、問題を整理してゆくことにする。

大参編年

欠山期

1．「欠山式土器」の再検討。2．甕・高杯を器種変遷の基軸にする。この両者で3・4世紀の濃尾平野の土器の8割を占める。3．濃尾平野における土器様式を設定する。

2）土器に関する覚書

土器について考えて行く場合、まずあらゆる個性を持つ全ての土器群から、より高度に抽象化された、概念化された形式・型式が導き出されることが多いようである。これらの型式の設定作業において必ず見い出されるのは、そこに至る概念化でふるいおとされる異形・異質なカタチの存在である。こうして一旦排除されたこの種の土器がその後「報告書」の中でどのように取扱いされてゆくかは不明瞭な場合が多い。報告書の中では整然と整理された型式の群が型にはまった歴史を語りはじめ、そこには一点の曇りも例外も存在しない。人間の行為は単純化され、必然性の呪縛の中で整然と変化してゆく過程のみが語られることが多いようである。

ところで「機能が形態を決定する」[5]という視点が存在する。しかしそれには批判も認められる。カタチの中には用途により分解しえない部分が存在する。また土器そのものは一つの完結した存在である以上、その使用、置き方に一定の規則性が見い出されようとも、一般にこれらとは無関係に存在することができるものである。機能を超えたある種の空間が必ずや土器の中には存在すると考えられる。

機能を超えたもの

機能に傾倒する「形式」とは以上の視点を一旦排除し、カタチ（形態）それ自身の中にすでに使い方（機能）が含まれるとし、「首尾一貫した表現形式」[6]をとることで、模範的な型（範型）を作りあげ、個人はこの型から独立しえないと考える。なるほどデザインは生活する目的にしたがい基本的には社会的な価値判断により決定されることが多い。社会的とはまさに一定の規則、行動様式や考え方の基準（集団成員の大多数により支持され、あるいは保持されている）であろう。しかし一方デザインは偶然的要素が混入されることもある。それは社会性から遊離している場合、次第に消失し、社会的な淘汰が行われるとしても、我々が取り扱う一つの関係として取り上げられた一群の土器等の中には、時に抽象化された概念から大きくズレるモノ、あるいは部分が存在しているのである。なぜならば我々が取り扱う「形式・型式」というカタチとしての関係自体が一定であることはまれであるからであり、それはむしろたえず変動していると理解した方がよいからである。このたえまない変動（あらゆる部分の変化）の集合体が一つの土器・土器群である。型式の変化を見通すにはこうした抽象化する以前の不安定な関係の中に位置するカタチにたえず立ち返えりつつ考察を進める必要がある。

偶然的要素

変動の集合体

社会性に裏打ちされた機能の立場よりも、むしろ一定の社会的関係の中に位置づけながらも一つの独立した存在である製作者とその造形に視点をおきたいものである。そこには具体的な道具（身体の延長）それを使用する手法、これらを統合し適度に調整する仕組であるカン・コツが重要な働きをする。こうしたカタチに内在する全体的な変動システムである手順を基準に置きつつ以下土器について考えてみることにする。

手順

共同体内部での土器製作の体得は「見よう見真似」という手段の中で進行してゆくのであり、そこに厳格な規則など存在しないのである。ただ構成員に共有されている「一定の方向性・関係」が存在し、それは土器群に見られる気風・作風に近いものと考えられる。

志向

これを今、「志向」と呼びかえることができる。具体的には当地域には高杯・壺を問わず認められる形態の内彎志向がその代表的なものである。これらの現象は明らかに単一の機能に還元できるものではなく、全体のバランス・流行というものに近い。様式を「同時代性を前提とした型式群」[7]の総体とすれば、むしろ志向としたカタチから醸し出される気風のようなものが重視されてよいのではなかろうか。このあいまいな全体性が様式を決定する場合が多いように思われる。

人間の製作行為には2つの次元があると考えられている。一つはフォームを見つけ出すことであり、それは人間の創造的行為そのものである。今一つはこの考え出されたものに現実の大きさやカタチを与え、それを製作するための材料を決定することである[8]。デザインとは普通後者の意味をもつ場合が多い。考古学の場合取り扱う「形式」とはどうも前者をイメージしつつ現実にはある程度の妥協の中でまとめられることが多いように思われる。たしかに前者には歴史を見通すために必要とされる「普遍性」が内在する。ところが一方後者であるデザインの視点もやはり重要といわざるをえない。道具を使って具体的に土器を作る、その過程こそ変化と普遍性が混在する空間といえるのであり、型式を決定する場合、避けては通れない視点と考える。道具の使用とその具体的製作工程、その全体を総括する製作手順。カタチの丸味・鋭利・調整等の考え方は全て道具とその使用方法（手順）に還元できる。デザインを分類する手掛りを手順に求めることができる。以上のような

型式

なデザインにおける共通性を型式と呼んでよいのではなかろうか。するとデザインに見られる共通性としての型式、そして同時代性の型式群に見られる志向性が一つの様式を決定すると綜合できる。

土器・土器群は本来変動する限り、変化を見通す要素が明確に位置づけられた分類を実施しなければならないはずである。しかしこれはかなり困難な問題である。一つの形式・型式の決定は、その次の瞬間他を排斥したものであることが多いからである。であるからこそ逆に志向・手順という全体的な視点が重要となる。

文明の趨勢の論理

「モチーフはその後の世紀の中で力を集め拡がり、成熟し、洗練されて最後にそのモチーフが本質を表現してきた文明から別れてしまう。こうなるとその文明は死滅して別の文明が別の場所か、又は同じ土壌から成立してくる。」[9]この文明の趨勢の論理はそのまま型式・様式の変化にあてはまるであろう。「力を集め、拡がり」とは新しいフォームを見つけ出し、デザインが決定されること。すなわち製作手順が決まり一つの方向性を持つことである。「成熟・洗練」とは手順の合理化が進むことであり、そしてやがてもうこれ以上手順の合理化・組替が不可能な段階に達した時、つまり一つの手順の省略がすなわちカタチの消失に直結するほどに進行した時に新しいカタチを求めて、歴史はあらたな方向に動き出すのである。

一つの歴史の方向性・志向性はいかに作られて行くか、そのメカニズムは以前として不明瞭ではある。この点は第2節で若干言及することになる。

3）分　類

形状と技法を主要な要素として土器を分類する。廻間遺跡ではこの作業を進める上で2つの資料的制約が認められる。一つは全体の形状が復原できる。あるいは推定できる資料の数が少ない点。したがって口縁部・口頸部の形状とその特徴を基本的な要素として土器の分類を実施した。2つめには量的な問題である。定量的な分析結果を分類作業に加味しえたのは甕・高杯類ぐらいであり、他はきわめて不安定である。一見して分類することが可能な要素こそむしろ重視される必要があり、そこには製作者がこの種の形に特に強調したい意図が存在しているはずである。それは本来的に全て機能に基づいて編み出されたものであったのかは不明瞭である。いずれにしろ他と区別される要素・他の形との差異性が明確な特徴を分類の基準にする必要がある。その意味からして口縁部・口頸部の区分における直口・内彎・外反・外傾は成形・整形・調整段階を通じて一貫して保たねばならない形状の特色として位置づけられるのであり、決定的な分類要素と考えてよいものと思われる。またその形状の変化も他の部位と比べて過敏であるという点は周知のごとくであろう。

分類要素

壺・甕類とする機能的分類の細分要因を口縁部・口頸部に求める。なお大型・小型品については本来明確な分類基準を作る必要があろうが、ここでは特に必要と考えるもの（編年を考える上で）のみを対象とした。分類の最下位枠についてはきわめて恣意的となる。

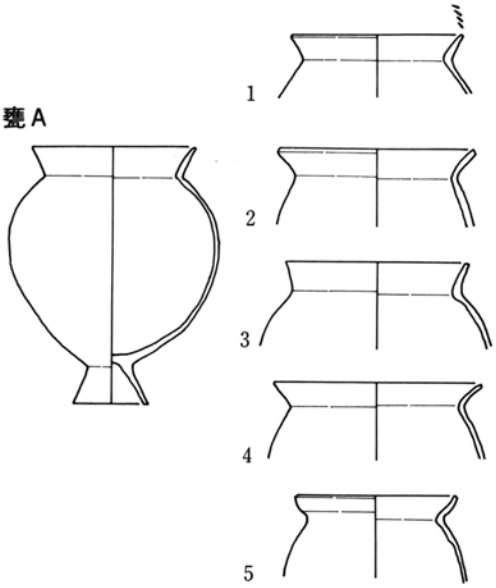
外来系・在地系土器について。遺跡から出土する器種に関しては、これを3つの群に区分する考え方が提示されている[10]。在地性・外来性そして新出性土器群。新出性については他の2者と少し分類基準が異なるように思われる。在地性・外来性はその系譜に主要な視点が置かれている区分であるとすれば、新出性は加えて広範囲な「斉一性」社会的背景を内包させようとする戦略的な区分であるように見うけられる。また一方「搬入品」についても胎土分析を含め、製作技法との関係もその研究対象とする場合が多いため、その資料の位置づけが不安定となる事が多いようである。そこで小論では以下のような基準を一応設けておくことにしたい。

外来系土器

土器の形に見られる形態の特色の系譜を第1の基準に置く。これにより外来系土器と在来系の2つに大きく大別できる。在来系とは前様式から系統的に、あるいはそれを基盤に創出された土器群と言う事になろう。その後前者（外来系）は対象とする土器そのものが単発的に他の地域から持ち込まれたもの、その可能性が高いものを搬入品として取り扱い、これらをモデルにして在地で製作された場合を模倣品と総括する[11]。また他の地域に系譜を置くものの、その後独特な、独自な解釈の基に受容され広くその地に定着した土器については受容された土器（受容土器）としておく。受容土器は一般的にその地域で独自の変化と独自の系譜をその後に辿れる場合が多いようである。また受容土器は受容した側の意図が強く働いた土器としてその選択性と新解釈が研究の対象とならねばならない。外来系の中に分類上は位置づけられるものの、その土器群そのものはむしろ在来系土器と同様に取り扱う必要がある。そこに系譜上の淵源地域と包摂的な関係を想定する事はほとんどないと考える。

受容された土器

甕A



〔甕A〕く字状口縁台付甕（く字甕）

A_1　口縁端部に刺突文を施すもの。口縁部は外傾する。

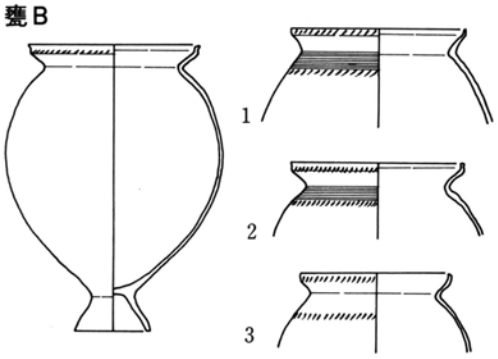
A_2　口縁部は大きく外傾し、口縁端部に明瞭な面をもつ。

A_3　口縁部は体部からほぼ垂直に立ち上がる直口口縁。端部に面をもつ。

A_4　口縁端部には明瞭な面をもたず、丸く調整する。口縁部は外傾・外反。

A_5　内彎口縁をもつもの。口縁部を強くヨコナデすることにより内彎させるものが多い。端部に面をもつ。

甕B



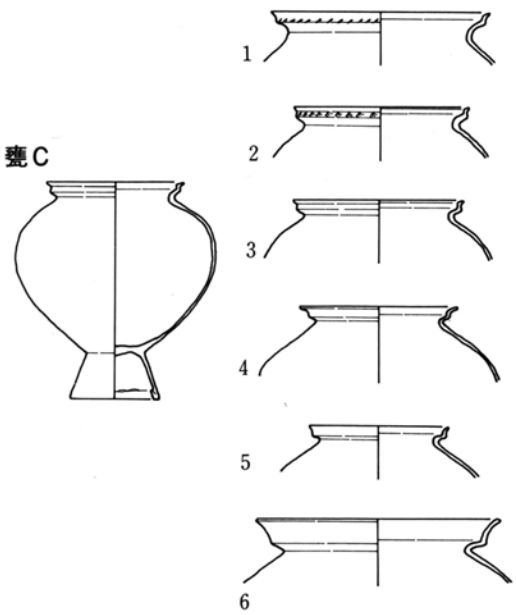
〔甕B〕受口系口縁台付甕（受口系甕）

B_1　鋭く屈曲する口縁部をもつが、その手法ははねあげ口縁的である。

B_2　鋭く屈曲する口縁は、端部に明瞭な面をもつ。屈曲の位置を口縁端部に置くもの(a)と体部に近接するもの(b)と２種に細分できる。

B_3　内彎屈曲口縁をもつもの。屈曲に丸味をもたせ、端部には面をもつ。

甕C



〔甕C〕Ｓ字状口縁台付甕（Ｓ字甕）

C_1　口縁部の複雑な段構成は全体に外反し、刺突文を加える。（Ｓ字甕Ｏ類）

C_2　押引刺突文をもち、口縁第２段はほぼ垂直に立ち上がる。（Ｓ字甕Ａ類）

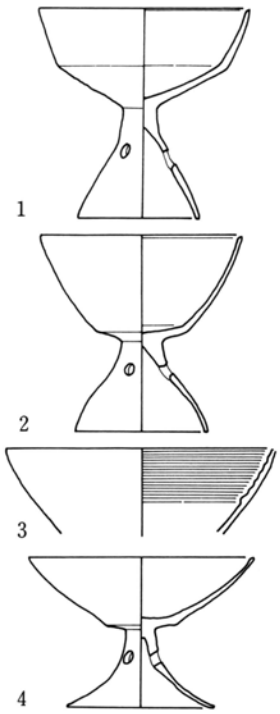
C_3　口縁端部に明瞭な面をもつ。刺突文は省略する。（Ｓ字甕Ｂ類）

C_4　口縁部の複雑な屈曲は外方へ大きく拡張する。頸部調整技法をもつ。（Ｓ字甕Ｃ類）

C_5　口縁部の第２段が上方に拡張する中型・小型品。

C_6　山陰系口縁の特色をもつもの。大型品。

高杯A



〔高杯A〕杯部に段をもつ有段高杯

A_1　口径と稜径の差が小さく、杯部が比較的浅い。円柱状から円錐へ移行する脚部をもつ。

A_2　内彎杯・内彎脚をもつ高杯。口径と稜径の差が大きく、杯部が深い。

A_3　杯部内面に多条沈線文を施す。

A_4　円錐状の外反脚をもつもの。杯部は大きく外傾するものが多い。

〔高杯B〕半球状の杯部をもつ椀形高杯

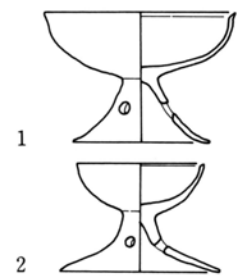
脚部は大きく外反する。大型（口径20～21cm）、中型（17・18cm）、小型（15cm未満）

B_1　口径が脚径を凌駕するもの。

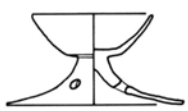
B_2　口径が脚径よりも小さいもの。中型(a)と小型(b)に区分する。

〔高杯C〕有稜高杯を一括する。脚部は外反あるいは屈折を有する場合がある。

高杯B



高杯C

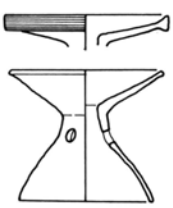


〔器台A〕円錐状の内彎脚をもつもの。

A_1　垂下・拡張口縁をもつもの。擬凹線文を施す。

A_2　口縁端部に面をもつ。中には沈線文を施すものも見られる。大・小型をもつ。

器台A



〔器台B〕口径11cm未満で、脚径が口径を凌駕する小型器台。

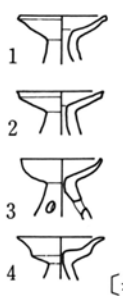
B_1　口縁部がやや彎曲し端部に面をもつ。脚部は屈折部をもち内彎・外傾。

B_2　口縁部は直線的で、大きく外反する脚部をもつ。

B_3　内彎する口縁部をもつ。

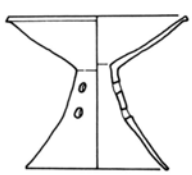
B_4　外反する有稜口縁をもつ。

器台B

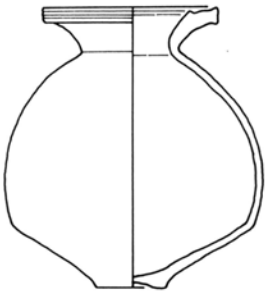


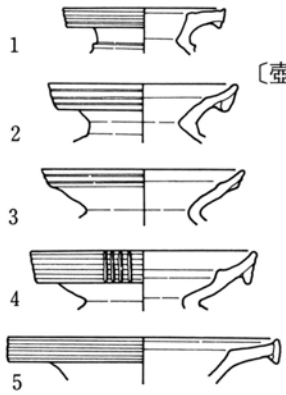
〔器台C〕外反する円錐状の脚部をもつもの。大型・小型をもつ。

器台C



壺A





〔壺A〕垂下・拡張口縁部に擬凹線文を施し、各部に赤彩を施す加飾壺(パレス壺)

A_1 口縁内面部の文様帯が平坦面を呈する。

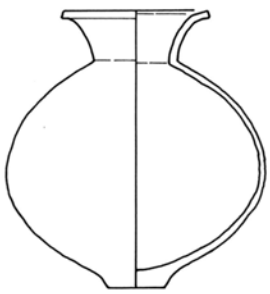
A_2 口縁内面文様帯が内彎し、端部の垂下が著しい。

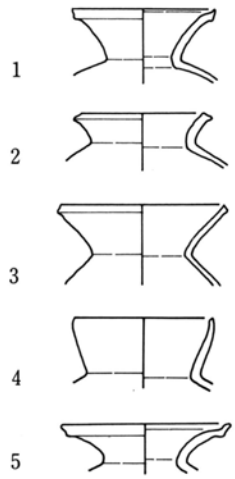
A_3 口縁部の文様帯が有段状を呈する。

A_4 口縁部が内彎しつつ端部に拡張口縁をもつもの。

A_5 口縁内面が直線的に屈折するもの。

壺B





〔壺B〕広口壺。比較的大型品が多い。

B_1 口頸部が外反・長頸のもの。(広口長頸壺)

B_2 口頸部が外反、短頸のもの。(広口短頸壺)

B_3 口頸部が外傾。(広口直口壺)

B_4 口頸部が内彎。(広口内彎壺)

B_5 口縁部が有段状を呈するもの。

〔壺C〕口頸部が内彎する中・小型内彎壺。

C_1 大きく外方に広がる口頸部をもつ。(内彎長頸壺)

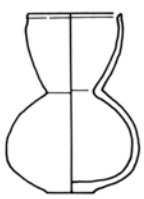
C_2 細く長頸の口頸部をもつ。(内彎細頸壺)

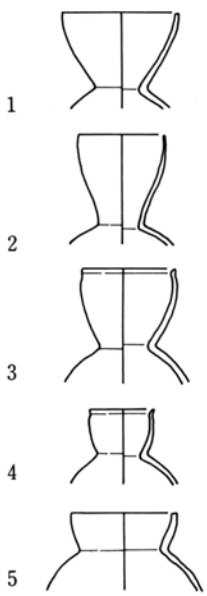
C_3 口縁部がやや複雑に変化、端部は、微妙に外反傾向。(長頸ヒサゴ壺)

C_4 C_3に比べ短頸のもの。体部が口頸部に比べ著しい大きい。(短頸ヒサゴ壺)

C_5 内彎口頸部をもつ広口壺。(内彎広口壺)

壺C



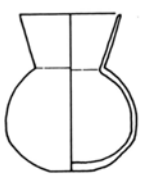


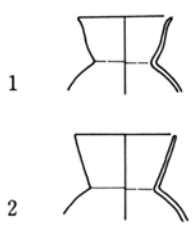
〔壺D〕直口・外反する口頸部をもつ中・小型壺。

D_1 流線的な外反する口縁部をもつもの。

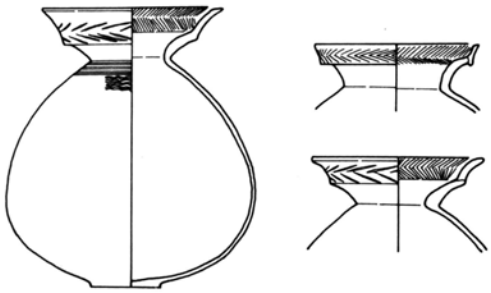
D_2 外傾・直口口頸部をもつもので、体部は球形を呈する。

壺D





壺E

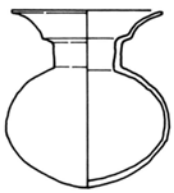


〔壺E〕口縁が有段状を呈する加飾壺。（柳ヶ坪型壺）

E_1　口縁部が有段状を呈するもの。

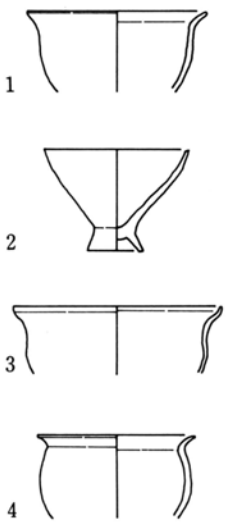
E_2　二重口縁技法をもつもの。口縁部の製作が貼り付け状から積み上げ状に変化する。

壺F



〔壺F〕二重口縁壺

鉢A



〔鉢A〕比較的大きな鉢を総合する。

A_1　口径が体部径を凌駕するもの。

A_2　直線的に外傾する体部をもつ。

A_3　受口系口縁をもつもの。

A_4　口径が体部径と同時か、小さいもの。

A_5　体部が比較的浅く、大きく開く口縁部をもつもの。大・小型をもつ。

A_6　有孔鉢。

鉢B

〔鉢B〕小型の鉢を総合する。

B_1　明瞭な口縁部を形作らないもの。比較的直線的なもの(a)と大きく彎曲するもの(b)がある。

B_2　口径が体部径より小さいもの。

B_3　口径が体部径を凌駕するもの。口縁部が比較的小さいもの(a)と大きいもの(b)がある。

B_4　口径が体部径を著しく凌駕するものを一括する。精製品。

4）技法と道具

土器に見られる細部の形状は、手法•技法に基づき実施された結果であると理解すれば、これらの細い形状の観察により具体的な手順とその手法・技法を類推することができる。ここでは文様を含めてまとめて概観しておこう。各々の形状分析は総体としてのまとまりある土器を分解することにおいて実施されるが、これら属性としての意味はあくまで総体に再び立ち返った時点において初めて有効性をもつものであり、属性のみに固執した分析法は基本的に何ら意味をもちえないと考える。属性分析を踏まえた上での綜合作業こそ主たる目的であらねばなるまい。

細部彎曲調整

口縁部　第27図ａ～ｅが見られ、その内特に注目したいのは口縁部ｂである。口縁端部には明瞭な面・斜面をもち、外面は微妙に外反する形状を見せる。このきわめて繊細な、特色的な端部調整を細部彎曲調整としておこう。細部彎曲調整は高杯・壺を中心に認められ、口縁部のみならず脚部にも使用される場合がある。受口系口縁[12]とＳ字状口縁の違いは口縁部が２段構成を原則としているか、３段構成かにある。また器種の薄さ、調整法に明瞭な差が存在することは言うまでもない。

脚・台部　脚部・台部の接合面は第27図ａ～ｄの４種が認められ、加えてＳ字甕の台部製作技法が存在する。甕の台部に限定すると、ａ・ｂは台部の製作から体部まで順に粘土を積み上げて行く方法を用いて行われ、その後充塡する。これに比べｄ及びＳ字甕台部はまず台部を製作して、その後（倒立）改めて体部の製作に移行する手順をもつものである。ｃは前者の一帯技法と後者の倒立技法と両者が存在する移行期の技法である。さらにＳ字甕台部はその製作手順に特異な手法が見い出されるのであり、この点においても受口系甕•く字甕の両者と大きく異なる。（後述）台部及び脚部の製作も基本的にはａ→ｄに変化すると考えてよいであろう。

その他口縁部（特に壺）製作においては第27図のような技法が存在する。ａは口縁端部に粘土を大きく貼り付け、垂下させ拡張させる垂下口縁技法と呼ばれるものである。時に垂下する粘土の隙間をさらに粘土で補充する場合も見られる。ｂは有段部を作り出すために貼り付け状に粘土を使用するもの。ｃは積み上げ状に粘土を置くもので、二重口縁壺や有段高杯によく見かける技法である。柳ケ坪型壺の口頸部製作はｂからｃへと変化することが認められ（E_1～E_2へ）、また有段高杯の杯部製作にもこうした変化が内在している（A_1～A_2へ）。

〔技法と手法〕

技法と手法

ここでは技法と手法の基準を以下の視点に基づき使い分けることにしたい。手法とはある限定された道具を使用し施される単一の動作で、技法はこれら手法の組合わせによってまとめあげられた細部手順。したがって単発的・極部的な動作である手法と異なり、技法は一定の共通性とまとまりをもつより高次元な概念と位置づけられよう。

調整段階の手法としてはナデ・ミガキ・ハケメ・ケズリが代表的なものである。

ナ　デ

ナデ

a・b・c・dの4種が存在する。ナデaとは所謂ヨコナデとして一括されるもので、皮・布を用いた調整段階に用いられる手法。口縁部、脚・台部によく散見できる。ナデbは指ナデ手法を意味し、特に指頭による動作痕跡が器壁に明瞭な凹凸となって残る場合が多い。主に体部内面、整形段階に実施される。ナデcはナデ調整とされるもので、具体的な道具は推定できにくく、器壁の凹凸はほとんど見られない。ナデcは本来複数の手法により実施された調整技法として位置づけた方がよいものである。ナデdはヘラ状工具を用い局部的に施されるヘラナデ手法。

ミガキ

ミガキ

a・b・cの3種が見られる。ミガキaは比較的幅の狭い工具痕跡を留めるもの。ミガキbは逆に幅の広いミガキ痕が見られるもので、その動作は粗く器壁に凹凸が残る。ミガキcは著しく細いミガキ痕が丁寧に施されるもので、その動作はヨコ方向に限定できるようである。一部に回転力を積極的に利用したと推定されるものも見られる。

ハケメ

ハケメ

a・b・cの3種が見られる。ハケメaは所謂ハケメと一括されるもの。浅く細い条痕を残す。ハケメbはハケメ痕がほとんど認められないもので、工具の動作単位のみが目立つもの。通常a・bの差はハケメ工具の使用度に起因すると考えられることが多いようである。しかしハケメbは特に内面調整に多用されるのであり、ハケメaに比べむしろより平滑化に力点を置いた手法と位置づけた方がよい。ハケメcはS字甕特有のハケメ（クシ状）で、1㎝単位あたりのハケメ密度が3～5本と粗い。器壁を整えると同時に掻壁作用にその特色を見い出すことができる。

ケズリ

ケズリ

a･bの2種が存在する。ケズリaは所謂ヘラケズリとして認識されているもの。成形後改めて行われる手法で、明瞭な乾燥という手順が伴う。ケズリbは掻壁手法で、ケズリaに比べると明確に乾燥段階が位置づけられていない。器壁には砂粒の動きが認められるものの同時に粘土の動きも存在する。

その他タタキ手法も一部に認められるも、廻間遺跡ではきわめて少なく、普遍的に用いられる手法としてはすでに消失した技術である。

〔技　法〕

特定の手順により組立てられた技法について、以下の4つの特色ある技法を照会しておきたい。これらは器種分類・小様式を設定するための有力な指標となる。

口縁端部細部彎曲調整技法

細部彎曲

形状的には前述した口縁形状bとしたものである。端部は明瞭な面をもち、形状は内彎のち外面のみ微妙な外反を伴う。あるいは内面をわずかに肥厚する。ミガキaにより調整される。壺・高杯に認められる技法である。壺は壺B_4（広口内彎壺）及び壺C類に広く採用され、高杯ではA・B・C類に多く散見できる。廻間2期（Ⅰ式1段階）から明瞭に認められるようになり、4期（Ⅰ式4段階）をもって終焉する。その後は端部に斜面を痕跡

的に残す形状へと変化してゆくようである。壺$C_{3.4}$（ヒサゴ壺）は特にこの調整技法から発展した形の口頸部が内彎し、端部においてやや広く外方へ彎月状を呈するやや複雑な形状となる。ヒサゴ口縁独特の形状を作り出している。

内彎脚調整技法

内彎脚の特色

高杯Aの内彎脚部に見られる特異な調整技法と考えられる。その特色はまず端部を形状b（細部彎曲）によって構成し、内面の調整はハケメ後ヨコナデの手順により実施される。外面はタテ方向のミガキ後ヨコナデ。これらを組合わした脚部は内彎しながら脚端部がわずかに外彎し、器壁の厚さは端部に向かって薄くなる。こうした内彎脚調整技法の完成された姿(A)はその後まず内外面のヨコナデが欠損(B)し、やがて端部の器壁が厚くなり、細部彎曲が消失したもの(C)に変化する。(A)は廻間2・3（古）期（Ⅰ式2・3段階）に多く見ることができ、(B)は続いて4期まで、(C)は4期から散見できる。

S字甕頸部調整技法

S字甕の特徴的な技法

S字甕B類新段階にすでに出現し、C類の登場に伴い確立し定着する技法である[13]。体部から口縁部にいたる形状が著しく急激に外反する傾向に伴い、屈曲部（頸部）外面のみを調整する必要が生じ、生み出されてきた技法と考えられる。結果的に一条の沈線が頸部屈曲部に廻ることになる。

S字甕台部成形技法

S字甕台部の製作は必ず第27図に示したような形成技法に基づく。まず台部を成形し、その後倒立する。その際指頭圧痕を孤状に配して体部への粘土紐積み上げの取り掛りを作る。体部第1段（体部約⅓弱）成形後粘土による補充を接合面内外に行う。この時使用する粘土には多量の砂粒を混合させるという特色が見られる。この原則は廻間式土器S字甕に普遍的に存在し、変化することはない。

〔道　具〕

道具は身体的な機能の延長とされるのであり、土器製作及び分類・編年作業にとってきわめて重要なものである。調整技法と施文具に限ってまとめておく。

貝殻はアサリ等の殻端部を使用（一部施文貝用に加工）した施文具である[14]。ハケメ（ハケメa）・板状工具（ハケメb）・S字甕用ハケメ（ハケメc）は主に整形・調整用に使用され、密度に差が見られる。ヘラ状工具はミガキ及びナデ（ナデd）に見られ、施文具として多用される。施文具としてのクシは、一応人為的に加工された歯を有するものとしてハケメと区別しておこう。

〔装　飾〕

刻文・貼付文・彩文と大きく3つに区分できる。（陰）刻文はさらに刺突文系と線描文系に大別できよう。

貼付文は粘土帯を貼り付けることにより装飾性をもたせるもので、浮文と凸帯文に大別できる。浮文は棒状と円形が存在し、他の刻文と組合わされる場合が多い。

彩文は赤色顔料（主にベンガラ）を塗布することによる文様で、ベタ塗りと描書に区別

される。ベタ塗りは一定の範囲内を広く塗りつぶすもので、赤色が強調される。描書は線描文として直線文・波線文等が見られる。その他（逆）U字文がある。（図版47—1125）

〔装飾文様〕

各種の装飾を組合わせることにより、器種によっては一定の文様パタンが確立してしまう場合がある。

パレス文様　壺A（パレス壺）に認められるもので、その構成は体部上半に横線文と波線文を交互に複数回組合わせるもの。廻間2期（廻間Ⅰ式1段階）に完成する文様パタン。 **パレス文様**

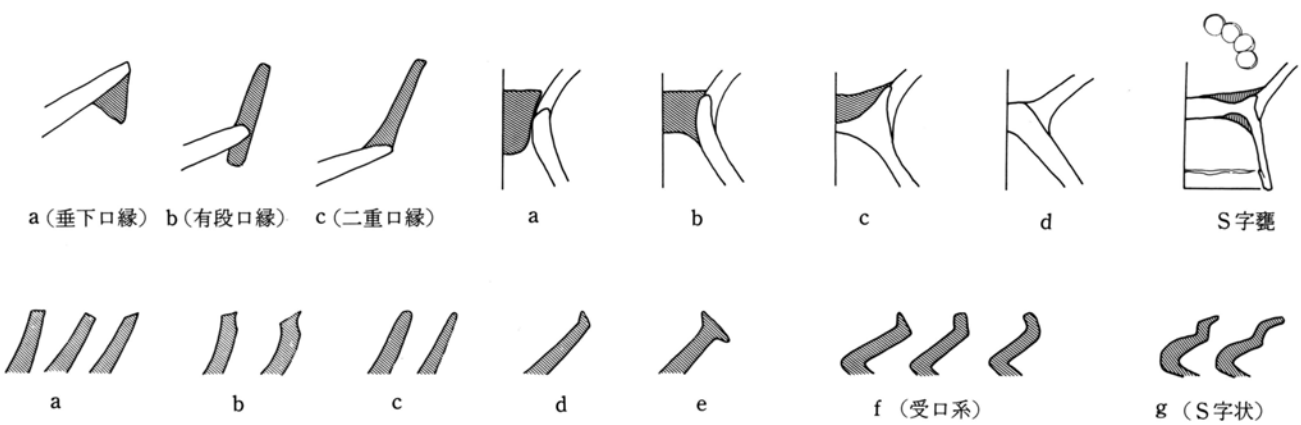
柳ヶ坪文様　壺E（柳ヶ坪型壺）の体部上半には必ず幅広い横線文と波状文がそれぞれ一単位施される。またその施し方がきわめて不明瞭で浅いという著しい特色が見られる。

受口文様　甕B（受口系甕）に用いられる文様で、口縁部に刺突文・体部上半に横線文とその下位に刺突文を組合わせる。

その他ヒサゴ壺（壺$C_{2.3}$）には口頸部を中心に連孤文を組合わせるものが多く、横線文を付加させるものもある[15]。

第4表　文様分類

刺突文系		線描文系	
刺突文【ハケメ・クシ・貝殻】		沈線文【ヘラ】	
押引刺突文【ハケメ】		多条沈線文（5条以上）【ヘラ・クシ】	
（不連続）波線文【ハケメ・クシ・貝殻】		擬凹線文【ヘラ・クシ】	
連孤文【貝殻】		横線文【クシ】	
羽状文【ハケメ・クシ・貝殻・板】		波状文【クシ】	
竹管文（半截）【竹】		（クシ描）鋸歯文【クシ】	
列点文【ハケメ・クシ・板・棒】		（クシ描）孤帯文【クシ】	
		連孤文（単線・複線）【ヘラ】	
		波線文【ヘラ】	
		羽状文【ヘラ】	



第27図　技法と形状

5）器　種

廻間遺跡から出土した土器を1～8期に区分する。1～8期の内容についてはまとめて次節で取り扱うこととし、ここでは各々の器形の変化とその特色を器種別に説明する。1～8期区分を前提とするが器種によってはそれぞれの時期の特色を明確に把握できないものも含まれている。また3期・5・6期はさらに古相と新相に区分が可能であり、その区分が見通されるものについては分離して説明を加えることになる。尚2～4期を廻間Ⅰ式、5・6期を廻間Ⅱ式、そして7・8期は廻間Ⅲ式期に所属することとなる。（後述）

〔甕〕

甕にはA・B・Cの大きく3つの器種が存在する。

く字甕　甕A（く字状口縁台付甕）

甕Aは体部から単純にく字状に屈曲する口縁部をもつ台付甕（以下く字甕）を総称した。

甕AはA_1・A_2・A_3・A_4・A_5の5つの形式が存在する。全形を推定できる資料は少なく、したがって主に口縁部の形状による区分となる。法量においても同様であり、大きさは第41図に示したようにロ径のみの比で推定した。

超大型は口径23cm以上、大型は23cm未満19.5cm以上、中型は19cm～15cmで小型は15cm未満から11cmまでとする。なお口径11cm未満の超小型品も存在する。

消　長

甕A_1・A_2は廻間式土器様式以前から系譜をたどる事ができる資料であり、同時に廻間1期にはA_1・A_2のみが存在する。2期（廻間Ⅰ式1段階）になるとA_3・A_4・A_5の各形式が一斉に登場し、さらに第41図から認められるように各形式単位で小型品が一定量存在するようになる。すなわち形式の多様化が出現し、一つの画期を想定することができよう。この点は廻間遺跡2期をもって廻間式土器の成立を考える一要因ともなる。次に出土量とその構成比率であるが(第40図)、甕A類はほぼ5期をもって激減し、ほとんどその姿が見られなくなるという著しい変化がある。総じて甕A類は廻間1～4期、廻間式土器ではⅠ式期の所産と理解してよい。

1　期

甕の多様化　甕A_1とA_2で構成される。特に甕A_1は山中様式を代表する台付甕の特徴を良く残している。体部は球形を呈するという特色が見られ、外面調整はタテ方向のハケメで、内面は口縁部直下までケズリが施されることが一般的である。台部は比較的大きく、内外面ともにハケメ後明瞭なヨコナデを施すものが多い。台部製作はaあるいはbが主体を占める。

2　期

甕A_1・A_2に加えてあらたにA_3・A_4・A_5類が登場する。またそれぞれの小型品も参入し、甕はより多様化する。器種は最も豊富になる。出土量を問題にするとA_1とA_5が多く、続いてA_2・A_4、A_3は最も少量である。体部の形状は以前として球形を保ち、外面調整はハケメ

で、内面調整はケズリが主体を占め、他にハケメが散見できる。台部はやや内彎する形状のものが見られるようになる。接合面はａ・ｂそしてｃが若干認められるようになる。A_5の内彎口縁をもつ甕は１期にその萌芽的現象が見られる資料(図版12—147)があるものの、これらは口縁部のみを強くヨコナデするに留まるものであり、内彎口縁甕の確立は２期をもってと理解してよかろう。

内彎口縁甕

３　期

甕A_1～A_5まで存在し、量的にはA_4である明瞭な面をもたない形式が多くを占めるようになる。以降A_4が甕Ａの主体となる。続いてA_4・A_1でA_2・A_3がこれに続く。特に直口して立ち上がる特徴的な口縁をもつA_3は３期以降に盛行する傾向を示す。刺突文を施すA_1は以前として認められるが、端面の幅が急速に狭くなる。特に３期新相から４期にかけてはほとんど面をもつことがなく甕A_4に刻目を施すような形に移行する。口縁部はより大きく、幅の広いものが散見できるようになり、体部は徐々に長胴化に向かう。台部は内彎するものと直線的なものとに区分され、３期新相以降前者が主体となる。接合面はａ技法が欠落し、ｂ～ｄが見られる。調整技法は外面にハケメを施すことは変化ないが、内面ではケズリが減少しケズリｂ（掻壁）・ハケメｂ（板）が盛行しはじめる。頸部内面に口縁部接合痕跡を留める資料が目立つようになる。

４　期

甕Ａ類は全て存続するが、量的には刺突文をもつA_1が激減し、その主体はA_4、続いてA_5・A_3・A_2となる。A_3は口縁部が大きく、垂直に立ち上がる。A_5は口縁部を強くヨコナデすることにより内彎し、時に有段状を呈するものもある。台部は小型化しほとんど内彎する。A_3・A_4を中心に、大きな口縁部に比較的小さい台部を作るという特色が見られる。内面調整は全体をケズリ手法によるものは消失し、ハケメｂ（板）が基本となる。

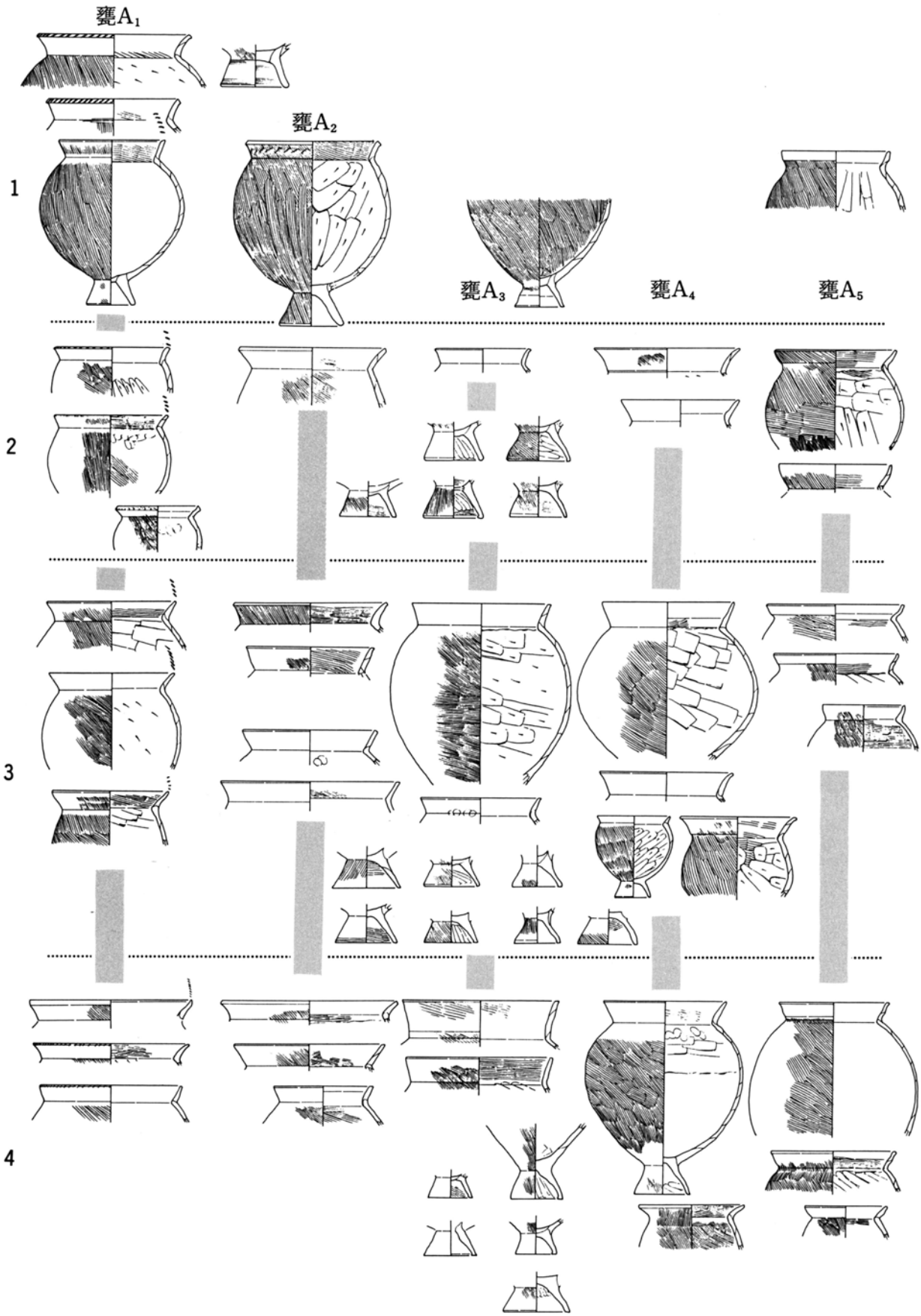
５　期

口縁部に刺突文を施すA_1は消失し、A_4の占める割合が甕Ａ類の50％以上に達する。また小型品の占める割合も増加する。A_3は口縁部から体部にいたる形状が、ゆるやかな曲線を呈し屈折は認められない。体部の長胴化は進行し、外面調整はハケメからケズリｂ（掻壁）に変化する。

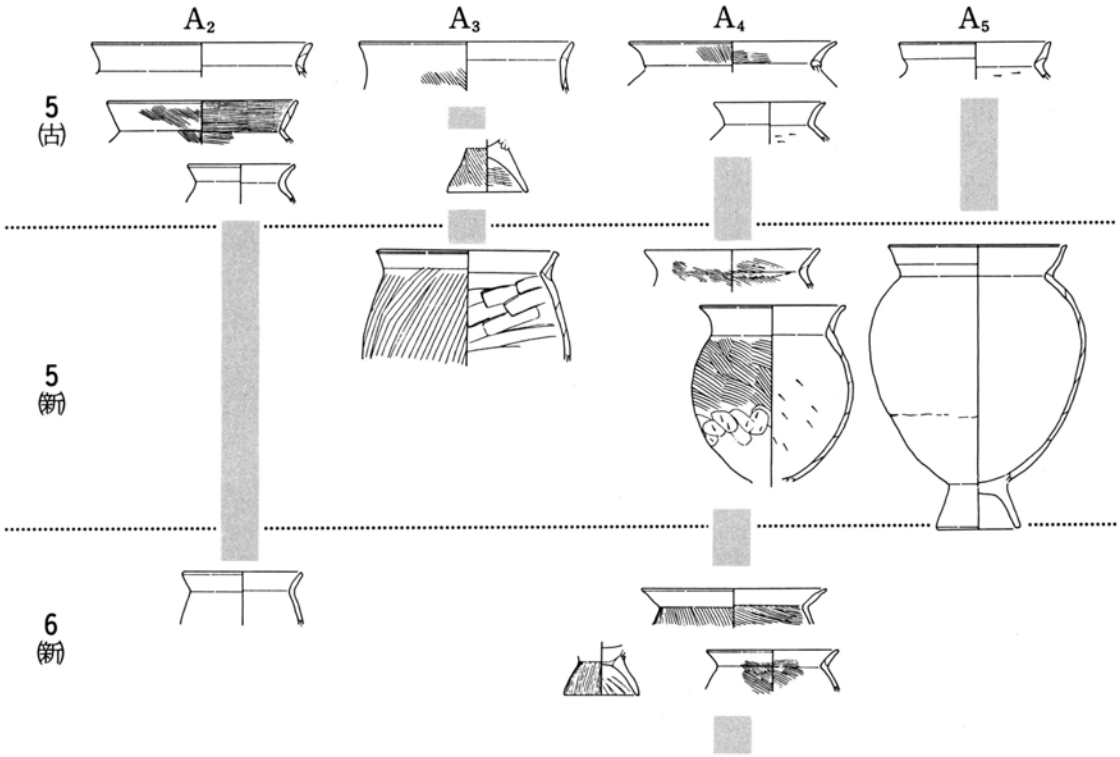
６　期

大型品はほとんど見られなくなり、A_4を中心とする小型品が残存する程度である。口縁部は大きく外傾するようになり、頸部径の比率が小さくなる。６期に所属する甕Ａはわずかに残存という形をとり、廻間遺跡では基本的には５期をもって甕Ａは一旦終焉を迎えると考えてよいであろう。

甕Ａの終焉



第28図　甕Aの変遷（1：8）



甕B（受口系口縁台付甕）　受口系甕

受口状の口縁部をもつ台付甕であるが、所謂近江型甕とは形状が異なり、かつ変化の仕方に違いが認められるため受口系口縁と仮称しておく。(以下受口系甕)受口系甕は近江地方北部、特に湖北地域との類似性が指摘できようが、濃尾平野の場合その全てが台付甕であるのに比べ、湖北では平底甕を多く含み、系統的にまず整理する必要があろう。受口系甕は外来系土器の内、新解釈を加えて定着した受容土器の範疇にはいる。山中様式後半から廻間Ⅰ式期を代表する、(むしろ主体となる)台付甕と位置づけてよいであろう。従来は全て近江系の系譜で処理されている場合が多いように思われるが、濃尾平野を中心として広く受容され、東海各地へ伝播し、それぞれの地域で再び新解釈が付け加えられてゆくタイプの甕であると再評価する必要がある[16]。　受容土器

甕BはB_1・B_2・B_3の3類に区分できる。その内B_2はさらに端部の屈折が口縁部下位ではじまるものと(a)と口縁端部近くで屈折するもの(b)と2つに細分できる。廻間式土器ではB_2bが甕Bを代表する形式であり主体を占める。

消　長

廻間式土器直前様式では甕B（受口系甕）が甕全体の中で多くの比率を占める形式として存在する。廻間遺跡では1期にB_1・B_2が存在しB_3類の有無は不明である。廻間2期になるとB_1～B_3の全ての形式が確実に存在する。また小型品も同時に認められる。3期古相ではB_1とB_2aが早くもこの段階をもって終焉する。(廻間Ⅰ式2段階)その後3期新相ではB_2bとB_3類が主体となり、5期に一部残存するものの基本的には4期をもって全ての形式が

消失する。廻間Ⅰ式期前半に盛し、Ⅰ式期内で終焉する甕と考えることができよう。

なお受口系口縁部のみの破片では甕Bと鉢A_3の区分が困難であり、これらを厳密に分類しえていない。

2　期

甕B_1・B_2・B_3で構成される。B_2・B_3は受口部の立ち上がりが比較的長く、外面にはヨコハケあるいは横線文を施す。受口部外面の稜線上には刺突文が細く施される。体部は球形の形状を残し、体部上半の肩部には横線文と刺突文を組合わす、受口文様が必ず施される。台部は甕Aに比べると器高が低く、低部径が広いという特色が見られ、接合部はaを主体とするもので、内面の充塡の時粘土が下方に突出するものが多く見られる。甕Bの台部製作は以降こうした連続して積み上げる接合部a・bに固執する傾向が強い。その意味で甕A（く字甕）の台部とは形状とその変化に違いが認められ、台部のみの区分も可能である。

内面ハケメ 外面調整はハケメ（ヨコ方向が多い）、内面もハケメを多用する。

甕全体の出土量を問題にするとこの時期（廻間Ⅰ式1段階）最も多い甕が甕B（受口系甕）となり、一つの時期的な特色といえよう。（第40図）なおその内B_2類が7割を占める。

3　期

3期古相（Ⅰ式2段階）をもってB_1とB_2a類は終焉する。甕全体の比率は3期をもって甕A・C・Bの順に順位が定着する。2期から3期にかけて甕Bの減少が目立ち、特に3期新相より激減すると見てよい。口縁部における受口部の立ち上がりは縮少し、ヨコハケがほとんど見られず、刺突文を省略するものも表れる。口縁部の外傾角度は小さくなり3期新相では口縁部の刺突文は省略される傾向が強く、また刺突文の施文間隔も粗い。体部は長胴化し、肩部の文様は横線文が古相に残存するも、全体に文様の省略が著しい。

4　期

甕B_2b・B_3が見られるものの、B_3類以外文様はほとんど省略される。B_3は受口部の製作が内彎状となり、屈曲が見られない。口縁端部に認められた面取り、それによるわずかな外方への把厚という特色は姿を消す。4期をもって甕Bはほぼ終焉する。

S字甕　甕C（S字状口縁台付甕）

甕Cは廻間式土器を代表する器種であるS字状口縁台付甕（以下S字甕）で、C_1～C_6類に分類できる。S字甕の詳細な分類は後述（第2節）するためここでは形式変遷を中心にまとめておくことにする。ただ甕A・Bに比べ製作法・胎土において別種の台付甕である点を強調しておく必要がある。

大きさは甕A・Bと同様な区分を適応でき、C_5は中・小型品、C_6は大型品以上のものに限られるという偏りが見られる。

消　長

廻間2期をもって甕Cが出現し、C_1（O類）→C_2（A類）→C_3（B類）→C_4（C類）と変化する。A類の登場は廻間3期（Ⅰ式2段階）、B類5期（Ⅱ式1段階）、C類は7期（Ⅲ

式１段階）に出現、廻間Ⅰ式期はＳ字甕Ｏ・Ａ類、Ⅱ式期をＢ類、Ⅲ式期をＣ類を中心とする時代であると単純化することもできる。C_5・C_6類は７期から出現し、Ｃ類とともに生み出されてくる新形式と見てよい。量的比率では５期をもってＳ字甕が急増し、甕全体の９割を占めるにいたり、Ⅱ式期を区切る最大の要因となる。甕の多様化（Ⅰ式期）から画一化へ（Ⅱ式期）、そしてＳ字甕自体の分化（Ⅲ式期）へと変遷する。

２　期

Ｓ字甕Ｏ類が主体となり、甕全体の中で占める割合は２割で甕Ｂ・Ａに比べ低い。

３　期

甕の比率では３割を超え、徐々に増加する傾向をもつ。Ｓ字甕Ｏ類とＡ類古段階が存在し、後者が主体となる。３期古相ではＡ類の外面調整は単斜方向のハケメが多く見られ、新相では単斜から放射状に変化してゆく、また内面調整ではハケメをナデ消し、頸部内面のハケメ調整のみを独立させようとする傾向が強い。

４　期

Ａ類新段階のものに変化する。体部はまだ長胴であるが、外面調整は羽状ハケメに統一され、内面の最終調整手法をハケメからナデに置換するようになる。Ｓ字甕調整技法が完成する。

５　期

体部は長胴から球形へと変化し、しだいに肩部の張りが強調されるようになる。５期をもってＳ字甕が他の甕類を圧してその主要形式となる。Ⅰ式期では甕全体の比率の中で５割を大きく下回っていたものが、Ⅱ式期になると突如７割に達し、やがて９割と、Ｓ字甕一色となる。

Ｂ類の登場

５期古相（Ⅱ式１段階）はＡ類新段階が残存するも新相ではＢ類古段階の資料で占められるようになる。５期から台部の折り返しは明瞭化する。

６　期

体部の形状は球形から肩部の張りの強いＢ類中段階の特徴に変化する。体部上半のヨコハケは屈曲部から完全に遊離する。６期古相（Ⅱ式３段階）ではＢ類中段階のものが多く見られるが、新相（４段階）になると口縁端部の面取りが不明瞭なＢ類新段階が混在する。

７　期

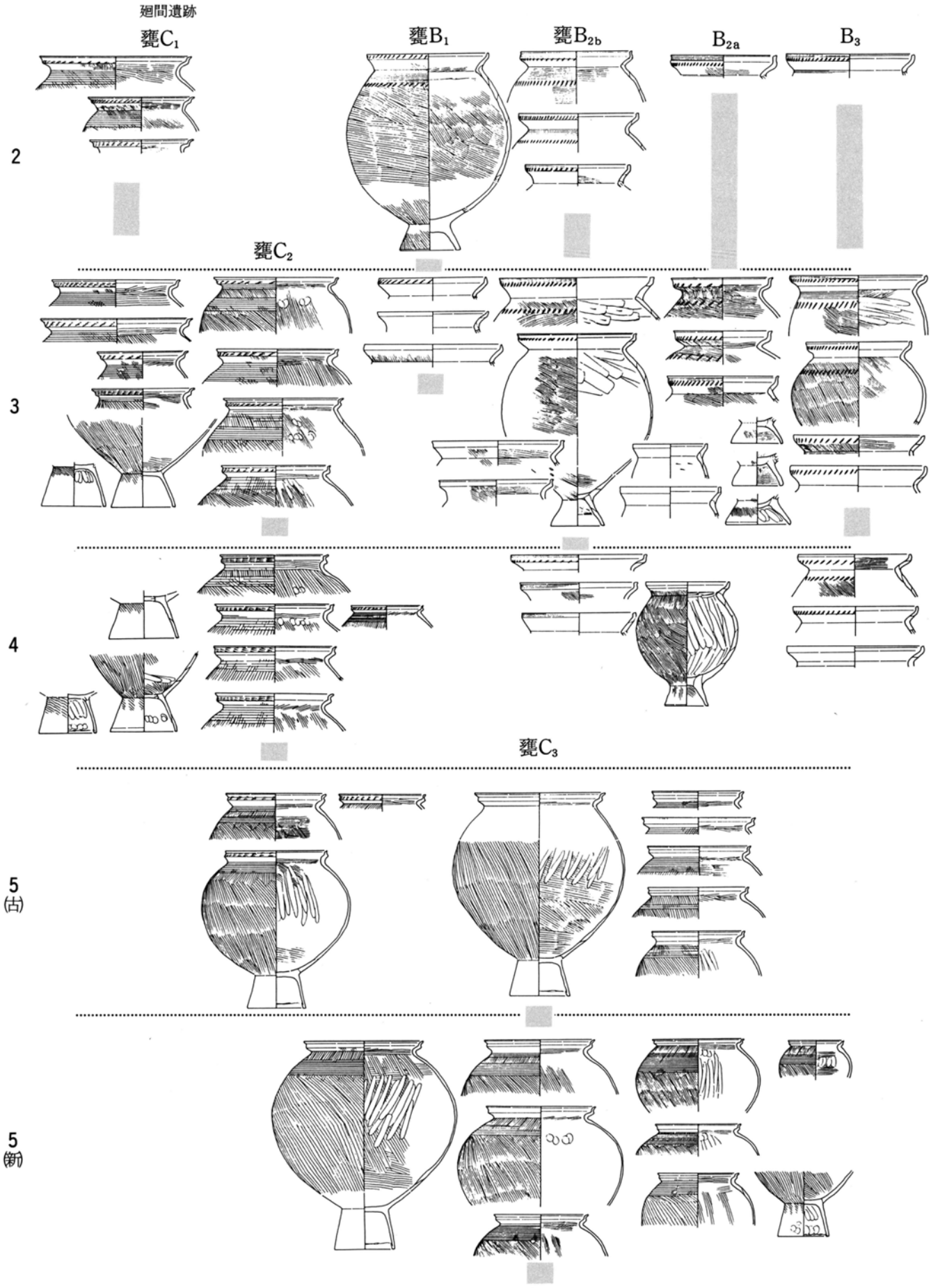
器種構成比率の中で甕の占める割合が、Ⅱ式期では５割強であったものが、７期になると５割を割り込む結果となり、Ｓ字甕の減少傾向がⅢ式期の基調となる。また一方７期（Ⅲ式１段階）はＢ類新段階の残存に加えあらたにＣ類古段階、C_5・C_6類が出現し、Ｓ字甕自体の分化が見られ一つの画期をなす。Ｂ類（25％）Ｃ類（52％）C_5（17％）C_6（３％）。

Ｃ類の登場

８　期

C_4（Ｃ類古段階）が86％とその主体を占めＢ類は消失、C_5・C_6類は合わせて１割強の比率に留まる。

廻間Ⅲ式３段階以降は口縁端部が肥厚するＣ類新段階へと変化する。



第29図　甕B・Cの変遷（1：8）

甕C3

6
(古)

6
(新)

甕C4

7

甕C5

甕C6

8

〔高　杯〕

高杯はA・B・Cの3つの器種が存在する。

高杯A

高杯Aは杯部が有段となる比較的大型の高杯と総称した。A_1・A_2・A_3・A_4の4類が存在する。A_1とA_2は廻間遺跡では同類として扱うが、本質的には別の系統的変化をもつ形式と理解した方がよい。(第38図)A_3は内面に多条沈線文を施すもの、A_4は内彎脚から脱却した円錐状の外反脚をもつ高杯である。口径はA_1～A_4まで大きな変化は見られず、25～23cmを中心とするものが多く、28～16cmの幅の中で特に目立った分布の偏りは認められない。

消　長

高杯A_1は廻間式土器様式以前に系譜を置くもので、廻間2期に残存するも、1期を中心に存在する形式である。A_2・A_4は廻間式土器様式を代表する形の高杯であり、A_2は2期から(廻間Ⅰ式1段階)A_4は廻間6期に登場する。A_3は2期に遡る可能性は残すものの、3期古相から散見でき、3・4期と多条化が進行し、廻間6期をもって終焉する。

高杯Aの高杯全体に占める割合は、約75%前後と推定でき、最も基本的な形式とすることができる。また全器種での比率を見ると、6期までは甕に次ぐ量をもつ。しかし廻間式土器では漸次減少傾向が基本的な流れとして存在し、廻間Ⅲ期にいたると、壺・器台の増加に伴い、量的較差が見られなくなる。

1　期

高杯A_2

高杯A_1で占められる。A_1は変化の仕方により2類に細分できる。A_1aは杯部の深さを増加させる方向をもつ。A_1bはむしろ稜径を減少させようとする方向をもつ。脚部は柱状部から円錐状に内彎するものが多く、しだいに柱状部が減少する変化が1期の中で見られる。なお脚部に横線文を施す資料も散見できる。

2　期

高杯A_1は残存するも、高杯A_2が出現し主体を占めるにいたる。高杯A_2は基本的に高杯A_1bを母体として発展したものと考えられ、稜径の激減にその特色がある。高杯A_1とA_2の差異は、口径と稜径比の変化の方向に表れている。(第38図)その他脚部に見られる内彎脚調整技法(60頁)の出現がある。1期の高杯A_1の脚部端部は面をもつものが多く見られるのに比べて、2・3期古相の脚部にはこの内彎脚調整技法が主体となる。なお口縁端部の細部彎曲技法の明瞭化も2期の特色である。杯部は大きく(杯部高の増大)また脚部も同様に大きく円錐状の内彎脚が出現する。

3　期

高杯A_2はこの段階以降器高の縮少が基調となる。脚部に比べ杯部の深さが最も深くなる(比率的に)のは3期新相の特色である。以降杯部の深さが相対的に減少する。内彎脚調整技法は3期新相から不明瞭となる。

高杯A_3は2期に出現する可能性があるものの、基本的には3期をもって定着する。3期古相は、杯部と脚部の器高比がほぼ同様となり、A_3は3～5条の沈線文が施される程度に

留まる。新相になると、杯部が脚部の器高を凌駕し、脚部の内彎脚調整技法はヨコナデが省略される。A_3は幅広く施文する多条沈線文に変化する。

4　期

高杯A_2は内彎脚が崩れはじめる段階である。2つの方向が見られる。一つは脚部全体の器高を低化されるもので、内彎が圧縮された形状を呈する。今一つは大きく彎月状の脚部が端部付近の彎曲のみに留まるもの、あるいは直線化を志向するものとが見られる。脚部の横線文は4期をもってほとんど見られなくなる。4期のものは無文帯が存在せず連続的な横線文が多い。脚部外面調整にナナメ方向のミガキが認められるようになる。杯部は大きく外傾する形状のものが主体を占める。A_3は多条化が進行し、その文様帯は器壁の厚さを増加させ段を有する。5期になると文様帯は粘土の貼り付けによる段製作へと手順が変化する。

5　期

高杯A_2は杯部がより強く外傾し、脚部の内彎も一段と圧縮される。また大きく開く円錐形に変化する。4期まで続いた口縁部の細部彎曲調整は消失し、明瞭な斜面をもつものになる。A_3は小型品が出現し、(5期新相)内面の文様には多条沈線文に加え波線文が組合わされる。

5期新相をもって杯部の内彎志向は崩壊し、内彎を留意するものと、直線化を志向するものの2つの形が見られるようになる。以下この2方向が高杯A_4にも受けつがれてゆく。

6　期

高杯A_2は稜径が著しく縮少し、大きく外傾する杯部をもつ。脚部の内彎はわずかな痕跡程度となる。高杯A_4が出現し、しだいにA_2形式と置換し、その主体を占めるようになる。A_3は小型品が多く、多条沈線文が施される文様帯は段構成が消失、線描による区分に変化する。

高杯A_4

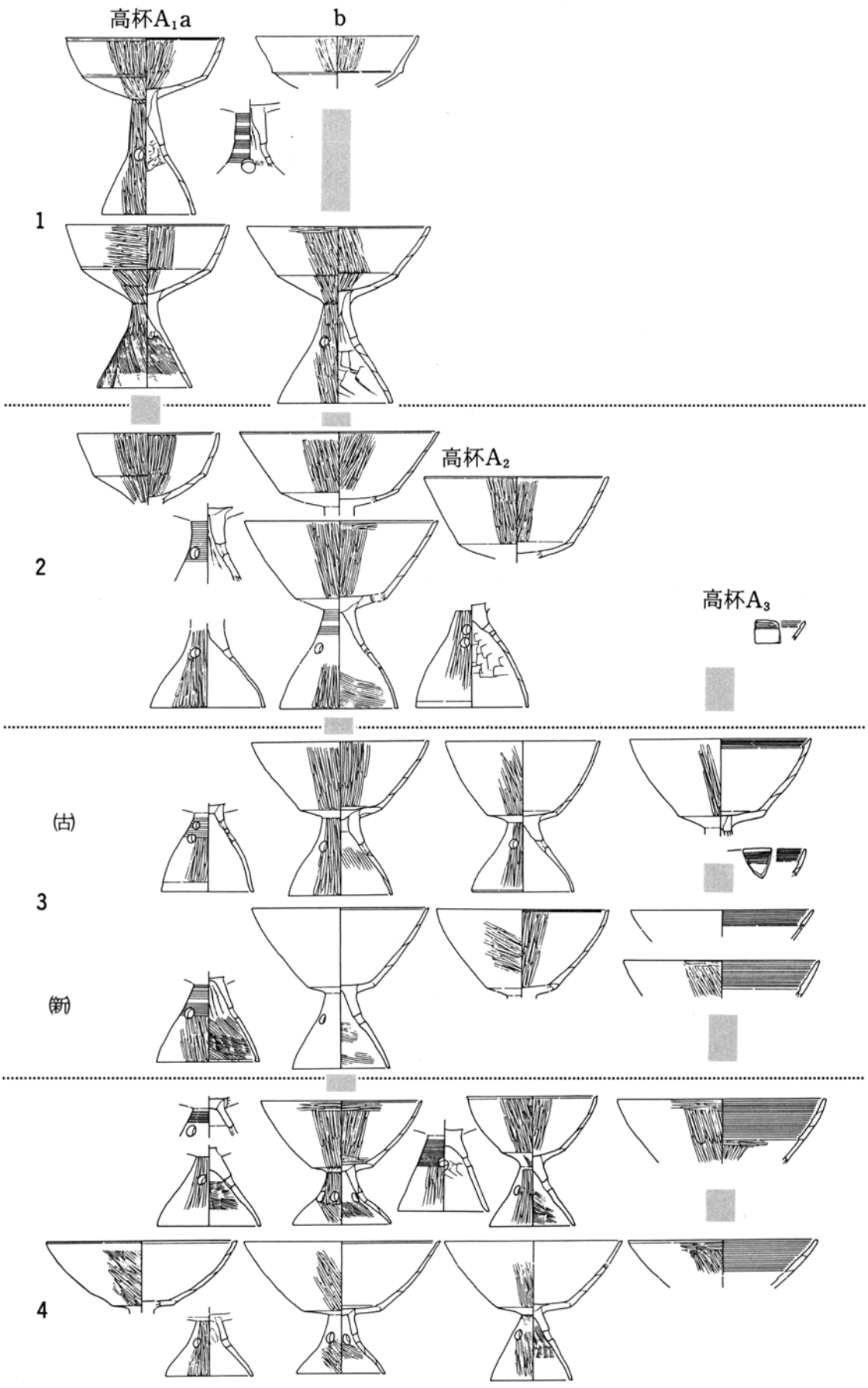
6期新相になるとA_2が終焉し、高杯AはA_4形式にほぼ統合される。脚部は高く、わずかな屈折部を有するものが多く見られる。透孔はしだいにその穿孔数が増加し、同時に穿孔方法も多様化する。

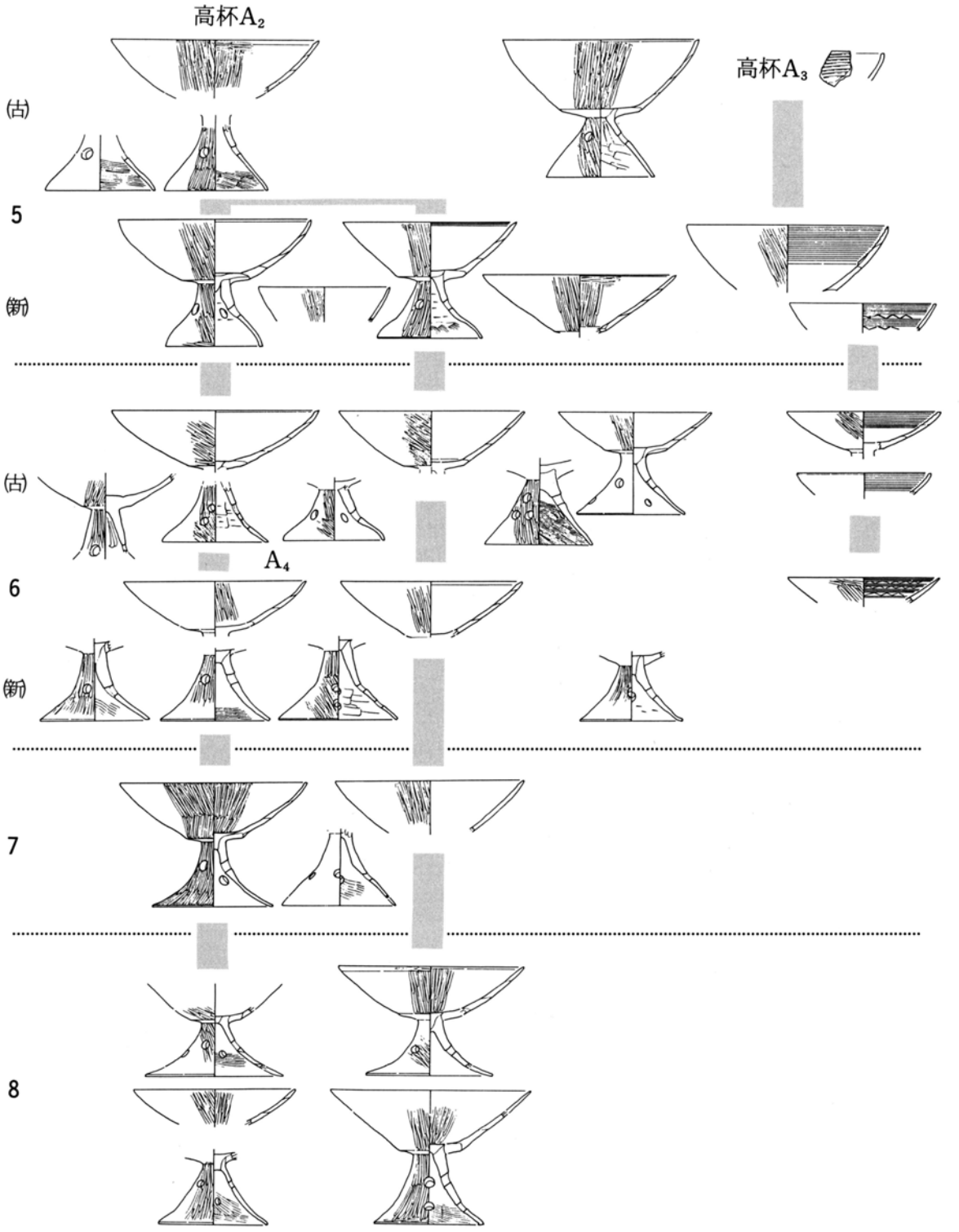
7　期

高杯A_4の口縁端部の斜面痕跡は、ほとんど欠損する。脚部はやや柱状を残しつつ、大きく外彎状に開口する形が多い。器壁が薄くなり、精製化する。

8　期

脚部は杯との接合点からただちに大きく外反する形に変化する。器高はますます小さくなり、杯部の深さも減少傾向を示す。器種構成における高杯の比率が相対的に減少し、A_4は急速に見られなくなる。


高杯A1a
b
1
高杯A2
2
高杯A3
(古)
3
(新)
4



第30図　高杯Aの変遷（1：8）

高杯B

椀形高杯　高杯Bは半球状の杯部をもち、大きく外反する脚部を有する椀形高杯である。

口径が脚径を凌駕するB_1と口径が脚径より小さいB_2の2つの形式がある。大きさは口径の区分で、20cm以上の大型と、17・18cmの中型と、15cm以下の小型の3種が見られる。B_1は大型・中型の2者、B_2は中型・小型の2者が存在する。

2　期

高杯B_1は山中様式に存在する半月状の杯部をもつ形状に系譜をもつ器種と考えることができる。高杯B_2は廻間式土器の開始である2期（廻間Ⅰ式1段階）をもって出現する形式である可能性が高い。また中型・小型も同時に存在してゆくものと考えられる。口縁端部の細部彎曲調整の出現は他の器種と同様である。

3　期

半球状の杯部が最も深くなる段階であり、こうした方向は高杯Aにも認められ、3期の特色と考えることができる。口縁端部は外方にやや突出する傾向が認められる。3期新相になると杯部上半が内側に傾きはじめ、全体に箱形状を呈するものも存在する。脚部には横線文を施す資料が多い。

4　期

杯部は急速にその深さを減少させ、B_1は浅く大きく開いた杯部に変化する。B_2は3期の形状を踏襲するようであるが、脚部はしだいにわずかな屈曲点を残す形状に変化してゆく。

5　期

高杯B_1はほとんど姿を消す。B_2がその主体を占めるようになり、かつB_2小型品が急増し、目立ちはじめる。脚部の屈曲は明瞭となるが以下稜線を残すほどに屈折することはない。

6　期

高杯B_2は小型品がほとんどとなり、杯部の器高が浅く、半月状を呈する。脚部は逆に大きく外反し、屈曲点から裾部にいたる長さが増す。杯部のミガキがヨコ方向に変化する。

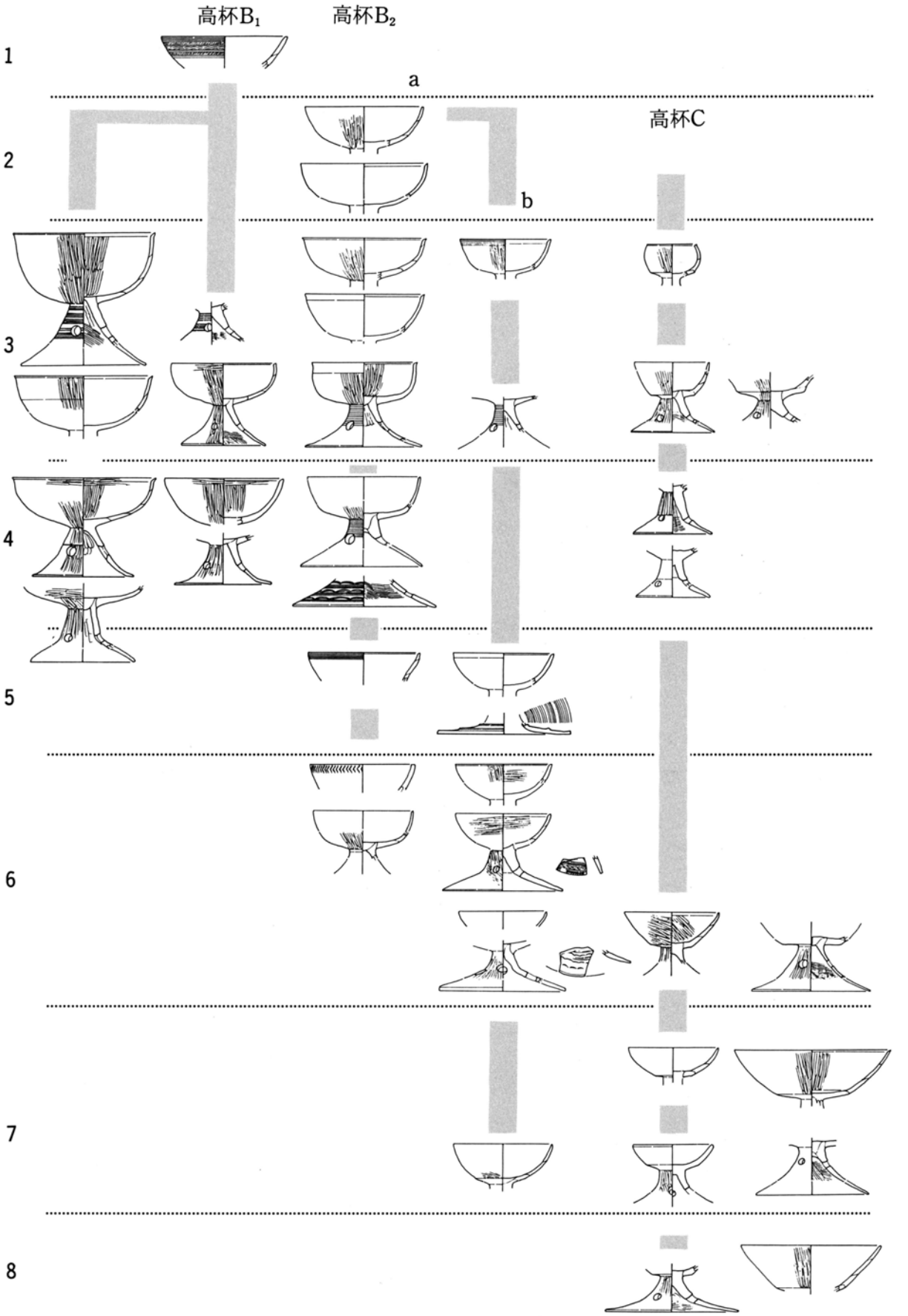
7　期

7期になるとB_2b（小型品）形式のみが残存し、杯部の器壁が著しく薄く、精製化する。

高杯C

有稜高杯　杯部に稜をもつ有稜高杯。中・小型品。その変化は廻間遺跡において、やや不明瞭であるが、5期と7期に画期が存在するようである。

高杯Cの出現は2期に遡る可能性を残すものの3期には確実に存在する。杯部に比べ著しく小型の脚部をもつものがⅠ式期に多い。脚部は当初より屈曲部を有するもので、裾部は著しく小さいという特色がある。5期、すなわちⅡ式期になると、脚部が大きく発達し、脚径が口径を凌駕する形式が出現する。脚部は多く文様を施し、波線文・沈線文を組合わせることが一般的である。7期、Ⅲ式期になると杯部が浅く、大きく彎曲を保ちながら外傾する形式が登場し、脚部は屈曲点をもつものから大きく外反する形状に移行する。



第31図　高杯B・Cの変遷（1：8）

〔器　台〕

器台はA・B・Cの3形式が見られ、その内Aは口縁部の形態からA_1・A_2に分類する。Bは同様に主に口縁部の形態からB_1・B_2・B_3・B_4に分類することができる。大きさは口径のみの区分であるが、口径15cmをさかいに大型と小型に大別しておく。AとCは大型・小型の両者が存在するが、Bは小型品のみで構成される。

消　長

器台Cは廻間式期以前から継続する形式であり、中空器台の系譜を引くものと考えられる。器台Aは円錐状の内彎脚をもつもので、廻間1期に登場する。高杯Aの変化とほぼ同調すると考えてもよく、脚部が明確な円柱部をもたず、口縁部からただちに大きく内彎する形状をもつ器台の出現は廻間2期をもってと理解することができる。この内彎脚をもつ器台Aの完成が、以下東海地域を代表する器台の特徴を決定した。

小型化　器台Cの小型化はすでに山中様式の中にその萌芽的現象が見られ、より大型とより小型品の形態が存在する。しかし今だ未分化であり、小型品として法量的に分化するのは2期をもってと考える。器台A・Cの口径15cm以上の大型品は廻間4期をもって姿を消し、小型品は廻間6期まで存続する。口径11cm未満で脚径が口径を凌駕する器台Bの所謂小型器台は廻間5期（II式）をもって成立する形式である。器台Bは廻間8期に画期を設定することができる。それは器台B_1からB_2に変化することに象徴されるように、脚部の形状において屈曲部が消失し、口縁部からただちに大きく外反する形状に変化する。また器台B_4も参入する。

品種構成比率を概観すると、全体に10%未満であるが、廻間2期に比較的多く見られる。その後徐々に減少し、4・5期が最も低い。器台A・C大型品の消失に関係があろう。その後再び増加し器台Bの盛行につながる。廻間8期にいたると構成比率では初めて10%の枠を突破する。廻間8期に器台における一つの画期を想定する理由はこの点からも窺い知れよう。器台Bの出現する5期（廻間II式1段階）と脚部の変化と器台Bにおける形式の多様化が見られる8期（廻間III式2段階）に器台の画期が存在する。

画期

なお中央部が貫通するものが主体を占めるものの、そうでない形状も見られる。本来は区分すべきであるが、後者の量が極めて少ないため分類できえていない。

2～4期（廻間I式期）

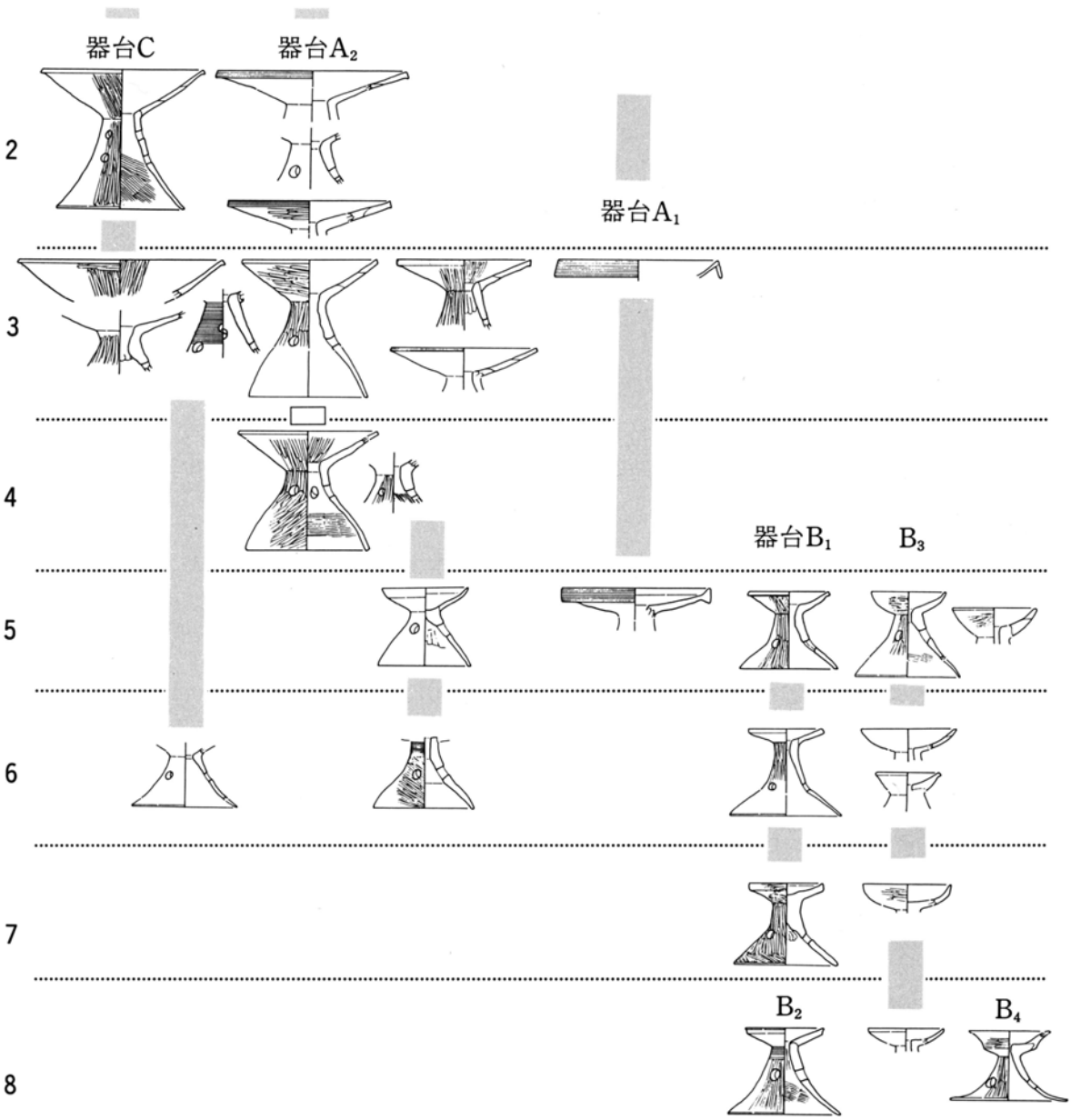
器台A・Cにより構成される。3期古相まで器台Aの口縁端部が拡張する形状のものが存在し、沈線文を施すものが多い。器台Aは高杯Aの脚部変化とほぼ同調して変化し、器高の減少が基調となる。A_1は5期まで残存するもののI式期をもって激減する形式であろう。

5・6期（廻間II式期）

器台Bが出現し、器台A・Cの小型品が残存する。脚部の変化は内彎脚の喪失に向かって進行する。

7・8期（廻間Ⅲ式期）

7期になると器台Bに統合され、他の形式はすでに消失したと考えられる。脚部は屈折点は残存するも、内彎から外傾、直線化に変化する。8期になるとB_1からB_2に変化し、B_4の登場等器種が豊富になる。と同時に量の増加が見られ、小型器台が盛行する。



第32図　器台の変遷（1：8）

〔壺〕

壺　A

壺Aは垂下拡張口縁部に擬凹線文を施し、体部に文様、各部位に赤彩を施す加飾壺で、パレススタイル壺と総称される一群の壺である[17]。(以下パレス壺)基本的に3つの要素から構成される加飾の広口壺で、第1に口縁部の拡張と擬凹線文、第2に体部上半の文様帯、第3に赤彩をもってパレス壺を規定することができる。

パレス壺

消　長

壺Aは口縁部の形状から3つの系統を考えることができる。A_1・A_2・A_3と変化する類型とA_4及びA_5の3系統である。A_1・A_5は廻間1期にすでに成立しているものと考えられる。ただし横線文と不連続波線文を交互に組合わせ、加えて波線文に赤彩を施すパレス文様の確立は廻間2期をもってと判断してよい。またパレス壺に特有のしもぶくれ状の体部の出現もやはり2期以降と考えられる。A_4の登場は3期新相であり、口径25cm前後の大型のものが一般的で、棒状浮文を必ず用いる。A_1の系統は口径18・19cmが一般的で棒状浮文はむしろ稀である(円形浮文は散見)。体部の波線文はII式期になると一気に大きく強調されるようになり、7期をもって壺Aは終焉する。

1　期

壺A_1とA_5が存在し、体部は球形で、文様構成は横線文と斜線文を組合わすものが多い。

2　期

壺A_1は口縁部内面に明瞭な有段の文様帯(平坦面)をもち、頸部に凸帯を有するものが多い。パレス文様、しもぶくれ体部が成立。A_5は口縁部内面が直線的に屈折するものである。

3　期

A_1の口縁部内面文様帯が内彎しはじめ、3期新相になると内彎口縁をもつA_2に変化する。また同じ時期に口頸部が内彎する大型のA_4がA_1を母体として誕生する。A_4の登場こそパレス壺を代表する形式の確立と位置づけてよい。体部はパレス文様一色に統一させる。

壺A_4の登場

4　期

3期新相と大きな変化は認められない。口縁内部の文様帯はますます内彎し、口縁の垂下技法は縮少、傾斜をもちはじめる。

5　期

A_2から有段口縁状のA_3へと大きく変化する。口縁部の垂下は消失し、口縁部が外傾する。口縁内面の羽状文は単純化され、体部の波線文は大きく強調される。工具は主体であった貝殻からクシに統一される。体部に幅広い凸帯を用いるものが散見できる。A_5は口縁部の文様帯が欠落してゆく。

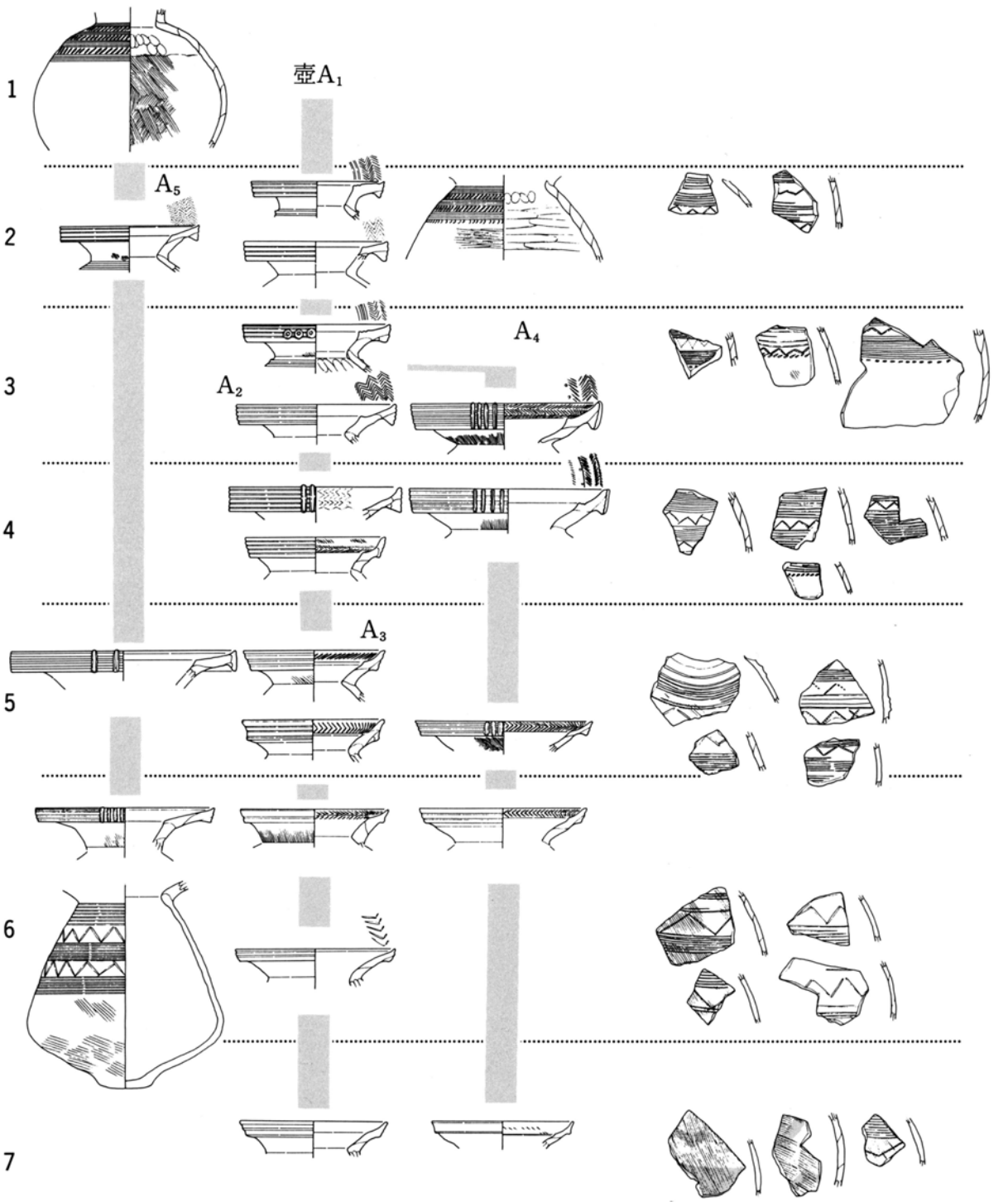
6　期

A_3・A_4の区分がほとんどなくなり、口縁部の拡張が小さく擬凹線文が減少する。体部の文様は横線文が痕跡的となり、波線文のみ強調される傾向が強い。工具はクシに加え板・

ヘラ描も見られるようになり、体部外面調整はミガキが省略されハケメがそのまま残存することが多い。A_5は口縁内部の平坦面がより拡張し、端部の垂下拡張がほとんど欠落する。

7　期

全ての文様が消失する傾向が強い。体部には赤彩による線描波線文のみで表現されるものが存在するようになる。壺Aは7期をもって終焉する。



第33図　壺Aの変遷（1：8）

壺　B

広口壺

広口壺を綜合して壺Bとする。口縁部の特色からB_1・B_2・B_3・B_4・B_5の5形式が存在する。

消　長

壺B_1は明らかに廻間式土器様式以前に成立する形式である。一方B_2～B_5は本様式内で生み出されてくる形式と考えて大過ないであろう。

廻間2期では体部は、その最大径を体部中位に置く形態が多い。口縁端部に沈線文・刺突文系の文様を施すものが一般的である。壺B_1は口縁端部に明瞭な拡張する面を有するものと、そうでなく単純な形状の2つに細分できる。3期になるとB_2の口縁部はより短頸になり、外反度が小さくなる。5期になると壺Bが激減する。体部は3期新相を中心に最大径が体部下位にさがるしもぶくれ状を呈するものが一般化する。壺B_5として一括した口縁部が有段化するものは、5期から散見できるようになる。

パレス壺以外の広口壺B類の盛行は明らかに廻間I式期内にあり、その器種の豊富さは一つの特色でもある。

壺　E

柳ケ坪型壺

口縁部が有段状を呈する加飾壺であり、柳ケ坪型壺と呼称されているものである[18]。その特色はまず口縁部の有段と羽状文。体部上半の文様は幅広い横線文と波状文を1単位毎施し、その動作がきわめて不鮮明であるという柳ケ坪文様が見られる。また体部最大径を底位に置く、極端なしもぶくれ状を呈する[19]。口縁部の特色からE_1とE_2に区分する。

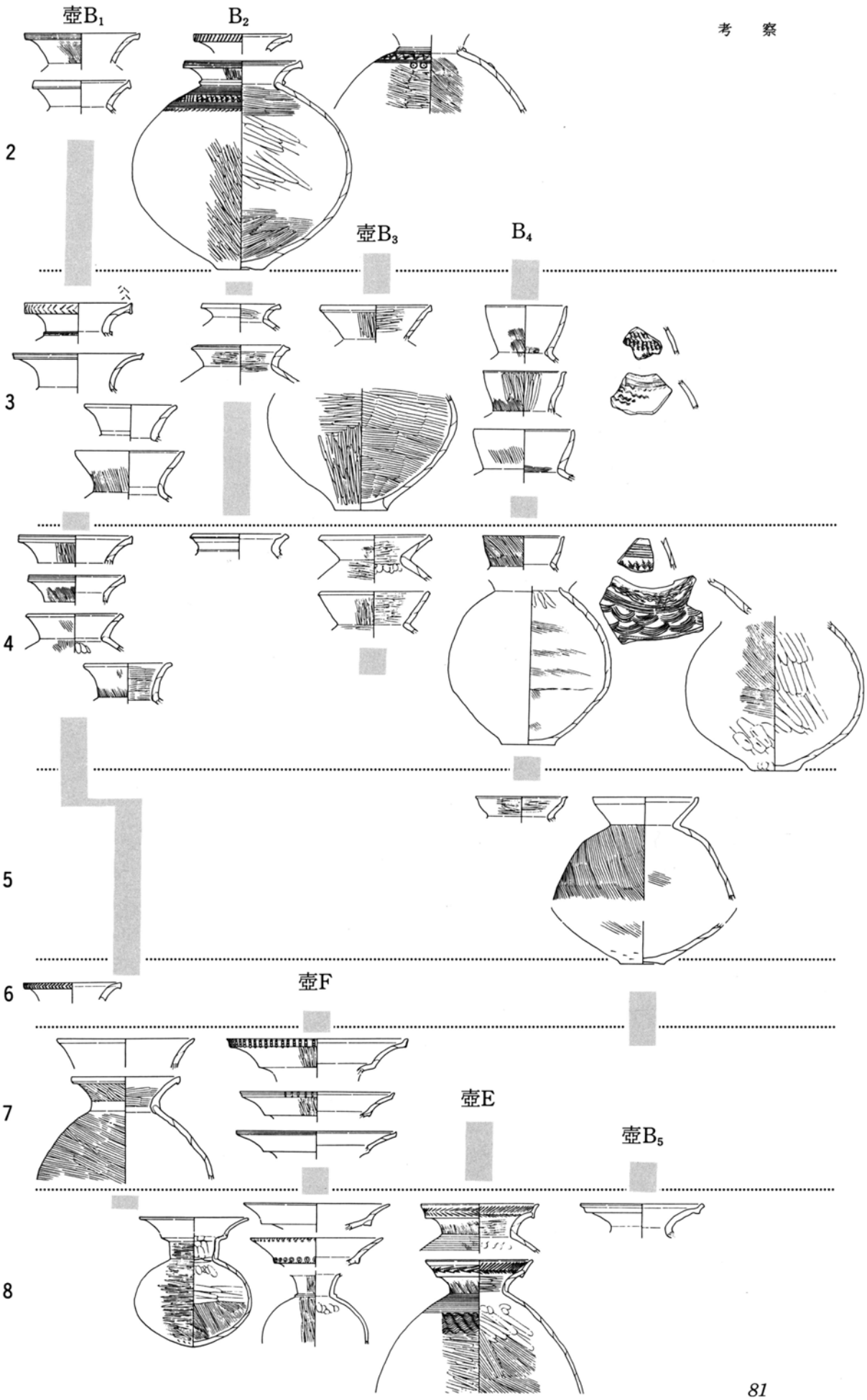
壺Eは廻間III式期（5期）をもって登場すると考えられ、7期のものは有段口縁というよりロ縁端部を拡張した幅広い面をもつ形状である。頸部に凸帯をもつものが多く、口縁部の羽状文は複数単位である。8期になると明瞭な有段口縁をもち、口縁部の羽状文は単純化する。頸部の凸帯は見られなくなる。その後（廻間III式3段階以降）壺E_1からE_2に大きく変化し、口頸部は二重口縁技法を採用する。口縁外面の羽状文はより大きく強調されるようになる。

壺　F

二重口縁壺

二重口縁壺で廻間遺跡においては7期（廻間III式1段階）をもって登場する。廻間様式では廻間II式期に散見できる見通しをもつものの、様式内に広く定着し、新解釈を基に受容土器として位置づけられてくるのはIII式期になってからと考える。

7期では口縁端部が上方に肥厚する形状が多く、はねあげ口縁を呈する。また端部に幅をもち沈線文・棒状浮文を用い、加飾性が強い。8期になると端部の肥厚は見られず、丸く整えられるものが主流となる。外面調整は基本的にはタテ方向のミガキが主体であり、ミガキC（細かいヨコ方向のミガキ）は少量で客体的であり、「搬入品・模倣品」と考えられる。III式3段階以降の形状は、特に口頸部が大きく外傾・外反するものに変化していくようである。



第34図　壺B・E・Fの変遷（1：8）

壺　C

内彎口頸壺

口頸部が内彎し、体部が比較的小さい内彎壺を綜合し壺Cとする。壺Cは口頸部の形状によりC_1～C_5の5つの形式が存在する。

消　長

壺C_1及びC_2は廻間様式直前に成立しているものの廻間2期になると内彎が明確化し、体部が球形、ややしもぶくれ状を呈するようになり、以降の形状の基本形が成立する。また廻間2期は壺C_3（ヒサゴ壺）C_5がほぼ同じ時期に成立してくる可能性が高い。C_3はC_1の内彎長頸壺を母体として生み出されてくる新形式であり、その特色は口頸部の独特の形状にある。端部周辺は微妙に外彎し、また口頸部には文様を施すものが一般的である。主に連孤文を多用し、横線文を組合わせるものも見られる。ヒサゴ壺は口頸部が垂直に立ち上がるものと、内彎を強調させるものと2つの形態が存在する。壺Cは時代の経過とともに小型化する傾向が基調にあり、特に口頸部の相対的縮少が著しい。廻間5期になるとこの口頸部の縮少化が明確化する。C_3はC_4形式に変化する。内彎細頸壺C_2は廻間1期からすでに他の器種に見られない特色が存在する。それは明瞭な底部を保有しない点であり、尖底からしだいに扁平底へと変化する。本質的に器台と組合わされて使用する目的をもつ壺と考えられる。この思想は2期以降になると壺C全体へ波及し、特にヒサゴ壺・内彎長頸壺（小型品）に顕著に見られるようになる。壺C_2は5期まで残存するものの本来廻間I式をもって終焉する形式と考えてよい。また壺C類は廻間7期に一部認められるようだが、基本的には廻間I・II式期特有の形式と理解してよいであろう。

器台と組合

壺Cの体部の変化をまとめると、1期のものは体部中央に最大径をもち、算盤玉形を呈している。C_1は平底でC_2は尖底の差は明確に存在する。2期になると体部最大径は体部下半に移動しはじめ、全体に丸味をもつ形となる。3期新相をもって最大径が底位に落ち、完全にしもぶくれ状を呈するようになる。また平底からやや突出した平底・あげ底状に変化する。ヒサゴ壺C_4は5期になると丸底で小さく底部が凹む独特な形状が見られる。外面調整はタテ方向のミガキが基本であるが、体部のヨコミガキはII式期から顕著となる。（壺C_5以外）

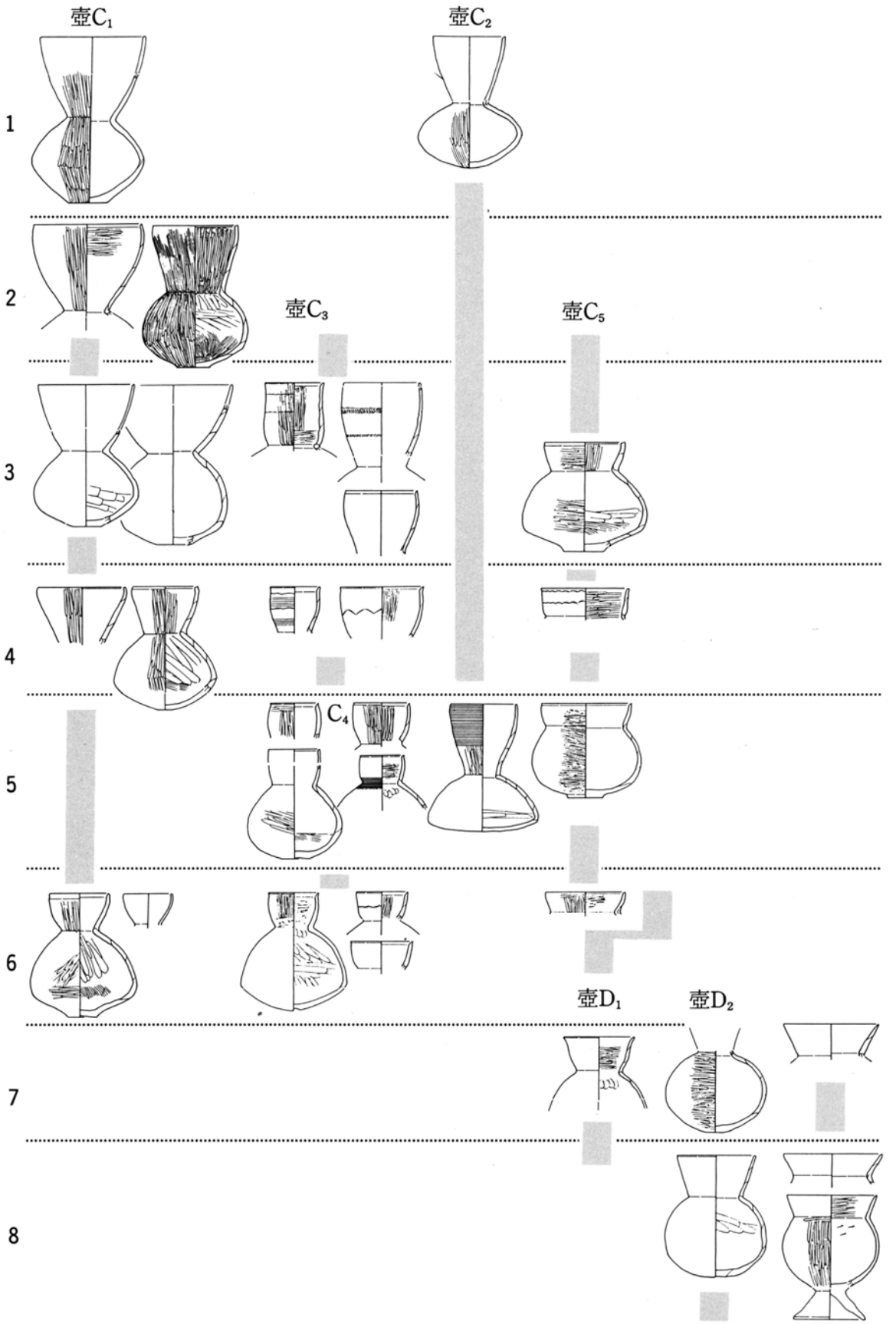
壺C_1・C_2は特に小型壺が2期より散見でき、小型の器台と組合される。またこれらを一体化して表現したものも存在し、これらをI式期の特色に加えてよいであろう。（117頁参照）

壺　D

壺Cに対して口頸部が直口・外反する中型の壺を総称する。廻間遺跡では個体数が少なく、明確な分類ができていない。D_1とD_2に大別し、D_2は直口口縁D_2aと広口口縁D_2bに別けて考えることができる。

D_1は廻間II式期後半代に成形してくる可能性をもつ壺で、口頸部が流線的で外反するやや複雑な形状をもつ。

D_2は廻間7期（III式1段階）から出現する形式で、体部球形を呈する。外面調整はミガキが用いられ、外来系土器の範疇で考えておく必要があろう。



第35図　壺C・Dの変遷（1：8）

〔鉢〕

鉢は口径・器高において比較的大型のものをA、小型のものをBとして綜合しておく。鉢AはA_1～A_6に分類でき、BはB_1～B_4に分類する。

消長

鉢A_5とした形式以外は廻間2期以前に出現している可能性が高く、特にA_3とした受口系口縁を有する鉢は山中様式での重要な器種である。A_1は口径が体部径を凌駕するものであり、廻間6期になるとこの形状が著しく小型化し、鉢B_3へと連続するものと考えられる。なお7期をもって鉢類の精製化が開始される(廻間III式期)。受口系口縁をもつA_3及び有孔鉢（おそらく直口鉢）A_6は廻間4期（Ⅰ式期）をもって終焉する。廻間8期になると鉢B_4とした精製品である一群の形式が登場する。

2～4期（廻間Ⅰ式期）

廻間Ⅰ式期は比較的大型の鉢であるA類によってほとんど占められる。そのような中にあって小型品鉢B_1も定量存在する。総じて廻間Ⅰ式期をもって鉢Aの多くの形式はその姿を消すか、激減すると考えてよく、A_1・A_4も急速に器形の縮少化が進行する。外面調整に明瞭なミガキ手法を鉢Aに本格的に採用するのは廻間3期新相になってからと考えてよいであろう。鉢A_3は廻間3期新相をもって受口系口縁の形状が痕跡的となる。鉢B_1はやはり3期新相に2つに分化する。一つは直口鉢の基本形を留意しつつも口縁部がやや内彎するもの(a)と、体部が大きく彎曲するもの(b)である。4期になるとB_1は口径が体部最大径より小さくなり、底部の突出もほとんど見られない。

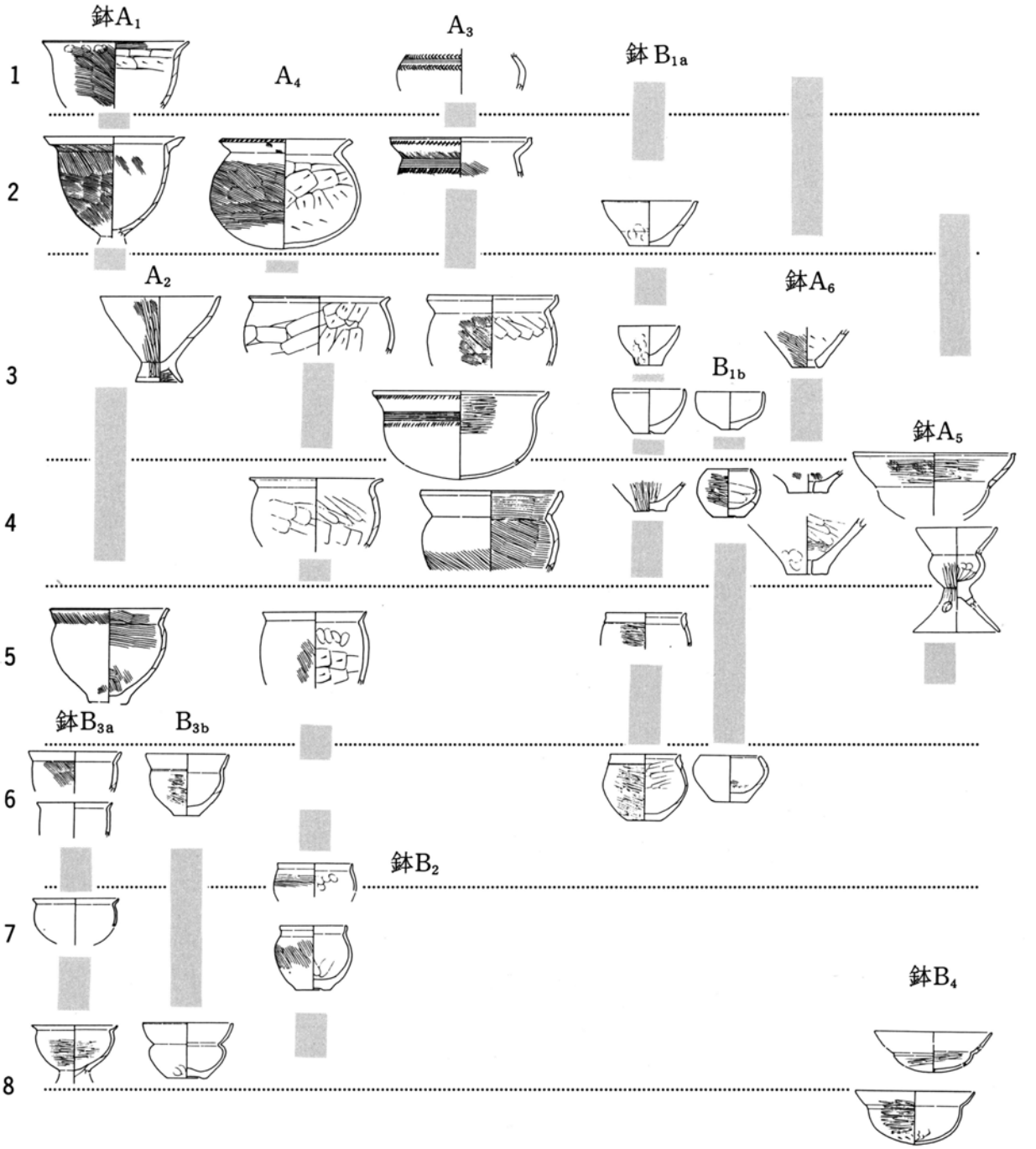
ミガキ手法

5・6期（廻間II式期）

5期の鉢A_1・A_4は著しく形状全体が小型化の傾向を呈しはじめ、AからBへの過渡期的様相を見せている。鉢B_1aは口縁部が意識され、幅をもち把厚する形状に変化する。端部も同様に面をもつ。6期になるとB_1は体部が大きく屈折する形状を呈する。B_1は廻間II式期をもって消失する形式であり、その影響はおそらくB_2へ連動する。鉢A_1・A_4はそれぞれB_3・B_2に形状が移行するものと思われる。B_3はさらに口径が比較的短いもの(a)と、長いもの(b)に分化するようである。廻間6期にいたると鉢類は小型品のみとなる。

7・8期（廻間III式期）

廻間7期は鉢B_2・B_3が存在し、器壁は全体に薄くなり、精製化が進行する。7期までは確実に平底を呈していたものが、8期になると丸底化が急速に進み、後続期では完全に丸底化する。ミガキC（細いヨコ方向のミガキ）が多用される。鉢B_4を中心とする新しい器種が登場する。



第36図　鉢の変遷（1：8）

6）廻間Ⅰ式～Ⅲ式期

廻間遺跡の資料を使用して出土土器を1～8期に区分することができた。それは主に一括性の高い資料を基準に竪穴住居出土資料を組合せることにより実施し、器種分類とその変遷を手掛りとしてまとめてみたものが前述の区分である。ここではこれらの諸点を基に、濃尾平野の土器様式を設定することにしたい。濃尾平野に固執する理由は、一つには四面を閉された地形的環境をもち、特定の土器様式でもってある程度一つの地域としてまとめられる見通しをもつからである。そこには伊勢湾あるいは東海地域の代表的器種組成と、その変化の在り方の典型的な姿を見い出すことができる。したがって廻間遺跡出土遺物を中心に、濃尾平野各地の土器群を利用しつつ土器様式を組立てることになる。

廻間式土器

廻間2～8期をここで改めて廻間Ⅰ～Ⅲ式期の3つに大別する。すなわち廻間2～4期をもって廻間Ⅰ式期を設定し、廻間5・6期をもって廻間Ⅱ式期とし、廻間7・8期及び塔の越遺跡SX01[20]・若葉通遺跡SB02[21]をもって廻間Ⅲ式期を設定する。なお廻間Ⅱ式は廻間遺跡以外良好な資料にめぐまれていないのが現状であり、廻間5・6期の細分のみによる作業に終始した。将来資料の増加をまちたい。廻間Ⅰ～Ⅲ式はさらにその内部を各4つの段階に細分しえるのであるが、Ⅱ式期における状況に代表されるように他遺跡との検証作業に問題が残る結果となった。したがって、ここでは一応大様式内の器種変遷の組合せにおける各段階程度に留まるのであり、将来的に資料の増加をまって細別様式として再構築する必要がある。

廻間様式はその前様式である広義の山中様式と後続様式である松河戸様式[22]により区分される。では廻間様式とは何か。何をもって代表されるのかといえば、単純化を恐れずに言及すると以下のようにまとめられる。甕と高杯が7・8割近くを占めることを前提として、甕C（S字甕）と高杯A（有段高杯、ただしA_1を除く）の時代であるといえよう。また甕Cの最大の特色である軽量甕の時代と換言してもよい。広義の山中様式は器種に無関係に加飾性を強調する気風をもち、一方松河戸様式は外来系土器群の定着による器種の置換によって廻間様式と明確に区別できる。濃尾平野の個性の消失が廻間様式の崩壊をもたらし、東日本に広く影響をあたえた土器群の創造が、廻間様式の開始である。廻間様式以降を古式土師器の範疇で考えることにする。

廻間式以前

廻間式以前

廻間遺跡SB02、あるいは高蔵遺跡C区第3層[23]、瑞穂遺跡4次SB02[24]をもって山中様式新相（3区分）を考える資料と位置づけることができる。その特色は高杯A_1と甕A_1・Bにある。甕A_1は口縁部に刺突文を施し内面ケズり調整をもつもので、山中式土器を代表する形式である。甕Bは受口系台付甕であり、甕Bの比率の高さがこの段階を規定する要因と見てよい。高杯A_1は2系統の変遷が存在し（70頁）内彎形態の登場が印象的である。内彎志向はこの段階ではまだ他の器種に広く波及せず、端部の屈折程度に限定できよう。従来「欠山式古相」と考えられていたものの大部分を含むものと思われる。その内容においてなお細分が可能であり、廻間遺跡SB02は終末期を考える良好な資料であろう。

廻間Ⅰ式期

廻間遺跡2期、3期古相、3期新相、4期をもってそれぞれ1～4段階とする。廻間Ⅰ式期は形態の内彎志向という最大の特色をもち、S字甕・ヒサゴ壷・パレス壷に代表される濃尾平野の個性的な形式の誕生・定型化が認められ、各器種に小型品がそれぞれ随伴する。従来「欠山式土器」と通説されていたものの多くを含むことになる。

1段階　　**1段階**

廻間遺跡ではより古い様相を残すSB67、新しい様相が認められるSB75、加えてSB30をもって代表することができる。また他の遺跡では仁所野遺跡第2号方形周溝墓[25]・高蔵遺跡D区1層[26]がこの段階の良好な資料と考えられる。

甕では甕C（S字甕）の登場と甕A・B、特にAの器種の多様化を指標とすることができる。甕AはA_3・A_4・A_5の出現があり、その内A_3の直口口縁と、A_5の内彎口縁は注目したい。体部は球形を維持し、内面ケズリ手法が多く見られる。甕BはB_1・B_2・B_3が存在し受口文様（刺突文・横線文）が盛行する。甕CはS字甕O類に限られる。口縁各段は外反し、刺突文は細かく、押引状になることはない。外面調整は単斜方向のハケメである。甕の比率はB・A・Cの順に多く見られる。

高杯A_1は残存し、しだいにA_2に統合される。高杯A_2の誕生は、以降の高杯の形態変化の原型（杯部深・稜径の減少）となり、杯部角度（第37図）は60°以下に定着。脚部は杯部との接合点からただちに大きく開く内彎脚が確立する。端部には細部彎曲調整、脚部に内彎脚調整技法が成立を見る。高杯B（椀型高杯）は脚部が口径を凌駕するB_2形式の出現と、口径15cm未満の小型品（B_{2b}）の登場が注目されよう。

器台は器高が高く、端部を肥厚し沈線文を施すものが主体を占める。小型品が完全に分化し定着する。

壷は、まず壷A_1の定型化に特色がある。ここで言う定型化とは口縁部内面の文様帯が平坦面をなし、体部の形状のしもぶくれ形態、横線文と不連続波線文を組合せ、波線文に赤彩による線描が施されるという「パレス文様」が確立することである。壷BはB_3・B_4を加えて器種が豊富になる。加飾性が強く、特に口縁端部には各種の施文法を駆使する。壷C（内彎口縁壷）はC_3（ヒサゴ壷）・C_5の登場及びその小型品が見られるようになり、口頸部の内彎が強調される。体部は算盤玉型から最大径が下降し、しもぶくれ状になる。

鉢は前段階から継続する形式によって構成される。第48図に示した鉢A_5及びその類、ならびにA_4は本段階から開始する可能性が高い。

2段階　　**2段階**

廻間遺跡ではSZ04、SU04、SB01、SB10を中心に考えることができるが、能田旭遺跡溝状遺構[27]により良好な一括資料（標式資料）を見ることができる。また朝日遺跡L区SZ01[28]もこの段階に含められよう。

高杯A_2の形状、A_3及びS字甕A類古段階の登場に特色づけられる。

甕は1段階まで多く存在した甕B（受口系甕）が以前として多くを占め甕A（く字甕）・

C（S字甕）が増加傾向を見せる。体部は長胴化が開始される。S字甕A類が登場、O類が残存。

高杯A_2は杯部の深さが相対的に大きくなり、逆に脚部が縮少、杯部と脚部の器高比がほぼ同様か近い数値になる。高杯A_3は1段階に萌芽的現象が見られるものの、2段階になると明確な文様帯を形成するようになる。しかしまだ多条化していない。高杯Bは杯部が深くなり、端部は外方へ強く突き出したような形状を見せる。

器台は器台Aが主体となり、小型品以外では内彎脚が主体となる。

壷AはA_1の体部文様構成がパレス文様に画一化する。口縁内面の文様帯はやや彎曲しはじめる。壷Cは体部最大径が下降し、しもぶくれ形態が定着する。

本段階をもって終焉する形式には甕B_1・B_{2a}・C_1・壷A_1がある。

3段階　3段階

廻間遺跡 SK51、SB03、SU02、SB39を中心に、その主要構成器種をもって考えることができ、その他勝川遺跡 SZ22[29]が存在する。狭義の欠山式土器は3段階に代表される。

甕A_4が主体となり、高杯A_2の形状・パレス壷A_2・A_4の登場に特色づけられる。

甕は、甕A形式の中で口縁端部に明瞭な面を有しないA_4が、主体的な器種として位置づけられ、以降甕A（く字甕）の基本型式となる。内面ケズリ手法はほとんど見られなくなり、ハケメb（板）が主体となる。台部は内彎するものが多くを占める。口縁部が相対的に大きくなり、逆に台部の器高が減少し、やや不安定な形状をもつ。甕BはすでにB_1、B_{2a}が消失し、口縁部の文様も欠損しはじめる。S字甕A類は外面ハケメが単射・放射状を呈し、内面のハケメをナデ消す場合が目立つようになる。甕の主体はBからAに移行する。

高杯A_2は杯部の深さが相対的に最も大きくなり、脚部の器高が縮少する。内彎脚調整技法が省略化（A→B）する。A_3は多条沈線文へ移行する。脚部の文様に無文帯を留めない横線文が見られるようになる。高杯Bは口縁部の立ち上がりが垂直化し、箱型を呈するものが存在する。

壷A_1は口縁内面に内彎文様帯をもつA_2に変化する。また口径25cm前後の大型の内彎口頸部をもつ特色的なパレス壷A_4が登場する。壷Bは急速にその量を減少させる方向に向かう。壷Cは口頸部の器高が減少するようになる。

鉢Aは外面調整にハケメからミガキ調整を採用するものが認められるようになる。鉢B_1は口縁部が彎曲しはじめ、B_{1a}とB_{1b}に分化する。

4段階　4段階

廻間遺跡 SK50の一括資料をもって設定する。

S字甕A類新の出現、高杯A_2の杯部と脚部の崩壊現象に特色づけられる。

甕では甕A_1はほとんど姿を消し、本段階をもって終焉する形式である。A_3は口縁部が直立する。甕Bは全ての文様が省略されるものが多く見られる。S字甕は外面調整に羽状のハケメが定着し、台部のハケメの施し方（体部下位のハケメ調整の結果）が不連続的となる特色的なナナメハケが認められるようになる。つまりS字甕A類新の段階をもってS字

甕製作（主に調整）技法が確立し、以降のS字甕盛行を約束させることになる。

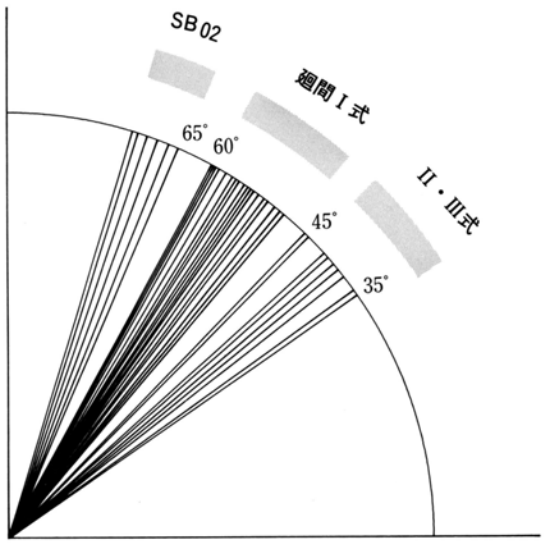
高杯A_2は2段階まで続いた基本形が崩れる。まず脚部においては脚部高が圧縮され、杯部と脚部の器高差が大きくなる。内彎脚の変化が著しく、圧縮化と直線化と2つの方向に進行する。以降この2つの方向はそれぞれ系統的な変化を見せる。特異な内彎脚調整技法は完全に消失する。杯部は相対的に深さを減少させ、見かけの上では大きく外傾したような形状になる。高杯A_3は多条化が進み杯部の半分以上を占めるものも見られる。透孔は2孔1組4方向の穿孔方法があらたに参入し4段階の特色となる。高杯BはB_1がこの段階をもってほぼ終焉しB_2が主体を占めるようになる。

器台・鉢は大型品が4段階をもってほとんど見られなくなる。

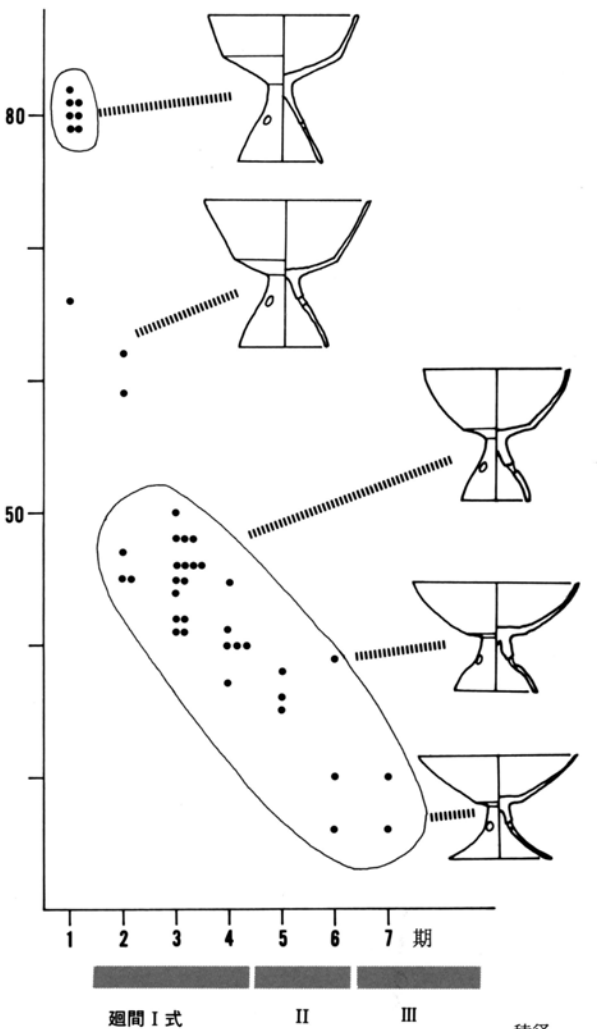
壷BにおいてはB_1・B_3が比較的目立つものの4段階以降壷Bは激減する。

1式4段階の資料としてその他安城市中狭間遺跡溝状遺構がある。

4段階をもって終焉ある



第37図　高杯Aの杯部上段角度



口稜比＝$\frac{稜径}{口径}\times100$

第38図　高杯Aの口稜比分布

いは激減する形式としては甕A_1・甕Bの多く、高杯B_1器台A_2・壷A_2・壷C_3・壷Bの多く、鉢A_3がある。

廻間II式期

廻間遺跡5期新相、古相、6期新相、古相をもって1～4段階を設定する。他の遺跡では良好な一括資料はほとんど認められない。

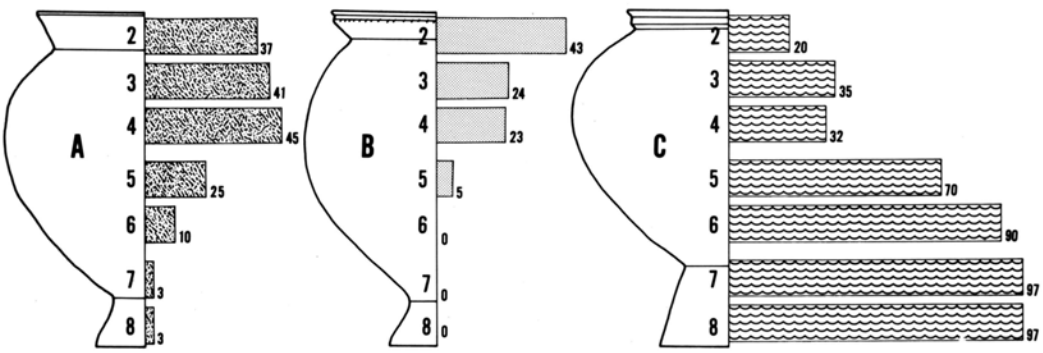
廻間II式期の最大の特色はS字甕B類の登場と甕の比率が50%以上を占め、その内9割以上がS字甕となる点である。甕すなわちS字甕といえる時代が到来した。また小型器台Bの誕生、小型鉢Bの盛行、大型壷の消失を加えることができる。形態の内彎志向が形骸化し、より小型化が基調となる。

1段階　1段階

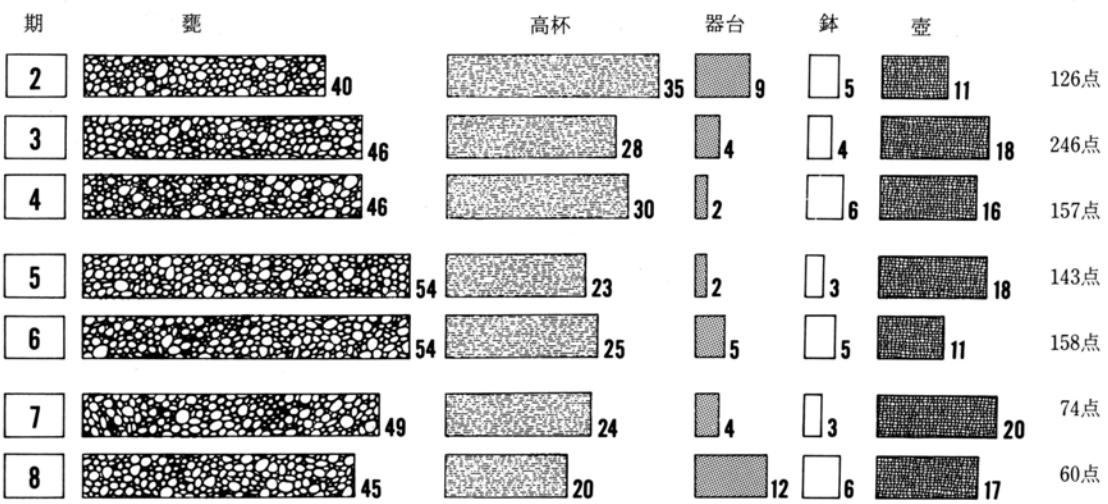
廻間遺跡 SB59、SB49に代表される。その他の一宮市平松遺跡SK01がある。

S字甕B類古・器台B、壷A_3、壷C_4（短頸ヒサゴ壷）の出現に特色づけられる。

甕Bはほとんど終焉し、甕Aは激減する。変ってS字甕が突如70%以上を占めるまで急



第39図　甕の比率



第40図　器種構成比率

増する。S字甕A類新が残存し、B類古が出現する。体部は球形を呈し、肩の張りが強調される。

高杯A_2は相対的に減少し（30%台から20%台へ）口縁部の細部彎曲調整は消失、幅広い斜面のみを留める形状となる。高杯BはB_2に限定され、その中心は口径15cm以下の小型高杯に移行する。脚部に若干の屈曲部が認められるようになる。高杯Cは脚底径が口径を大きく凌駕する形態が出現しその主体となる。

器台は小型器台B_1・B_3が参入、器台Aは小型品が残存し、やや器種が多様化する。

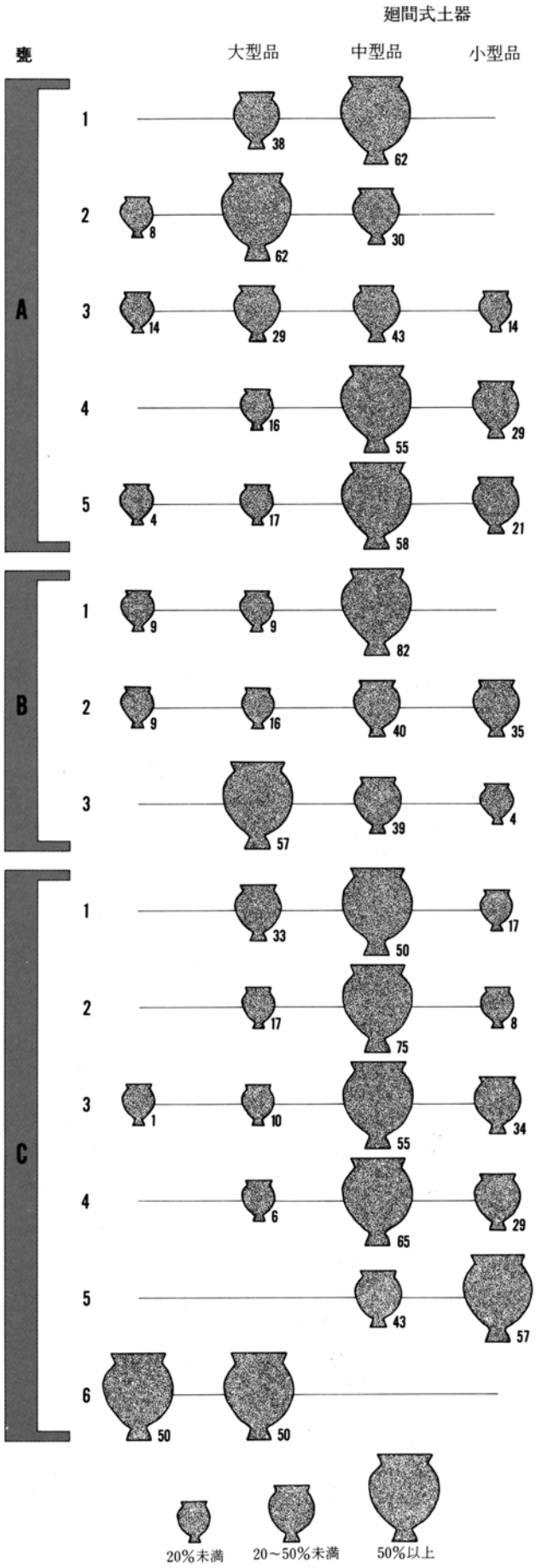
鉢は急速に小型化に向かい、鉢B_1は口縁部を肥厚させ、段をもつ形状に変化する。ミガキ調整が主体をなす。

壷A_2は有段口縁状を呈するA_3に移行すると同時にパレス文様は波線文が大きく強調され、羽状文は単純化する。壷Cは口頸が急速に縮少し、ヒサゴ壷はC_3から口頸部が縮少し、体部が大きいC_4形式へ変化する。

2段階

廻間遺跡 SZ02の良好な一括資料をもって標式とする。その他SB33を加えることができる。

甕はこの段階をもって甕Aの各形式が一斉に姿を消し、3段階以降A_4が残存するのみとなる。S字甕はA類が消失し、B類古に統合される。



第41図　甕の口径分類（%）

高杯A_2は杯部に2つの形状が見られるようになる。内彎志向を残すものと、直線化を志向するものである。以降この2者が高杯Aに併存する。脚部は以前として内彎を留めた形状が主流である。高杯A_2、A_3を小型化した形状のものが散見できるようになる。また高杯A_3に波線文を加えた文様を有するものも見られるようになる。高杯B・Cに加飾性が見られる。

鉢A類、内彎細頸壺C_2は2段階をもって完全に消失したと考えることができる。

3段階　3段階

廻間遺跡 SB60の良好な一括資料をもって設定する。その他 SB50が含まれる。

甕は、S字甕の占める割合が90%以上に達し、甕A（く字甕）はほとんど見られなくなる。甕の画一化が完成し、S字甕一色となる。甕A_4はわずかに残存するも小型品が主流となる。S字甕はB類中に変化し、体部が球形から肩の張りが強調され、体部最大径は上位に移行する。外面のヨコハケは頸部から完全に離脱し下降する。内面調整は指ナデとなり、頸部内面にはハケメの他、ヘラナデ（ナデb）に置換する資料が散見できる。台部は若干開く傾向が見られる。

高杯A_2は内彎脚がわずかに残存する形状になり、杯部の傾斜は最も強くなる。小型品に外反脚に移行した高杯A_4が出現し、しだいに主体的な形状となる。透孔は2段3方向6穿孔が出現し、穿孔数の増加が認められる(高杯A_4の一要素)。高杯の杯部口縁端部は幅の狭い面をもつのみのものが存在するようになる。高杯A_3は多条沈線文を施す文様帯から段が喪失し、単に沈線文による区分に変化する。

鉢は小型の直口鉢の系譜を引くB_1はこの段階をもって終焉し、前段階まで続く鉢Aが消失、小型鉢B_2、B_3が出現する。

壺A_3は形骸化が進行し、口縁部の擬凹線文が減少、端部の拡張も縮少する。体部の調整はナデ・ミガキ手法が省略される傾向が著しく、ハケメをそのまま残す場合が認められる。波線文は大型化し、線描の赤彩は繊細さを欠き幅広く粗雑に描かれる。壺Cは体部が大きく、小さな口頸部を製作する形状に変化する。

4段階　4段階

廻間遺跡 SK30、SB55をもって代表させる。

甕Aはほとんど見られない。S字甕B類は中・新段階が併存する。口縁端部の面は不明瞭で、肩部の張りは最も強くなりその特色はC類へと引き継がれる。

高杯はA_2が消失し、変って外反脚をもつ高杯A_4が盛行する。その脚部の形状は若干柱状を残しつつゆるやかに外反、あるいはわずかな屈曲点を残すものが多い。内面に多条沈線文を施すA_3は4段階をもって完全に消失する。高杯B_2は小型品（B_{2b}）のみとなり、脚部はただちに屈曲して大きくより扁平状に開く形状を呈するようになる。

壺は4段階をもって壺類の中で残存してきた壺Cもほとんど見られなくなり、Ⅰ・Ⅱ式期での壺の代表形式はことごとく消失する結果となる。Ⅱ式期後半代に終焉あるいは激減する形式は甕C_3・高杯A_2・A_3・器台A・壺A・壺C_1・C_4・鉢B_1がある。なお元屋敷遺跡

竪穴状遺構出土遺物の主体はII式期後半～III式期前半に置くことができよう。

廻間III式期

廻間遺跡7期・8期そして稲沢市塔の越遺跡SX01、名古屋市若葉通遺跡SB02をもって1～4段階を設定する。廻間III式期は濃尾平野の個性的な器種の多くが終焉し、甕の占める割合が再び50%を下まわり減少傾向がみられる。変って新たに参入した壷類・小型鉢・器台は精製化を伴い盛行する。壷の画期と小型品の精製化が主要な変化である。

1段階 **1段階**

廻間遺跡SB06・SB45上層資料をもって代表させることができる。SB06とSB45上層は古・新相の関係が見られる。他の遺跡に明瞭な資料が存在しない。

甕は全体の器種構成比率に占める割合が5割を下まわる。甕C（S字甕）はB類が残存するもののC類が出現し主体となる。C類古段階の資料は頸部調整が必ず行われ、体部から口縁部へは鋭く屈折させる状況が生み出されてくる。C_5、C_6が出現する。C_6は山陰系の口縁部をS字甕に合体させたもので大型品に散見できる。一方C_5は口縁部第2段の拡張に特色があり、小型品を中心に製作される。S字甕に初めて新しい要素を付加させた視点は注目される所である。

高杯はその全体に占める比率が20%を確保するものの減少化は決定的となる。高杯A_4は脚部が大きくゆるやかに開く形状に変化する。高杯B_2は器壁が薄く精製化が認められる。高杯Cは杯部の深さが一気に減少し、扁平な杯部に大きく外反する脚部を有する形状が出現し、それまで多々認められていた杯・脚部の加飾はほとんど見られなくなる。

器台はA類が消失し、B_1、B_3により構成される。杯部は浅くなるものの、脚部には屈曲部がわずかに残存する。鉢は全体に精製化する。

壷A_3は各部の文様がほとんど欠落し、体部のパレス文様は形骸化し、特に不連続波線文及び横線文が省略され、赤彩のみによる波線文の表現が見られるようになる。この段階をもって壷A（パレス壷）は終焉する。壷F・壷E・壷Dが出現し定量を占めるにいたる。壷F（二重口縁壷）はII式後半代から搬入してくる可能性が強いが、加飾性に富む受容された壷Fとして定着するのはこの段階と考えられる。口縁端部は上方に肥厚したはねあげ口縁で、棒状浮文・沈線文を施すものが多い。壷Eは柳ヶ坪型壷で口縁部は大きく拡張した形状を呈する。羽状文は複合し、頸部に凸帯を有する場合が多い。

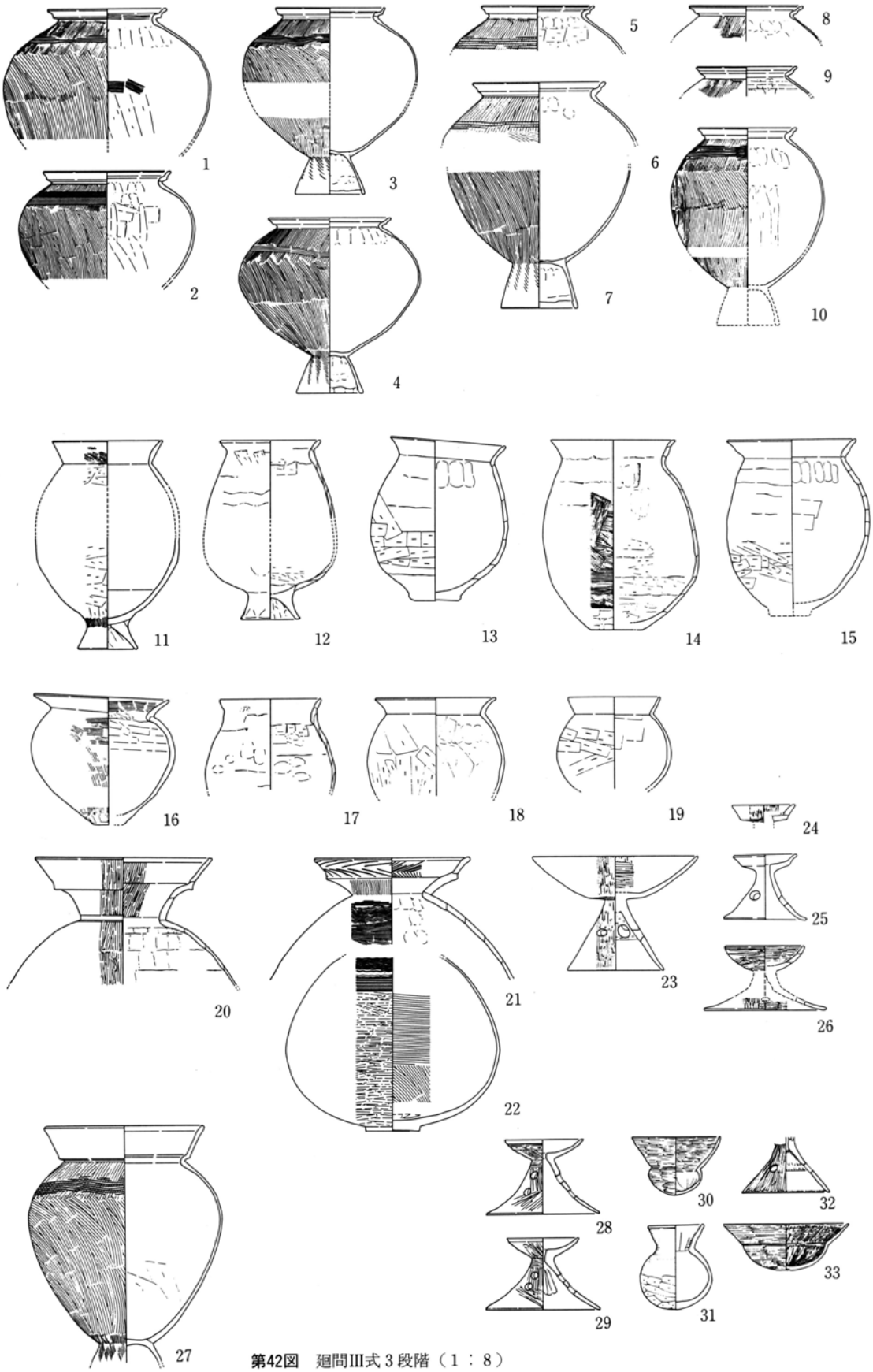
2段階 **2段階**

廻間遺跡SB12上層・SB56の良好な資料をもって設定する。

甕Cは全てS字甕C類古の典型的な姿を示し、肩の張りが強く、八字状を呈する台部をもつ。甕C_6は口縁部の立ち上がりが直立する。

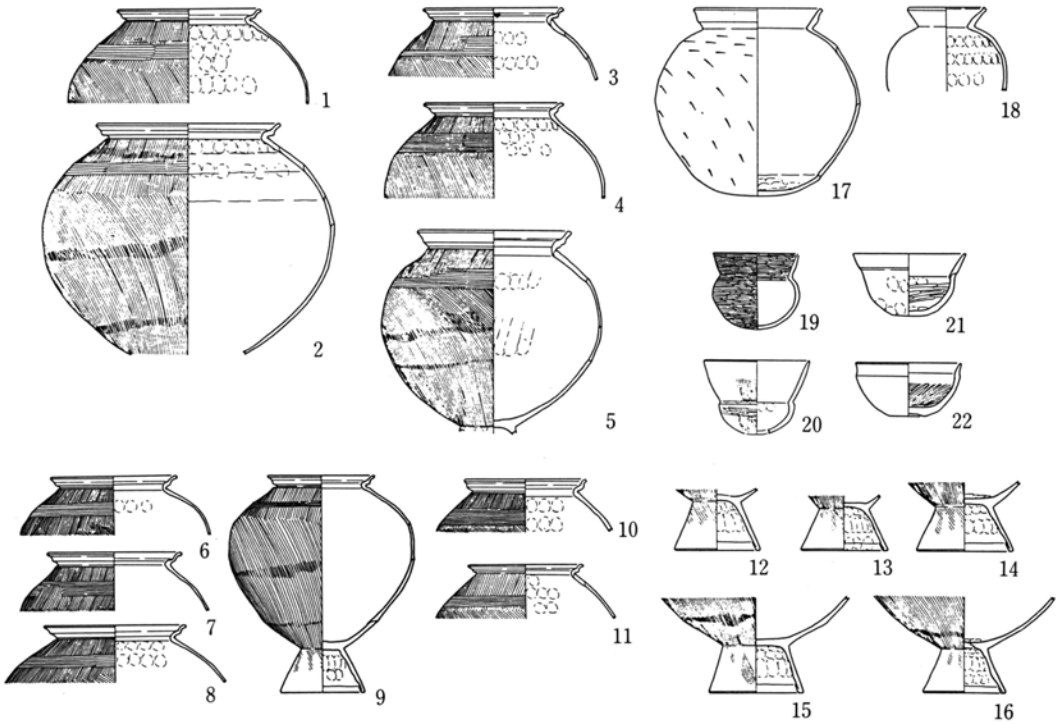
高杯は杯部端部が鋭く、面取り技法は消失するものが多い。脚部は杯部との接合面からただちに大きく外反する形状に統一される。

器台は一つの画期をなす段階である。脚部の屈曲を残すB_1が消失し、代って直線的な口縁部と接合部からただちに大きく外反する脚部をもつ形態に変化する。また新たに外反口

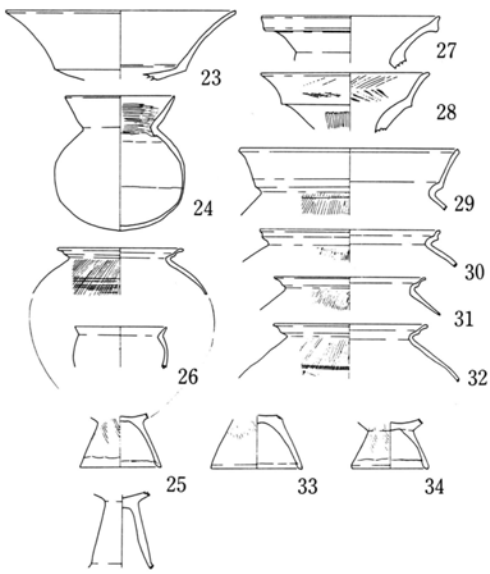


第42図　廻間Ⅲ式３段階（１：８）
（塔の越遺跡 SX01-1～26、SX02-27　定納遺跡-28・29）
（朝日遺跡63Ｂ区ＳＢ02）

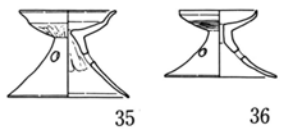
宮之脇遺跡２号住居



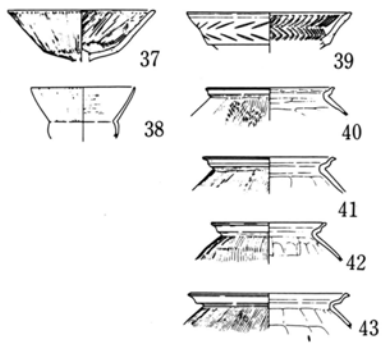
若葉通遺跡 SB02



朝日遺跡

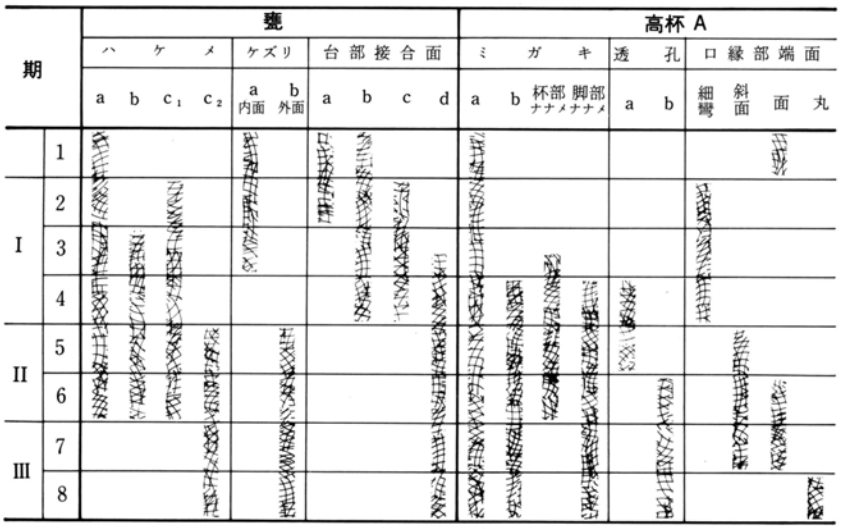


朝日遺跡63B SZ01上層



第43図　廻間Ⅲ式４段階（１：８）（37～43は除く）
朝日遺跡35・36『朝日遺跡群第１次調査報告』1975愛知県教育委員会

第5表　技法の消長



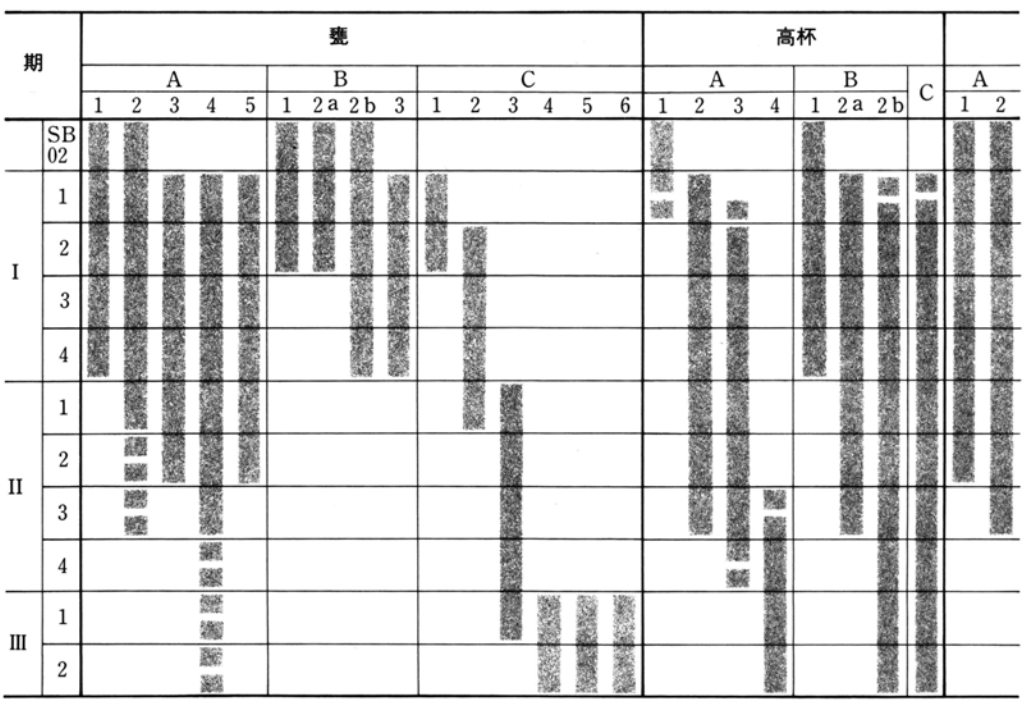
ハケメa—ハケメ
b—板状工具
C_1-S字甕用ハケメ密度3・4本
C_2-S字甕用ハケメ密度5～7本

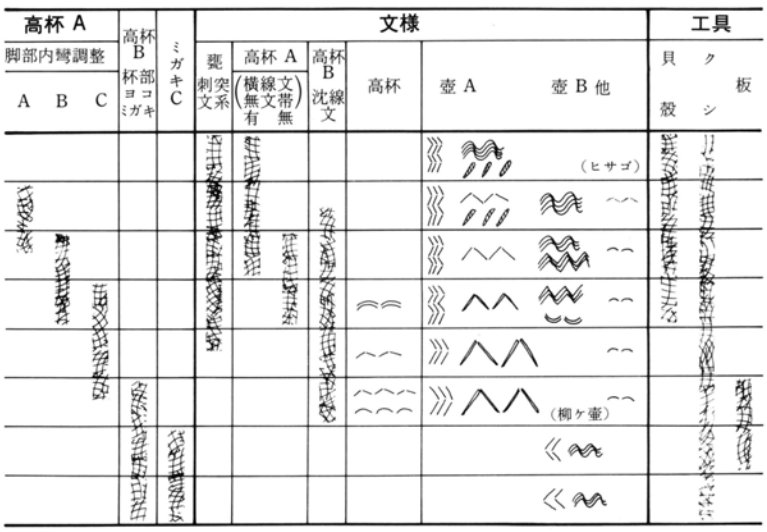
ケズリa—ケズリ
b—掻壁

ミガキa—ヘラミガキ
b—幅広・粗雑なミガキ

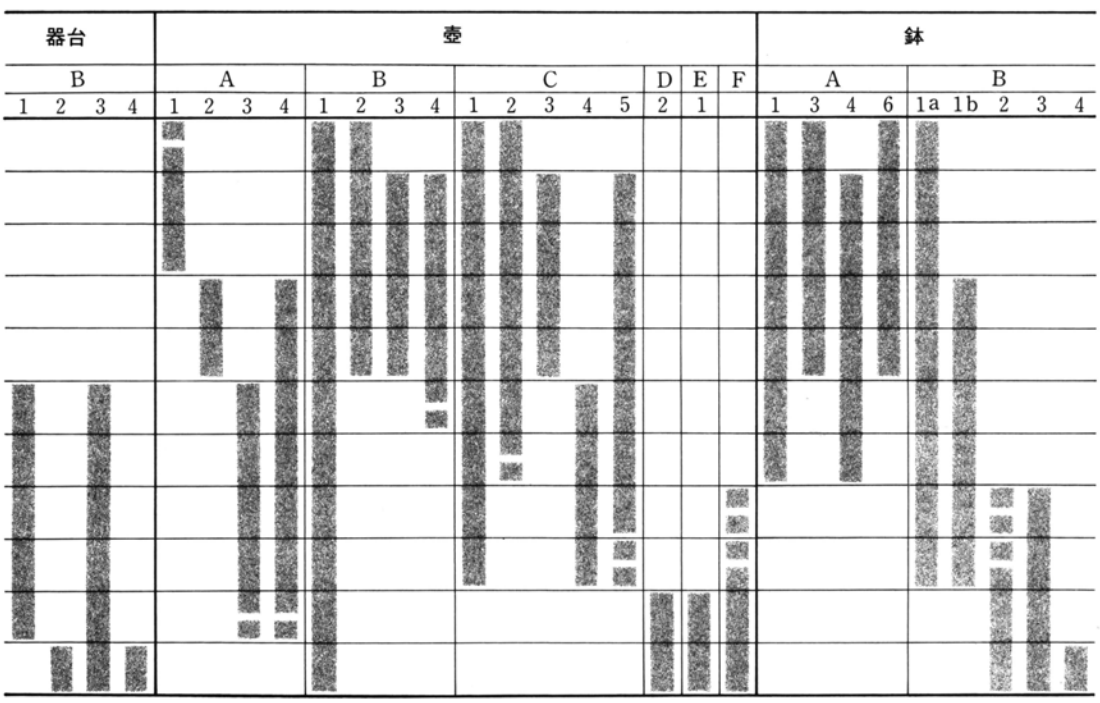
透孔a—2孔1組4穿孔
b—3方向2段6穿孔

第6表　形式の消長





技法について58～61頁参照



縁をもつ器台B_4が参入する。このような小型器台の多様化とさらに量の増大が2段階の特色といえよう。器種構成比率の上で12%と突如10%の枠を超える。鼓型器台に系譜をおくとされるX型の小型器台が搬入される。

鉢も同様に小型鉢の器種が豊富に見られるようになる。丸底化が基調となり、前段階から見られるミガキC（細いヨコ方向のミガキ）が盛行する。

壷F（二重口縁壷）は、はねあげ口縁が消失し、単純化する。壷E_1は有段口縁技法をもち、徐々に口縁部の外反が強く、また幅が拡大する傾向を示す。羽状文はより強調され単純化する。他の器種にはほとんど文様を施すことが見られないのに比べ、壷E、あるいはFに加飾性が認められる点は注目すべき所である。

3段階　3段階

塔の越遺跡 SX01の良好な一括資料及び岩倉城下層 SX01[30]により設定する。

甕はS字甕C類新段階が主体を占める。塔の越遺跡ではく字甕が多く出土し、平底を呈する。外面はハケメが採用されずケズリb（掻壁）が多用される。製作がきわめて粗くはたして本段階を代表する型式であるのか疑問が残る。むしろ精製化する球形体部の丸底甕の出現を重視しておきたい。

高杯A_4は激減し散見できるのみとなる。杯部は著しく浅くなり、脚部は直線化する。高杯B_2は器壁の薄さが消失し、再び厚くなる傾向を示す。脚部はより大きく、杯部から柱状部を残すもののただちに大きく開くものが見られる。

器台はますます多様化し、やや長大化する傾向を示すX型を呈する器台が出現し、器台B_4は口縁部を強くヨコナデし外反させる形状に変化する。またB_2は口縁部の直線化が崩れ、徐々に内彎する形状になる。脚部は全体に大きく外反し、器高の低化が基調となる。

鉢B類は丸底化し、「小型丸底土器」が確実に共伴してくるのも3段階からである。

壷は柳ケ坪型壷は二重口縁化し、壷E_1からE_2へ変化する。壷Fは口頸部が大きく外反する傾向が見られるようになる。

4段階　4段階

宮之脇遺跡2号住（古相）と若葉通遺跡SB02（新相）をもって代表させ、将来2分割できるであろう。甕はS字甕C類新段階で占められ、口縁部は肥厚し、D類古段階と近似するまでになる。体部のヨコハケは施され器壁の薄さは維持される。肩の張りは弱くやや長胴化する。台部は底径が大きく端部が外反する形状のものも見られる。高杯A_4は器高が低く脚部は大きく直線的に開く、器台はB_4がより口縁部が大きく発達し、ヨコナデによる外反が口縁部付近のみに施される形状となる。脚部の高さも低くなる。ミガキ手法は低調で、省略するものさえ認められる。器台B_2はやや内彎し、比較的大きな口縁部をもち、端部が上方につまみ上げる形状に変化する。

朝日遺跡63B区 SZ01上層[31]の資料はS字甕は口縁端部を肥厚し、明確な面を保有する。またヨコハケは欠損し、器壁は厚くなる。D類古段階の資料である。高杯は畿内系の屈折脚有段高杯となる。松河戸様式の初段階を示す資料と考えてよいであろう。（第43図）

7）廻間式土器をめぐる問題

併行関係

廻間式土器の併行関係について、まず廻間遺跡の場合を見てみる必要がある。「搬入品」「模倣品」を捜すときわめて少量であるが第44図に示すように約40点を取り出すことができた。

近江型甕

1、2、3、15、25は受口状口縁を有する近江型甕であり、その口縁部の変化の方向は近江地域と同調する動きと理解してよいであろう[32]。廻間Ⅰ式をもって消失する甕B（受口系甕）とは口縁部の形状・変化・技法において明確に区分できる。4、5、6及び8、12、16～18、20～27、30～33は畿内系あるいはその影響において生み出されたものとして一括する。4は小型の軽量甕で口縁端部は上方に肥厚し庄内型甕を機械的に模倣した可能性が考えられる（外面調整はハケメ）。5、6は畿内系の高杯で杯部は大きく外反し、脚部は明瞭な屈折部をもち、庄内期の高杯でもより古い様相を留めているものと理解してよいであろう。8、12はタタキ手法をもつ台付甕で、その淵源地は不明である。廻間6～7期にかけて畿内系土器が比較的多く参入する。これはおそらく廻間Ⅲ式にいたる胎動として畿内の土器様式の影響を強く受けはじめたことを表示しているものと考えることができる。16は庄内型甕口縁部で、17、18、22、23、26は所謂「甕C」として纒向遺跡で一括されたものである[33]。26の資料は口縁部が内彎し端部は面の延長線上に肥厚するもので、他の資料に比べより新しい形状のものであろう[34]。6期新相（Ⅱ式4段階）以降のものは寺沢の0式布留形甕[35]の範疇で理解してよいものである。高杯21はやはり庄内期の畿内に散見できるものであり、壷27は加飾した二重口縁壷である。以上の諸点から6・7期は総じて纒向遺跡3式期の枠内で理解することができるであろう。そしてその早い段階から「布留傾向甕」が極少量ながら認められる点は留意していく必要がある。典型的な庄内型甕・布留型甕ではない甕が搬入の対象となる。

布留傾向

14、19、20、28は杯部に透孔をもつ高杯でその淵源地は不明であるが、一定の量と拡がりを東海地域の中で見ることができる。その他9、10、11、13は三河以東の技法を留めるものである。29は鼓型器台。

畿内との併行関係

その他、濃尾平野各地の遺跡での共伴関係を見てゆくと朝日遺跡61D区 SD03[36]では廻間Ⅰ式2段階を中心とする資料と畿内系の高杯（纒向Ⅰ式[37]）が共伴する。岩倉城下層SX01で畿内系の有段鉢がS字甕C類新段階と共伴し[38]、朝日遺跡 SK01上層[39]ではS字甕C類古段階と布留型甕が共伴している。廻間Ⅲ式前半代と布留Ⅰ式（寺沢編年）は大きく重複する見通しがたつであろう。

次に畿内地域での廻間式土器を概観しておく必要がある。まず布留遺跡山口池Ⅳ層[40]資料の中に廻間Ⅰ式2段階の高杯Aが見られる。美園遺跡 DSX-304[41]では高杯Aの脚部と推定される資料があり、Ⅰ式4段階に併行するものであろう。崇禅寺遺跡Ⅱ区土器溜[42]ではS字甕B類中段階・小型器台B_1・小型高杯Cが見られ良好な資料である。廻間Ⅱ式3段階を中心とする。布留遺跡山口池第Ⅲ層においてS字甕B類中段階の資料が出土している。そ

の他平城宮下層 SD6030[43]では小型高杯C及びS字甕C類新が共伴し、廻間III式3段階と併行するであろう。また垂水南遺跡[44]からはS字甕C類新～D類の資料が多く見られ、柳ケ坪型壺等も散見できる。D10区大溝上層の資料は松河戸様式初相を中心とするようである。

以上を綜合すると庄内型甕[45]の時代は廻間I式3段階から廻間II式までであり、布留型甕の時代は廻間III式から松河戸様式にかけてとすることができる。

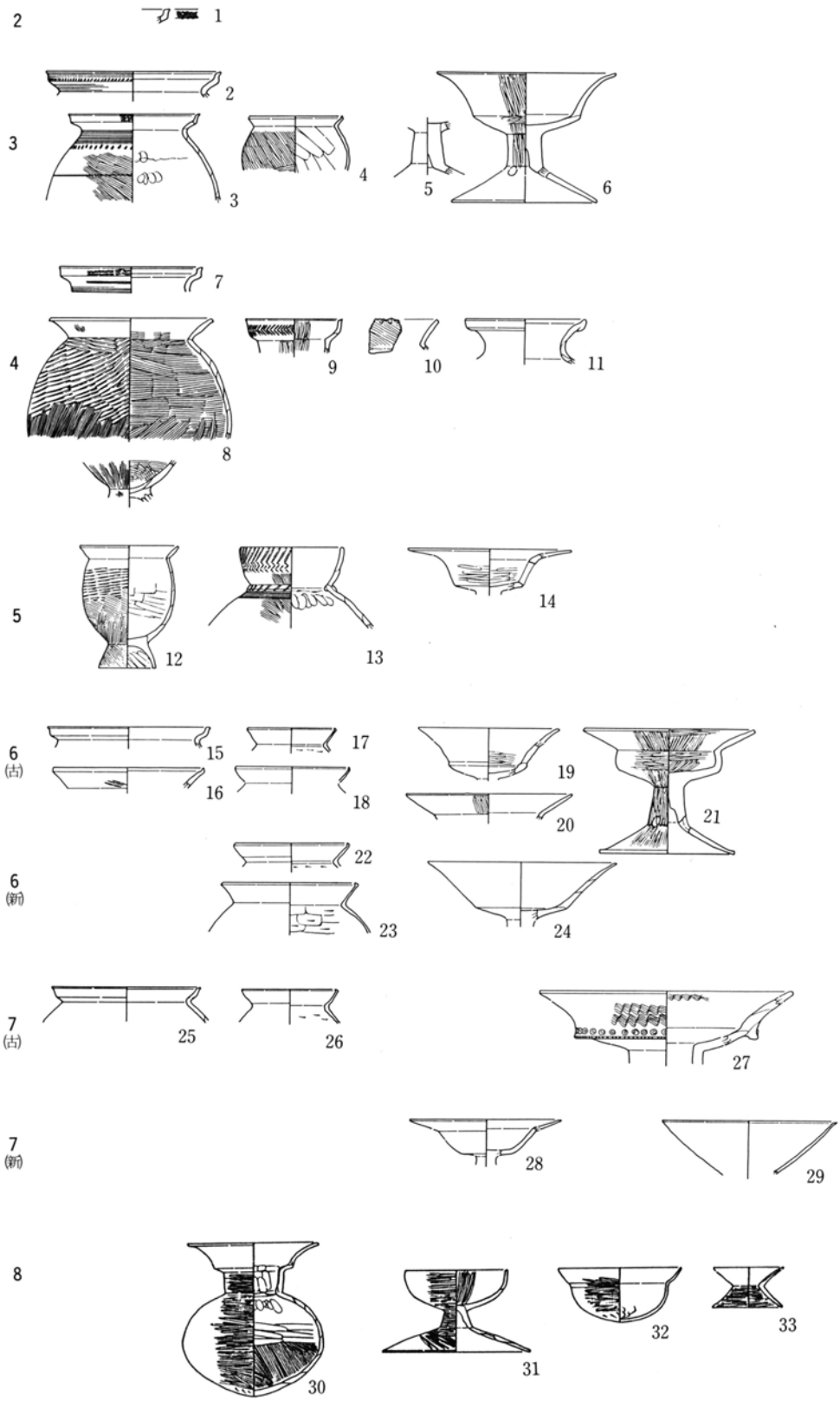
東海各地

伊勢湾をめぐる東海各地域を一つの大様式圏と理解する見方は根づよく存在する。鈴木が見通した「欠山様式の地域性」[46]をはじめ石黒のいう「欠山期土器群の偏差」[47]等が近年提示された代表的なものであろう。これらの考え方には容認できる点もあるものの、器種の系統的変遷の理解に問題が多い。結論を急げば、東海地域をめぐる古式土師器の様式問題はまず濃尾平野低湿地帯の土器様相を中核として組立てられていく必要がある。そして濃尾平野低湿地帯を中心として、濃尾平野全域、及び伊勢湾沿岸地域を含めて一つのまとまりを形作ることができる。それはおおよそ廻間様式をもって代表されることができるであろう。その領域は、濃尾平野・知多・伊勢・志摩と「古代幡豆」[48]を含めて考えることができる。したがって近江北部と東三河・西遠江地域はまた別の様式を構築してゆく必要があり、その後に各様式間の関係を明確化していくという手続きが重要であると考える。それは例えば器種構成上で最も多くを占める甕をもってしても明らかである。まず、廻間様式ではS字甕の動向が中核をなす。一方北近江（湖北）では受口（状・系）口縁を有する（台付）甕が主体であり、S字甕はあくまで「搬入品」「模倣品」の枠を出ることはなく、少量存在するのみである[49]。東三河・西遠江地域もその主体は広口の台付甕であって、S字甕の受容はC類段階からのようである[50]。なお下伊那地域においても中島式土器における個性的な甕・壺が存在し、ある程度孤立した様式が認められるのである。以上のごとく小地域単位で独自の様式が設定されるのであり、その上で共通する、近似する形式を受容しながらたがいに交流が行われる。したがって、それぞれの地域性をまずは強調しつつ、相互の関係・影響の仕方を改めて取り扱っていくことが必要であろう。

廻間様式圏

さてここで伊勢湾沿岸地域（廻間様式圏内）における良好な資料を追加しておきたい。西三河地域では高木遺跡第1号方形周溝墓[51]出土品は廻間I式1段階を中心とするものであり、山王遺跡出土品[52]はI式2段階の特色を留めている。中狭間遺跡溝状遺構[53]はI式4段階の良好な資料と考えられる。S字甕A類新を含み、小型高杯・ヒサゴ壺・パレス壺等器種も豊富で北陸系の有段甕等と共伴する。なお東三河地域の欠山遺跡第2貝塚溝状遺構出土資料[54]は、その主体をI式3段階におくものと考えてよいであろう。

伊勢地域では、まず草山遺跡SB38上層・SX114[55]が総じてI式1段階の資料であり、中楽山遺跡SB1[56]がこれに続くI式2段階、中楽山遺跡SX1[57]及び地蔵僧遺跡SB26[58]はI式4段階に所属するであろう。お畑遺跡SK1[59]は廻間III式2・3段階に主体をおくものである。



第44図　搬入・模倣品（1：8）

土器の移動

古墳時代初頭の土器とした廻間式土器について、他地域への搬入の仕方を概観しておく必要がある。その前に確認しておかねばならない点は受容された土器の問題である。系譜上は外来系土器（53頁）に所属するもののその実体は「搬入品」「模倣品」と異なりきわめて在地的色彩が強く認められるものであり、土器の定着の過程に新解釈が加えられた在来系土器の一面をもつものである。その受容結果から5つの形態を摘出することができる。まったく新しい形式を他地域の土器から「借用」する場合、従来存在する形式の器種を外来の土器と代替えする、「置換」。その器種を新たに追加する「付加」。2種類以上の要素が一体化する「融合」。受容を「拒否」する場合。廻間式土器ではⅠ式期の鉢A_3は本来的には近江地方からの器種の「借用」。甕Bは「融合」。Ⅲ式期の壷F・E_2は畿内系との「融合」。松河戸様式への高杯の変化は「置換」型。なお畿内系の甕は「拒否」されることになる。

受容

濃尾平野の土器を代表するS字甕の分布を中心にその搬入経路を復原することからはじめたい。特にS字甕A類の分布を手掛りにし、その形状・技法から「搬入品」「模倣品」を重視しておく。第45図に示したものが管見による資料である。A類の分布はこの図から見て明らかのようにその中心は濃尾平野低地部にある[60]。

〈近畿道〉

土器の移動

搬入経路は今の所、伊勢を通り伊賀そして奈良盆地へ入り、その後大和川を下りかつて大阪に存在した「河内湖」に入る。やがて最大の重要拠点、西摂地域の淀川河口部の遺跡群に到達する[61]。その後、瀬戸内へ向かうと言う主要経路が推定されよう。近畿地域においてまとまったS字甕A類の出土が見られる遺跡は、現状においても纒向遺跡のみである。しかしその後のB・C類を含めて考えてみると、まず宇陀地方の野山遺跡[62]が知られる。廻間式土器の多くの器種が散見でき興味深い遺跡である。また搬入経路を考える上でも重要な位置を占める。摂津では垂水南遺跡・崇禅寺遺跡が代表的で比較的まとまった資料が見られる。纒向遺跡を中心に北上すれば、布留遺跡・平城宮下層資料が存在し、南下し紀伊地方では鳴神地区遺跡[63]等でS字甕が報告されている。纒向遺跡と北摂地域を結ぶ経路上に今後廻間式土器の増加が保証されるであろう。ところで今一つ留意しておく経路がある。それは伊賀より木津川・淀川を下るコースである。南山背の状況はやや不安定であるが、芝ケ原古墳からはS字甕B類[64]及び、伊勢湾の影響が残る壷等の出土が報告されている。

土器そのものの状況としては多量の搬入品、模倣品により構成され、また器種のほとんど全てが搬入の対象と考えることができる。S字甕・パレス壷・ヒサゴ壷という特色のある器種の他に、器台・く字甕・椀形高杯・小型高杯等が見られる。崇禅寺遺跡ではS字甕の他小型高杯・小型器台が存在し[65]、纒向遺跡では東田南溝中層を中心にS字甕A・B類、高杯A、器台、内彎口縁壷、ヒサゴ壷がみられる[66]。S字甕以外の器種をも同様に搬入されていく姿を垣間見ることができる。その時期は廻間Ⅱ式期と考えて良いようであり、寺沢編年庄内2式期を中心に廻間式土器が多く畿内へ参入し、以降布留式期にいたる間、ほぼ継続的に土器が搬入されると推測できる。（99頁参照）

以上まとめると、近畿道へは伊勢を経由して交流が廻間II式期前半（寺沢編年庄内２式期）に本格的に開始され、その多くは搬入品・模倣品で占められる。受容され定着を志向する形式はほとんど見られない。多量の搬入品は直接的な人の動きを強く主調する要因となるであろう。

〈北陸道〉

関ヶ原の狭い谷間をぬけ滋賀県湖北地方から北陸地方へ向かう経路が基本である。

北陸地域では報告例が増加している石川県北加賀を中心に見てみると、Ｓ字甕Ａ類は２遺跡で認められる。その他Ｂ類古を含めると、田嶋明人による漆町編年[67]による漆５群土器の中にこれらの土器の多くが含まれることになる。金沢市近岡ナカシマ２号溝上層ではＡ類新（小型品）が、松寺遺跡Ｂ２号土坑ではＳ字甕Ｂ類古、南新保Ｄ遺跡Ｐ－５４出土のパレス壷は廻間遺跡の壷A_4類に相当する[68]。これらは総じて廻間５期（II式１～２段階）の資料とすることができる。漆５群と廻間５期はほぼ併行すると理解してよいであろう。

漆５群土器

器種についても多くの種類が散見でき、「白江式の段階に波及してくる外来系土器ないしはその影響を受けたものは、その種類、量ともに多い」[69]という田嶋の指摘があるようにこの時期の土器の交流は注目する必要がある。Ｓ字甕、受口系甕は客体でありその主体は搬入品・模倣品であろう。く字甕は漆町「甕Ｇ」を中心に影響を与えたのではないかと思われるが、台付甕の有無を考慮すると不安が残る（付加あるいは融合）。高杯及び器台はその多くを「東海系」として考えることができ、その淵源地を廻間様式にあてることが可能かと思われる。高杯は置換、器台は借用現象であろう。またパレス壷も受容され独自の変化を遂げる（融合）。以上白江式期を中心にその多くの器種が参入し、廻間様式と密接な関係を留めている。そして漆７・８群土器以降、畿内系の土器が主体を占める段階までその状況は残存するようである。

湖北地方の状況はやや不鮮明ではあるが、Ｓ字甕Ａ類が多々散見するもそれはあくまで客体としてであり、量的にも少量に留まる。しかしながら高杯・器台はきわめて類似しており、濃尾平野との関係が明白である。長浜市十里町遺跡１号方形周溝墓[70]出土品（模倣品）はほぼ廻間Ｉ式２段階を中心とする資料をもって構成されている。山中様式から連続する受口系甕・鉢の濃尾地域での受容を考慮すれば、他の地域より逸早く、互いに器種を互換しあう状況が存在しているようである。

〈東山道〉

東山道に沿って関東北部（毛野地域）地域にいたる路は、最も重要なルートとして位置づけられる。Ｓ字甕Ａ類はこのルート上に点在し、また後続するＢ類も散見できる。

まず伊那谷であるが、下伊那地方は飯田市恒川遺跡[71]、上郷町高松原遺跡[72]でＡ類新が出土しており、その他小型高杯・パレス壷・ヒサゴ壷・高杯Ａ等多くの器種が見られる。酒屋前遺跡７号住居[73]から廻間Ｉ式１段階の鉢・器台が出土し、在来系土器群と共伴する。これらの資料が座光寺原式から中島式土器への変換期にあたるものだとすれば[74]廻間式土器の成立と微妙に同調する現象であるのかもしれない。恒川遺跡ＧＢＯ16号住居[75]が廻間II

中島式土器

式前半期と併行する資料であり、恒川Ⅶ・Ⅷ期は廻間Ⅲ式期と考えることができるようである。16号住居以降「東海系」高杯・壷・器台類が受容され定着する。甕はく字甕が融合する可能性を残すものの他の器種は大旨借用現象と考えることができる地域である。

塩尻市上木戸遺跡[76]では外来系土器群の約8割を「濃尾平野系土器」によって占められる状況が報告されている。上木戸遺跡2号溝の資料は廻間Ⅰ式4段階に併行するきわめて重要な資料である。甲斐地域では韮崎市でS字甕A類が出土し[77]、その初源においては諏訪を経由した交流を想定できよう。ところで甲斐では京原式期になるとS字甕を含めた「東海系土器群が受容される」という指摘[78]がある。これらは廻間Ⅲ式期に見られる東海道の動向と関連づけて考えることができるのであり、Ⅱ式期初頭の土器の動きとは一応区別しておく必要があろう。

毛野地域ではS字甕・器台・高杯・壷等多くの器種が「東海系土器」に変化するようだが、その多くはS字甕の変化[79]に特色づけられるように独自の変還を示すものである。(受容土器)したがって問題はその影響をうけた段階の資料といえよう。高崎市熊野堂遺跡の9号住居[80]に見られる小型器台・高杯・パレス壷・ヒサゴ壷・台付甕は廻間Ⅱ式前半期の特色を残すものであり、これらが当地域への交流の初期の在り方を留めたものであるとすれば、廻間Ⅱ式期の早い段階にはすでに東山道ルートを経由して北関東の一部に廻間様式は波及していたと理解してよいであろう。

〈東海道〉

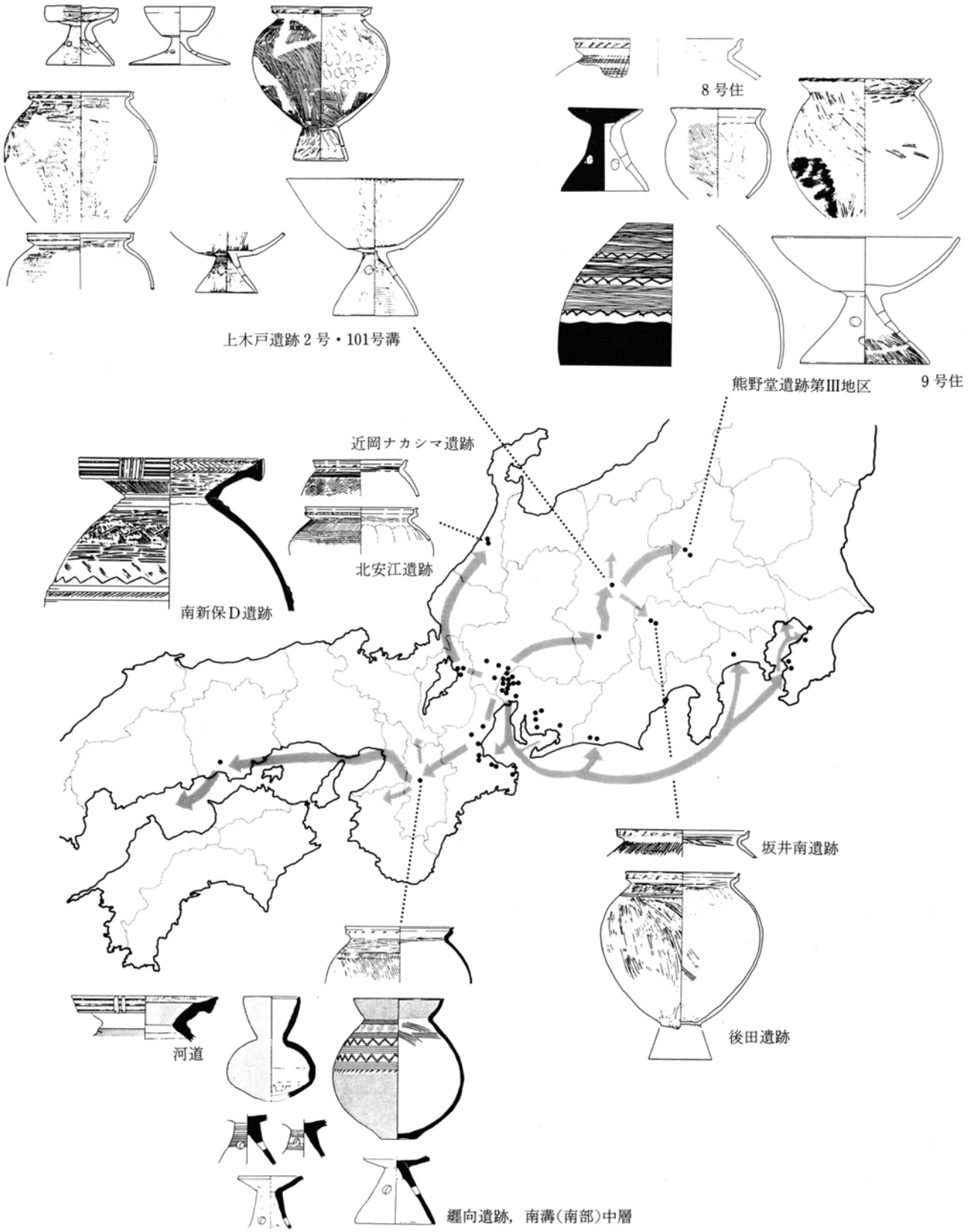
海上ルートを主要な経路とすべきである。まず注目される地域は上総地域である。S字甕A類が近年増加しつつあり、廻間Ⅰ式段階での交流が想定できる。その分布の中心は木更津・君津・富津にかけての地区と考えられる[81]。また同様に神奈川県相模川流域においても比田井[82]が指摘するように山中期からの交流があり、廻間Ⅰ式期においても同様な状況を見せつつある。しかしこれらの地域には土器型式としての定着は見られず、一部の器種(高杯を中心)の借用付加現象が認められるにすぎない。また「東海系土器」は畿内系土器を伴った搬入品・模倣品が主体を占めるようである[83]。東海道沿線に廻間式土器が多量に

大廓式土器

しかも決定的に影響をあたえるのは駿河「大廓式土器」の段階を[84]またねばならない。その嚆矢は千代南原遺跡1号土坑の資料にある[85]。一括資料の中で外来系土器の多くを廻間式土器に淵源をもとめることが可能な器種によって構成されている。その特色から廻間Ⅱ式後半代に中心を置くものと考えることができる。以降S字甕・高杯は独自な変化を遂げ、椀形高杯も借用し定着する。壷においては個性的であり、独自の形態の創出が見られる。これらは器種の拡がりの中心を廻間Ⅲ式期に置くきわめて重要な土器様式と評価したい。

以上各地域の動向を概観してきたが、ここで総括しておきたい。

近畿道では廻間Ⅱ式期をもって廻間式土器が搬入・模倣されはじめる。北陸道ではやはりⅡ式期をもって交流し、高杯・器台は受容され定着する。東山道ではⅡ式期にすでに毛野地域へ搬入され、と同時に様式を構成する器種の多くが受容され定着する。一方東海道では廻間Ⅰ式期にすでに相模・上総と交渉が見られる。しかしながら遠江・駿河・西相模



第45図　Ｓ字甕Ａ類の分布

第1次拡散 に広く廻間様式が影響を与えはじめるのはII式期後半代であり、III式期にいたり広く定着する。廻間式土器の動きはII式期初頭に最大の画期が見られ、その後II式期末～III式期前半に再び拡散が開始される。前者を第1次拡散期、後者を第2次拡散期としておくことにしよう[86]。

第7表 編年対照表

廻間遺跡	濃尾平野		濃尾平野基準資料	尾張		畿内		北陸	
	赤塚			宮腰		石野・関川	寺沢	田嶋	
1			瑞穂4次SB02 高蔵C区第3層	欠山	3				
2	廻間I式	1	仁所野2号 高蔵D区1層		4	纒向1	庄内0	月影	漆町3
3		2	能田旭溝 朝日L区SZ01						
		3	勝川 SZ22 廻間 SK51			纒向2	庄内1		漆4
4		4	廻間 SK50						
5	廻間II式	1	廻間 SB59 平松 SK01	元屋敷(古)	5		庄内2	白江	漆5
		2	廻間 SZ02			纒向3			
6		3	廻間 SB60				庄内3		漆6
		4	廻間 SK30		6		布留0		漆7
7	廻間III式	1	廻間 SB06 廻間 SB45上層						
8		2	廻間 SB12上層 廻間 SB56	元屋敷(中)	7	纒向4	布留1		漆8
		3	塔の越 SX01 岩倉城下層 SX01		8				
		4	宮脇2号住 若葉通 SB02				布留2		漆9

尾張―宮腰健司　1987「尾張における欠山式土器とその前後」『欠山式土器とその前後：研究・報告編』
畿内―関川尚功　1976「畿内地方の古式土師器」『纒向』
　　寺沢　薫　1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』
北陸―田嶋明人　1986「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡I』

〔注〕

1）大参義一1968「弥生時代から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論集』ＸＬＶ11

2）受口系甕との区分が不明瞭であるが大参分類のａ類とは基本的に本論のＳ字甕Ａ類を意味するようである。

3）紅村　弘1975・1976「入門講座弥生土器・東海西部」『考古学ジャーナル』112、116、122、125
加納俊介・都築みどり1984「愛知県」『古墳時代土器の研究』古墳時代土器研究会
加納俊介1986「東海地方」『シンポジウム“月影式”土器について報告編』石川考古学研究会シンポジウム実行委員会

4）飯尾恭之1973「尾張における後期弥生式土器の編年的研究（Ｉ）」『古代人』27、28合
杉浦仁美1982「名古屋台地欠山期についての一試論」『南山考古』１

5）小林達雄1975「タイポロジー」『日本の旧石器文化』１

6）集団表象　注５）と同じ。

7）寺沢　薫1980「大和におけるいわゆる第五様式土器の細別と二・三の問題」『六条山遺跡』奈良県文化財調査報告書第34集

8）川添　登1977『デザインとは何か』角川選書41

9）川添　登1985「生活の母胎としての都市」『日本民俗文化大系11』

10）加納俊介1987「用語に関する２・３の問題」『欠山式土器とその前後、研究・報告編』

11）模倣には外形のみを形作る（機械的模倣）ものと、意味（製作手順）を理解して行うもの（洞察的模倣）の２者がある。後者はその後在地的発展をする可能性があるが、前者にはそれが見られない。

12）近江型甕の特色である受口状口縁に淵源を求めるものの、その形状・変化の方向・台付甕等に明確な違いが見られる。この種の台付甕を受口系甕と一括し仮称する。湖北・西濃地方の甕の研究が進めば再検討が必要となろう。

13）以前「屈曲部調整」として報告した。屈曲部は複数存在し、やや煩雑であるため、「頸部」という一般用言を採用した。
赤塚次郎1986「Ｓ字甕覚書’85」『年報　昭和60年度』㈶愛知県埋蔵文化財センター

14）森勇一氏御教示。なお施文法は刺突というより弧状押引であるという指摘をいただいた。

15）貝殻刺突による連弧文が向かい合うように施される場合が多い。なおＩ式期前半には不連続波線文が用いられるものがあり、連弧文への定着はＩ式期後半の可能性が高い。

16）高杯A_{1a}は廻間様式直前に誕生する内彎高杯であり（淵源地不明、伊勢か？）、A_{1b}は山中様式通有の高杯から系統的に変化するもので、A_{1b}とA_{1a}が融合することにより高杯A_2が生み出されると仮定しておく。資料の増加をまちたい。

17）パレス壷を取り扱った論考としては浅井和宏1987「パレス・スタイル壷小考」『マージナル』No．７がある。ここで注目したＥ類（文様区分）とは廻間Ｉ・II式期全てを含むことになる。

18）北村和宏1988「柳ヶ坪型壷について」『古代』86号　北村分類のＡ・Ｂ類がここでいうE_1、Ｃ・Ｄ類をE_2にほぼ比定できよう。なお柳ヶ坪型壷の下限はおそらく松河戸様式前半まで残存するであろう。

19）その他底部の木葉痕（注18）、胎土、色調においてE_1は赤褐色を呈し、シャモットを含むものが多く、E_2は褐色を呈する場合が多い。

20）日野幸治1988『塔の越遺跡発掘調査報告書』（II）塔の越遺跡発掘調査団

21）伊藤厚史『若葉通遺跡発掘調査の概要』名古屋市教育委員会1989　報告書掲載品以外に良好な資料が見られる。伊藤氏御教示

22）赤塚次郎1989「東海」『古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』第Ｉ分冊　第25回埋蔵文化財研究集会

23）伊藤秋男・水口富夫1985『高蔵貝塚II　人類学博物館紀要　第７号』

24）服部哲也他1987『瑞穂遺跡　第４次調査の概要』名古屋市教育委員会

25）宮川芳照1983『仁所野遺跡』大口町埋蔵文化財調査報告書第４集

26）注23）に同じ。

27）市橋芳則1987『能田旭遺跡』師勝町埋蔵文化財分布調査概要１

28）丹羽博他1987「朝日遺跡」『年報　昭和61年度』　㈶愛知県埋蔵文化財センター
29）赤塚次郎他1984『勝川』愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査報告書第１集
30）服部信博1990「岩倉城遺跡下層出土の古墳時代前半期の遺構と遺物」『年報　平成元年度』㈶愛知県埋蔵文化財センター
31）石黒立人他1989「朝日遺跡」『年報　昭和63年度』　㈶愛知県埋蔵文化財センター
32）神谷友和氏御教示。
33）関川尚功1979「纒向遺跡の古式土師器」『纒向』
34）端部を丸く肥厚させる資料は存在しない。内面のケズリは全体に屈曲部まで施され、明瞭な稜を留める資料が多い。
35）寺沢　薫1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第49冊
36）宮腰健司1988「朝日遺跡出土の外来系土器について２」『年報　昭和62年度』㈶愛知県埋蔵文化財センター
37）関川尚功氏御教示
38）注30）に同じ。
39）宮腰健司1988「朝日遺跡」『年報　昭和62年度』㈶愛知県埋蔵文化財センター
40）置田雅昭1975「大和における古式土師器の実態」『古代文化』第26巻２号　山口他Ⅳ層（第３図―９）Ⅲ層（第４図―11・12）
置田雅昭1988「古式土師器研究」『天理大学学報』第157 輯
41）渡辺昌宏・井藤暁子他1984『美園』大阪文化財センター（第291図―D261）
42）大野薫他1983『崇禅寺遺跡発掘調査概要・Ⅰ』大阪府教育委員会
43）奈良国立文化財研究所1981『平城宮発掘調査報告Ⅹ』
44）米田文考1983「搬入された土器―摂津・垂水南遺跡を中心として―」『考古学論叢』関西大学
45）井上和人1983「布留式土器の再検討」『奈良国立文化財研究創立30周年記念論文集文化財論叢』
46）鈴木敏則1987「欠山様式とその前後―西遠型」『欠山式土器とその前後　研究・報告編』
47）石黒立人1988「伊勢湾地方と琵琶湖地方、あるいは東西の結節点」『古代』86号。
48）知多半島南端・島嶼部・渥美半島先端・西三河南部。つまり知多湾を巡る沿岸部を古代「ハズ」の領域とすることができる。
49）湖北地方の動向については神谷友和氏・古川　登氏に御教示を賜った。
50）広く定着する段階は廻間Ⅲ式期であろう。
51）川崎みどり1986「西三河」『欠山式土器とその前後』。
52）注51）に同じ。
53）注51）に同じ。
54）小林久彦・贄元洋1986「東三河」『欠山式土器とその前後』
55）松阪市教育委員会1982・83『草山遺跡発掘調査月報』№2、№5
56）三重県教育委員会1973「中楽山遺跡」『昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』
57）注56）に同じ。
58）亀山市教育委員会1978『地蔵僧遺跡発掘調査報告』
59）鳥羽市教育委員会1972『おばたけ遺跡発掘調査報告』第４次
60）現状では一宮市域から稲沢市、そして海部郡に広く分布する。特に津島市周辺から稲沢市にいたる日光川水系は注目される。
61）西摂平野には垂井南遺跡・崇禅寺遺跡等Ｓ字甕を中心とする「東海系土器」の出土が指摘されている。注44）と同じ。
62）奈良県立橿原考古学研究所1987「宇陀地方の遺跡調査」『奈良県遺跡調査概報1986年度』
63）河内一浩氏御教示。
64）近藤義行他1987『芝ヶ原古墳』城陽市埋蔵文化財調査報告書第16集

65）注42）と同じ。35頁第16図162、173。
66）石野博信・関川尚功1976『纒向』
67）田嶋明人1986「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡Ⅰ』
68）石川考古学研究会シンポジウム実行委員会1986『シンポジウム“月影式”土器について』
69）注67）と同じ。
70）森口訓男1988「十里町遺跡」『十里遺跡・鴨田遺跡調査』長洗市埋蔵文化財調査資料第4集
71）小林正春他1986『恒川遺跡群』飯田市教育委員会
72）佐藤甦信他1984『高松原Ⅱ』上郷町教育委員会
73）岡田正彦1972「酒屋前遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―飯田市内その2』長野県教育委員会
74）山下誠一1986「弥生時代後期から古墳時代前期」『恒川遺跡群』飯田市教育委員会
75）注71）と同じ。
76）宇賀神誠司1988「（上木戸遺跡）弥生後期後半の土器について」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2』㈶長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書2
77）山下孝司1989『後田遺跡』韮崎市教育委員会
山下孝司1988『坂井南』韮崎市教育委員会
78）中山誠二1986「甲府盆地における古墳出現期の土器様相」『山梨考古学論集Ⅰ』
79）田口一郎1981「S字状口縁台付甕の分類と編年」『元島名将軍塚古墳』高崎市文化財調査報告書第22集
80）㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団1984『熊野堂遺跡第Ⅲ地区・雨壺遺跡』
81）野口行雄1988『蓮華寺遺跡』㈶君津郡市文化財センター発掘調査報告書第36集
82）比田井克仁1985「外来土器の展開―古墳時代前期の東京を中心として」『古代』第78、79合併号
83）例えば千葉県神門古墳群出土遺物。田中新史御教示。
白井久美子1981「市原市上総国分寺台出土の東海系『有段口縁甕形土器について」『古代』71号
84）加納俊介1981「出土土器の編年的位置」『月の輪遺跡』
湯川悦夫・加納俊介1972「南関東出土の東海系土器とその問題」『小田原考古学研究会会報5』
85）立花　実1987「古墳時代前期の土器」『千代南原遺跡第Ⅳ地点』小田原市文化財調査報告書第22集
86）第2次拡散期は寺沢が提唱する布留O式土器の拡散と同調するものと思われる。
寺沢　薫1987「布留O式土器拡散論」『考古学と地域文化』

付記　本論を執筆するにあたり多くの方々に御教示を賜わった。また資料の実見に際し数々の御配慮を頂いた。記して感謝の意を表します。
田口一郎・石塚久則・白井久美子・岩崎卓也・杉山晋作・田中新史・松本完・車崎正彦・立花実・諏訪間順・大島慎一・田嶋明人・栃木英道・北野博司・出越茂和・小林正春・山下誠一・中山誠二・山下孝司・比田井克仁・鈴木敏則・中嶋郁夫・伊勢野久好・古川　登・関川尚功・寺沢　薫・豊岡卓之・大野　薫・小山田宏一・一瀬和夫・米田敏幸・島崎　東・増田安生・平野吾郎・山田成洋・置田雅昭・小森紀男・古谷　毅・薮下　浩・笹澤　浩・吉田正人・宮腰健司・石黒立人・伊藤厚史・服部哲也・北村和宏・市橋芳則・日野幸治・川崎みどり・贄元　洋・岩野見司・加納俊介・江崎　武・神谷友和・種浦　修・蒲原宏行・丹羽　博・狐塚省蔵・小川貴司・青木一男・伊丹　徹・望月幹夫・立木　修・森　毅　（順不同、敬称略）
なお、S字甕の胎土及び石製品の材質について永草康次氏に御教示を賜った。

2　土器・土器群の形成

前節では主に各々の器種別の動態を中心に見てきたのであるが、ここでは別の角度から廻間様式をとらえ直してみることにしたい。一つはS字甕の変遷とその普及の仕方について。もう一つは各器種を統合するものは何か、加えてその多様性を考えてみる。

1）S字甕とその時代

S字甕を以前分類しておいたが[1]ここでは今一度それを整理しつつ再確認しておく。S字甕の広範囲な広がりと長期間系統的に変化する特色をもって個別器種の単独分類は許されるであろう、廻間式土器の各段階の設定はこのS字甕の分類を基準にして実現できたといっても過言ではない。

規定

S字甕O類

S字甕をO類・A・B・C・D類と5つに大別する。今ここであえてO類を設定する理由は2つある。一つはO類の出現が廻間式土器の初源的現象であるからであり、後述する軽量甕の共鳴現象と理解するからである。今一つは胎土分析の結果からO類を含めたS字甕と他の甕類は異なる胎土を使用しているという点にあり、(48頁)S字甕O類の製作そのものが一つの画期的現象と考えられるからである。O類は濃尾平野に広く存在する受口系台付甕とく字甕を融合して、独特の台付甕技法の発明と選択された「土」の発見により濃尾平野低地部の中で生み出された甕である。O類からD類までをS字状口縁台付甕（S字甕)と規定し、D類から新たに発展した宇田型甕と区分する[2]。S字甕の製作法及びその特色についても改めて記述することはしない。ただ器壁の薄さについてタタキあるいはケズリを推定する場合も見られるようであるが、濃尾平野に残るS字甕の破片をくまなく調査した限り、その痕跡は全く存在しない。もしこれらの手法が認められたとすれば他地域からの搬入と理解してよいであろう。駿河湾・関東に広く分布する一次調整として外面ケズリ手法とは異なり、濃尾平野ではS字甕独特のハケメによる掻壁効果を重視する必要がある。また胎土の特殊性と他の台付甕と異なる独自の台付甕製作技法がこの軽量化を実現させたものと理解している。

普及

廻間Ⅰ～Ⅱ式期にいたる間のS字甕の動行を、特に廃棄されたまとまりのある資料を中心に見ていくことにしよう。

Ⅰ式1段階ではS字甕は他の甕類の中で最もその比率が低く、量的に多いのはむしろ受口系甕(甕B)であった。例えばSB30では受口系甕が多く出土し、S字甕は数点に留まる。一方SB23ではく字甕とS字甕が主体で受口系甕は見られない。総じて受口系甕が甕の主体を占めながら、一部では（住居単位）受口系甕からS字甕を主体的に使用する風潮が認められることは重要である。そのようなものの代表的なものがSB75である。図示できえない少破片を含めるとS字甕O類が甕の主体を占める。

2・3段階では1段階と同様にS字甕を使用する住居と、そうではなくく字甕、受口系甕を多用する人々が併存する。例えばSB01は受口系甕を主体とし、SB10はむしろく字甕を中心とする。SK51もやはりく字甕・受口系甕の使用が重視されS字甕はこれらを凌ぐことはなく第3の甕と位置づけられよう。ところがSZ04ではS字甕の使用が多く、続いてく字甕となる。墳丘墓という使用目的の差を考慮に入れる必要もあろう。

第3の甕

4段階になるとSK50のように明らかに受口系甕が姿を消しはじめ、S字甕の使用が主体的なものとなる。しかしやはりS字甕単一製作へはいたらず、S字甕より他の甕の使用を固執する人々も存在し続けるようである。

このような動向がII式期になると一変し、全ての住居において広くS字甕の製作が定着し、その使用が普及する。1段階ではく字甕と併用する場合が一部残存するようだが、2段階以降になると甕＝S字甕の図式が完成し、全形式内でS字甕の占める割合が5割を超えることになる。またI式期後半でS字甕の法量分化が明確化していくようであるが、II式期になると他形式によって補完されていた使用による甕の法量差が、S字甕内部において必要とされるようになり、ますます分化が進む。

以上をまとめてみるとS字甕はI式期においてはその使用が、住居単位でかなりのバラツキが存在する。S字甕を積極的に多用する人々と、く字甕・受口系甕に固執する人々が併存し、総じてく字甕の盛行と受口系甕の減少が結果的にI式期内の甕の動静となる。こうした甕使用における住居単位の多様性は何に起因しているのであろうか。

まずS字甕自体に問題がある。それは特殊な胎土の使用と、独自の台付甕技法という製作技法全体の問題であり、その習得には一定の時間が必要であろう。そしてまたこうした特殊性から一元的な供給物と見るか、一定の拡がりをもつ小地域的な動向・流行と理解するかという問題が残る。現状では後者の立場をとることにしたい[3)]。

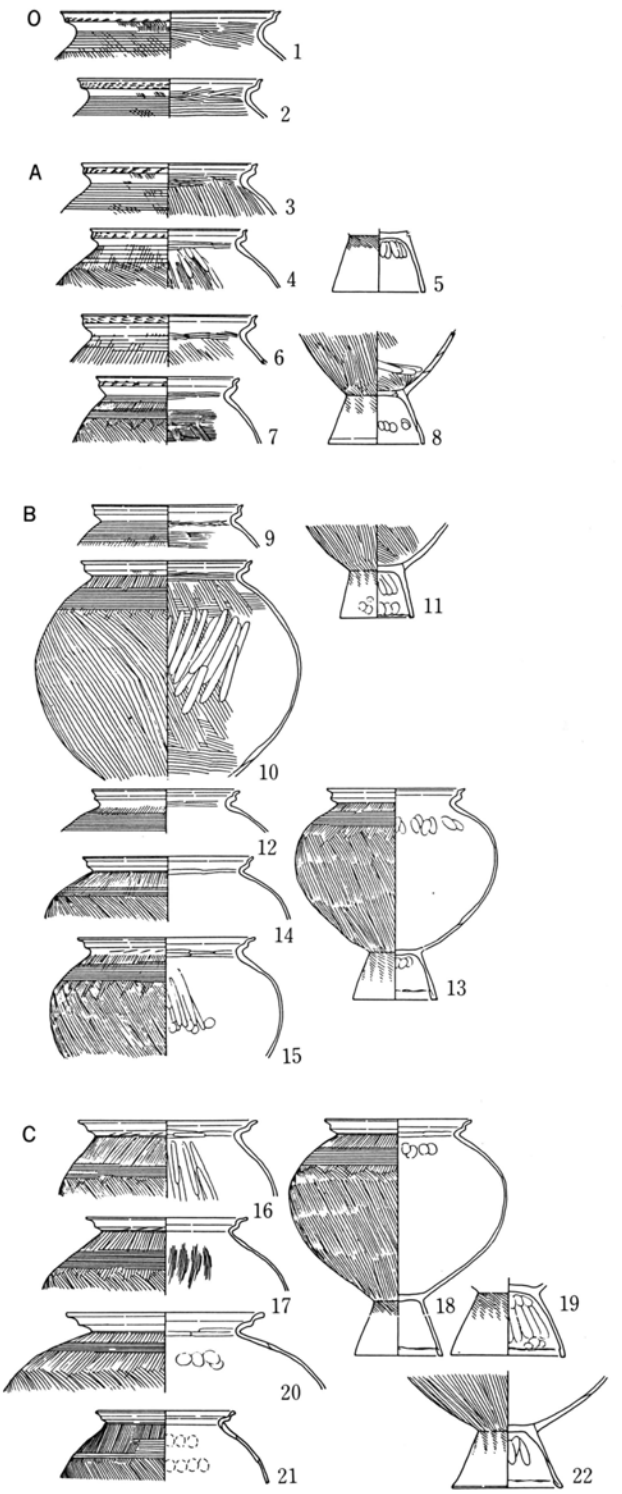
もう一つの問題は受け入れ側の意志がある。新しい文物に対する嫌悪観はいつの世にも存在する。伝統的な甕に対する愛着もあろう。集落を構成する基礎単位毎、その人々の意志がS字甕を受容するその仕方に大きく関係していたであろう。あるいはそうした主張を抱く小集団単位が漂泊し、錯綜していた時代であるのかもしれない。いずれにしろこのような遺跡内部の多様性はII式期になると一変し、甕の画一化が突如完成する。きわめて熱効率の良い軽量甕への傾倒が時代の志向と決定した時、この現象は強権のごとく実施される。それは一つの社会的な出来事性と連動していくものであるかもしれない。結果的にはS字甕B類の完成をまって第1次拡散現象はまきおこることになるのだが。

画一化

分類

口縁部の特色を中心に手法、体部の形状・台部等を考慮しつつO～D類の5つに大きく区分し、さらにその内部を細分する。

O類は廻間I式1・2段階に見られ、A類の登場はI式2段階である。A類古はI式2・3段階に、A類新はI式4段階からII式1段階までであり、体部の球形はII式期前半の特色である。B類の登場は廻間II式であり、古段階はII式1・2。B類中はII式3・4。B類



第46図　S 字甕の分類

新はII式4及びIII式1段階に見られる。C類は廻間III式から出現し、C類古はIII式1・2、C類新はIII式3・4段階に見られる。D類への変化は廻間式土器から松河戸式土器への変化と考えることができる。

O類

口縁部2段は外反し、外面には刺突文を施する。体部から口縁部にかけてゆるやかな曲線を保つ。内外面ハケメ調整を基本とする。

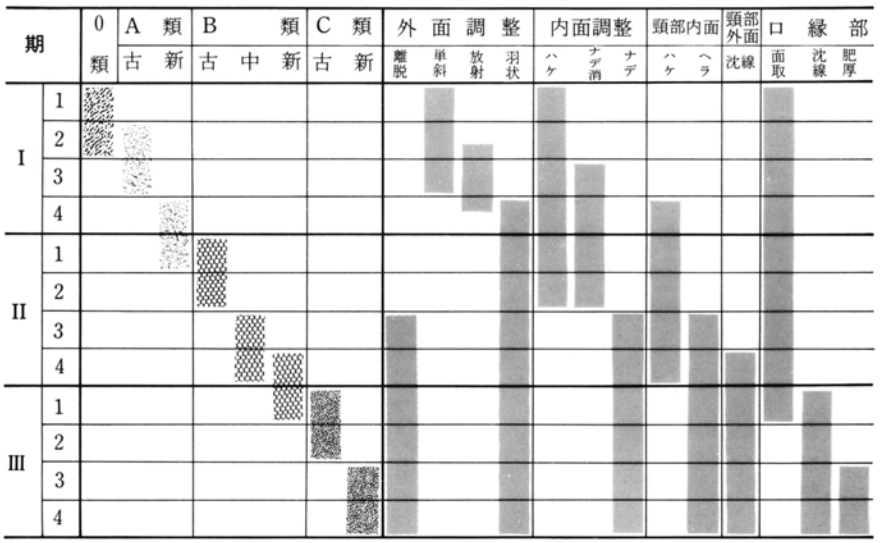
A類

3～5の古段階と6～8の新段階に区分。口縁部第2段は垂直に立ち上がり、外面は押引刺突文に変化。体部から口縁部へは屈曲する。古段階は外面上位が単斜→放射状ハケメ後ヨコハケ。新段階は刺突文は粗く、羽状ハケメが確立。台部外面は不連続ナナメハケが定着。長胴から球体へ徐々に変化する。

B類

9～11の古段階、12・13の中段階、14・15の新段階に区分。刺突文が欠損。台部折返しが明瞭化。古段階は体部が球形し、端部に強い面を持つ。中段階はヨコハケが屈曲部から離脱し、肩が張る。内面ハケメ調整が完全に省略、屈曲部内面のみハケメ・ヘラ調整。新段階は口縁第2段が外反しはじめ、端部の面取が不明瞭。頸部調整を採取するものもある。

第8表 S字甕形態・技法の消長



（離脱―ヨコハケが頸部から離脱
頸部内面ハケ―単独に内面のみハケメを施す場合）

C類

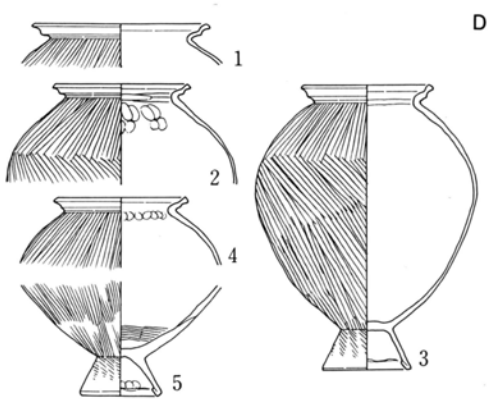
16～18の古段階と19～22の新段階に区分。口縁部は外反、面取の省略。頸部調整を必ず行なう。古段階は最も肩の張が強く、口縁端部は一条の沈線が巡る。頸部内面はヘラ状工具に統一。新段階は端部が肥厚する。台部は大きく八字状に開く。徐々に肩の張りが弱くなり体部は長胴化を志向。

D類

1の古段階、2・3の中段階、4・5の新段階に区分。体部長胴化。器壁を厚くし、端部に明瞭な肥厚した面をもつ。新段階でヨコハケがほぼ欠損。中段階で口縁部の外反が縮少。新段階で口縁の屈曲が痕跡的となる。

廃棄

廻間遺跡では明瞭な一括廃棄資料は比較的少なく、加えてある一定量を保有する資料となるとさらに限定されてくる。廻間I・II式期ではSK50・SZ02・SB60を上げるのみとなる。SK50・SZ02は墳丘墓に関係した土器廃棄である可能性が高く、SB60もやはり配列を意図した土坑内廃棄と考えられ、非



日常性の事象と理解した方がよいであろう。ここでは祭の道具の変遷を垣間見ることができる。

祭の道具

Ⅰ式4段階のSK50は、甕が約30%弱、高杯が40%近くを占める。4段階全体の器種構成比率と比べるとまず甕と高杯の割合が逆転している。(合計量の比は同じ)SK50が高杯の占める割合が特に多いことを示しているものと理解されよう。手捏土器・手焙型土器・U字文を残す壷等、希少な型式を共伴する点は祭に伴い整理された一群の土器であることを補強する。すると祭における主役は高杯にあるといえるのかもしれない。ただしこれは量のみの問題である。次にⅡ式期に所属するSZ02とSB60であるが、これらに見られる甕と高杯の割合は、Ⅱ式期の器種構成比率とほぼ同調し、甕の卓越と高杯の20%台が基本である。日常性の器種組成が祭の場へそのままもちこまれていく風潮のあることを示すものであろう。SZ01は内彎細頸壷・線刻文壷・加飾の小型高杯・台付大型鉢等やや異質な形が散見できる。さらにS字甕も全体に小型で、この時期にしてはく字甕の比が大きい。やはり祭の道具として製作されたものである可能性が高い。主役は高杯から甕類へ移行した。

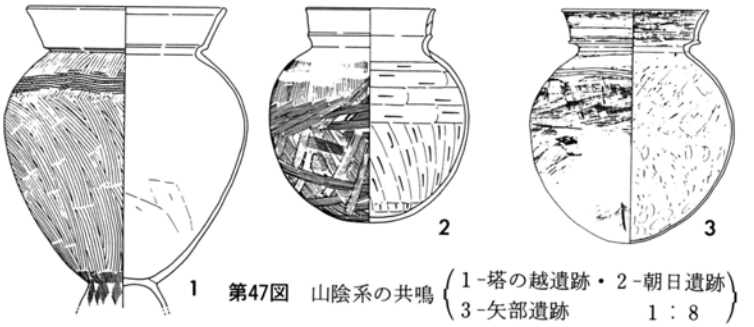
SB60はきわめて日常的な器種を中心とするものであるが、S字甕の超大型品はSB60をおいて他にほとんど見られない。この超大型S字甕を中心に祭が実施されたと推定することもできる。ここでは明らかに甕、しかもそれはS字甕に主役の位置がある。因にSK30でもやはりS字甕を中心として、小型高杯、パレス壷という組合が廃棄の中に認められる。

以上を総合すると1．非日常性、祭の道具の主体はⅠ式期後半[4]での高杯からⅡ式期になると甕、しかもS字甕に移行する。2．S字甕・小型高杯・パレス壷は祭にかかせない道具としてⅡ式期以降定着する。

土器の破壊

ところでこれらは量に主眼をおいて見通した結果である。廻間Ⅱ式期になるとS字甕が5割強の比率を保有するまでに突如増大する。これはすなわちS字甕の使用頻度が激増したことを示すものである。ここで少し破壊される量を考えてみなければならない。S字甕は薄く軽量品であり、逆にそれはもろく、破壊されやすい特色をもつことにほかならない。生活上の使用頻度も他の器種に比べ高い(煮沸具)。どうもこのあたりに甕の急増の要因が隠れているように思われる。単に量の比率のみでは、使用する意図における重要性は浮かび上がらない点も配慮する必要がある。時に一点の器形の使用が決定的な役割を演じる場合もありうる(祭の場面)。

しかしこうした危惧をいだきつつもやはりⅡ式期のS字甕の在り方は注目すべきである。加納が指摘する三連S字甕の問題[5]を含めて、S字甕のもつ多義性を改めて確認しておく必要がある。超大型・小型・三連品。こうしたS字甕はどうも墳丘墓をはじめとする祭に広く用いられていく可能性があり、廻間Ⅰ式期内で成就され、Ⅱ式期をもって広く各方面に定着していったものと想定したい。ヒサゴ壷・小型器台・小型高杯(有稜・椀形)そしてパレス壷はこうしたS字甕を中心とする祭を構成する重要な道具として位置づけられていた。

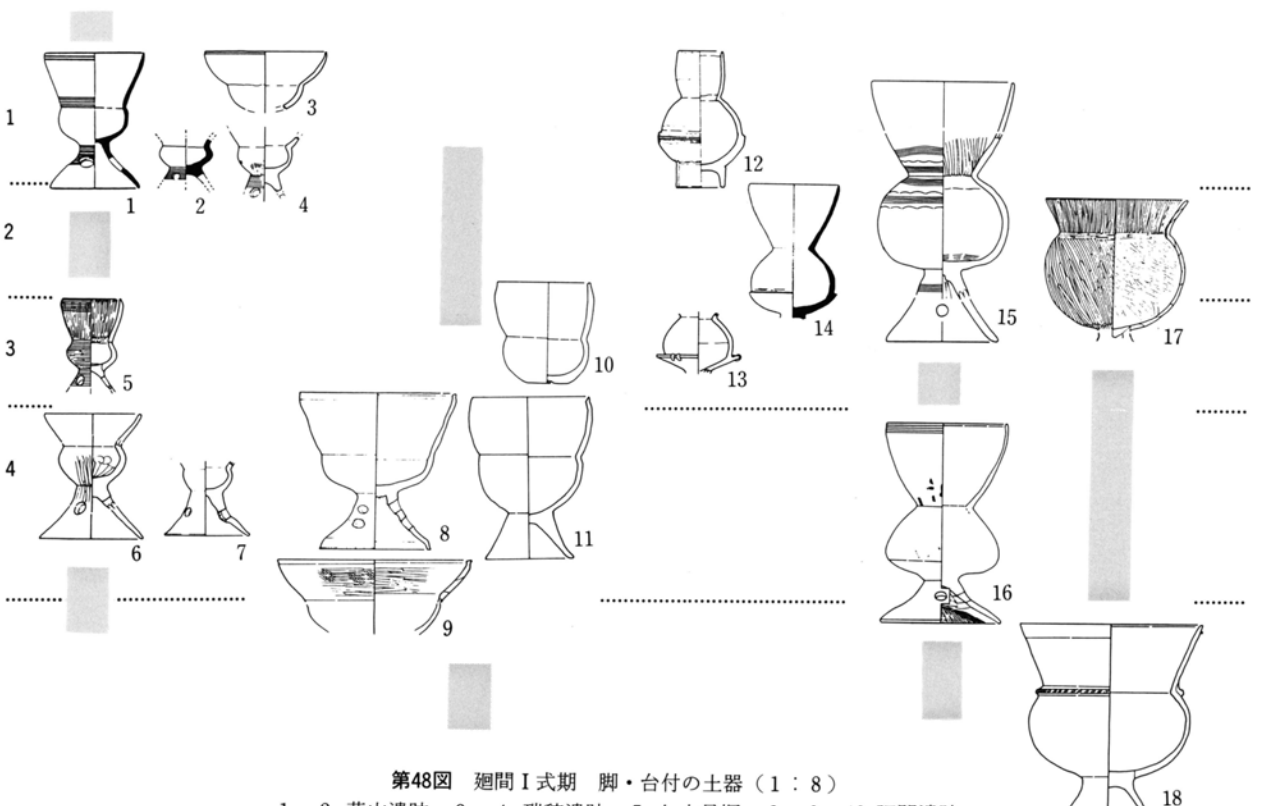


第47図　山陰系の共鳴（1-塔の越遺跡・2-朝日遺跡　3-矢部遺跡　1：8）

2）共鳴現象

様式を形成するものが同時代性を保有する型式群であるとすれば、これらは少なくとも概念上の問題であって本来様式を統合するものはもっと別なもののようである。例えば一つの時代を代表する土器群を見わたした時、そこに共通する、あるいはそこから直観する雰囲気ににたものを我々は観じとることができる。それは豊かな装飾性であったり、形の丸味・薄さといったようなものの総体であって、気風とか流行に似た感覚である。きわめてあいまいな表現であるが、以下これらの点に少しこだわってみることにしよう。そして土器の交流・伝播と呼ばれる状況についても考えることとし、そこにもう一つの普遍化現象である「共鳴現象」を見通す。

もう一つの普遍化現象



第48図　廻間Ⅰ式期　脚・台付の土器（1：8）
1・2-草山遺跡　3・4-瑞穂遺跡　5-欠山貝塚　6・9・18-廻間遺跡
7・8・10・11・12・13・17-朝日遺跡　14-高橋遺跡　15-勝川遺跡　16-本神遺跡

形態の内彎志向と小型化

内彎志向　形態の内彎志向とは口頸部・口縁部・脚部・台部等の器形の開口部が内彎する、あるいは内彎を意識することを意味する。内彎志向の嚆矢はすでに山中様式末期に見られ、まず高杯A_1とした長脚有段高杯にはじまり、それが廻間式土器にいたると各形式に波及する。例えば甕において、甕A_5の内彎口縁及び台部の内彎化。高杯Aは明らかに杯部・脚部をとわず内彎化する。高杯Bは杯部が皿状から大きく内彎する椀形へ、高杯Cも同様に杯部が内彎する。器台は大型・小型をとわず内彎脚を採用。鉢においても内彎の著しい広口鉢の一群（第48図）が見られ、壷ではパレス壷の口頸部の内彎化、壷B_4及び壷C類の内彎壷の多様化。あらゆる器種に内彎が盛行する。こうした形態の内彎志向が廻間Ⅰ式期を統合する気風であることが理解できるであろう。

次に小型化について。ある型式において一回り小型化した形状のものが一定の組列を見せることにより形式として独立してゆく。廻間Ⅰ式期の開始に伴い各形式間に広く小型化が定着する。高杯B_{2b}・高杯C・器台A及びC、壷C類にその代表的なあり方を見ることができる。特に器台A・Cの小型化と壷Cの小型化は注目したい所である。第48図のように小型器台と壷Cの小型品は組合される場合が多い。それは8・9・10の器台と壷が合体した器形の存在からも類推されるであろう。壷Cで加飾性の強い壷C_3（ヒサゴ壷）は特に重要な器種と考えることができ、器台Aと組合される率が高いものである。またこうした傾向は廻間II式期へと受け継がれていく。そしてこのような小型化への憧憬が新しい形式を生み出す要因ともなる。それは第48図1～7の小型の広口鉢と11～14のやや大きい広口鉢の類に見られる。多種多様な小型品がⅠ式期内に創出されてくるものと考えられる。

精製化

精製化とは胎土を良選し、器壁を薄くし、ミガキ調整を強調するものを意味する。廻間III式1段階の高杯A_4・B_2・C・器台類・鉢B・壷Dに共通して認められる現象である。その他壷Fを加えることもできる。小型品・中型品をとわず精製化する。こうした現象はIII式期前半を中心に広く定着するのであり、II式期とはこの点をもってして趣を異にする。

その他の現象として体部のしもぶくれがあり、Ⅰ式期から出現する。まずパレス壷にこの現象が登場し（Ⅰ式1段階）やがて壷Cへ、そして壷Bへと流行する。廻間III式期にいたると壷D・Fを中心に球形化・丸底化が流行し、鉢類へと波及していく。

以上、様式における志向性の変化をまとめてみると、廻間Ⅰ式期前半と廻間III式期前半に一つの画期が認められ、その間に独特の気風が確立していくことが認められる。それは同時に新しい器種の創出・参入と大きく関係がありそうである。

共鳴現象

軽量甕　廻間Ⅰ式1段階をもってS字甕が創出される。S字甕は他の甕類と大きく異なる点が2つ見られた。それはまず胎土の特異性、次に製作法の独自性。そしてこれらの技術の基にきわめて器壁の薄い軽量甕が完成する。このような軽量甕は濃尾平野ではS字甕として登場するが、他の地域ではどうかと言えばまず近江地域の受口甕が同じ頃軽量化し、北陸で

は擬凹線文有段甕が成立、畿内においても庄内型甕が出現しようとしている。またこれ以外の地でも甕の軽量化が一つの流行のように同時多発してくる現象が見られる[6]。器壁の薄さを可能にした技術はそれぞれ異なるようであるが、軽量化を思念する動きは同じである。

また寺沢編年の庄内O式設定にあたり重視された小型器台の登場は[7]、廻間I式期1段階の小型器台の出現、上記した形態の小型化ときわめて類似した現象といわねばならない。こうした動きはIII式期の精製化においても、畿内を中心とした小型精製土器群の成立と深く関係する動きと理解されるであろう。

第47図は山陰系甕の影響と考えられているもので、1はS字甕に山陰系口縁が融合したもので、2・3は布留型甕との融合現象である。山陰系土器の影響下において多発してゆくのであろうが、その受容の仕方が各地で異なるようだ。畿内では布留型甕の誕生の契機[8]と理解されている。濃尾平野ではこの種のS字甕は大型品に限定される傾向が強い所から機能的側面を重視したS字甕の形式分化を強調する切っ掛けとなっている。

共鳴現象

以上のようなまったく別の地域で、同時多発的に起こる同様な現象を共鳴現象と呼ぶことができよう。共鳴現象とは技術の世界に多々見られる同時多発型の普遍化現象である[9]。

共鳴の仕方はそれぞれの地域で異なるのであり、時に同種の形式をまた量の増大を出現させる場合もある。共鳴現象の重要性はこうした共鳴がある一定の時期に集中して広い地域に見られる点にある。それは廻間式土器で見てきたような様式を決定する、気風を確立するためのある種の志向性の出現期に相当する。時代が大きく胎動する、しようとする時、共鳴現象はどこともなく突如出現する。そうした共鳴現象を手掛りとして逆に時代の画期を見い出すことができるものと考えられる。またこうした現象は生物学における進化的放散、そして収斂という現象に似ている[10]。器種の多様化、新しい形式の創出はこのようなある限られた歴史的瞬間に一斉に発生するようであり、共鳴現象が広い空間に見られるほどその画期は地域史のレベルを通り抜ける。

〔注〕

1）赤塚次郎1986「S字甕覚書'85」『年報　昭和60年度』㈶愛知県埋蔵文化財センター

2）赤塚次郎1988「最後の台付甕」『古代』86号

3）粘土採掘地帯の比定の問題もあろうが、現状ではS字甕O・A類が分布する日光川水系及び「味蜂間の海」（4頁）周辺部を一つの「小地域」と理解したい。

4）前半では壷が主体となるようである。それは土田遺跡における墳丘墓出土土器の在り方に見られる。

5）加納俊介1989「東海地方」『シンポジウム“月影式”土器について報告編』

6）置田雅昭1982「古墳出現期の土器」『えとのす』19

7）寺沢　薫「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第49冊

8）注7）と同じ。

9）村上陽一郎1986『技術とは何か』NHKブックス505「基本的な技術の多くは、こうして共鳴か伝播によって普遍化する。」

10）森勇一氏御教示。大森昌衛訳1982『地球生物学入門』

3　遺構の変遷

廻間遺跡古墳時代初頭の遺構について廻間１～８期の基準を基にその変遷を概観してみることにする。なお墳丘墓については近接する土田遺跡のものを含めて考えてみることになる。

１）竪穴住居

廻間遺跡の調査では竪穴住居75軒検出することができた。

分類

検出しえた竪穴住居の内、平面形・内部の状況を明瞭に示す資料は少なく、各属性においてまずは分類しておかねばならないのであるが、ここでは平面形（具体的には検出した平面形での計測値）を中心に整理を試みるのに留まる。２つの要素を基とする。１つは住居面積（㎡）、今一つは長軸・短軸の比である。前者を優先させる。

住居面積をもとに大型・中型・小型に分類することができる。大型は50㎡以上のもの、中型は40～25㎡、小型は25㎡未満～12㎡。これを基に竪穴住居をⅠ～Ⅳ類に大別し、Ⅱ・Ⅳ類をさらに各々ａ・ｂに細分する。

Ⅰ類　大型の住居で50㎡以上の住居面積をもつ。ＳＢ40（51.5㎡）のみが所属する。第51図の時期別面積分布から明らかなように、面積では他の住居に比べて卓越する。廻間４期（Ⅰ式４段階）

Ⅱ類　中型の住居で40～31㎡のⅡａ類と30～25㎡のⅡｂ類に区分できる（第52図）。Ⅱｂ類は比較的正方形プランをもつものが多いが、Ⅱｂ類はやや多様である。廻間３・４期（Ⅰ式期後半）がその主体を占め、現状では廻間Ⅱ式期には存在しない。

Ⅲ類　中型の住居であるが、著しく長方形プランをもつもの。30㎡前後の住居面積をもち長軸７～６ｍ、短軸５～４ｍの規模を有する。廻間Ⅱ式期においてのみ出現する形態である。

Ⅳ類　25㎡未満の小型の住居で、19㎡以上の面積をもつⅣａ類と19㎡未満～12㎡のⅣｂ類に区分できる。第49図からみられるように廻間Ⅰ式期のものはどちらうというと長方形に近いプランをもつものが多いのに比べ、Ⅱ式期以降は正方形プランをもつものが主体を占めるという傾向が認められる。

ただし廻間Ⅲ式期は所属する資料が少ないため等質的な成果がえられたとはいえない。

住居の平面形を中心とする分類から見れば廻間Ⅰ式期とⅡ式期の間に大きな変化を読みとることができる。すなわち住居形態の多様性が見られる時期から、規格化へと変化する。Ⅲ類の出現に象徴されるような著しい長方形プランの住居の採用。（規模から見ればⅡ類からⅢ類が創出された可能性が認められるようである）Ⅱ式期になると長方形プランをもつ中型の住居と正方形プランをもつ小型の住居に規格が統合されて行く様相が見られる。Ⅰ

式期に存在したⅠ類・Ⅱａ類という比較的大型の住居は一般的な居住空間から一旦消失すると考えてよいのかもしれない。であるならばこうした大型住居は別の空間に、別の建物群の中に個別に位置づけられていく可能性が考えられるのかもしれない。集落内の階層分化が住居に表現され、選地の問題と係わり、特定の建物群の独立（居館）に連続していくとすれば、廻間Ⅱ式期の住居形態の変化は注目してよいであろう。

動向

第56図の廻間遺跡主要遺構配置図を見ると住居は旧河道ＮＲ01に沿って西から東へ配列しているように見られる。もちろんこれはⅠ式～Ⅲ式期にわたる生活の結果に基づく。第53図の変遷を見ると明らかに住居は調査区の西端から東へ移動していることが認められる。３期と５・６期（重複が著しく図示していない。）の住居数は、他の時期と比較して多く，また重複関係が多い。したがって細分が可能でありその意味からしても廻間様式における各段階設定は妥当性があろう。すると廻間様式各段階の住居軒数はほぼ10軒前後と推定することができる。

廻間２期では比較的大きな住居を中心に散在する形状が見られるのであるが、３期になるとＳＢ01・03・10あるいはＳＢ14・27・29というような主軸をそろえ近接する配置が見られる。こうした中型住居の小単位群が集落構造の核となっていたようである。このような状況は４期まで続く。Ⅳ類とした小型住居は長方形プランに近いものがⅠ式期に多く存在し、核となる中型住居群の周辺に散在する傾向が窺える。廻間Ⅱ式期になるとこうした構造が大きく崩れ整然とした配列と、住居面積の等質化が実現する。何らかの計画的集落構造を想定できるのであり、住居選地と建物構造の差別化がより大きな枠組の中で実施されているように思われる。続くⅢ式期になると明らかに集中した住居構成をとらず、散在する小規模単位の住居が配置されている。８期では大・小の２つの住居を一単位とするような配置と、その住居間に空間が存在し、畝状遺構に見られるような畑地がそれぞれの単位毎に設けられていたことが推測できる。一つの敷地の所有が意識されているようにも理解できる。

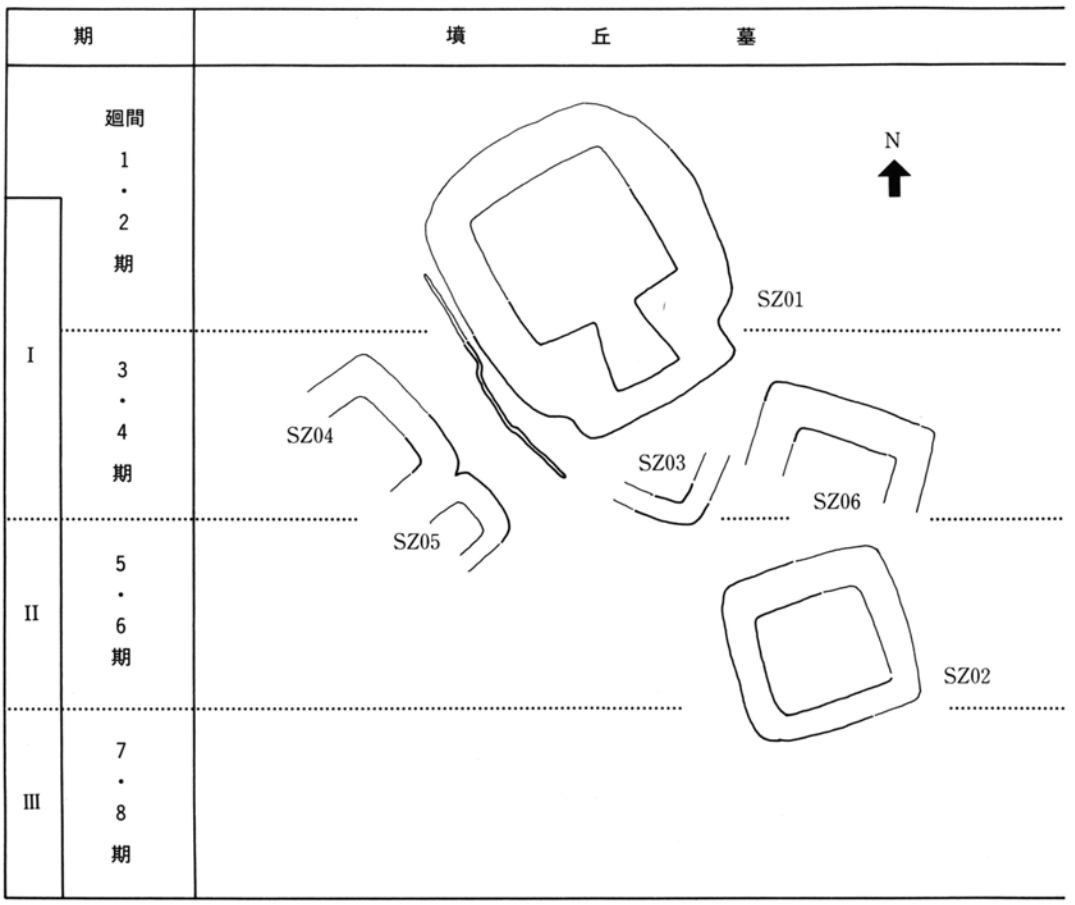
以上をまとめてみる。

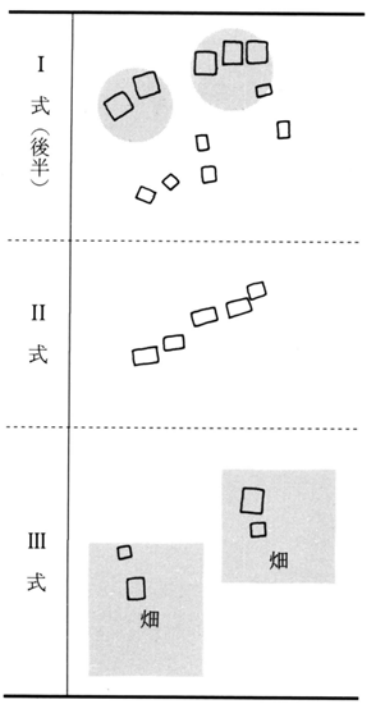
1　廻間遺跡は竪穴住居10軒前後が様式各段階での軒数と考えられ、小規模な集落を構成している。

2　Ⅰ式期では数軒単位の中型住居を核とした配置が存在する。その周辺には長方形プランをもつ小型住居が併設する。

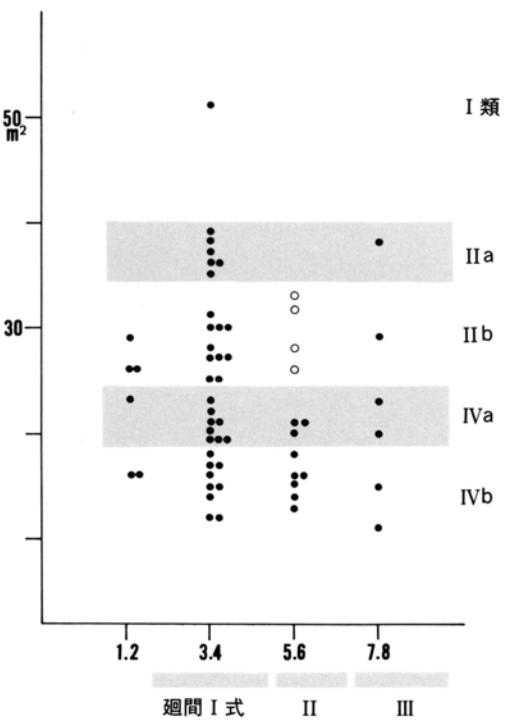
3　Ⅱ式期では計画性の強い住居配置が存在し、住居は等質化する。より大型の建物群が一般集落から独立していくことが想定される。

4　Ⅲ式期になると集落構成員単位で、一定の拡がりを占める敷地の所有が普遍化する。

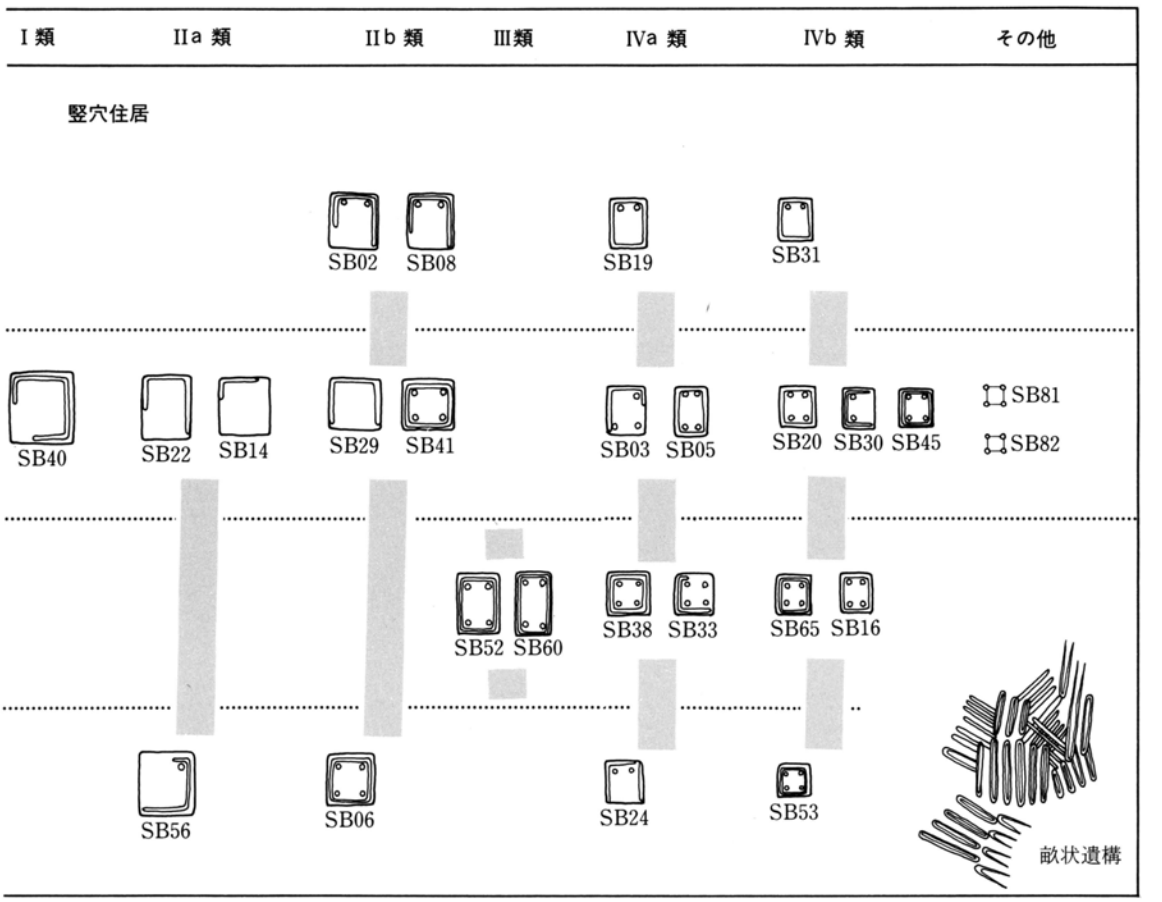




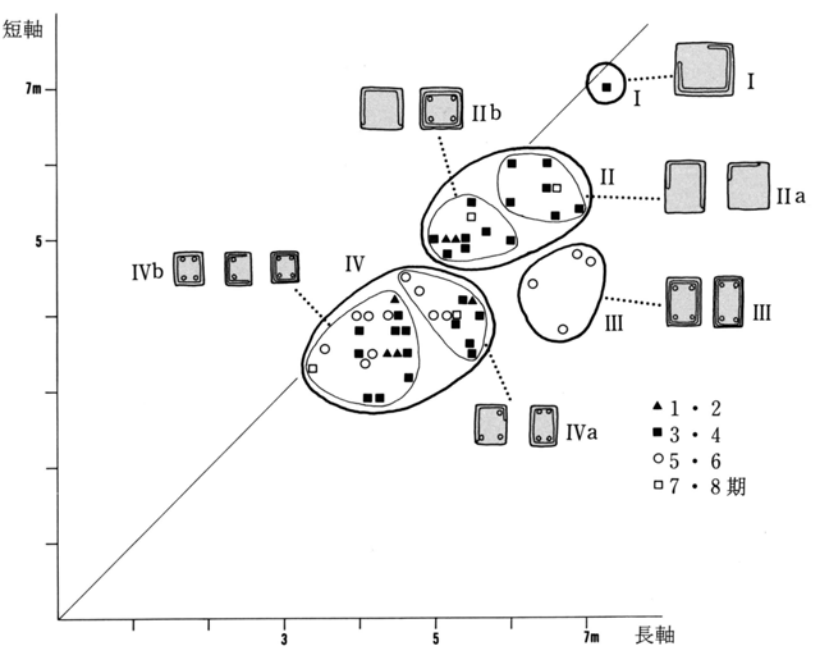
第50図　住居区モデルの変遷



第51図　竪穴住居面積分布（時期別）
○はIII類

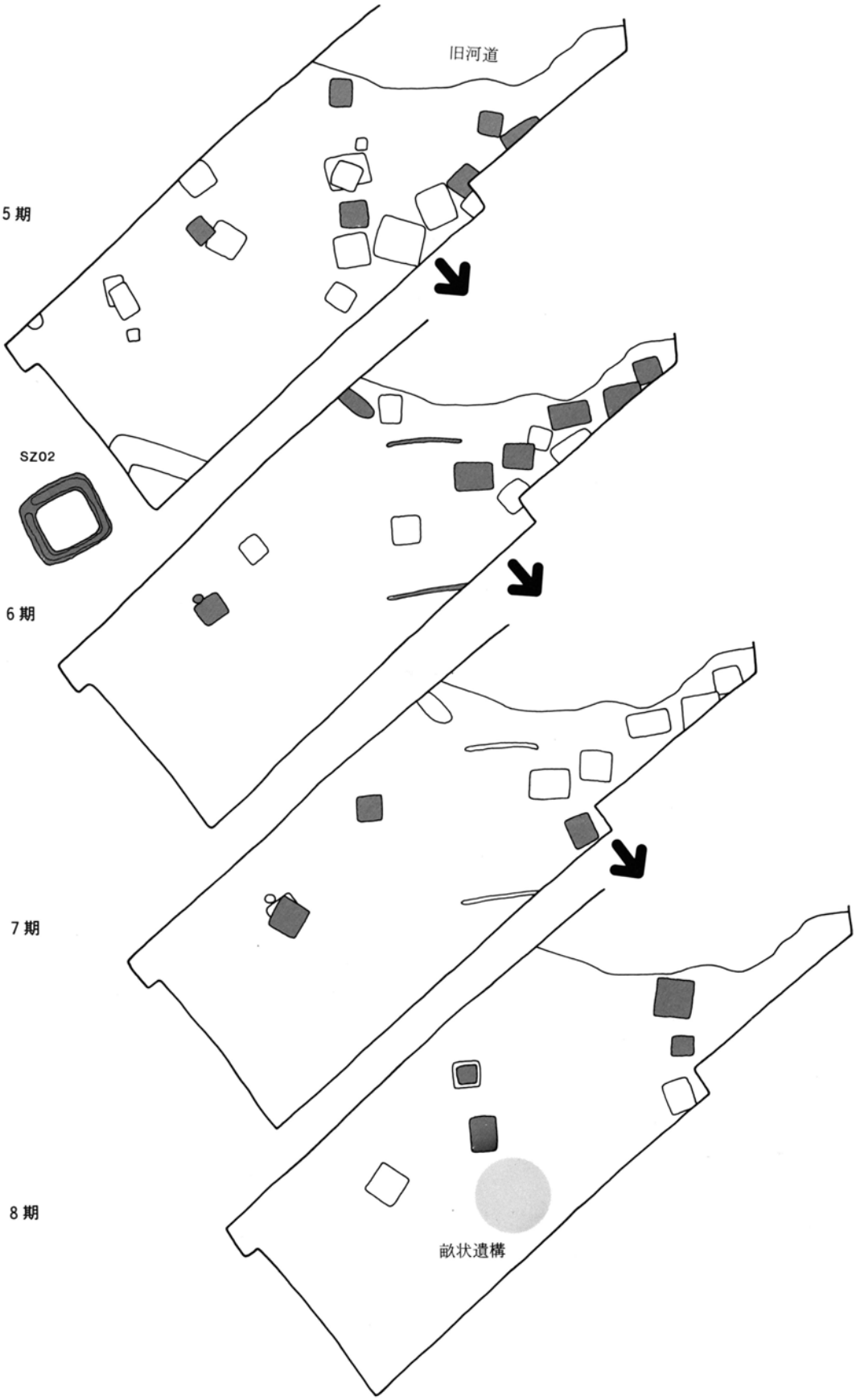


第49図　墳丘墓・住居等の変遷



第52図　竪穴住居面積分布（分類）

旧河道
1 期
2 期
3 期
SZ04
SZ05
SZ01
4 期
SZ06



第53図　竪穴住居等の変遷

2）墳丘墓

廻間遺跡において6基、土田遺跡において9基の墳丘墓を検出することができた。これらを中心にまとめておく。（第57図）

分類

まず規模から見てみよう。第55図から明らかなようにその墳丘規模（主墳丘の大きさ）を4つに区分することができる。廻間遺跡ＳＺ01は前方後方形を明確に示し、その主墳丘（後方部）の規模が19mを測る超大型。次に14～13mの大型、10～9mの中型、そして5m以下の小型墳に分類する。大型の墳丘墓は廻間遺跡でＳＺ02及びSZ06、土田遺跡のSZ05、SZ06の4基が含まれる。総じて廻間遺跡は比較的規模の大きい墳丘墓で占められ、土田遺跡は中・小型墳を主体とする。

次に墳形であるが、全形状を明らかにする資料、推定可能な資料を基に分類すると、大きく2つに区分でき、一つは廻間SZ02、土田SZ07、SZ08のように、四隅のいずれかに陸橋部をもつもの、あるいは全く存在しないもの（A類）。ただし廻間SZ02は西隅部に周溝を浅くする陸橋部状の施設をもつもので、南、東溝の状況は不明である。土田SZ06、07が小型墳に所属する点を考慮すると、廻間SZ02の大型墳を同類に位置づけるのはむしろ無理がある。したがって墳形を保留する。さて今一つの類型は溝の中央に開口部をもつ広義の前方後方型墳丘墓である（B類）。Ⅰ～Ⅲ類に細分できる。土田SZ01・03・05に見られるような、開口部周辺に明瞭な変化が認められないもの（BⅠ）。次に土田SZ02・06のように開口部周辺の溝幅が拡張するもの（BⅡ）。そして廻間SZ01の前方後方形周溝が取り囲むもの（BⅢ）。この分類は田中新史[1]による類型を念頭におくものである。ただし田中類型では全周をとり囲む周溝の存在をBⅣ型におくのが原則であるが、ここでは田中類型BⅢ型の段階にすでに存在していると考えておく。（注3参照）

ほぼここでいう超大型はBⅢ類。大型墳はBⅠ・Ⅱ類、中型墳はBⅠ・Ⅱ類、小型墳はA類に所属するとまとめることができよう。

類型　以上の分類から墳丘墓における3つのまとまりを想定することができる。第1類型として墳形が多様な形状をもち、5m未満の墳丘規模をもつ小型墳のクラス。第2類型として墳形はBⅠ・Ⅱ類を採用し、14～9mの墳丘をもつ大・中型墳のクラス。そして第3類型としてBⅢ類に発展した大規模な前方後方型墳丘墓をもつクラスである。

時期

廻間式土器編年案を手掛りとして墳丘墓の築造時期を推定してみると、まず出土土器に基づく状況は第10表のようになりほとんどが廻間Ⅰ式前半期に集中することになる。これらの溝内出土土器の中で最も新しい特色をもつものをもって造営終了時期と決定すると第9表のようになる。（廻間ＳＺ01については28頁参照）。まとめてみると

1　土田遺跡・廻間遺跡とも廻間様式の開始をもって墳丘墓が営まれはじめる。

2　BⅠ類からBⅡ・Ⅲ類への変化は廻間Ⅰ式1段階と2段階の間に設定される。しかしながら出土土器の在り方を再検討すれば、廻間Ⅰ式1段階をもってBⅡ類の開口部の

発達に向かって志向する可能性が高い。廻間様式にいたると前方後方型墳丘墓は開口部（前方部）が一気に発達すると結論づけておきたい。

造営地

土田遺跡の場合SZ01～SZ06とSZ07～SZ09の２つの大きな墳丘墓支群とも呼べる明瞭なまとまりが存在する。ところが廻間遺跡の場合そうした明瞭なまとまりは存在しないようである。土田遺跡は短期集中型の造営形態を(廻間Ⅰ式１～２段階)、廻間遺跡の場合はこれに比べるとやや長期的な造形地を形作っていたことが認められる。土田遺跡における墳丘墓の相対的規模の小型化と、廻間遺跡の大型化の差がこのような造営地における性格の差となって表われているのかもしれない。もしそうであるならば土田遺跡の造営パタンは集落構成内小集団単位の造営地を表わすものであり、一方廻間遺跡の造営パタンはより階層的上位の集団を対象とした造営地と理解してよいことにもなる。土田遺跡・廻間遺跡を中心とする遺跡環境が複数の小集落単位の集合であると仮定すれば、これらの諸点はきわめて都合のよい結論を導き出すことができよう。すなわち土田遺跡の立地する南北の細長い微高地西端が集落構成単位の造営地を、そして廻間遺跡が立地するやや岬状の微高地北端周辺が指導者達の造営地であると（第57図）。そして旧河道NR01を中心に小集落がいくつも存在している状況を推定することができるようである。

造営パタン

ところで廻間Ⅱ式期以降墳丘墓がほとんど見られない点はやや不自然である。一つにはその主要な造営地を大きく移動している可能性が考えられよう。それにしても第３類型クラスの墳丘墓が今少し存在してもよいように思われる。集落の動向に比べてⅡ式期に所属する墳丘墓の消失は注目する所であり、あるいは造営地を異にするより大規模な墓の出現を推定してよいかもしれない。巨大な墓と、従来から続く墳丘墓と２極化する現象をⅡ式期の中で想定しておきたい。

土器

土田遺跡の墳丘墓から出土する土器の多くは壷である。一方廻間遺跡では多器種にわたって見られ、甕の出土も認められる。Ｓ字甕の所で前述した諸点(112頁)を踏まえると、まず壷を中心とした祭の道具が存在し、廻間Ⅰ式期にいたると壷から多器種に、中でも高杯そして甕へとその主要な道具が変化していくようである（量的な問題)。甕の参入（墳丘墓への）は廻間様式に見られるもののⅡ式期で主体となる。なお祭の道具の多様性は（廻間遺跡に見られるように）より大きな墳丘墓から逸早く採用されていく傾向がある[2)]。

以上の諸点をまとめておくことにする。

1　前方後方型を呈する開口部の何らかの拡張は廻間様式の開始をもって急速に進行し、Ⅰ式前半期には早くも周溝を巡らす形態を創出している[3)]。

2　造営地には小型墳丘墓を短期的に造営するものと、大型の墳丘墓を比較的長期的に造営する墓域が存在し、この関係（弥生時代からの類型）はⅠ式期後半からⅡ式期にいたるとさらに巨大な墳墓の出現により伝統的な造営形態を残すものと、より高度に象徴化された造営地とに両極化していくことが推測される。

〔注〕

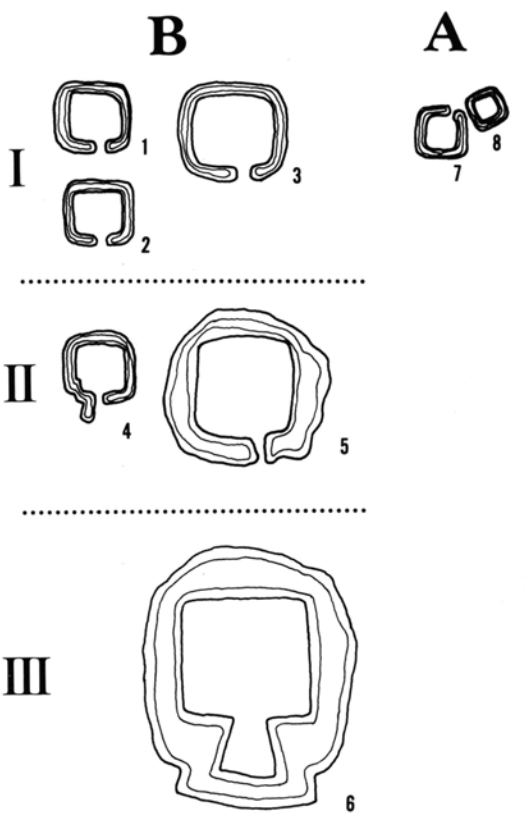
1）田中新史1984「出現期古墳の理解と展望」『古代』第77号

2）Ⅲ式期では小型高杯・器台が多く見られまた壷（特に二重口縁壷）が再び特異な意味をもつようになる。

3）廻間式土器の開始と同時に墓制において大きな変化が認められることは明らかであろう。前方後方型墳丘墓としたＢⅠ～Ⅲ類、特にＢⅡ、ＢⅢのこの時期での出現は注目したい所である。なお「ＢⅢ型」からさらに発展した「ＢⅣ型」（田中類型）をもって「前方後方墳」と呼び用語として区分しておくことにしよう。これはＢⅣ型は「ＢⅠ～ＢⅢとは隔絶した大規模なものが多い」（田中論文）とする点と以下の点を加えて考えることができる。

前方後方墳

すなわち主墳丘の大きさについてはＢⅢ、ＢⅣ型もあまり大きな変化は見られないように思われる。つまり主墳丘20mクラスが一般的であり、それは所謂「高い墳丘をもつ」前方後方墳を含めてみても同様である。例えば東海地方で古い形態としたＩａ、Ｉｂ類（赤塚1988「東海の前方後方墳」『古代』86号）に属する西山１号墳で24m、筒野１号墳26.8m、庵ノ門１号墳20m、象鼻山１号墳23×25m、高倉山古墳24.5m等と後方部の規模は20～25mクラスと判断してよいものである。これは廻間遺跡SZ01を含めたＢⅢ類の墳丘墓のあり方と大きな差はない、やや規模の増加が認められる程度である。しかしながら全長の増大は決定的であり、その違いは何に起因するかといえば前方部の発達にあることは言うまでもない。つまり前方部の大きさをもって、より大きな形に変化するという方向が確立したことになり、この点はもちろん従来までの「墳丘墓」には見られない現象である。この点を重視することにしたい。



第54図　墳丘墓の分類

第９表　墳丘墓一覧

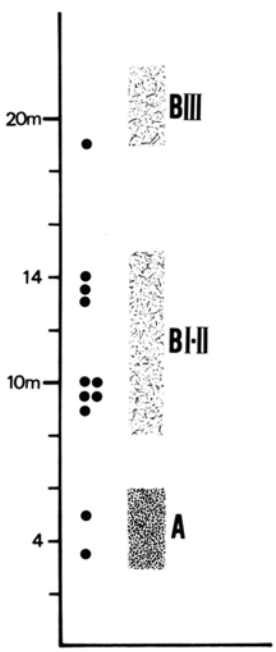
遺跡	SZ	規模（m）	溝幅（m）	墳形	時期
廻間遺跡	1	全長(25)方19	5.5＊	BⅢ	Ⅰ-2
	2	(13)	3.5	(A)？	Ⅱ-2
	3		2.5		Ⅰ-4
	4		3.3		Ⅰ-2
	5				Ⅰ-2・3
	6	(13)	4.5		Ⅰ-4
土田遺跡	1	9×10	1.3～1.6	BⅠ	Ⅰ-1
	2	9.5×9	0.9～1.4	BⅡ	Ⅰ-2
	3	(9)	1.5	BⅠ	Ⅰ-2
	4	(11～10)	1.9	(B)	Ⅰ-1
	5	13×13.5	2	BⅠ	Ⅰ-1
	6	13×14	2～5	BⅡ	Ⅰ-2
	7	3.6×3.6	0.5～1	A	Ⅰ-2
	8	4×5	0.5～1.2	A	Ⅰ-3
	9	(9)	1.5～1.8	(B)	Ⅰ-1

＊（廻間　SZ01　前方部長８m，幅7.5m）

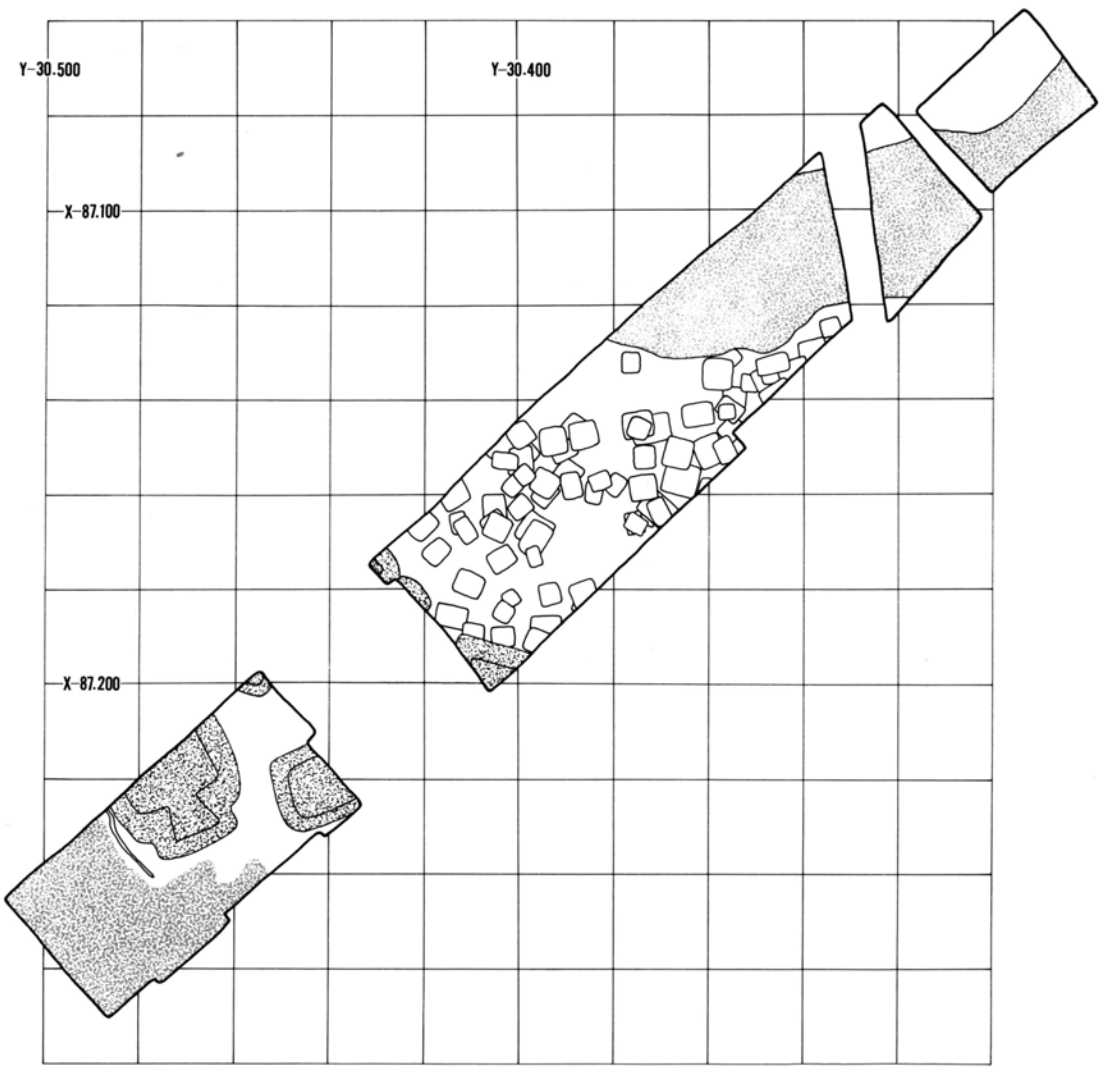
この区分にしたがえば廻間遺跡SZ01はあくまで「前方後方型墳丘墓」の最も発達したものの一種であり、「前方後方墳」とは異なることになる。前方後方墳の出現の時期は不明瞭ながら、BIII型の在り方に注目すれば、廻間II式期には確実に存在しており、あるいはI式期後半代にさかのぼりえる可能性が高い。

第10表　主要遺構存続期間

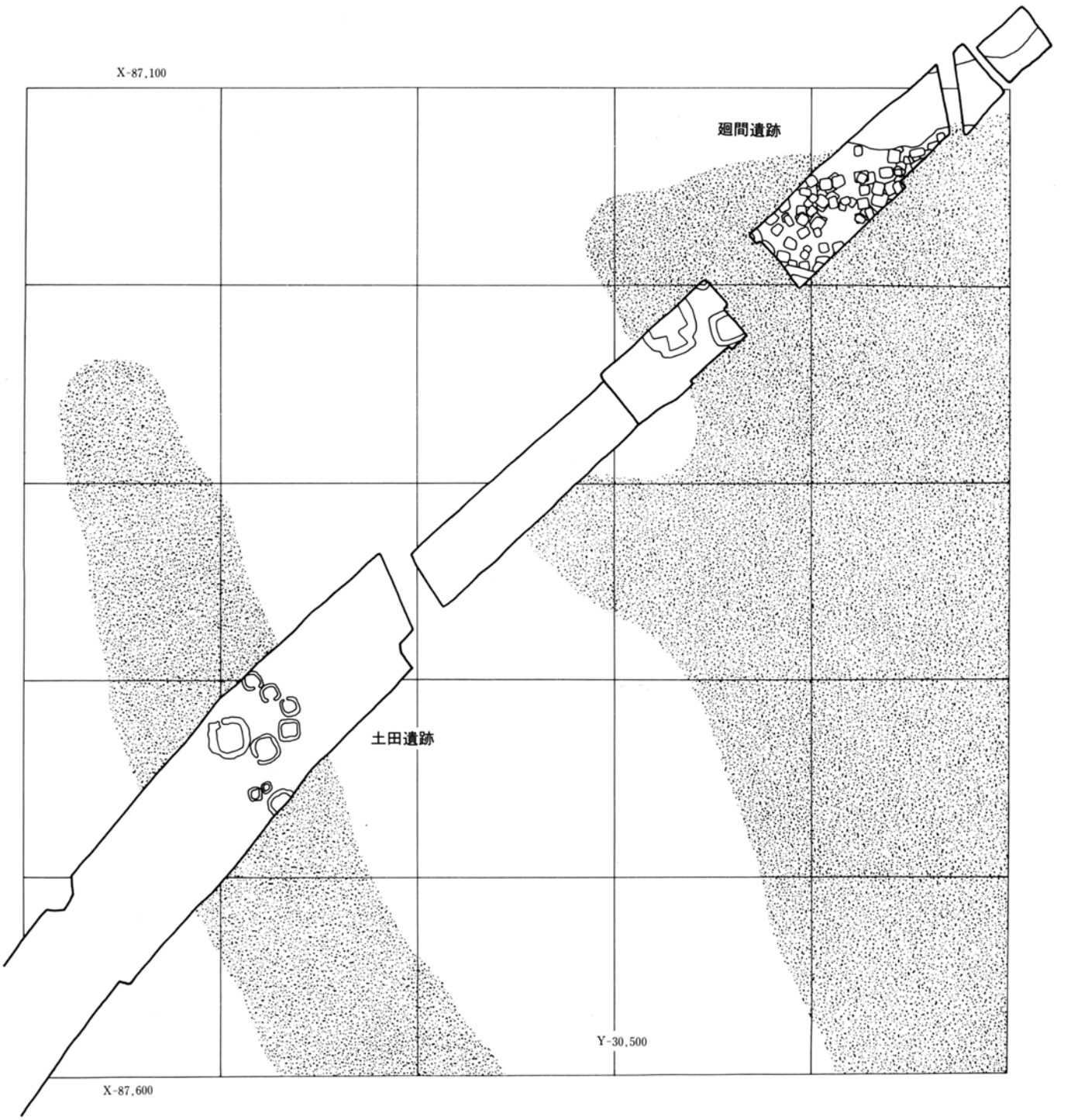
遺構			I式			II式		III式	
		1	2	3	4	5	6	7	8
SB	1								
	2								
	3								
	6								
	10								
	23								
	30								
	32								
	33								
	39								
	40								
	41								
	45上								
	48								
	49								
	50								
	51								
	52								
	55								
	56								
	59								
	64								
	60								
	67								
	68								
	75								
	12上								
SK	30								
	50								
	51								
SU	1								
	2								
	3								
	4								
SZ	1								
	2								
	4								
SZ（土田）	1								
	2								
	3								
	4								
	5								
	6								
	7								
	8								
	9								



第55図　墳丘墓の規模



第56図　廻間遺跡主要遺構配置図（1：1,600）
（古墳時代初頭，四角の白ヌキは竪穴住居
アミフセは墳丘墓，北側の旧河道，南側の緩斜面）



第57図　廻間遺跡・土田遺跡（1：3,000）
（砂目は微高地の復元）

4　まとめ

廻間遺跡の分析で導き出された結果を箇条書にまとめておくことにする。

1）廻間式土器

1　欠山式土器古相以外をもって廻間式土器様式を設定し東海地域最古の土師器とする。

2　甕・高杯を基軸にして廻間式土器をⅠ～Ⅲ式に区分、さらにこれらを各4段階に細分する。

3　廻間式土器は濃尾平野低地帯を中核とする土器様式として出発し、その応用範囲は濃尾平野及び伊勢湾沿岸地域（伊勢・志摩・知多・幡豆）と考える。

4　廻間Ⅰ式期は形態の内彎志向という共通項をもちつつ、S字甕の出現に代表されるような甕の多様化、各器種別の小型品の登場、パレス壺の定型化と大型壺の盛行、ヒサゴ壺の出現とそれを含めた内彎口頸壺の多様化に特色づけられる。

5　廻間Ⅱ式期はS字甕B類の登場による甕の画一化とその急増。小型器台（B）の出現、大型壺の消失が見られ、内彎志向の形骸化。土器の移動の開始。

6　廻間Ⅲ式期はS字甕C類の登場とS字甕の分化。土器の精製化という共通項を伴ない小型器台・小型鉢の盛行と多様化。また系譜的に連続する壺類が消失、新たに新器種が導入されるという壺の画期が存在する。

7　廻間式土器の開始を畿内庄内式土器の開始とほぼ同じ頃と考え、布留式土器への転換期をおおよそⅡ式期末にあてる。

8　廻間Ⅱ式期にいたると土器の移動がはじまり第一次拡散が開始される。廻間式土器が広く東日本各地を中心にもたらされ、それぞれの地域で受容しながら、器種の選別と定着が認められる。

9　Ⅱ式期後半からⅢ式期にかけて、畿内の影響をうけながら東海道を中心に第2次拡散が開始される。それは駿河大廓式土器の成立の契機とその拡散に連続する動きとなる。

2）土器について

1　S字甕は受口系台付甕を母胎とし、特異な胎土の選出と、独自の台付甕製作技法の発明をもって廻間Ⅰ式1段階に登場する。その淵源地を日光川水系低地部とする。

2　廻間Ⅰ式期においてはS字甕はむしろ第2・第3の甕であり、さらに住居単位で甕の構成が異なり、きわめて多様である。ところがⅡ式期になると様相が一変し、甕＝S字甕に画一化する。

3　祭の道具の主役はⅠ式期前半では壺が、後半では高杯へと変化し、Ⅱ式期にいたるとS字甕に移行する[1]。（量的な問題として）

4　非日常性の場面においてもS字甕をその主要な道具として位置づける場合がある。（超

大型品・小型品・三連品）そしてその風習はII式期の土器の拡散とともに広く他地域に受け入れられていく。

5　様式を統合するその気風を形作るものを志向と呼ぶと、それはI式期の形態の内彎志向・小型化及びIII式期の精製化に代表される。I式期前半とIII式期前半期に志向性の確立が見られる。そこに一つの時代の画期を見い出す。

6　軽量甕に代表される同時多発的普遍化現象を共鳴現象と呼ぶ。共鳴現象は志向性の確立期と大きく関係し、ある限られた時間帯に一斉にまき起る。それは新しい時代を予見させるものである。

3）遺構について

1　竪穴住居は廻間I式期とII式期に大きな画期が存在する。それは住居形態にも見られその他住居の配置にも変化が見られる。II式期にいたると計画性の強い住居配置が出現し、住居形態も長方形を呈するIII類が登場し、等質化する。III式期では一定の広がりを所有する敷地が普遍化していく。

2　墳丘墓の分類で3つの類型が存在する。墳形に統制が見られない小型墳、主墳丘10mクラスの前方後方型墳丘墓、BIII型[2]に発展したより大きな（主墳丘20mクラス）前方後方型墳丘墓である[3]。

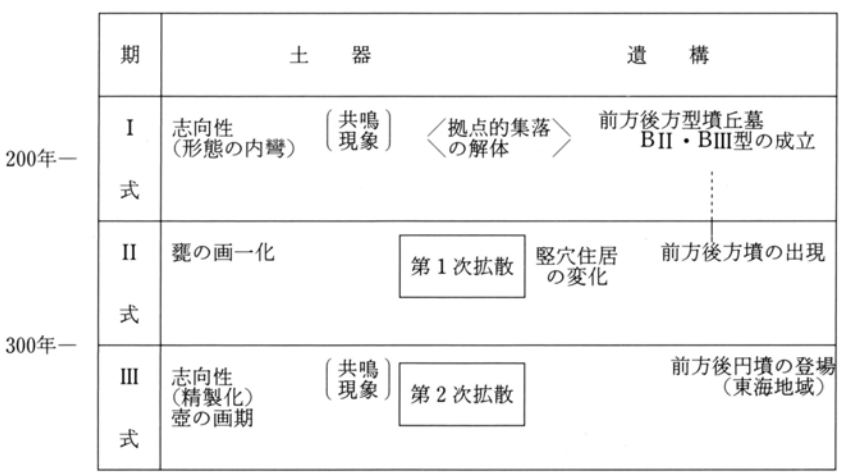
3　廻間I式期をもって開口部（B型）が拡張し、急速に前方部が発達する前方後方型墳丘墓が登場し、周溝を巡らすものもI式期前半代で完成する。

4　竪穴住居及び墳丘墓の造営地での変化を綜合すると、I式期後半からII式期前半にかけて集落構造が激変し、指導者層の一般集落からの独立（建物及び墳墓）が想定できる。

〔注〕

1）赤塚次郎他1987『土田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第2集

2）田中新史1984「出現期古墳の理解と展望」『古代』第77号。



廻間遺跡編年表（付表）遺跡一覧

く字甕　1～4・7～17・19～22　廻間遺跡
18　朝日遺跡1982
23～25　塔の越遺跡ＳＸ01

Ｓ字甕　26～49・52・55～58・60・61　廻間遺跡
50・53　塔の越遺跡ＳＸ01
51・54・59　宮之脇遺跡２号住
62　塔の越遺跡ＳＸ02
63　若葉通遺跡ＳＢ02

受口系甕　64～73　廻間遺跡

有稜高杯　74～90　廻間遺跡
91　塔の越遺跡ＳＸ01
92　鳴海廃寺遺跡１号住
93　岩倉城下層ＳＥ01

椀形高杯　102・103・105～116　廻間遺跡
104　能田旭遺跡　溝
117　高木遺跡　10号周溝墓
118　塔の越遺跡ＳＸ01
119　岩倉城下層ＳＸ01
5　元屋敷遺跡　竪穴
6　欠ノ上遺跡２号住

有稜高杯　120　高蔵遺跡
121・123・124・131～135　廻間遺跡
122　高蔵遺跡1956　Ｃ区第２層
125　岩倉城下層
126　中狭間遺跡　溝
127　平松遺跡ＳＫ01
128　朝日遺跡
130　元屋敷遺跡　竪穴
136　南木戸遺跡
＊　親ケ谷古墳（石製品）

器台　137・138・142・145・147・148～150・152・153・156・159・165・166　廻間遺跡
139　高蔵遺跡1956Ｄ区第１層
140・141　能田旭遺跡　溝
143　朝日遺跡61Ｌ　ＳＺ01
144・155・158　朝日遺跡1982
146　中狭間遺跡　溝
151・160　元屋敷遺跡　竪穴
154　定納遺跡
157　塔の越遺跡ＳＸ01
162　江東遺跡
163　平松遺跡
164　勝川遺跡ＳＺ22
167　朝日遺跡63Ｊ
161・168　岩倉城下層ＳＸ01

パレス壺　169　土田遺跡ＳＺ05
170～185・189・191～195　廻間遺跡
186　南木戸遺跡
187　海戸遺跡
188　富塚遺跡
190　斉宮司遺跡

内彎直口壺　196　土田遺跡ＳＫ14
197　朝日遺跡1982　ＳＤ178
198・200・201　廻間遺跡
199　土田遺跡ＳＺ08

ヒサゴ壺　202・204・210　朝日遺跡1982
203　朝日遺跡60Ａ　ＳＤ04
205・211・212・213　廻間遺跡
207　中狭間遺跡　溝
208・209　平松遺跡ＳＫ01

内彎細頸壺　214　朝日遺跡1982　ＳＤ177
215　能田旭遺跡　溝
216　勝川遺跡ＳＺ22
217　廻間遺跡

内彎短頸壺　218・219　廻間遺跡

壺　220　朝日遺跡1982
221～223　廻間遺跡
224　若葉通遺跡ＳＢ02

広口壺　226・228・231～233・237・241　土田遺跡
227・229・230・234～236・238・240・243・244・245　廻間遺跡
239　中狭間遺跡　溝
246　欠ノ上遺跡　２号住

柳ケ坪型壺　247　朝日遺跡61Ｔ　ＳＤ02
248～250　廻間遺跡
251　若葉通遺跡ＳＢ02

二重口縁壺　252～255　廻間遺跡
256　塔の越遺跡ＳＸ01

鉢　257～262・264・266～270・272・274～284　廻間遺跡
263・286・289　岩倉城下層ＳＸ01
265・271・288　宮之脇遺跡２号住
273　能田旭遺跡　溝
285・287　朝日遺跡63Ｂ　ＳＢ02

その他　290～293　廻間遺跡

別　　表

遺構登録一覧 ……134
挿図掲載遺物一覧 ……138
図版掲載遺物一覧 ……140

＊（　）推定

竪穴住居

SB	調査区番号	住居面積 m²	壁溝(幅・深)cm	壁高cm	主柱穴(数・径・深)cm	類型	時期	備考
1	60A-SB01	6.0×(5)・(30)	50・15	4	(2)・40・13	IIb	3	a・b 拡張
2	60A-SB02	5.2×(5)・(26)	65・25	16	(2)・50・10	IIb	1	
3	60A-SB03	5.4×4.2・22.7	50・23	11	3・50・11	IVa	3・4	
4	60A-SB04	4.6×3.2・14.7	35・5	4	(2)・30・10	IVb	4	
5	60A-SB05	5.5×3.5・19.3	35・25	18	4・35・11	IVa	4	
6	60A-SB06	5.5×5.3・29.2	40・38	30	4・40・12	IIb	7	
7	60A-SB07	4.8×	30・34	8			6	
8	60A-SB08	5.0×(5)・(25)	50・28	20	(2)・45・20	IIb	I	
9	60A-SB09	5.5×	30・24	19	(1)・45・10		I	
10	60A-SB28	5.9×(4.5)・(27)	50・20	15	(2)・50・10	IIb	2・3	a・b 縮少
11	60A-SB29		30・10				I	
12	60A-SB12	5.2×4.8・25	50・46	40	(3)・40・14	IIb	(3・4)8	土器廃棄
13	60A-SB10	5.3×3.9・20.7	30・31	27	4・30・13	IVa	2・3	
14	60A-SB13	6.0×5.5・33	40・37	28		IIa	2・3	
15		4.0×3.5・14	50・5		(3)・30・10	IVb	I	
16	60A-SB14	4.1×3.4・13.9	40・35	29	4・40・8	IVb	II	
17	60A-SB11	(4.5)×3.8・(17)	65・20	13	(1)・40・10	IVb	2・3	
18	60A-SB18	5.4×4.9・26.5	60・22	6	(3)・60・18	IIb	4・5	
19	60A-SB19	5.5×4.2・23.1	60・16	7	(2)・60・16	IVa	2	
20	60A-SB15	4.5×4.0・18	60・40	15	4・40・20	IVb	2・3	
21	60A-SB16 60B-SB38	6.5×60・39	50・31	20	(3)・50・21	IIa	I	
22	60A-SB17 60B-SB34	6.8×5.4・36.7	40・37	27	(1)・50・18	IIa	I	
23	60B-SB29	4.1×2.9・11.9	40・34	23	4・25・10	IVb	2・3	
24	60A-SB21	5.5×4.2・23.1	55・11	6	(3)・45・21	IVa	8	
25	60A-SB33		60・6		(1)・35・15		2・3	
26	60A-SB22		45・10		(1)・50・18		2	
27	60A-SB20	5.8×5.5・31.9				IIa	3～8	a・b・c 縮少
28	60A-SB32	5.4×5.0・27	40・13	5	(2)・45・13	IIb	I	
29	60A-SB24	5.5×(5.5)・(30.3)	70・20	15	(2)・35・10	IIb	3	
30	60B-SB28	4.5×(3.5)・(15.8)	30・36	26	(2)・30・21	IVb	2・3	
31	60B-SB43	(4.5)×3.5・(15.8)	50・10	7	(2)・30・10	IVb	2	
32	60B-SB42	4.5×3.5・15.8	65・15	7	(2)・30・7	IVb	2・3	
33	60A-SB27	4.8×4.3・20.6	40・21	14	4・35・8	IVa	5	中央に炉
34	60A-SB25	6.6×5.3・35.0	40・20	9	(1)・55・13	IIa	3～5	
35	60A-SB34	4.3	60・24	15	(1)・50・7		4	
36	60B-SB19	(7.5)×(5)・(37.5)	40・35	20	(1)・40・10	IIa	I	
37	60B-SB20	4.0×	20・15				I	
38	60B-SB21	4.6×4.5・20.7	50・38	25	4・35・10	IVa	4～5	

溝

SD	調査区番号	時期	備考
1	I KM61-SD01	江戸前	
2	I KM61-SD02	江戸前	
3	I KM61-SD03	江戸前	
4	I KM60A-SD02	明治	石組水路
5	I KM60A-SD01	江戸前	
6	I KM60A-SD12	古墳初	
7	I KM60A-SD08	古墳初	弧状
8	I KM60B-SD12	古墳初	
9	I KM60A-SD05	古墳初	
10	I KM60B	古墳初	
11	I KM60B-SD13	古墳初	
12	I KM60A	古墳初	
13	I KM60B-SD03	室町	
14	I KT60A-SD01	明治	石組水路
15	I KT60A-SD09	古墳初	SZ01に伴
16	I KT60A-SD02 I KT60B-SD02	江戸後～明治	
17	I KT60A-SD06 I KT60B-SD03	鎌倉～室町	
18	I KT60B-SD01	奈良	

SB	調査区番号	住居面積 m²	壁溝(幅・深)cm	壁高cm	主柱穴(数・径・深)cm	類型	時期	備考
39	60B-SB16	6.0×6.0・(36)	40・38	25	4・35・13	IIa	(3)6・7	土器廃棄
40	60B-SB17	7.3×7.0・51.1	40・27	20	0・	I	4	
41	60B-SB22	5.7×5.2・29.6	40・47	38	4・30・15	IIb	3～5	
42	60B-SB24	5.5×4.0・22	30・10			IVa		
43	60B-SB23	(7.0)×6.0・42	38・8			IIa		
44	60B-SB25	5.6×4.0・22.4	40・6			IVa	I	
45	60B-SB27	4.2×3.5・14.7	50・48	35	4・30・7	IVb	(4・5)7	土器廃棄
46	60B-SB26	4.7×3.6・17.0		13		IVb	3	
47	60B-SB18		40・47	27	(1)・30・10			
48	60B-SB40			39			4・5	
49	60B-SB41	4.0×(4)・(16)		30		IVb	4・5	
50	60B-SB05	5.0×4.0・20	40・54	38	4・25・30	IVa	6・7	
51	60B-SB15	6.5×5.7・37.1	40・41	27	(2)・38・32	IIa	3・4	
52	60B-SB14	6.3×4.4・27.7	30・39	27	4・40・14	III	5・6	
53	60B-SB13	3.4×3.3・11.2	70・58	41	4・25・10	IVb	7・8	
54	60B-SB12	5.2×4.0・20.8	40・59	39		IVa	6・7	
55	60B-SB11	(4.5)×(4.0)・(18)		30		IVb	6	
56	60B-SB10	6.6×5.7・37.6	40・54	42	(1)・40・15	IIa	8	
57	60B-SB07		40・35	20	(1)・30・15		II	
58	60B-SB09	3.6×3.6・13	30・30	12	(3)・25・17	IVb	II	
59	60B-SB06	6.8×	30・66	44			5	
60	60B-SB04	6.7×3.8・25.5	40・72	44	4・45・24	III	6	土器廃棄
61	60B-SB39		65・12				II	
62	60B-SB08		45・41	27	(1)・45・23		II	
63	60B-SB03	6.5×	60・46	31	(1)・30・20		6・7	
64	60B-SB04	6.9×(4.8)・(33.1)	60・55	25	(1)・40・24	III	6	
65	60B-SB01	4.1×4・16.1	25・48	42	4・35・11	IVb	5・6	
66	60B-SB46			20			2	
67	60B-SB30	5.2×(5)・26	35・44	36	(2)・30・7	IIb	2	
68	60B-SB31	4.5×4.2・18.9	60・38	20	(2)・32・8	IVb	2・3	
69	60B-SB32	(4)×3・(12)	30・36	22	(2)・35・22	IVb	2・3	
70	60B-SB33	4.0×3.8・15.2	90・30	25	4・30・13	IVb	I	
71	60B-SB35	6.6×5.1・33.7	50・10	5		IIa		
72	60B-SB36	5.0×4.3・21.5	35・20	5	(2)・35・18	IVa		
73	60B-SB45	4.6×4.3・19.8		10		IVa		
74	60B-SB44	4.8×(4.0)・19.2		6		IVa	2・3	
75	60A-SB31 60B-SB37	(6.4)×4.5・(28.8)	50・12	6		IIb	2	

掘立柱建物

SB	調査区番号	時期	備考
80	I KM60B	奈良	4×2
81	I KM60A-SB26	古墳初	1×1(1.9×1.8m)
82	I KM60A	古墳初	1×1(1.6×1.5m)

遺物集積

SU	調査区番号	時期	備考
1	I KT60A-SU02	廻間1～2	SK34～41上面
2	I KT60A-SU01	廻間3	
3	I KM60B-IIG5o	廻間4～5	
4	I KM60B-SK09	廻間3	

墳丘墓

SZ	調査区番号	規模	溝幅・深(m)	時期
1	I KT60A-SZ01	(全長25)	4.5~5.5・0.5~0.6	廻間3
2	I KT60B-SZ01	(11×11)	3.5・0.5	廻間5
3	I KT60A-SZ02		2.5・0.3	廻間4
4	I KM60A-SD04		3.3・0.6	廻間3
5	I KM60A-SD09		(3.0)×0.4	廻間3
6	I KM60B-SD04	(9.5以上×)	4.5・0.35	廻間4

土坑

SK	調査区番号	長軸・短軸・深(m)	時期
1	I KM61-SK01	3.5・2.2・0.35	江戸
2	I KM61-SK02	2.2・2.2・0.3	江戸
3	I KM61-SK03	2.6・2.5・	江戸
4	I KM61-SK04	2.5・2.7・0.45	江戸
5	I KM61-SK05	3.8・3.4・0.8	江戸
6	I KM61-SK06	1.2・1.2・	江戸
7	I KM61-SK07	3.0・2.2・	江戸
8	I KM61-SK08	1.5・1.4・0.35	江戸
9	I KM61-SK09	0.8・0.7・0.3	江戸
10	I KM61-SK10	0.7・0.6・0.35	江戸
11	I KM61-SK11	1.2・0.9・0.6	江戸
12	I KM61-SK12	1.2・1.1・0.15	江戸
13	I KM61-SK13	1.0・1.0・	江戸
14	I KM61-SK14	1.3・1.2・0.2	江戸
15	I KM61-SK15	1.5・1.3・0.7	江戸
16	I KM60B-SK01	1.2・1.1・0.7	江戸
17	I KM60B-SK06	1.2・1.0・0.35	古墳初
18	I KM60A-SK21	2.2・2.2・0.5	鎌倉
19	I KM60A-SK24	6.5・3.0・0.25	古墳初
20	I KM60A-SK25	5.0・3.2・0.35	古墳初
21	I KM60B-SK04	2.2・1.8・0.15	古墳初
22	I KM60B-SK03	2.2・1.4・0.3	古墳初
23	I KM60A-SK20	2.5・1.5・0.5	古墳初
24	I KM60B-SK02	2.6・1.8・0.15	古墳初
25	I KM60B-SK01	1.5・1.2・0.25	古墳初
26	I KM60A-SK07	1.9・1.3・0.4	古墳初
27	I KM60A-SK08	2.2・1.7・0.2	古墳初
28	I KM60A-SK22	1.8・1.1・0.15	古墳初
29	I KM60A-SK10	1.6・1.5・0.4	古墳初
30	I KM60A-SK13	1.8・1.3・0.34	古墳初
31	I KT60A-SK07	1.5・1.5・0.2	鎌倉
32	I KT60B-SK24	4.0・2.9・0.8	室町
33	I KT60B-SK26	・0.8	奈良
34	I KT60A-SK41	1.3・0.5・0.15	古墳初
35	I KT60A-SK42	1.2・0.5・0.15	古墳初
36	I KT60A-SK43	1.0・0.6・0.14	古墳初
37	I KT60A-SK44	1.3・1.0・0.05	古墳初
38	I KT60A-SK45	0.9・0.6・0.1	古墳初
39	I KT60A-SK46	0.7・0.5・0.1	古墳初
40	I KT60A-SK47	1.4・0.5・0.15	古墳初
41	I KT60A-SK48	0.6・0.5・0.1	古墳初
42	I KT60A-SD12	2.5・0.4・0.15	古墳初
50	I KM60A-SK23	2.6・2.3・0.52	古墳初
51	I KM60A-SD13 SB23	(7.5)・2.5・0.35	古墳初
52	I KM60A-SD06	9.0・1.8・0.2	古墳初

土壙

SX	調査区番号	長軸・短軸・深(m)
1	I KT61-SK08	3.6・2.1・0.53
2	I KT61-SK07	4.6・1.9・0.51
3	I KT61-SK06	(3.0)・1.8・0.50
4	I KT61-SK05	(1.0)・(0.6)・0.35
5	I KT61-SK01	4.1・2.6・0.51
6	I KT61-SK02	(1.4)・1.4・0.25
7	I KT61-SK03	3.2・1.4・0.30
8	I KT61-SK09	(3.0)・1.7・0.30
9	I KT61-SK04	(3.0)・1.5・0.48
10	IKT60A-SK14	(2.0)・1.1・0.15
11	IKT60A-SK13	2.6・0.85・0.3
12	IKT60A-SK12	2.3・1.1・0.5
13	IKT60A-SK11	2.1・1.1・0.4
14	IKT60A-SK27	2.6・1.2・0.2
15	IKT60A-SK32	2.2・1.1・0.5
16	IKT60A-SK33	2.9・1.7・0.6
17	IKT60A-SK31	2.1・1.1・0.35
18	IKT60A-SK29	2.1・1.1・0.35
19	IKT60A-SK28	3.0・1.3・0.6
20	IKT60A-SK30	4.5・2.5・0.5
21	IKT60A-SK24	2.3・1.3・0.3
22	IKT60A-SK25	3.5・2.0・0.15
23	IKT60A-SK21	1.8・1.2・0.15
24	IKT60A-SK23	2.5・1.3・0.4
25	IKT60A-SK22	2.9・1.6・0.15
26	IKT60A-SK26	4.2・1.7・0.6
27	IKT60A-SK18	1.8・0.8・0.35
28	IKT60A-SK19	2.5・1.2・0.3
29	IKT60A-SK20	(2.2)・1.3・0.25
30	IKT60A-SK17	1.1・0.65・0.2
31	IKT60A-SK16	2.9・1.7・0.55
32	IKT60A-SK15	2.9・1.2・0.3
33	IKT60B-SK21	(3.0)・(1.5)・0.25
34	IKT60B-SK20	3.2・1.6・0.2
35	IKT60B-SK19	3.0・1.2・0.4
36	IKT60B-SK18	2.0・1.0・0.3
37	IKT60B-SK01	2.9・1.2・0.2
38	IKT60B-SK17	2.5・1.5・0.3
39	IKT60B-SK16	5.2・1.8・0.3
40	IKT60B-SK22	(1.8)・1.4・0.2
41	IKT60B-SK04	3.0・1.4・0.2
42	IKT60A-SK38	(1.7)・1.7・0.4
43	IKT60B-SK06	4.1・1.8・0.7
44	IKT60B-SK15	2.4・1.4・0.2
45	IKT60B-SK14	2.4・2.2・0.35
46	IKT60B-SK02	2.5・1.1・0.25
47	IKT60B-SK03	1.2・0.6・0.3
48	IKT60B-SK07	2.9・1.6・0.2
49	IKT60A-SK36	(2.4)・(1.5)・0.3
50	IKT60A-SK37	3.0・1.0・0.8
51	IKT60A-SK34	(1.0)・1.3・0.5
52	IKT60B-SK28	(2.0)・(1.0)・0.3
53	IKT60B-SK27	2.2・1.5・0.2

井戸

SE	調査区番号	長軸・短軸・深(m)	時期	備考
1	I KM61-SE01	1.8・1.8・1.2	江戸	
2	I KM61-SE02	1.9・1.9・1.7	江戸	桶抜取
3	I KM61-SE03	1.4・1.3・1.35	江戸	
4	I KM61-SE04	0.8・0.7・1.35	江戸	桶抜取
5	I KM61-SE05	2.3・2.2・1.0	江戸	
6	I KM61-SE06	1.1・1.0・0.7	江戸	
7	I KM61-SE07	2.1・1.9・0.75	江戸	
8	I KM61-SE08	1.2・1.2・1.3	江戸	桶抜取
9	I KM61-SE09	1.2・1.2・1.0	江戸	桶2段
10	I KM61-SE10	1.0・0.9・0.6	江戸	
11	I KM61-SE11	1.5・1.5・0.9	江戸	
12	I KM61-SE12	1.1・1.0・1.3	江戸	
13	I KM61-SE13	1.1・0.9・0.75	江戸	
14	I KM61-SE14	2.2・2.0・1.5	江戸	
15	I KM61-SE15	1.4・1.3・0.6	江戸	植物茎組
17	I KM61-SE17	2.0・2.0・0.5	江戸	
18	I KM60B-SE01	1.5・1.4・0.8	江戸	基底に笊
19	I KM60B-SE02	1.4・1.2・0.5	室町	
20	I KM60B-SE03	0.9・0.8・0.6	江戸	桶1段
21	I KM60A-SE02	1.9・1.7・0.8	江戸	
22	I KM60A-SE03	2.1・2.0・0.7	江戸	
23	I KM60A-SE01	2.4・2.2・0.7	江戸	
24	I KM60A-SE04	1.8・1.6・0.5	江戸	
25	I KM60B-SE08	1.4・1.3・0.45	古墳初	
26	I KM60B-SE11	2.0・2.0・1.0	古墳初	
27	I KM60A-SE07	1.5・1.4・1.0	平安	曲物
28	I KM60B-SE10	1.2・1.1・0.4	古墳後	
29	I KM60B-SE09	1.7・1.6・0.4	室町	曲物
30	I KM60B-SE07	2.0・1.8・0.5	室町	曲物
31	I KT60A-SE04	1.2・1.1・1.0	鎌倉	
32	I KT60A-SE06	1.3・1.2・0.9	鎌倉	曲物
33	I KT60A-SE03	1.8・1.7・0.9	室町	曲物
34	I KT60A-SK09	0.8・0.8・0.7	鎌倉	
35	I KT60A-SE02	2.3・2.1・1.0	鎌倉	曲物
36	I KT60A-SE08	0.8・0.8・0.7	鎌倉	
37	I KT60A-SE05	1.8・1.6・0.8	鎌倉	
38	I KT60A-SE01	2.8・2.6・0.7	鎌倉	
39	I KT60A-SE07	1.3・1.3・0.7	鎌倉	
40	I KM60B-SE12	2.8・1.8・1.3	江戸	桶2段

挿図

20・21図	登録番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	備考
1	I KM60A-1109	須恵器高杯	13.2		
2	I KM60A-1107	須恵器高杯	17.5		
3	I KM60B-1002	須恵器長頸壺	8.8	17.4	
4	I KM60A-1119	須恵器杯身	10.1	3	
5	I KM60A-1118	須恵器杯身	9	3.3	
6	I KM60B-1003	須恵器杯身	12.6	4.8	
7	I KM60A-1117	須恵器杯身	13	5.5	
8	I KM60A-1116	須恵器杯身	11	5.1	
9	I KM60A-1108	須恵器短頸壺			
10	I KM60A-1105	須恵器甑	24	27.8	
11	I KM60B-1001	土師器甕	15.6	18.7	
12	I KM60B-1000	土師器甕	17		
13	I KM60A-1111	土師器杯	20.6	2.6	赤褐色
14	I KM60A-1115	土師器甕	21.6	42.8	
15	I KM60A-1030	灰釉椀	15.8	5.7	
16	I KM60A-1024	灰釉椀	14.8	4.5	
17	I KM60A-1023	灰釉椀	15.8	4.5	
18	I KM60A-1029	灰釉椀	14	4.1	
19	I KM60A-1022	灰釉椀	15.3	4.5	
20	I KM60A-1047	灰釉系椀	16.1	5.9	
21	I KM60A-1055	灰釉系椀	16.2	4.8	
22	I KM60A-1025	灰釉皿	14.4	2.2	

20・21図	登録番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	備考
23	I KM60A-1027	灰釉皿	13.4	2.7	段皿
24	I KM60A-1026	灰釉皿	12.9	2.5	
25	I KM60A-1040	灰釉皿	10.6	2.4	段皿
26	I KM60A-1028	灰釉皿	5.9	3	
27	I KM60A-1041	緑釉椀	16	(6.8)	破片
28	I KM60A-1121	灰釉系椀	15	5.2	
29	I KM60A-1057	灰釉系椀	14	4.8	
30	I KM60A-1036	土鍋	21		清郷型
31	I KM60A-1035	土鍋	22		清郷型
32	I KM60A-1037	土鍋	22.5		伊勢型
33	I KM60A-1100	土鍋	23.8		伊勢型
34	I KM60A-1043	灰釉系皿	9.5	2.7	
35	I KM60A-1044	灰釉系皿	9.6	2.6	
36	I KM60A-1050	灰釉系皿	7.8	2.5	
37	I KM60A-1053	灰釉系皿	7.9	2.1	
38	I KM60A-1056	灰釉系皿	8.2	2	
39	I KM60A-1045	灰釉系皿	8.2	1.7	
40	I KM60A-1052	灰釉系皿	8.3	1.7	
41	I KM60A-1049	灰釉系皿	8.7	1.7	
42	I KM60A-1046	灰釉系皿	8.3	1.8	
43	I KM60A-1054	灰釉系皿	8.3	1.8	
44	I KM60A-1039	土器皿			

加工円盤

21図	登録番号	分類	長軸(cm)	短軸(cm)	重さ(g)	備考
45	I KM60A-1068	A_1	2.9	2.6	10.6	
46	I KM60A-1069	A_1	2.2	1.8	6.1	
47	I KM60A-1070	A_1	2.8	2.2	11.4	
48	I KM60A-1075	A_1	3	2.5	9.9	
49	I KM60A-1076	A_1	3	2.6	12.4	
50	I KM60A-1077	A_1	2.8	2.2	11.5	
51	I KM60A-1059	A_1	2.7	2.1	8	
52	I KM60A-1060	A_1	2.4	2	6.4	
53	I KM60A-1061	A_1	2.6	2.1	5.9	
54	I KM60A-1085	A_1	2.8	2.6	7.7	
55	I KM60A-1084	A_1	3.7	2.9	16	
56	I KM60A-1096	A_1	3.5	2.7	17.1	
57	I KM60A-1073	A_1	2.6	2.2	6.7	
58	I KM60A-1063	A_1	2.7	2.2	9.7	
59	I KM60A-1064	A_1	2.8	2.5	10	
60	I KM60A-1065	A_1	3.2	3	14.5	
61	I KM60A-1087	A_1	2.2	2	5.8	
62	I KM60A-1094	A_1	3.5	2.8	13.3	

21図	登録番号	分類	長軸(cm)	短軸(cm)	重さ(g)	備考
63	I KM60A-1095	A_1	2.8	1.7	8	
64	I KM60A-1097	A_1	2.5	2.1	6.1	
65	I KM60A-1088	A_1	3.6	2.6	12.4	
66	I KM60A-1089	A_1	2.3	2.2	5.8	
67	I KM60A-1090	A_1	2.6	2.3	8.4	
68	I KM60A-1091	A_1	2.9	2.6	12.8	
69	I KM60A-1072	B	2.9	2.5	15	
70	I KM60A-1071	B	2.8	2.6	11	
71	I KM60A-1074	B	2.4	2	6.2	
72	I KM60A-1058	B	2.9	2.4	12.1	
73	I KM60A-1066	B	3	2.8	12.6	
74	I KM60A-1067	A_2	2.5	2	6.6	
75	I KM60A-1083	A_2	2.4	2.3	6.9	
76	I KM60A-1062	B	2.9	2.5	12.6	
77	I KM60A-1086	B	2.1	1.9	4.8	
78	I KM60A-1093	B	2.5	2.2	8.6	
79	I KM60A-1078	B	2.8	2.5	11.6	
80	I KM60A-1092	A_1	1.9	1.7	4.4	

挿図

第22・23図	登録番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	備考
1	IKT60A-3	灰釉系椀	14.6	5.3	
2	IKT60A-13	灰釉系椀	14.8	5.2	
3	IKT60A-6	灰釉系椀	15.6	5.3	
4	IKT60A-12	灰釉系椀	14.9	5.7	
5	IKT60A-2	灰釉系椀	14.7	5.4	
6	IKT60A-8	灰釉系椀	15.7	5.7	
7	IKT60A-7	灰釉系椀	16.0		
8	IKT60A-5	灰釉系椀	14.7	5	
9	IKT60A-14	土鍋	26.3		伊勢型
10	IKT60A-1	灰釉系皿	8	2	
11	IKT60A-9	灰釉系皿	7.9	1.4	
12	IKT60A-10	灰釉系皿	8	1.85	
13	IKT60A-4	灰釉系皿	8.4	2	
14	IKT60A-11	灰釉系皿	8.1	2.1	
15	IKT60A-15	灰釉系椀	13.4	5.2	
16	IKT60A-17	灰釉系椀	13.9	5.3	
17	IKT60A-19	灰釉系椀			
18	IKT60A-20	灰釉系椀			
19	IKT60A-18	灰釉系椀	15.2	5.55	
20	IKT60A-16	土鍋	26.6		伊勢型
21	IKT60A-32	灰釉系椀	17.4		
22	IKT60A-34	灰釉系椀	14.7		
23	IKT60A-30	灰釉系椀	13.4	4.5	
24	IKT60A-33	灰釉系椀			
25	IKT60A-31	灰釉系椀	15.4	5.1	
26	IKT60A-38	灰釉系椀	14.2	6	
27	IKT60A-42	灰釉系椀	13.4	5.4	
28	IKT60A-39	灰釉系椀	13.2	5	
29	IKT60A-40	灰釉系椀	14.2		
30	IKT60A-41	灰釉系椀	14.4	5.3	
31	IKT60A-37	灰釉系椀	14.6	5.5	
32	IKT60A-36	灰釉系皿	9.3	1.9	内型成形
33	IKT60A-35	土器・皿	8.4		
34	IKT60A-21	灰釉系鉢	26.6		
35	IKT60A-26	陶丸			
36	IKT60A-27	陶丸			
37	IKT60A-23	灰釉系皿	8.8	1.5	
38	IKT60A-24	灰釉系皿	8.0	1.5	精製
39	IKT60A-22	灰釉系皿	8.0	1	精製
40	IKT60A-25	施釉皿	9.1	2	「上」の墨書
41	IKT60A-29	灰釉系椀	14.5	4.9	精製
42	IKT60A-28	灰釉系椀	12.2	4.0	精製
43	IKT60A-43	土器・皿	9	1.9	内型成形
44	IKT60A-45	灰釉系椀	15.1	5	
45	IKM60B-1036	灰釉系鉢			

第22・23図	登録番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	備考
46	IKM60B-1045	灰釉系椀	14	5.2	
47	IKM60B-1038	灰釉系椀	14	5	
48	IKM60B-1037	灰釉系椀	14	6	
49	IKM60B-1041	灰釉系椀	14	5.7	
50	IKM60B-1039	灰釉系皿	8.4	1.6	
51	IKM60B-1040	灰釉系皿	8.4	1.6	
52	IKM60B-1043	灰釉系皿	7.5	1	精製
53	IKM60B-1044	灰釉系皿	8.4	1.3	精製
54	IKM60B-1042	陶丸			
55	IKM60B-1020	灰釉系甕	25		常滑
56	IKM60B-1029	土鍋			粗製
57	IKM60B-1027	灰釉系椀	14	5.2	精製
58	IKM60B-1026	灰釉系椀	14	5	精製
59	IKM60B-1024	灰釉系椀	15.5		精製

第24図	登録番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	備考
1	IKM60A-1006	土鍋	11.6		三足両耳
2	IKM60A-1007	土鍋	14.2		三足両耳
3	IKM60A-1009	土鍋	11.3		三足両耳
4	IKM60A-1008	水指	16.3		鉄釉
5	IKM60A-1013	皿	12	2.8	長石釉
6	IKM60A-1011	皿	11.5	2.1	長石釉
7	IKM60A-1012	皿	11.2	2.2	長石釉
8	IKM60A-1003	皿	10.2	1.9	長石釉
9	IKM60A-1004	向付	8.8	8.2	長石釉
10	IKM60A-1005	徳利	4.1		鉄釉
11	IKM60A-1002	椀	11.2	6.1	灰釉
12	IKM60A-1001	椀	11.5	6.1	長石釉
13	IKM60A-1010	椀	11.6		鉄釉天目
14	IKM60A-1017	土器・皿	5	0.7	手捏
15	IKM60A-1015	土器・皿	4.8	1	手捏
16	IKM60A-1016	土器・皿	4.6	1.1	手捏
17	IKM60A-1014	土器・皿	4.5	0.7	手捏
18	IKM60A-1019	土器・皿	4.2	0.9	手捏
19	IKM60A-1020	土器・皿	4.3	1.2	手捏
20	IKM60A-1103	土器鍋	29.2	7	内耳
21	IKM60A-1000	火鉢	28.8		
22	IKM60A-1031	土器・鍋	11.8	16.5	三足両耳
23	IKM60B-1032	水注	4	5.9	灰釉
24	IKM60B-1035	土器・皿	8.5	1.5	糸切底
25	IKM60B-1034	皿	12.5	2.3	長石釉

砥石

第16図	登録番号	遺構	備考
1	IKT60A-S-1	SZ01	3面使用凝灰岩
2	IKM60B-S-2	SB53	4面使用凝灰岩
3	IKM60B-S-1	SB60	3面使用凝灰岩
＊右図	IKM60B-S-4	SB40	11.2g　軽石、浮遊可 多面使用

SB40　1：4

図版 5 ～ 8

SZ01	登録番号	分類	口径	器高
1	I KT60A-E-119	甕 A_1	14.2	
2	I KT60A-E-107	甕 A_5	16.6	
3	I KT60A-E-114	甕 C_2	19	
4	I KT60A-E-114	甕 C_2	19	
5	I KT60A-E-157	甕 A(タタキ)	19.5	
6	I KT60A-E-158	甕A(5と同じ)		
7	I KT60A-E-118	鉢 A_3	18	
8	I KT60A-E-102	器台 A_2	20.6	
9	I KT60A-E-108	鉢 A_4	16	14
10	I KT60A-E-105	高杯 A_1	24.4	
11	I KT60A-E-106	高杯 A_1		
12	I KT60A-E-100	高杯 A_1	20	
13	I KT60A-E-103	高杯 A_1		
14	I KT60A-E-112	高杯 A_3	28.6	
15	I KT60A-E-111	高杯 A_3	26	
16	I KT60A-E-113	高杯 A_2	26.6	
17	I KT60A-E-101	壷 B	8.9	
18	I KT60A-E-109	壷 B	14.6	
19	I KT60A-E-104	壷 C		
20	I KT60A-E-165	壷 E_1	16	34
21	I KT60A-E-159	壷 E_2	18	
22	I KT60A-E-163	壷 F		
23	I KT60A-E-162	高杯 B_2	12.6	10
24	I KT60A-E-160	器高		
25	I KT60A-E-164	鉢 B_3	15	6.7
26	I KT60A-E-161	手焙		
27	I KT60A-E-124	器台 A_2	18.8	
28	I KT60A-E-127	高杯 A_1		
29	I KT60A-E-123	壷 A		
30	I KT60A-E-128	高杯 A_2		
31	I KT60A-E-122	高杯 A_2	24.8	
32	I KT60A-E-121	壷 C_3	9.2	
33	I KT61-E-137			
34	I KT60A-E-133	高杯 A_2		
35	I KT61-E-135	高杯		
36	I KT60A-E-115	高杯 A_1		
37	I KT60A-E-131	甕 A		
38	I KT60A-E-129	器台 A		
39	I KT61-E-136	甕 B_1	19.6	
40	I KT60A-E-126	壷 B	20	
41	I KT60A-E-130	器台 A_2	22	
42	I KT60A-E-134	甕 B_2	15	

SU01	登録番号	分　類	口径	器高
43	I KT60A-E-156	甕 A_1	21	
44	〃	甕 A_1(43と同じ)	〃	
45	I KT60A-E-154	鉢 A_1	18.6	
46	I KT60A-E-152	鉢 A_3		
47	I KT60A-E-138	壷 A_1		
48	I KT60A-E-155	甕 B_2	14.6	

SU02	登録番号	分類	口径	器高
49	I KT60A-E-141	甕 C_2	19	
50	I KT60A-E-142	甕 C_2	18	
51	I KT60A-E-139	高杯 A_2	21.2	
52	I KT60A-E-148	高杯 A_2		
53	I KT60A-E-149	高杯 A_1		
54	I KT60A-E-143	器台 A		
55	I KT60A-E-147	壷 C_1	17	
56	I KT60A-E-140	壷 C_1		
57	I KT60A-E-153	壷 B		

SZ04	登録番号	分類	口径	器高
58	I KM60A-E-467	甕 C_2	21.2	
59	I KM60A-E-465	甕 C_2	19.4	
60	I KM60A-E-459	甕 C_2	15.2	
61	I KM60A-E-461	甕 C_2	16.6	
62	I KM60A-E-451	甕 C_2	19.6	
63	I KM60A-E-460	甕 C_2	18.6	
64	I KM60A-E-463	甕 C_2	15.4	
65	I KM60A-E-457	甕 B_2	21.6	
66	I KM60A-E-456	甕 B_3	21	
67	I KM60A-E-453	甕 A_4	17.4	
68	I KM60A-E-466	甕 A_4	18	
69	I KM60A-E-452	甕 A_4	16.5	
70	I KM60A-E-178	甕 A_4	16.4	
71	I KM60A-E-449	器台 A_2		
72	I KM60A-E-450 I KM60A-E-468	高杯 A_2	22.2	
73	I KM60A-E-464	高杯 A_2		
74	I KM60A-E-446	壷 C_5	15	
75	I KM60A-E-447	甕 A_4	18.4	
76	I KM60A-E-445	甕 A		
77	I KM60A-E-173	高杯 A_2	24	21
78	I KM60A-E-455	高杯 A		
79	I KM60A-E-474	高杯 A		
80	I KM60A-E-565	壷 A_1		
81	I KM60A-E-586	壷 A_1	19	
82	I KM60A-E-470	壷 B_2	11.6	
83	I KM60A-E-469	壷 C_3	13.2	
84	I KM60A-E-475	鉢 A_2	15.0	10.7
85	I KM60A-E-471	器台 A_2	15.6	

図版 9 ～13

SZ02	登録番号	分類	口径	器高
86	I KT60B-E-10	甕 C_3	17	
87	I KT60B-E-4	甕 C_3	17.2	
88	I KT60B-E-6	甕 C_3	16.5	
89	I KT60B-E-11	甕 A_3	18.2	
90	I KT60B-E-28	甕 A_5	18.8	
91	I KT60B-E-2	甕 C_3	15	
92	I KT60B-E-8	甕 C_3		
93	I KT60B-E-3	甕 C_3	12.4	
94	I KT60B-E-1	甕 C_3		
95	I KT60B-E-7	甕 C_3	12.8	
96	I KT60B-E-9	甕 C_3	14.2	
97	I KT60B-E-33	甕 A_4	15.4	
98	I KT60B-E-29	甕 A_4	15.3	
99	I KT60B-E-5	甕 C_3	11.2	
100	I KT60B-E-13	甕 A_5	12.6	
101	I KT60B-E-18	鉢 A_4	14.5	12
102	I KT60B-E-15	鉢 A_4	12.7	
103	I KT60B-E-12	壷 C_4		
104	I KT60B-E-25	壷 C_2	9	(17.5)
105	I KT60B-E-31	高杯 A_2	25	16.5
106	I KT60B-E-17	高杯 A_2	25	
107	I KT60B-E-27	高杯 A_2	22.5	15
108	I KT60B-E-23	高杯 A_3	26	
109	I KT60B-E-20 I KT60B-E-22	高杯 A_2	26.6	
110	I KT60B-E-14	器台 A_1	17	
111	I KT60B-E-26	器台 B_1	9	9
112	I KT60B-E-19	高杯 B_2	14.4	
113	I KT60B-E-32	高杯 B_2		
114	I KT60B-E-21	高杯		
115	I KT60B-E-30	壷	19.5	19.7
116	I KT60B-E-16	壷 A_5	28.4	
117	I KT60B-E-34	壷 B_4	15.5	
118	I KT60B-E-24	壷(117と同じか)		

SB01	登録番号	分類	口径	器高
119	I KM60A-E-5	高杯 A_2	25	
120	I KM60A-E-11	高杯 A_3	24.6	
121	I KM60A-E-3	鉢 A_4	17.8	
122	I KM60A-E-4	甕 A_1	15.6	
123	I KM60A-E-10	甕 B_2	25.2	
124	I KM60A-E-12	甕 B_3	15.8	
125	I KM60A-E-8	甕 B_2	17	
126	I KM60A-E-1	甕 B_2	19.8	
127	I KM60A-E-502	甕 C_2	17.7	
128	I KM60A-E-7	甕 A	11.2	
129	I KM60A-E-9	甕 A		
130	I KM60A-E-503	壷 A		
131	I KM60A-E-501	研磨具(土器)		

SB02(上)	登録番号	分類	口径	器高
132	I KM60A-E-504	壷 A_1	18	
133	I KM60A-E-506	壷 A_1	18.5	
134	I KM60A-E-505	壷 A		
135	I KM60A-E-18	甕 A_5	19.7	
136	I KM60A-E-16	甕 C_2	18	
137	I KM60A-E-19	甕 C_2	19	
138	I KM60A-E-20	高杯 A_2	21	
139	I KM60A-E-21	高杯 A_2		

SB02	登録番号	分類	口径	器高
140	I KM60A-E-254	高杯 A_1	21.5	24
141	I KM60A-E-251	高杯 A_1	25	24
142	I KM60A-E-252	高杯 A_1	22.5	22
143	I KM60A-E-15	高杯 A_1	22.2	
144	I KM60A-E-253	高杯 A_1	19	
145	I KM60A-E-248	甕 A_1	15	23.2
146	I KM60A-E-243 I KM60A-E-244	甕 A_2	18	
147	I KM60A-E-14	甕 A_2	15.2	
148	I KM60A-E-245	甕 A		
149	I KM60A-E-250	壷 C_1		
150	I KM60A-E-246	壷 C_1	13	
151	I KM60A-E-249	壷 C_2		
152	I KM60A-E-247	壷 B		

SB03	登録番号	分類	口径	器高
153	I KM60A-E-256	高杯 A_2	25	22
154	I KM60A-E-53	高杯 A_2	24	
155	I KM60A-E-241	高杯 A_2	22	19.5
156	I KM60A-E-239	高杯 A_2	22.5	16.8
157	I KM60A-E-240	高杯 A_2	26	18
158	I KM60A-E-47	高杯 A_2		
159	I KM60A-E-26	壷 C_1		
160	I KM60A-E-43	甕 A_1	18	
161	I KM60A-E-28	甕 A_5	19	
162	I KM60A-E-41	甕 A_2	18	
163	I KM60A-E-33	甕 A	9.6	
164	I KM60A-E-32	鉢 A_3	27.8	
165	I KM60A-E-38	甕 C_2	16.8	
166	I KM60A-E-242	甕 C_2	18.2	
167	I KM60A-E-35	器台 A_2		
168	I KM60A-E-23	高杯 B_2	13	4.3
169	I KM60A-E-22	壷 C_1	20	8.5
170	I KM60A-E-26	壷 B_1	15	
171	I KM60A-E-34	甕 A_3	16.8	
172	I KM60A-E-39	甕 B_2	16	

図版14～16

SB06	登録番号	分類	口径	器高
173	I KM60A-E-70	甕 C_3	18.5	
174	I KM60A-E-71	甕 C_4	19	
175	I KM60A-E-62	甕 C_3	16.8	
176	I KM60A-E-508	甕 C_3	16.4	
177	I KM60A-E-65	甕 C_3	15.	
178	I KM60A-E-67	甕 C_4	13	
179	I KM60A-E-63	甕 C_3	17	
180	I KM60A-E-57	高杯 C	13.6	
181	I KM60A-E-68	高杯 C	22	
182	I KM60A-E-69	鉢 B_2	8.5	8.1
183	I KM60A-E-58	壷 D_2		
184	I KM60A-E-61	壷 F	26.4	

SB10	登録番号	分類	口径	器高
185	I KM60A-E-370	高杯 A_2	24	
186	I KM60A-E-388	高杯 A_2		
187	I KM60A-E-371	高杯 A_2		
188	I KM60A-E-376	高杯 A_2	24	
189	I KM60A-E-382	甕 C_2	16	
190	I KM60A-E-379	受口甕	16.1	
191	I KM60A-E-381	甕 A_4	19.2	
192	I KM60A-E-387	甕 A_4	19	
193	I KM60A-E-373	甕 A_3	18	
194	I KM60A-E-372	甕 A_5	22.4	
195	I KM60A-E-384	甕 B		
196	I KM60A-E-380	器台 A_2	16.8	
197	I KM60A-E-375	高杯 A_2		
198	I KM60A-E-378	壷 B		
199	I KM60A-E-531	壷 C_5	15.6	
200	I KM60A-E-369	壷 C_5	11	(15)

SB13	登録番号	分類	口径	器高
201	I KM60A-E-82	甕 C_2	13	
202	I KM60A-E-512	甕 B_3	19.4	
203	I KM60A-E-87	甕 B_1	20.5	
204	I KM60A-E-80	高杯 A_2		
205	I KM60A-E-515	壷 A_1	17	
206	I KM60A-E-510	壷 A		
207	I KM60A-E-513	壷 A		
208	I KM60A-E-85	高杯 A_2		
209	I KM60A-E-84	甕 A		
210	I KM60A-E-88	甕 A		
211	I KM60A-E-81	ミニチュア	5.5	3.6
212	I KM60A-E-89	高杯 A_2		
213	I KM60A-E-79	器台 C		

SB14	登録番号	分類	口径	器高
214	I KM60A-E-206	甕 B_2	15	
215	I KM60A-E-207	甕 C_2	17.2	
216	I KM60A-E-209	甕 A_2	22	
217	I KM60A-E-210	高杯 B_1	17	
218	I KM60A-E-204	高杯 B		
219	I KM60A-E-203	甕 B		
220	I KM60A-E-205	高杯 A_2		
221	I KM60A-E-200	高杯 A_2		
222	I KM60A-E-201	甕 A		
223	I KM60A-E-202	甕 B		

SB17	登録番号	分類	口径	器高
224	I KM60A-E-96	甕 C_2	17.5	
225	I KM60A-E-95	甕 C_1	14	
226	I KM60A-E-97	甕 A_5	19	
227	I KM60A-E-98	鉢 A_5	14	
228	I KM60A-E-90	高杯 B_2	15	11
229	I KM60A-E-91	鉢 B_1	9	5.6
230	I KM60A-E-93	壷 B_3	12.2	
231	I KM60A-E-518	壷 A		
232	I KM60A-E-99	甕 A		
233	I KM60A-E-517	壷 C_3		
234	I KM60A-E-92	甕 B		

SB12	登録番号	分類	口径	器高
235	I KM60A-E-100	甕 C_4	16.8	
236	I KM60A-E-110	甕 C_4	18	
237	I KM60A-E-105	甕 C_4	15.2	
238	I KM60A-E-102	甕 C_4	18.2	
239	I KM60A-E-103	甕 C_4	16	
240	I KM60A-E-101	甕 C_4		
241	I KM60A-E-104	甕 C_4	16.2	
242	I KM60A-E-123	甕 C_4	17	
243	I KM60A-E-128	甕 C_4	17.2	
244	I KM60A-E-115	甕 C_5	16	
245	I KM60A-E-120	甕 C_5	12.6	
246	I KM60A-E-132	壷 D_2	12.4	12.6
247	I KM60A-E-126	壷 D_2		
248	I KM60A-E-138	鉢 B_3		
249	I KM60A-E-136	器台 B_2	9	
250	I KM60A-E-135	器台 B_2	9	9.3
251	I KM60A-E-129	器台 B_3	10.4	
252	I KM60A-E-134	器台 B_4	9.5	8
253	I KM60A-E-137	鉢 B_4		
254	I KM60A-E-109	甕 C_4		
255	I KM60A-E-119	高杯 A_4	23	
256	I KM60A-E-113 I KM60A-E-127	高杯 A_4	24	
257	I KM60A-E-133 I KM60A-E-118	高杯 A_4		
258	I KM60A-E-112	高杯 A_4	29.6	
259	I KM60A-E-125	高杯 A_4		8.5
260	I KM60A-E-107	高杯 A_4		
261	I KM60A-E-106	壷 B_5	18	
262	I KM60A-E-108	壷 B		

図版17～20

SB18	登録番号	分類	口径	器高
263	I KM60A-E-273	甕 B_2	20.6	
264	I KM60A-E-281	甕 B_3	19	
265	I KM60A-E-275	甕 B_1	16.4	
266	I KM60A-E-532	壷 A_2	22	
267	I KM60A-E-529	壷 A		
268	I KM60A-E-530	壷 A		
269	I KM60A-E-533	壷 A		
270	I KM60A-E-270	甕 A		
271	I KM60A-E-280	甕 A_1	19	
272	I KM60A-E-274	甕 A_4	17	
273	I KM60A-E-279	甕 C_3	17.6	
274	I KM60A-E-531	甕 C_3	15.6	
275	I KM60A-E-528	壷 B_1	16.8	
276	I KM60A-E-278		25.4	
277	I KM60A-E-277	壷	12.2	
278	I KM60A-E-527	壷	11.7	
279	I KM60A-E-271	高杯 A_2		
280	I KM60A-E-268	高杯 A_2		
281	I KM60A-E-276	鉢 A_6		

SB19	登録番号	分類	口径	器高
282	I KM60A-E-283	甕 B_1	17.5	
283	I KM60A-E-282	甕 A		
284	I KM60A-E-534	高杯 A_1		
285	I KM60A-E-284	高杯 A_2		

SB20	登録番号	分類	口径	器高
286	I KM60A-E-260	壷 B		
287	I KM60A-E-261	甕 B_2	16.8	
288	I KM60A-E-264	甕 B_2	13	
289	I KM60A-E-263	甕 A_4	15	
290	I KM60A-E-262	甕 A		
291	I KM60A-E-523	壷 A		

SB23	登録番号	分類	口径	器高
292	I KM60A-E-266	甕 C_2	22.6	
293	I KM60B-E-627	甕 C_2	22.6	
294	I KM60B-E-615	甕 C_2	18.6	
295	I KM60B-E-618	高杯 A_3		
296	I KM60B-E-617	壷 B_2	14.2	
297	I KM60B-E-630	壷 B_2	17	
298	I KM60B-E-626	甕 A_5	15.8	
299	I KM60B-E-624	高杯 A_2		
300	I KM60B-E-622	高杯 A_1		
301	I KM60B-E-620	甕 A_1	16	
302	I KM60B-E-625	甕 A_1	19	
303	I KM60B-E-623	壷 A		
304	I KM60B-E-614	壷 A		
305	I KM60B-E-621	壷 A		
306	I KM60B-E-899	鉢 B_1	12	5.6

SB24	登録番号	分類	口径	器高
307	I KM60A-E-318	甕 C_2	16.6	
308	I KM60A-E-540	甕 A_4	16	
309	I KM60A-E-310	鉢 A_4	15.5	
310	I KM60A-E-311	高杯 A_2		
311	I KM60A-E-317	甕 A_4	11.6	
312	I KM60A-E-315	高杯 A_2		
313	I KM60A-E-313	高杯 B_1	19.8	
314	I KM60A-E-312	鉢 A_5	20.5	
315	I KM60A-E-316	甕 C_4	18.4	
316	I KM60A-E-562	鉢 B_3	10.6	

SB26	登録番号	分類	口径	器高
317	I KM60A-E-319	高杯 B_1	18	
318	I KM60A-E-543	甕 B_2	16	
319	I KM60A-E-541	甕 A_5	16	
320	I KM60A-E-320	甕 A		

SB27	登録番号	分類	口径	器高
321	I KM60A-E-290	高杯 A_2	23	
322	I KM60A-E-301	高杯 A_2		
323	I KM60A-E-309	高杯 A_2		
324	I KM60A-E-294	壷 C_1	16.8	
325	I KM60A-E-286	壷 B_1	19.4	
326	I KM60A-E-293	器台 A_2	18	
327	I KM60A-E-292	壷 B_1	13	
328	I KM60A-E-308	鉢 A_6		
329	I KM60A-E-535	高杯 C	7	
330	I KM60A-E-295	甕 B_3	17.5	
331	I KM60A-E-291	甕 C_2	15.2	
332	I KM60A-E-298	甕 B_2	17.2	
333	I KM60A-E-300	高杯 B_2		
334	I KM60A-E-307	高杯 B_2		
335	I KM60A-E-287	高杯 C	13.5	
336	I KM60A-E-303	高杯 B_2	11	
337	I KM60A-E-297	高杯 B_2		
338	I KM60A-E-299	高杯 B_2		
339	I KM60A-E-289	高杯 A		
340	I KM60A-E-288	甕 A		
341	I KM60A-E-536	壷 A		
342	I KM60A-E-296			
343	I KM60A-E-302			
344	I KM60A-E-305	甕 C_3	18	
345	I KM60A-E-306	甕 C_4	18	
346	I KM60A-E-304	甕 A_4	18	
347	I KM60A-E-285	甕 C_6	26	

SB29	登録番号	分類	口径	器高
348	I KM60A-E-345	甕 C_2	27	
349	I KM60A-E-344	甕 A_2	21.8	
350	I KM60A-E-346	甕 A		

図版20～22

SB30	登録番号	分類	口径	器高
351	I KM60B-E-605	甕 C_1	22	
352	I KM60B-E-597	甕 B_3	20	
353	I KM60B-E-591	甕 B_2	17	
354	I KM60B-E-613	甕 C_2	20	
355	I KM60B-E-610	甕 B_2	15	
356	I KM60B-E-592	甕 B		
357	I KM60B-E-598	甕 B_1	25	
358	I KM60B-E-595	甕 B_2	16	
359	I KM60B-E-601	高杯 B_2	17	
360	I KM60B-E-612	鉢 A_5	15.6	
361	I KM60B-E-609	高杯 A_2	22	
362	I KM60B-E-596	高杯 A_2	22	
363	I KM60B-E-603	高杯 A_2		
364	I KM60B-E-600	高杯 A_2		
365	I KM60B-E-604	高杯 A_2		
366	I KM60B-E-608	壷 B		
367	I KM60B-E-593	器台 A_2	14	
368	I KM60B-E-631		8.8	
369	I KM60B-E-607	甕 A		
370	I KM60B-E-606	甕 A		
371	I KM60B-E-602			
372	I KM60B-E-614	加工円盤		
373	I KM60B-E-633	壷 A		
374	I KM60B-E-594	甕 A_4	16	
375	I KM60B-E-634		12	

SB32	登録番号	分類	口径	器高
376	I KM60B-E-821	甕 B_2	15.5	
377	I KM60B-E-812	甕 C_2	16	
378	I KM60B-E-823	甕 B_2	15.4	
379	I KM60B-E-819	甕 A_4	16	
380	I KM60B-E-822	高杯 A_2		
381	I KM60B-E-827	甕 B_2	23.4	
382	I KM60B-E-808	壷 A_2	20	
383	I KM60B-E-820	壷 A_2		
384	I KM60B-E-825	壷 B_1	16	
385	I KM60B-E-807	高杯 A_2		
386	I KM60B-E-806	高杯 A_2		
387	I KM60B-E-804	加工円盤		
388	I KM60B-E-813	壷		
389	I KM60B-E-805	高杯 B_2	17.8	
390	I KM60B-E-826	高杯 B_1	19	
391	I KM60B-E-818	壷 B_1	20	
392	I KM60B-E-803	甕 A_2	20	
393	I KM60B-E-810	高杯 A_2		
394	I KM60B-E-824	甕 A		

SB33	登録番号	分類	口径	器高
395	I KM60A-E-359	甕 C_3	14	
396	I KM60A-E-551	甕 C_3	16	
397	I KM60A-E-361	甕 C_3	18.2	
398	I KM60A-E-365	甕 C_3	14.2	
399	I KM60A-E-549	壷 C_4	6	
400	I KM60A-E-550	壷 C_4	6.6	
401	I KM60A-E-364	壷 C_1	12.6	
402	I KM60A-E-356	器台 B_1	10	
403	I KM60A-E-358	高杯 A_2	21	
404	I KM60A-E-362	高杯 A_2	16.8	
405	I KM60A-E-360	甕 A_4	18.4	
406	I KM60A-E-552	壷 A		
407	I KM60A-E-357	壷 C		
408	I KM60A-E-363	器台		
409	I KM60A-E-367	高杯		

SB34	登録番号	分類	口径	器高
410	I KM60A-E-353	甕 C_2	20.8	
411	I KM60A-E-354	甕 C_3	18	
412	I KM60A-E-355	甕 C_3	16.2	
413	I KM60A-E-352	甕 C_3	11.8	
414	I KM60A-E-547	甕 C_3		
415	I KM60A-E-350	甕 A_4	21.6	
416	I KM60A-E-348	甕 A_5	22.8	
417	I KM60A-E-347	甕 B_2	20.5	
418	I KM60A-E-349	高杯 A_2	28	
419	I KM60A-E-351	甕	14.5	
420	I KM60A-E-548	甕 A_5	11.6	

SB35	登録番号	分類	口径	器高
421	I KM60A-E-556	甕 C_2	17.8	
422	I KM60A-E-392	甕 A_3	21	
423	I KM60A-E-393	壷 B_2	13.4	
424	I KM60A-E-555	研摩痕(土器)		
425	I KM60A-E-394	壷 D_2	(12.5)	

SB31	登録番号	分類	口径	器高
426	I KM60B-E-828	高杯 B_1	20.2	(19)
427	I KM60B-E-811	甕 C_3	16.4	
428	I KM60B-E-814	甕 C_3	16.2	
429	I KM60B-E-809	甕 B_2	16.4	

図版23～25

SB38	登録番号	分類	口径	器高
430	I KM60B-E-438	甕 C_3	17.4	
431	I KM60B-E-430	甕 C_3	18.2	
432	I KM60B-E-455	甕 C_3	14	
433	I KM60B-E-448	甕 B_3	20	
434	I KM60B-E-456	甕 B_3	18	
435	I KM60B-E-458	甕 B_3	21	
436	I KM60B-E-433	甕 B_2	20.6	
437	I KM60B-E-439	甕 B_2	26	
438	I KM60B-E-444	甕 A_4	23	
439	I KM60B-E-452	甕 C_3	13.2	
440	I KM60B-E-450	甕 C_3	14	
441	I KM60B-E-443	受口甕	14.6	
442	I KM60B-E-445	甕 B_1	15.6	
443	I KM60B-E-428	甕 B_1	15.8	
444	I KM60B-E-434	甕 A_5	11.8	
445	I KM60B-E-435	壷 B_5	12.6	
446	I KM60B-E-453	壷 C_1	9	
447	I KM60B-E-436	壷 B	9.8	
448	I KM60B-E-449	壷		
449	I KM60B-E-446	壷 B_3	16	
450	I KM60B-E-447	壷 A		
451	I KM60B-E-459	壷	17	
452	I KM60B-E-461	高杯 A_2		
453	I KM60B-E-454	甕 A_4	10.8	
454	I KM60B-E-457	甕 A		
455	I KM60B-E-437	高杯 A_3		
456	I KM60B-E-431	壷 A		
457	I KM60B-E-429	壷		
458	I KM60B-E-442	壷		

SB46	登録番号	分類	口径	器高
459	I KM60B-E-835	高杯(畿内系)	22	
460	I KM60B-E-534	壷 A		
461	I KM60B-E-533	甕 C_2		
462	I KM60B-E-531	高杯 A_2		

SB39	登録番号	分類	口径	器高
463	I KM60B-E-359	高杯 A_2	23.4	
464	I KM60B-E-389	高杯 A_3	25	
465	I KM60B-E-366	甕 A_3	21	
466	I KM60B-E-374	甕 A_5	17.6	
467	I KM60B-E-369	壷 A_4	23.6	
468	I KM60B-E-362	鉢 A_5	16	
469	I KM60B-E-371	高杯(畿内系)		
470	I KM60B-E-391	甕 C_2	16.6	
471	I KM60B-E-378	甕 C_2	16.4	
472	I KM60B-E-372	甕 A_1	15.6	
473	I KM60B-E-363	甕 A_4	15.2	
474	I KM60B-E-390	壷 C_5	14.2	
475	I KM60B-E-385	高杯 A_2		
476	I KM60B-E-383	高杯 A_2		

SB39	登録番号	分類	口径	器高
477	I KM60B-E-364	甕 C_2		
478	I KM60B-E-388	鉢 B_1	7.7	5
479	I KM60B-E-360	壷 C_1	12	
480	I KM60B-E-386	高杯 C		
481	I KM60B-E-370	高杯 A_2		
482	I KM60B-E-373	壷 A_2	22.6	
483	I KM60B-E-376	壷 F	21.8	
484	I KM60B-E-367	高杯 A_4	23.5	
485	I KM60B-E-356	高杯 A_4		
486	I KM60B-E-361	高杯 A_4		
487	I KM60B-E-358	甕 C_3	19	
488	I KM60B-E-380	甕 C_3	16.4	
489	I KM60B-E-375	甕 C_3	12.4	
490	I KM60B-E-384	甕 C_3	11.6	
491	I KM60B-E-368	甕 C_3	11.8	
492	I KM60B-E-377	甕 B_2	15.4	
493	I KM60B-E-387	高杯		
494	I KM60B-E-379	高杯 C		
495	I KM60B-E-365	高杯 A_4		
496	I KM60B-E-353	甕 A		
497	I KM60B-E-357	甕 A		

SB40	登録番号	分類	口径	器高
498	I KM60B-E-411	甕 C_2	19	
499	I KM60B-E-417	甕 C_3	16.6	
500	I KM60B-E-400	甕 C_3	17.4	
501	I KM60B-E-419	甕 C_3	17	
502	I KM60B-E-410	甕 C_3	13.4	
503	I KM60B-E-393	甕 A_4	12.8	
504	I KM60B-E-414	甕 A_4	12.2	
505	I KM60B-E-397	甕 C_3		
506	I KM60B-E-413	甕 A_5	17.8	
507	I KM60B-E-416	甕 A_5	15.6	
508	I KM60B-E-407	甕 A_3	18.4	
509	I KM60B-E-392	甕 A_4	21	
510	I KM60B-E-394	甕 A_4	22	
511	I KM60B-E-402	甕 A		
512	I KM60B-E-404	甕 A_4	14.4	
513	I KM60B-E-418	壷 B_4	12	
514	I KM60B-E-398	壷 B_3	14	
515	I KM60B-E-403	鉢 A_3	22	
516	I KM60B-E-412	高杯 A_2	23	
517	I KM60B-E-408	高杯 A_2		
518	I KM60B-E-401	高杯 A_2	25.2	
519	I KM60B-E-415	高杯 A_2		
520	I KM60B-E-405	高杯 A_3		
521	I KM60B-E-399	壷 C_5	(8.5)	(9.5)
522	I KM60B-E-395	壷 A		
523	I KM60B-E-409	壷 A		
524	I KM60B-E-396	壷 A		

図版26～28

SB41	登録番号	分類	口径	器高
525	I KM60B-E-517	甕 C_2	15	
526	I KM60B-E-490	甕 C_2	16	
527	I KM60B-E-477	甕 C_2	16.8	
528	I KM60B-E-505	甕 B_2	20.4	
529	I KM60B-E-496	甕 A_4	22	
530	I KM60B-E-509	甕 A_5	22.2	
531	I KM60B-E-495	甕 A_2	24.4	
532	I KM60B-E-493	甕 A_1	11.2	
533	I KM60B-E-470	壷 B_2	16.4	
534	I KM60B-E-494	壷 B_4	14.6	
535	I KM60B-E-515	壷 B_1	14	
536	I KM60B-E-465	壷 B_2	13.6	
537	I KM60B-E-480	壷 B_3	16	
538	I KM60B-E-516	壷 B		
539	I KM60B-E-491	壷 B		
540	I KM60B-E-483	甕 A_5	19	
541	I KM60B-E-488	壷 B_3	18	
542	I KM60B-E-499	壷		
543	I KM60B-E-501	壷		
544	I KM60B-E-481	壷 A		
545	I KM60B-E-510	甕 B		
546	I KM60B-E-502	高杯 A_3	26.6	
547	I KM60B-E-479	壷 A_4	17	
548	I KM60B-E-478	壷 A_2	21.2	
549	I KM60B-E-498	壷 A		
550	I KM60B-E-467	高杯 A_2		
551	I KM60B-E-513	高杯 A_2		
552	I KM60B-E-476	鉢 B_1	5.4	
553	I KM60B-E-497	甕 B_3	12.8	18.8
554	I KM60B-E-512	甕 A		
555	I KM60B-E-462	鉢 A_5		
556	I KM60B-E-468	鉢 A_4	16.6	
557	I KM60B-E-463	高杯		
558	I KM60B-E-500	高杯 B_2	13.4	
559	I KM60B-E-503 / E-482	高杯 B_2	13.4	
560	I KM60B-E-504	高杯 A_4	27	
561	I KM60B-E-492	高杯 A_4		
562	I KM60B-E-508	甕 C_3	18.8	
563	I KM60B-E-469	甕 C_5	16.4	
564	I KM60B-E-475	甕 C_3	18.2	

SB45(上)	登録番号	分類	口径	器高
565	I KM60B-E-584	甕 C_3	16.0	
566	I KM60B-E-587	壷 C_3	16.6	
567	I KM60B-E-581	壷 C_3	21.6	
568	I KM60B-E-547	甕 C_4	18.4	
569	I KM60B-E-572	甕 C		
570	I KM60B-E-548	甕 C		
571	I KM60B-E-549	甕 C		
572	I KM60B-E-588	甕 C_5	14.8	
573	I KM60B-E-589	甕 C_4	14	
574	I KM60B-E-556	甕 C_4	14.2	
575	I KM60B-E-553	甕 C_4	12.8	
576	I KM60B-E-579	甕 C_5	12.2	
577	I KM60B-E-539	甕 C		
578	I KM60B-E-585	壷 F	23.4	
579	I KM60B-E-541	壷 F	22.6	
580	I KM60B-E-540	壷 F		
581	I KM60B-E-560	壷 A_3	19	
582	I KM60B-E-573	壷 A		
583	I KM60B-E-838	壷 B_1	16	
584	I KM60B-E-580	壷 D_1	9.8	
585	I KM60B-E-550	壷 D	9.8	
586	I KM60B-E-586	壷 D		
587	I KM60B-E-544	壷 D_2		
588	I KM60B-E-568			
589	I KM60B-E-577			
590	I KM60B-E-583			
591	I KM60B-E-576			
592	I KM60B-E-837	器台 B_1	8.5	9.5
593	I KM60B-E-570	器台 B_1		
594	I KM60B-E-558	鉢 B_3	10.8	
595	I KM60B-E-582	高杯 B_2	14	
596	I KM60B-E-569	高杯		
597	I KM60B-E-543		20	
598	I KM60B-E-552	高杯 A_4		
599	I KM60B-E-575	高杯 A_4		
600	I KM60B-E-836	高杯 A_4	24	16

SB45	登録番号	分類	口径	器高
601	I KM60B-E-557	甕 C_3	14.4	
602	I KM60B-E-555	甕 C_3	13.4	
603	I KM60B-E-546	甕 C_3	16.2	
604	I KM60B-E-571	甕 B_3	17	
605	I KM60B-E-566	甕 A_2	21	
606	I KM60B-E-578	壷 C_5	12	
607	I KM60B-E-551	高杯 A_2		
608	I KM60B-E-542	器台 A		
609	I KM60B-E-562	壷 A_4	25.2	
610	I KM60B-E-564	高杯 A_3	23.2	
611	I KM60B-E-559	壷 B		26.1

図版28～31

SB48	登録番号	分類	口径	器高
612	I KM60B-E-740	甕 B_3	19	
613	I KM60B-E-744	甕 C_3	21	
614	I KM60B-E-735	甕 C_3	16	
615	I KM60B-E-745	甕 C_2	11	
616	I KM60B-E-750	壷 B_2	22.5	
617	I KM60B-E-758	高杯 A_2	23.5	20.8
618	I KM60B-E-752	高杯 A_2		
619	I KM60B-E-743	壷 C_4	8	
620	I KM60B-E-754	壷 A		
621	I KM60B-E-746	甕 A_2		
622	I KM60B-E-760	壷 C_1	12	
623	I KM60B-E-741	高杯 A_2		
624	I KM60B-E-764	高杯 A_2		
625	I KM60B-E-765	高杯 A_2		
626	I KM60B-E-742	甕 A_4	20.5	
627	I KM60B-E-751	甕 A_2	22.5	
628	I KM60B-E-756	甕 A_2	22	
629	I KM60B-E-736	甕 B_2	17.2	
630	I KM60B-E-761	甕 B_2	14	
631	I KM60B-E-737	甕 A_4	15	
632	I KM60B-E-759	高杯 B_1	20	
633	I KM60B-E-799	鉢 A_6		

SB49	登録番号	分類	口径	器高
634	I KM60B-E-796	甕 C_3	15.6	
635	I KM60B-E-773	甕 C_3	14	
636	I KM60B-E-791	甕 C_3	15.6	
637	I KM60B-E-800	甕 C_3	14.2	
638	I KM60B-E-775	甕 C_2	15.8	
639	I KM60B-E-782	甕 C_2	13.2	
640	I KM60B-E-780	甕 B_2	14.2	
641	I KM60B-E-770	甕 A_2	20	
642	I KM60B-E-798	甕 A_3	23.3	
643	I KM60B-E-779	甕 A_3	22.6	
644	I KM60B-E-795	甕 A_4	22	
645	I KM60B-E-793	甕 A		
646	I KM60B-E-788	甕 A		
647	I KM60B-E-768	壷 B_3	17.2	
648	I KM60B-E-785	高杯 A_2	24.2	
649	I KM60B-E-777	高杯 A_2		
650	I KM60B-E-781	高杯 A_2		
651	I KM60B-E-778	器台 B		
652	I KM60B-E-797	器台 B		
653	I KM60B-E-794	高杯 A_3		
654	I KM60B-E-787	壷 A		
655	I KM60B-E-802	壷 A		
656	I KM60B-E-774	高杯 A_2		
657	I KM60B-E-771	高杯 A_2		
658	I KM60B-E-792	壷 D_1	9.2	
659	I KM60B-E-789	壷 D		
660	I KM60B-E-776	鉢 A_4	13	
661	I KM60B-E-790	甕 A_2	15.8	
662	I KM60B-E-783	甕 A_4	11.8	
663	I KM60B-E-786		16	

SB50	登録番号	分類	口径	器高
664	I KM60B-E-148	甕 C_3	15.4	
665	I KM60B-E-133	甕 C		
666	I KM60B-E-172	甕 C_3	19	
667	I KM60B-E-179	甕 C_3	16.8	
668	I KM60B-E-125	甕 C_3	16	
669	I KM60B-E-155	甕 C_3	17.6	
670	I KM60B-E-143	甕 C_3	15.4	
671	I KM60B-E-153	甕 C_5	13.8	
672	I KM60B-E-150	甕 C_5	16	
673	I KM60B-E-126	甕 C_4	16.2	
674	I KM60B-E-130	甕 C_4	13.4	
675	I KM60B-E-169	甕 C_4	17	
676	I KM60B-E-177	壷 A_2	21.2	
677	I KM60B-E-166	受口甕	20	
678	I KM60B-E-142	甕 A_4	14	
679	I KM60B-E-168	甕 A_4	18.4	
680	I KM60B-E-160	高杯 B_2	13	
681	I KM60B-E-167	高杯 B_2	12.5	
682	I KM60B-E-154	高杯 B_2	15	
683	I KM60B-E-165	高杯	20.2	
684	I KM60B-E-144	高杯 A_3	20	
685	I KM60B-E-158	高杯 A_4	21.2	
686	I KM60B-E-134	高杯 A_4		
687	I KM60B-E-180	甕 A_2	26.6	
688	I KM60B-E-135	高杯 A_2		
689	I KM60B-E-141	甕	10.5	10.6
690	I KM60B-E-170	高杯 B_2	11.2	
691	I KM60B-E-173	鉢 B_2	10.5	8
692	I KM60B-E-881	布留系	11	
693	I KM60B-E-880	布留系	14	
694	I KM60B-E-149	甕 A		
695	I KM60B-E-162	甕 A		
696	I KM60B-E-128	甕 A		
697	I KM60B-E-159	甕 A		
698	I KM60B-E-132	高杯 A_2		
699	I KM60B-E-161	甕	18.4	

SB50	登録番号	分類	口径	器高
700	I KM60B-E-151	甕 C_2	18	
701	I KM60B-E-176	甕 B_2	20.6	
702	I KM60B-E-129	甕 B_2	18	
703	I KM60B-E-140	甕 A_1	20	
704	I KM60B-E-122	壷 B_3	18.6	
705	I KM60B-E-889	壷 C_3	6.6	
706	I KM60B-E-890	高杯		
707	I KM60B-E-884	壷 A		
708	I KM60B-E-886	壷 A		
709	I KM60B-E-891	壷		
710	I KM60B-E-157	高杯 A_2		
711	I KM60B-E-138	高杯 A_2		

＊700～711 SB50下

図版31～33

SB51	登録番号	分類	口径	器高
712	I KM60B-E-329	受口甕	21	
713	I KM60B-E-312	甕 B_3	19	
714	I KM60B-E-334	甕 B_3	16.7	
715	I KM60B-E-330	甕 C_2	18.2	
716	I KM60B-E-351	甕 C_2	15	
717	I KM60B-E-318	甕 C_2	14	
718	I KM60B-E-322	甕 A_4	23	
719	I KM60B-E-341	壺		
720	I KM60B-E-337	壺 A		
721	I KM60B-E-336	器台 A_2	23	
722	I KM60B-E-313	壺	19	
723	I KM60B-E-326	壺 B_2	13	
724	I KM60B-E-340	壺 B_2	18.7	
725	I KM60B-E-342	壺		
726	I KM60B-E-316	壺 B_4	14.8	
727	I KM60B-E-327	高杯 B_2	17	

SB51(上)	登録番号	分類	口径	器高
728	I KM60B-E-319	甕 C_3	16.4	
729	I KM60B-E-314	甕 C_3	18.8	
730	I KM60B-E-308	甕 C_3	16.6	
731	I KM60B-E-307	甕 C_3	14.5	
732	I KM60B-E-311	甕 C_4	14.7	
733	I KM60B-E-345	甕 C_4	16.2	
734	I KM60B-E-315	甕 C_4	14.5	
735	I KM60B-E-323	甕 C_3	14	
736	I KM60B-E-328	甕 C	15	
737	I KM60B-E-320	甕 C		
738	I KM60B-E-352	壺 B_2	14.2	
739	I KM60B-E-350	壺 C_4	7.1	
740	I KM60B-E-339	高杯 C	11.4	
741	I KM60B-E-333	高杯 B_2		
742	I KM60B-E-347	高杯 A_4		
743	I KM60B-E-338	壺 B_5	17	
744	I KM60B-E-349	壺 D_1	14.4	
745	I KM60B-E-310	鉢	10.6	
746	I KM60B-E-309	高杯 A_4	26	
747	I KM60B-E-348	高杯 A_4	24.4	
748	I KM60B-E-335	高杯 A_4	21.2	
749	I KM60B-E-332	高杯 A_3	17.4	
750	I KM60B-E-321	高杯 A_4		
751	I KM60B-E-346			
752	I KM60B-E-424	壺 A		
753	I KM60B-E-343	壺 A		

SB53	登録番号	分類	口径	器高
754	I KM60B-E-283	甕 C_4	14.7	
755	I KM60B-E-279	壺 B_2	12.8	
756	I KM60B-E-282	鉢 B_2	10.5	
757	I KM60B-E-278	壺 A		
758	I KM60B-E-280	高杯 B_1	28	
759	I KM60B-E-281	壺 B_3	19.6	

SB54	登録番号	分類	口径	器高
760	I KM60B-E-273	壺 A_2	20.4	
761	I KM60B-E-276	甕 C_3	12.4	
762	I KM60B-E-274	甕 C_3	11.2	
763	I KM60B-E-275	高杯 B_2	12.5	
764	I KM60B-E-277			

SB52	登録番号	分類	口径	器高
765	I KM60B-E-292	甕 C_3	16.4	
766	I KM60B-E-297	甕 C_3	16	
767	I KM60B-E-287	甕 C_3	13.6	
768	I KM60B-E-289	甕 C_3	11.8	
769	I KM60B-E-305	甕 C_3	12	
770	I KM60B-E-301	甕 C_3	8.4	
771	I KM60B-E-296	甕 C_3		
772	I KM60B-E-874	布留系	16.2	
773	I KM60B-E-909	布留系	13.4	
774	I KM60B-E-290	高杯 A_2	22	
775	I KM60B-E-303	高杯 A_3	19	
776	I KM60B-E-291	高杯 A_4		
777	I KM60B-E-286	壺 C_1	16	
778	I KM60B-E-293	壺 A_3	17.2	
779	I KM60B-E-302	壺 C_3	11.4	
780	I KM60B-E-299	壺 C_1	6.6	
781	I KM60B-E-295	壺 C_5	11	
782	I KM60B-E-298	壺 C_5	13.6	
783	I KM60B-E-304	鉢 B_3	9.4	
784	I KM60B-E-294	壺		
785	I KM60B-E-288	器台 B		

SB55	登録番号	分類	口径	器高
786	I KM60B-E-262	甕 C_3	18	
787	I KM60B-E-265	甕 C_3	13.6	
788	I KM60B-E-270	甕 C_3	15.2	
789	I KM60B-E-272	甕 C_3	16.4	
790	I KM60B-E-266	甕 C_3	15.6	
791	I KM60B-E-269	甕 C_3	14.7	
792	I KM60B-E-261	高杯	23	
793	I KM60B-E-267	高杯 A_4	23.5	
794	I KM60B-E-263	高杯 A_4	24.6	
795	I KM60B-E-260	高杯 A_4		
796	I KM60B-E-255	高杯 A_4		
797	I KM60B-E-257	甕 C_3	11.2	
798	I KM60B-E-258	甕 C_3	10.4	
799	I KM60B-E-268	甕 A_4	12.4	
800	I KM60B-E-256	器台 B_1	7.4	
801	I KM60B-E-284	高杯 A_4		
802	I KM60B-E-271	高杯 A_4		

図版34～36

SB56	登録番号	分類	口径	器高
803	I KM60B-E-227	甕 C_4		
804	I KM60B-E-238	甕 C_4	15.5	25
805	I KM60B-E-242	甕 C_4	16	
806	I KM60B-E-254	甕 C_4	21.8	
807	I KM60B-E-228	甕 C_4		
808	I KM60B-E-248	甕 C_4		
809	I KM60B-E-237	甕 C_4	17	
810	I KM60B-E-239	甕 C_4	19.6	(29.5)
811	I KM60B-E-233	甕 C_4		
812	I KM60B-E-243	甕 C_4	14	
813	I KM60B-E-231	高杯 C	20	
814	I KM60B-E-217	高杯 A_4	21	
815	I KM60B-E-215	高杯 A_4	22.6	
816	I KM60B-E-241	高杯 A_4		
817	I KM60B-E-236	器台 B		
818	I KM60B-E-251	高杯 C		
819	I KM60B-E-875	器台 B_2	9	
820	I KM60B-E-223	器台 B_2	7.6	
821	I KM60B-E-244	壷 E_1	16.8	
822	I KM60B-E-226	壷 F	19.4	
823	I KM60B-E-222	壷 F		
824	I KM60B-E-230	壷 D_2	12	
825	I KM60B-E-224	壷 D_2	13.6	
826	I KM60B-E-235	土錘		
827	I KM60B-E-240	鉢 B	11.2	7
828	I KM60B-E-249			
829	I KM60B-E-229	鉢 B	7.4	
830	I KM60B-E-253	甕 A		
831	I KM60B-E-246	甕 A		

SB59	登録番号	分類	口径	器高
832	I KM60B-E-184	甕 C_2	15	(24)
833	I KM60B-E-188	甕 C_2	15.2	
834	I KM60B-E-185	甕 C_2	13.6	
835	I KM60B-E-181	壷 A_2	18	
836	I KM60B-E-187 I KM60B-E-183	甕 C_3	20	(31)
837	I KM60B-E-202	甕 C_3	14	
838	I KM60B-E-192	甕 C_3	15.8	
839	I KM60B-E-191	甕 C_3	17.2	
840	I KM60B-E-196	甕 C_3	14	
841	I KM60B-E-199	壷 A		
842	I KM60B-E-189	壷 A		
843	I KM60B-E-200	壷 A		
844	I KM60B-E-194	壷 A		
845	I KM60B-E-182	壷 A		
846	I KM60B-E-203	高杯		
847	I KM60B-E-197	高杯		
848	I KM60B-E-201	高杯		
849	I KM60B-E-198	甕 A_4	11.4	
850	I KM60B-E-879	甕 A_4	11	
851	I KM60B-E-195	鉢 B_1	10	

SB63	登録番号	分類	口径	器高
852	I KM60B-E-63	高杯 A_2	26.3	
853	I KM60B-E-65	高杯 A_2		
854	I KM60B-E-67	壷 A		
855	I KM60B-E-882	壷 A		
856	I KM60B-E-62	甕 A		
857	I KM60B-E-64	鉢 B_2	9.5	
858	I KM60B-E-66	甕 B_2	13.7	
859	I KM60B-E-68	壷 A_3	18	
860	I KM60B-E-69	壷 B_2	15.5	
861	I KM60B-E-71	壷 B_5	11.4	
862	I KM60B-E-61	甕 C_3	14	
863	I KM60B-E-70	高杯 A_2		

SB64	登録番号	分類	口径	器高
864	I KM60B-E-57	甕 C_3	16.5	
865	I KM60B-E-60	甕 C_3	16.8	
866	I KM60B-E-51	甕 C_4	18	
867	I KM60B-E-52	甕 C_3	14	
868	I KM60B-E-53	甕 C_3	14.2	
869	I KM60B-E-55	甕 C_2	18	
870	I KM60B-E-45	甕	16.2	
871	I KM60B-E-58	甕 C		
872	I KM60B-E-46	壷 C_5	12.2	12.8
873	I KM60B-E-49	壷 A_2	17	
874	I KM60B-E-47	壷 A_2	18	
875	I KM60B-E-48	高杯 A_4		
876	I KM60B-E-42	高杯 A_4		
877	I KM60B-E-44	高杯 A_2	25.6	
878	I KM60B-E-40	高杯 A_2	25	
879	I KM60B-E-41	器台		
880	I KM60B-E-50	甕(タタキ)	12	15
881	I KM60B-E-56	器台 B_3	9.8	
882	I KM60B-E-39	器台 B_3	8.6	

図版37～40

SB60	登録番号	分類	口径	器高
883	I KM60B-E-85	甕 C_3	23	
884	I KM60B-E-119	甕 C_3	22.7	
885	I KM60B-E-84	甕 C_3		
886	I KM60B-E-847	甕 C_3	21	(36)
887	I KM60B-E-76	甕 C_3		
888	I KM60B-E-848	甕 C_3	20.8	(34.5)
889	I KM60B-E-848	甕 C_3	20.8	
890	I KM60B-E-86	甕 C_3		
891	I KM60B-E-83	甕 C_3	18	
892	I KM60B-E-73	甕 C_3	19	
893	I KM60B-E-81	甕 C_3	15.2	
894	I KM60B-E-75	甕 C_3	15.2	
895	I KM60B-E-72	甕 C_3	15.2	
896	I KM60B-E-74	甕 C_3	17	
897	I KM60B-E-80	甕 C_3	13.5	
898	I KM60B-E-77	甕 C_3	12	
899	I KM60B-E-78	甕 C_3	15.5	
900	I KM60B-E-840	甕 C_3	12.5	20.5
901	I KM60B-E-846	甕 C_3	12.2	(19)
902	I KM60B-E-98	高杯 A	23	
903	I KM60B-E-107	高杯 A_2	24	
904	I KM60B-E-108	高杯 A_2		
905	I KM60B-E-97	高杯 A	24	
906	I KM60B-E-839	高杯 A_4	19.8	13
907	I KM60B-E-95	高杯		
908	I KM60B-E-841	高杯	21.5	15.2
909	I KM60B-E-115	高杯		
910	I KM60B-E-99	高杯		
911	I KM60B-E-106	高杯 B_2	14	
912	I KM60B-E-849	高杯		
913	I KM60B-E-896	加工円盤		
914	I KM60B-E-105	甕 A_4	13.8	
915	I KM60B-E-104	甕 A_4	12.8	
916	I KM60B-E-111	器台 B_1		
917	I KM60B-E-112	器台 B_1	9	(10)
918	I KM60B-E-117	鉢 B_3	11.6	
919	I KM60B-E-843	鉢 B_4	11.6	4.3
920	I KM60B-E-88	壷 A_5	23.5	
921	I KM60B-E-110	壷 A_2	21.4	
922	I KM60B-E-93	壷 A_3	19	
923	I KM60B-E-89	壷 A		
924	I KM60B-E-90	壷 A		
925	I KM60B-E-113	壷 B_5	21.4	
926	I KM60B-E-118	壷 B_2	14.4	
927	I KM60B-E-100	壷 C_4	8.5	
928	I KM60B-E-845	壷 C_4	7	(16)
929	I KM60B-E-844	鉢 B_1	8.7	8.4
930	I KM60B-E-842	鉢 B_1	7.4	5.8

SB66	登録番号	分類	口径	器高
960	I KM60B-E-829	高杯 A_2	27	
961	I KM60B-E-830	器台 A_2	17.7	
962	I KM60B-E-831			

SB65	登録番号	分類	口径	器高
931	I KM60B-E-37	甕 C_3	22	
932	I KM60B-E-38	甕 C_3	20.5	
933	I KM60B-E-25	甕 C_3	13	
934	I KM60B-E-4	甕 C_3	15.8	
935	I KM60B-E-36	甕 C_2	16.2	
936	I KM60B-E-34	甕 C_3	16.5	
937	I KM60B-E-29	甕 C_3	15.8	
938	I KM60B-E-26	甕 C_3		
939	I KM60B-E-28	甕 C_3		
940	I KM60B-E-9	甕 C_2		
941	I KM60B-E-35	甕 A_4	19.5	
942	I KM60B-E-873	布留系	11.8	
943	I KM60B-E-1	壷 C_1	8.5	16.6
944	I KM60B-E-32	器台 B_3	11	
945	I KM60B-E-3	高杯 C		
946	I KM60B-E-33	甕 A_4	7.8	
947	I KM60B-E-13	壷 A_2	20	
948	I KM60B-E-17	壷 A		
949	I KM60B-E-16	壷 A		
950	I KM60B-E-31	壷 B		
951	I KM60B-E-872	壷		
952	I KM60B-E-8	高杯	23.2	
953	I KM60B-E-6	高杯		
954	I KM60B-E-2	高杯	21.6	
955	I KM60B-E-23	高杯		
956	I KM60B-E-7	高杯		
957	I KM60B-E-11	甕 A		
958	I KM60B-E-20	高杯 A_4		
959	I KM60B-E-30	鉢 B_3	11	(9)

SB67	登録番号	分類	口径	器高
963	I KM60B-E-642	高杯 A_2	25	
964	I KM60B-E-659	高杯 A_2		
965	I KM60B-E-647	器台 A_2	19	
966	I KM60B-E-646	器台 C	18.8	16
967	I KM60B-E-650	器台 C	18.8	
968	I KM60B-E-645	器台 C		
969	I KM60B-E-648	器台 C		
970	I KM60B-E-654	壷	15.6	
971	I KM60B-E-656	甕 A_4	20	
972	I KM60B-E-652	高杯 A_2		
973	I KM60B-E-637	甕 A		
974	I KM60B-E-657	甕 B_2	18.2	
975	I KM60B-E-643	甕 B_2	16.8	
976	I KM60B-E-662	甕 C_2	15.8	
977	I KM60B-E-636	壷 B_1	17.2	
978	I KM60B-E-640	高杯 A_2		
979	I KM60B-E-639	高杯 A_2		
980	I KM60B-E-658	高杯	17.5	
981	I KM60B-E-635	甕 A		
982	I KM60B-E-638	甕 A		
983	I KM60B-E-661	甕 C_3	16.4	
984	I KM60B-E-660	甕 C_3	16	

図版41～44

SB68	登録番号	分類	口径	器高
985	I KM60B-E-667	甕 C_2	23	
986	I KM60B-E-666	甕 C_2	20	
987	I KM60B-E-684	甕 C_2	16.6	
988	I KM60B-E-674	甕 C_2	15.4	
989	I KM60B-E-675	甕 A_3	25	
990	I KM60B-E-682	器台 A_2	16.6	
991	I KM60B-E-678	器台 A_1	18.2	
992	I KM60B-E-673		19.6	
993	I KM60B-E-665	高杯 B_2	14.8	11.7
994	I KM60B-E-670	器台 A_1	26.6	
995	I KM60B-E-685	高杯 A_2	23	
996	I KM60B-E-686	高杯 A_2		
997	I KM60B-E-671	高杯 A_2		
998	I KM60B-E-669	高杯 A_1		
999	I KM60B-E-680	高杯 A_2		
1000	I KM60B-E-697	高杯 A_2	28	
1001	I KM60B-E-687	壷 B_1		
1002	I KM60B-E-683	甕 C_3	20.8	
1003	I KM60B-E-681	甕 C_4	17	
1004	I KM60B-E-664	甕 C_3	16.2	22.4
1005	I KM60B-E-679	壷	10.8	
1006	I KM60B-E-668	壷	11	
1007	I KM60B-E-676	壷 D_2	10.8	16.8
1008	I KM60B-E-672	壷		

SB69	登録番号	分類	口径	器高
1009	I KM60B-E-711	甕 B_2	18	
1010	I KM60B-E-715	甕 B_2	14	
1011	I KM60B-E-705	甕 B_2	11.8	
1012	I KM60B-E-718	甕 B_3	16.4	
1013	I KM60B-E-692	高杯 A_2		
1014	I KM60B-E-695	高杯 A_2		
1015	I KM60B-E-703	高杯 A_1		
1016	I KM60B-E-707	壷 B_1	14.2	
1017	I KM60B-E-713	壷 B_3	32	
1018	I KM60B-E-706	高杯	23.6	
1019	I KM60B-E-693	甕 A_2	20.2	
1020	I KM60B-E-694	壷		
1021	I KM60B-E-712	壷		
1022	I KM60B-E-688	甕 C_4	17.4	
1023	I KM60B-E-693	甕 A_4	16.6	
1024	I KM60B-E-704	甕 B_2	11.2	
1025	I KM60B-E-717	甕 A_3	13.6	
1026	I KM60B-E-709	甕 B_1	17	
1027	I KM60B-E-689	鉢 B_1	8.2	4.7
1028	I KM60B-E-699	甕 A_4	11.4	
1029	I KM60B-E-697	高杯 A_2	28	
1030	I KM60B-E-708	高杯 A_2		
1031	I KM60B-E-690	高杯 A_2		

SB71	登録番号	分類	口径	器高
1032	I KM60B-E-725	甕 C_3	19.6	
1033	I KM60B-E-724	甕 C_3	27.4	
1034	I KM60B-E-726	甕 B_2	11.4	
1035	I KM60B-E-727	高杯 A_4	22	

SB75	登録番号	分類	口径	器高
1036	I KM60A-E-194	甕 C_1	23	
1037	I KM60A-E-193	甕 C_1	16	
1038	I KM60A-E-196	甕 B_1	18.5	(30)
1039	I KM60A-E-195	受口甕		
1040	I KM60A-E-197	鉢 A_1	18	
1041	I KM60A-E-191	壷 C_1	12	19.5
1042	I KM60A-E-199	高杯 A_2		
1043	I KM60A-E-235	高杯 A_2		
1044	I KM60A-E-236	高杯 A_2		
1045	I KM60A-E-233	高杯 A_2	26	
1046	I KM60A-E-234	高杯 A_2		
1047	I KM60A-E-192	高杯 A_2	21	20.6
1048	I KM60A-E-237	壷		
1049	I KM60A-E-238	壷 C_1	15	
1050	I KM60A-E-198	高杯 A_2		

SK26	登録番号	分類	口径	器高
1051	I KM60A-E-482	甕 A_4	18.5	
1052	I KM60A-E-487	ミニチュア		
1053	I KM60A-E-485	高杯 B	21	
1054	I KM60A-E-476	高杯 A_2		

SK29	登録番号	分類	口径	器高
1055	I KM60A-E-480	甕 C_3	27.2	
1056	I KM60A-E-478	高杯 A_2		
1057	I KM60A-E-559	壷 A		
1058	I KM60A-E-481	高杯 A_2		
1059	I KM60A-E-479	高杯		

SK30	登録番号	分類	口径	器高
1060	I KM60A-E-218 I KM60A-E-231	甕 C_3	15.8	(25.5)
1061	I KM60A-E-225	甕 C_3		
1062	I KM60A-E-219 I KM60A-E-232	甕 C_3	14.6	(23)
1063	I KM60A-E-221	甕 C_3	16.2	
1064	I KM60A-E-220	甕 C_3	17	(28)
1065	I KM60A-E-222	壷 A		
1066	I KM60A-E-560	壷 A		
1067	I KM60A-E-558	壷 A		
1068	I KM60A-E-227	高杯 A_4		
1069	I KM60A-E-223	高杯 A_4		
1070	I KM60A-E-224	高杯 B_2		
1071	I KM60A-E-226	高杯 B_2		

図版45～48

SK50	登録番号	分類	口径	器高
1072	I KM60A-E-141	甕 C_2	17.2	
1073	I KM60A-E-147	甕 C_2	20.4	
1074	I KM60A-E-148	甕 C_2	21.2	
1075	I KM60A-E-145	甕 C_2	17.6	
1076	I KM60A-E-140	甕 C_2	16.4	
1077	I KM60A-E-146	甕 C_2	23	
1078	I KM60A-E-144	甕 C_2	17	
1079	I KM60A-E-142	甕 C_2	18	
1080	I KM60A-E-143	甕 C_2		
1081	I KM60A-E-188	甕 A_3	22	
1082	I KM60A-E-255	甕 A_4	19.5	27.2
1083	I KM60A-E-187	甕 A_4	18.4	
1084	I KM60A-E-490	甕 A_5	18.6	
1085	I KM60A-E-189	甕 A_3	14	
1086	I KM60A-E-493	甕 A_4	14.2	
1087	I KM60A-E-185	甕 A		
1088	I KM60A-E-186	甕 A		
1089	I KM60A-E-182	甕 A		
1090	I KM60A-E-184	鉢 B_1		
1091	I KM60A-E-557	壷 A		
1092	I KM60A-E-177	壷 A_2	22	
1093	I KM60A-E-561	壷 A_2	18	
1094	I KM60A-E-174	ミニチュア		
1095	I KM60A-E-259	手焙	19	(20)
1096	I KM60A-E-150	高杯 A_2	26.6	
1097	I KM60A-E-163	高杯 A_2	22	
1098	I KM60A-E-157	高杯 A_2		
1099	I KM60A-E-162	高杯 A_2	22	
1100	I KM60A-E-161	高杯 A_2	23.2	
1101	I KM60A-E-171	高杯 A_2		
1102	I KM60A-E-168	高杯 A_2		
1103	I KM60A-E-154	高杯 A_2	26	
1104	I KM60A-E-158	高杯 A_2		
1105	I KM60A-E-152	高杯 A_2		
1106	I KM60A-E-169	高杯 A_2		
1107	I KM60A-E-166	高杯 A_2		
1108	I KM60A-E-258	高杯 A_2		(19)
1109	I KM60A-E-164	高杯 B_2	17	
1110	I KM60A-E-155	高杯 B		
1111	I KM60A-E-170	高杯 B		
1112	I KM60A-E-160	高杯 C		
1113	I KM60A-E-159	高杯 B		
1114	I KM60A-E-156	高杯 B		
1115	I KM60A-E-257	高杯 B_1	20.4	14
1116	I KM60A-E-175	高杯 B_1	22	
1117	I KM60A-E-151	高杯 B_1		
1118	I KM60A-E-172	高杯 B		
1119	I KM60A-E-489	壷 C_1	16	
1120	I KM60A-E-190	壷 C_1	10	
1121	I KM60A-E-180	壷 B_1	14.4	
1122	I KM60A-E-183	壷 B		
1123	I KM60A-E-494	壷 B_1	18.5	
1124	I KM60A-E-179	壷 B_1	13	
1125	I KM60A-E-176	壷 B		
1126	I KM60A-E-181	壷 B		
1127	I KM60A-E-165	器台 A_2	24	
1128	I KM60A-E-153	器台 A_2		

SK51	登録番号	分類	口径	器高
1129	I KM60A-E-429	壷 B_1	14.5	
1130	I KM60A-E-419	壷 B_1	17	
1131	I KM60A-E-564	壷 A		
1132	I KM60A-E-320	壷 B_1	18	
1133	I KM60A-E-428	壷 B_4	12	
1134	I KM60A-E-425	壷 B_1	13.6	
1135	I KM60A-E-322	壷 B_2	12	
1136	I KM60A-E-412	壷 B_2	15.5	
1137	I KM60A-E-324	壷 B_3	16.4	
1138	I KM60A-E-423	壷 B_4	16	
1139	I KM60A-E-416	甕 A_1	19.8	
1140	I KM60A-E-418	甕 B_2	23.5	
1141	I KM60A-E-440	壷 B_3	20.8	
1142	I KM60A-E-341	壷 B_3	20.2	
1143	I KM60A-E-437	壷 B_3	20.8	
1144	I KM60A-E-430	壷 A_4	15.8	
1145	I KM60A-E-323	壷 B_1	17	
1146	I KM60A-E-332	壷 C_2	18.5	
1147	I KM60A-E-543	甕 C_2	16	
1148	I KM60A-E-339	甕 C_2	17	
1149	I KM60A-E-417	甕 A_4	18.8	
1150	I KM60A-E-439	甕 A_4	19.2	
1151	I KM60A-E-438	甕 A_5	18.2	
1152	I KM60A-E-340	甕 A_5	14.5	
1153	I KM60A-E-327	甕 A_4	15.5	
1154	I KM60A-E-326	甕 A_4	12.6	
1155	I KM60A-E-330	甕 A		
1156	I KM60A-E-337	甕 A		
1157	I KM60A-E-427	甕 A		
1158	I KM60A-E-338	甕 A		
1159	I KM60A-E-434	甕 A		
1160	I KM60A-E-342	甕 A		
1161	I KM60A-E-415	高杯 A_2	20	
1162	I KM60A-E-420	高杯 A_2	23	
1163	I KM60A-E-436	高杯 A_2	24.4	
1164	I KM60A-E-424	高杯 A_2		
1165	I KM60A-E-413	高杯 A_2		
1166	I KM60A-E-331	高杯 A_2		
1167	I KM60A-E-335	高杯 A_2		
1168	I KM60A-E-321	高杯 A_2		
1169	I KM60A-E-422	高杯 A_2		
1170	I KM60A-E-432	高杯 C		
1171	I KM60A-E-426	高杯 B		
1172	I KM60A-E-336	鉢	15.2	3.6

SK18	登録番号	分類	口径	器高
1173	I KM60A-E-498	受口甕	18	
1174	I KM60A-E-488	甕 C_4	13	
1175	I KM60A-E-491	甕 C_6	22	
1176	I KM60A-E-492	高杯 A_4		
1177	I KM60A-E-497	甕 B_3	18	

図版49～52

SK19	登録番号	分類	口径	器高
1178	I KM60A-E-570	甕 C_3	14	
1179	I KM60A-E-577	甕 C_3	17	
1180	I KM60A-E-580	甕 C_3	13	
1181	I KM60A-E-581	甕 B_2	18.2	
1182	I KM60A-E-589	甕 B_2	16.6	
1183	I KM60A-E-588	甕 B_2	17.8	
1184	I KM60A-E-573	壷 B_3	16	
1185	I KM60A-E-569	器台	16	
1186	I KM60A-E-579	器台 B_3	10	
1187	I KM60A-E-576			
1188	I KM60A-E-568	壷		
1189	I KM60A-E-585	手焙		
1190	I KM60A-E-578	高杯 A_2		
1191	I KM60A-E-590	高杯 A_2	26	
1192	I KM60A-E-574	高杯 A_4		
1193	I KM60A-E-571	甕 A		
1194	I KM60A-E-572	甕 B		

SK20	登録番号	分類	口径	器高
1195	I KM60A-E-500	甕 C_4	21	
1196	I KM60A-E-499	甕 C_4		
1197	I KM60A-E-582	甕 A_3	16.2	

SZ06	登録番号	分類	口径	器高
1198	I KM60B-E-860	受口甕	17.2	
1199	I KM60B-E-908	高杯 A_2	19	17.6

SZ05	登録番号	分類	口径	器高
1200	I KM60A-E-408	甕 C_2	26	
1201	I KM60A-E-409	甕 C_1	19.2	
1202	I KM60A-E-406	高杯 A_2	20.4	
1203	I KM60A-E-407	高杯 A_2		
1204	I KM60A-E-404	高杯 A_2		

SB22	登録番号	分類	口径	器高
1205	I KM60B-E-720	甕 B_2	18	(29)
1206	I KM60A-E-266	甕 C_2	22.6	
1207	I KM60B-E-722	甕 A_4	18.2	
1208	I KM60B-E-721	器台 A_2	15.4	
1209	I KM60B-E-723	高杯 A		

SB16	登録番号	分類	口径	器高
1210	I KM60A-E-216	甕 C_1	18	
1211	I KM60A-E-215	甕 A_5	14.4	
1212	I KM60A-E-213	甕 B_2	10.8	
1213	I KM60A-E-217	甕 A_4	10.2	11.5
1214	I KM60A-E-212	高杯 A_2	26.4	
1215	I KM60A-E-214	壷 C_1	10	

SU03	登録番号	分類	口径	器高
1216	I KM60B-E-10	高杯 A_2	25.2	17.8
1217	I KM60B-E-15	壷 A_2	18	
1218	I KM60B-E-22	壷 A_2	20	
1219	I KM60B-E-871	壷	12.4	

SU04	登録番号	分類	口径	器高
1220	I KM60B-E-864	甕 A_3	19.4	
1221	I KM60B-E-869	甕 A_1	17.5	
1222	I KM60B-E-866	甕 C_2	19	
1223	I KM60B-E-867	甕 B_3	20.5	
1224	I KM60B-E-868	壷 C_3	10	
1225	I KM60B-E-865	壷 A		

SD09	登録番号	分類	口径	器高
1226	I KM60A-E-395	壷 B_1	17	
1227	I KM60A-E-397	壷 B		
1228	I KM60A-E-399	壷 B_2	14	
1229	I KM60A-E-398	甕 B_3	15.6	

その他	登録番号	分類	口径	備考
1230	I KM60B-E-853	甕 A_5	19	NR01
1231	I KM60B-E-225	甕 A_1	20.2	SB56上
1232	I KM60B-E-250	甕 A_5	21	SB56上
1233	I KM60B-E-856	甕 A_5	29.4	NR01
1234	I KM60A-E-587	甕 B_1	19	SB39上
1235	I KM60B-E-855	甕 B_3	16	NR01
1236	I KM60B-E-870	甕 A_4	18.4	畝
1237	I KM60B-E-232	壷 C_4	7.4	SB56上
1238	I KM60B-E-898	壷 F	24.4	SB22上
1239	I KM60A-E-477	高杯 A_1	27.6	
1240	I KM60B-E-895	壷 A_2	18.4	
1241	I KM60B-E-18	壷 A_3	19.8	
1242	I KM60B-E-892	壷 E_2	17.8	
1243	I KM60B-E-451	壷 E_2	17	SB38上
1244	I KM60B-E-691	壷 B_1	16.4	SB74
1245	I KM60B-E-878	高杯 B	18	NR01
1246	I KM60B-E-421	高杯 B	13	SB47
1247	I KM60A-E-511	高杯 B	12.2	SB13
1248	I KM60A-E-566	高杯 B		SB13
1249	I KM60B-E-907	高杯 C		SB40上
1250	I KM60B-E-862	器台 B_2	9	SD11
1251	I KM60B-E-894	高杯 A_3	19.4	
1252	I KM60B-E-619	高杯 C		SB23上
1253	I KM60A-E-520	高杯 C		SB12下
1254	I KM60A-E-122	鉢 B_3	12.5	SB12下
1255	I KM60B-E-906	壷 C_5	11.4	

図　　版

凡　例

1．遺構番号

SA：柵　SB：建物　SK：土坑

SD：溝　SE：井戸　SZ：墳丘墓

SU：遺物集積　NR：旧河道

SX：その他

2．縮率

全体図1：1000

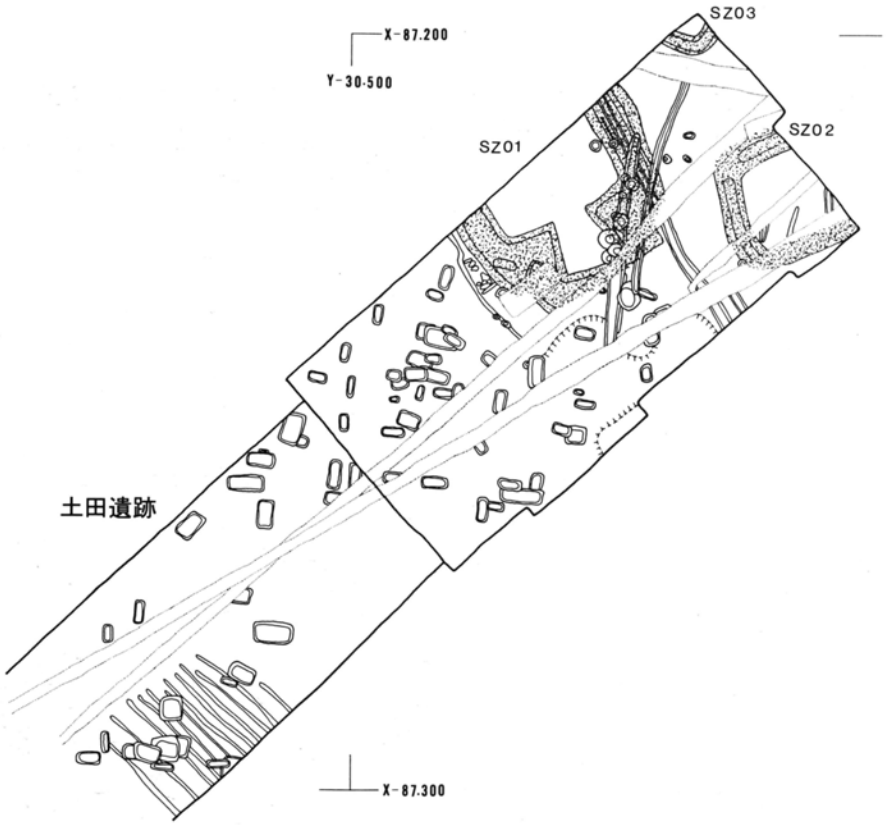
遺構図1：500

遺物実測図1：4

遺物写真1：3（一部1：4）

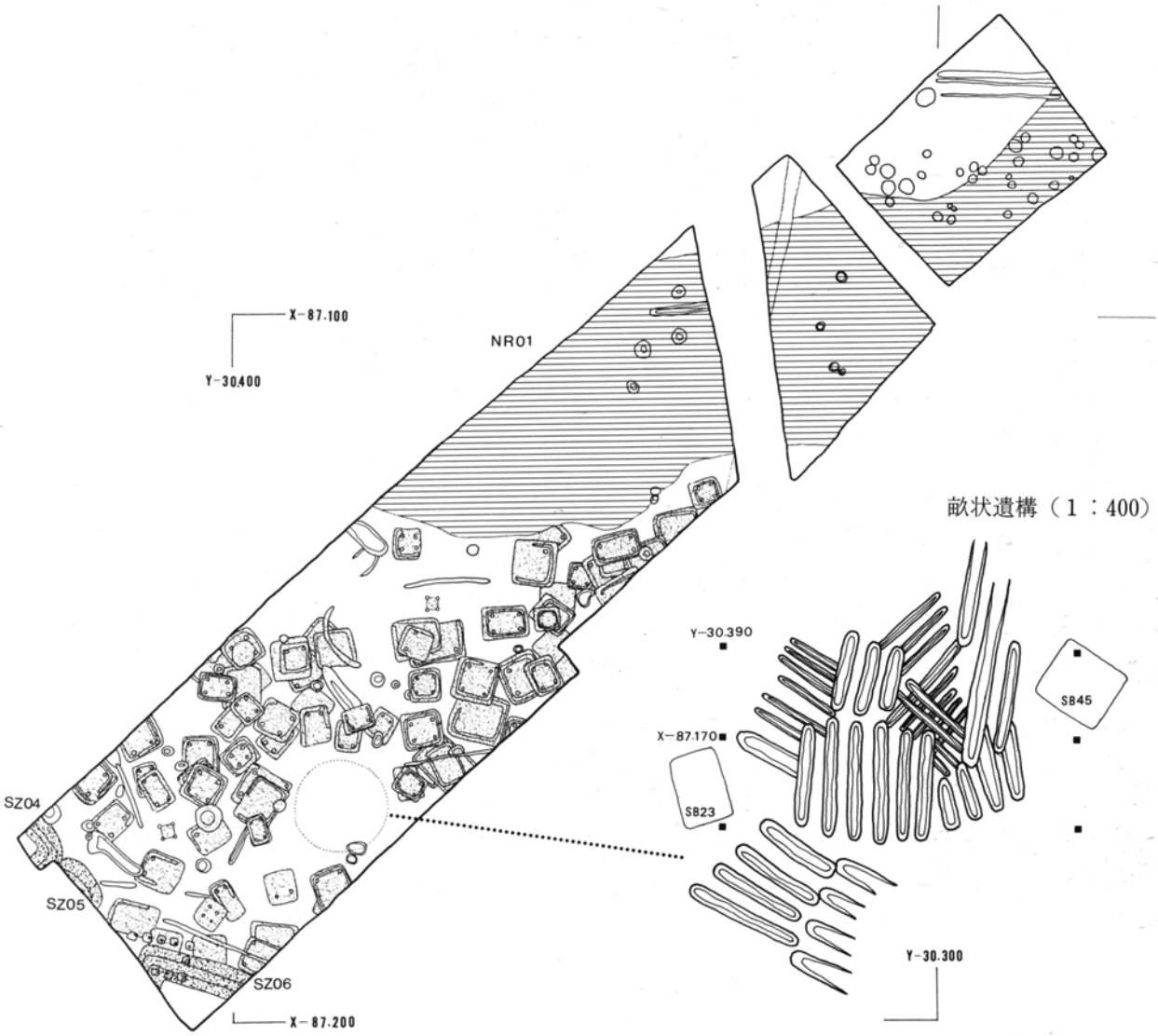
3．遺構基準線は国土座標第Ⅶ系によるものである。

A・B区　SZ01・SZ02



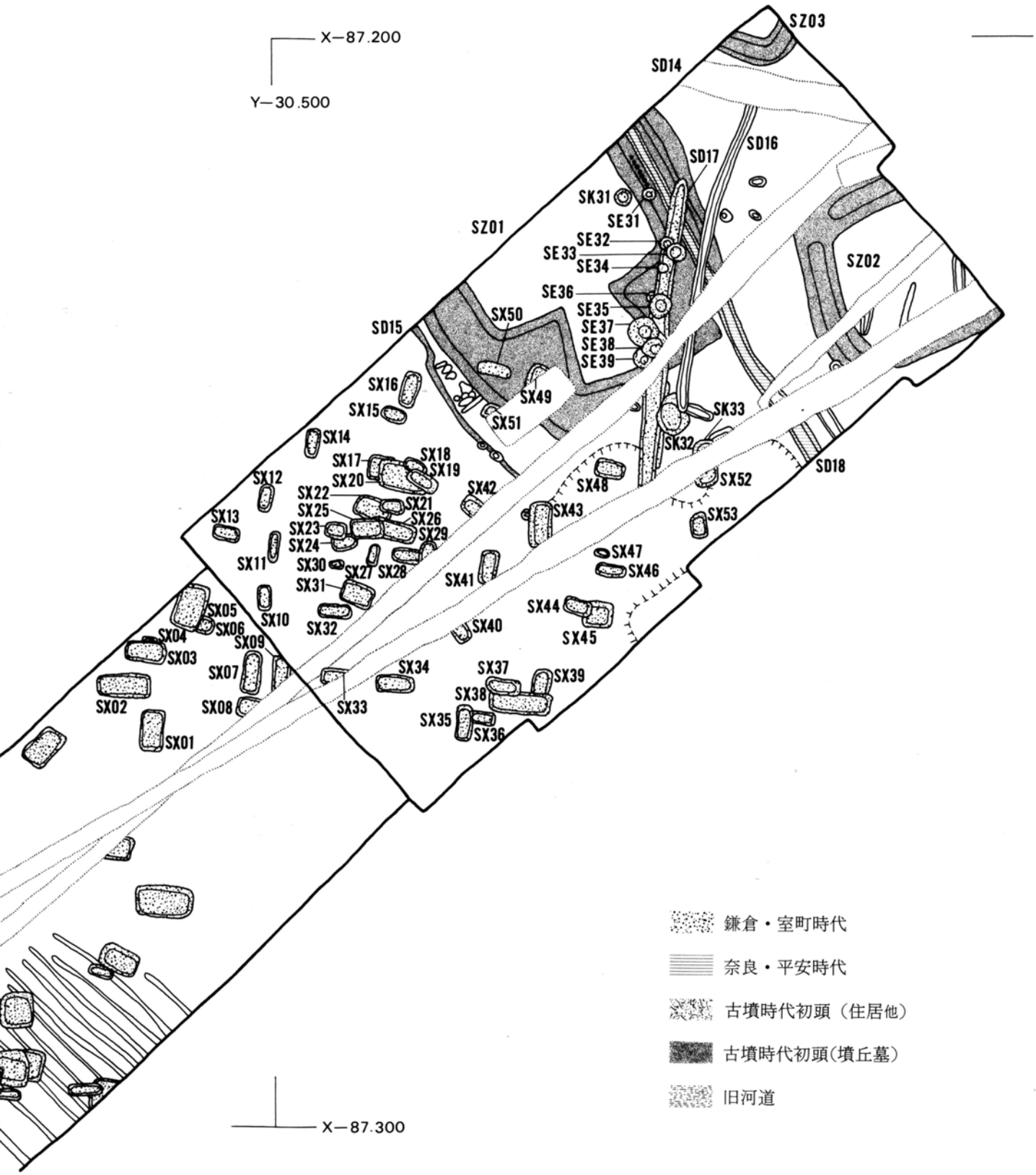
図版１　廻間遺跡主要遺構（１：1000）

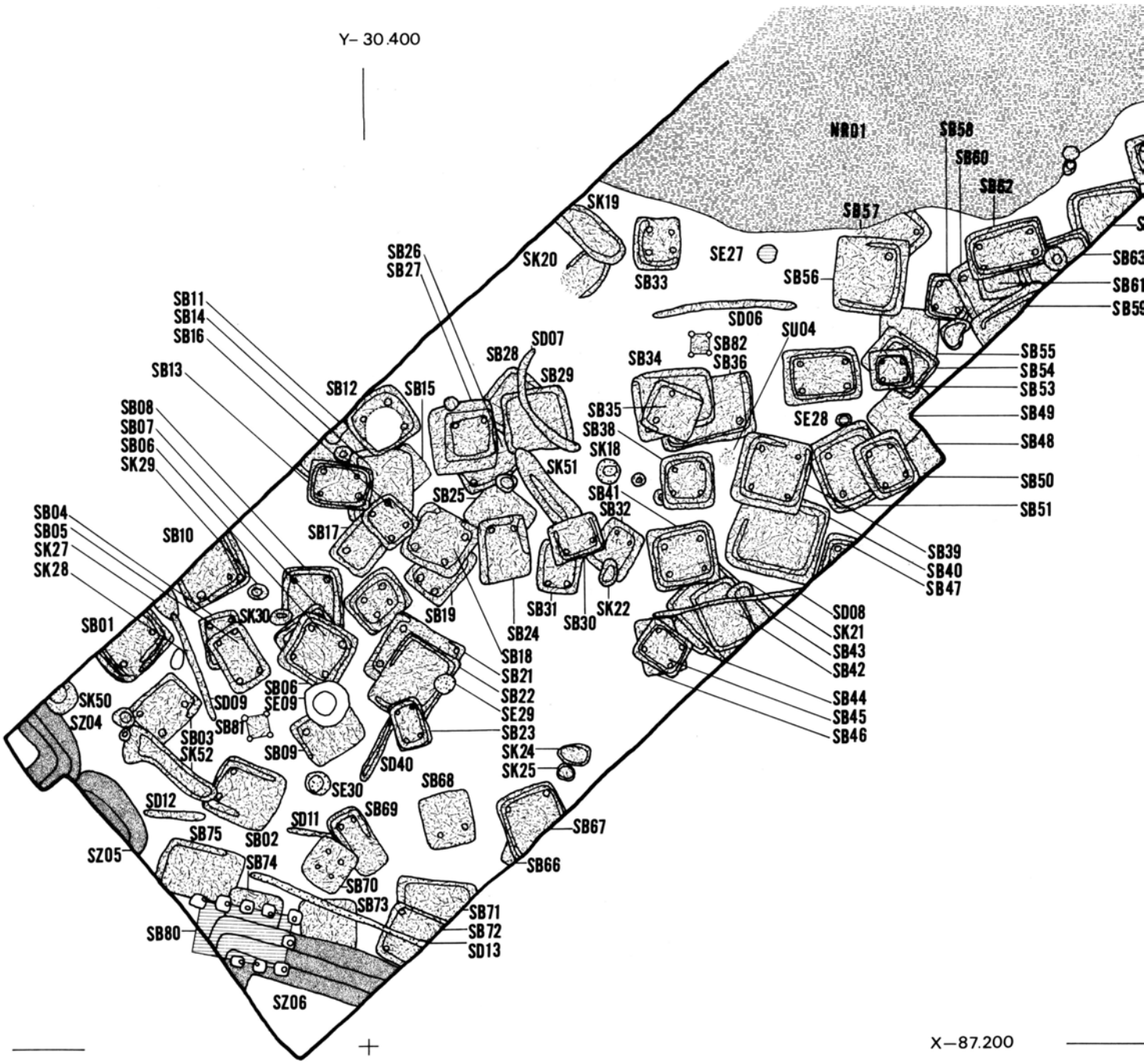
畝状遺構（１：400）



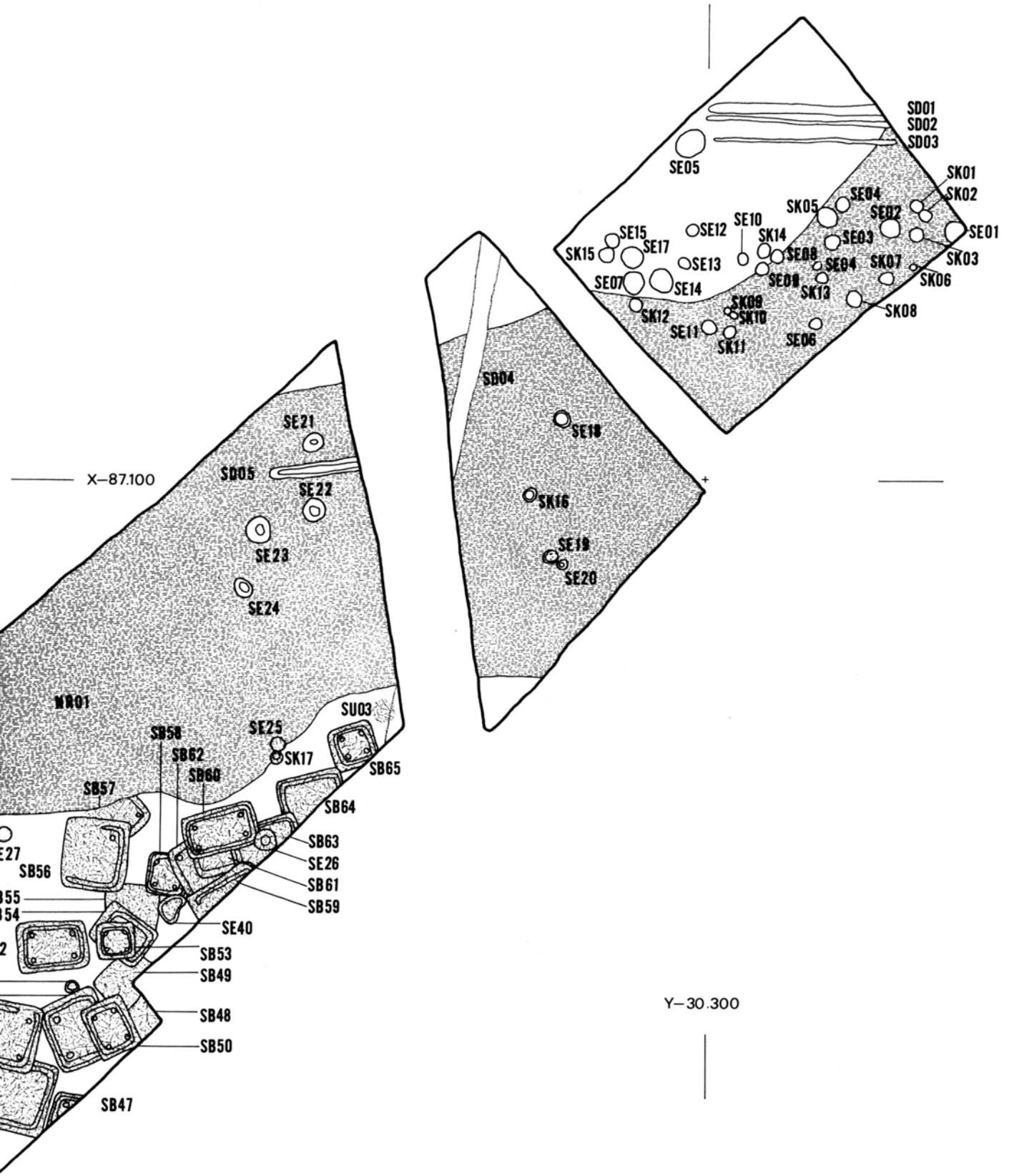
D区中央　竪穴住居群

図版２　遺構図(1)　１：500



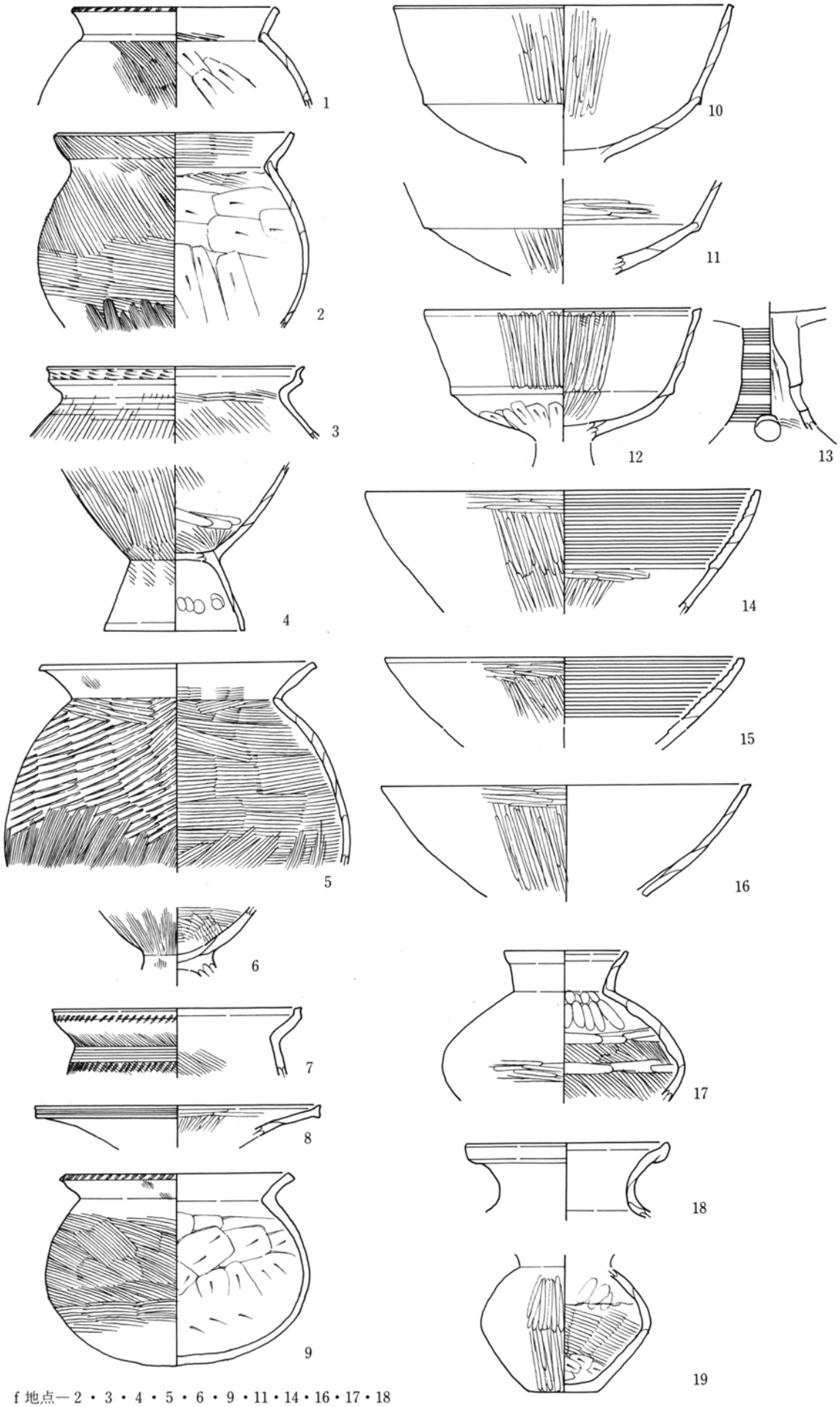

Y- 30.400
X−87.200
NR01
SB58
SB60
SB62
SB57
SK19
SK20
SB33
SE27
SB56
SB63
SB61
SB59
SB26
SB27
SD06
SU04
SB82
SB36
SB34
SD07
SB28
SB29
SB11
SB14
SB16
SB13
SB12
SB15
SB35
SB38
SK18
SK51
SE28
SB55
SB54
SB53
SB49
SB48
SB50
SB51
SB08
SB07
SB06
SK29
SB41
SB32
SB25
SB04
SB05
SK27
SK28
SB10
SB17
SB39
SB40
SB47
SB01
SK30
SB19
SB24
SB31
SB30
SK22
SD08
SK21
SB43
SB42
SB18
SB21
SB22
SE29
SB23
SK24
SK25
SB44
SB45
SB46
SK50
SZ04
SD09
SB06
SE09
SB81
SB03
SK52
SB09
SD40
SE30
SB68
SD12
SB69
SD11
SB67
SB75
SB02
SZ05
SB74
SB66
SB70
SB73
SB71
SB72
SB80
SD13
SZ06

図版 4　遺構図(3)


SD01
SD02
SD03
SE05
SK01
SK02
SK05
SE04
SE02
SE01
SE10
SE12
SE15
SK14
SE03
SK03
SK15
SE17
SE13
SE08
SE04
SK07
SK06
SE07
SE14
SE09
SK13
SK08
SK09
SK10
SK12
SE11
SK11
SE06
SD04
SE18
SK16
SE19
SE20
X−87.100
SD05
SE21
SE22
SE23
SE24
MR01
SU03
SB58
SE25
SB62
SK17
SB65
SB60
SB57
SB64
SB63
SE27
SE26
SB56
SB61
SB55
SB59
SB54
SE40
SB53
SB49
SB48
SB50
SB47
Y−30.300

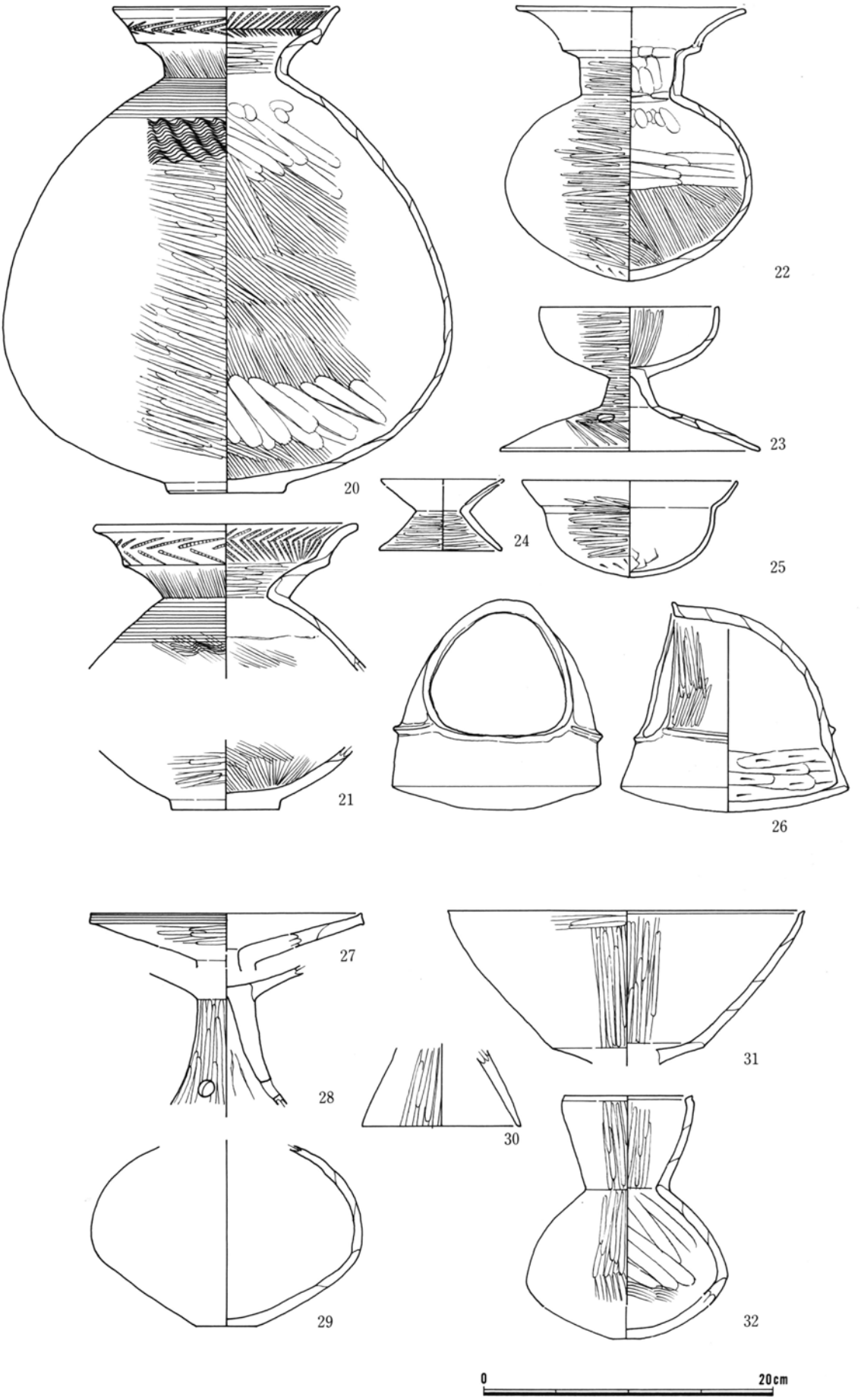
出土遺物

SZ01

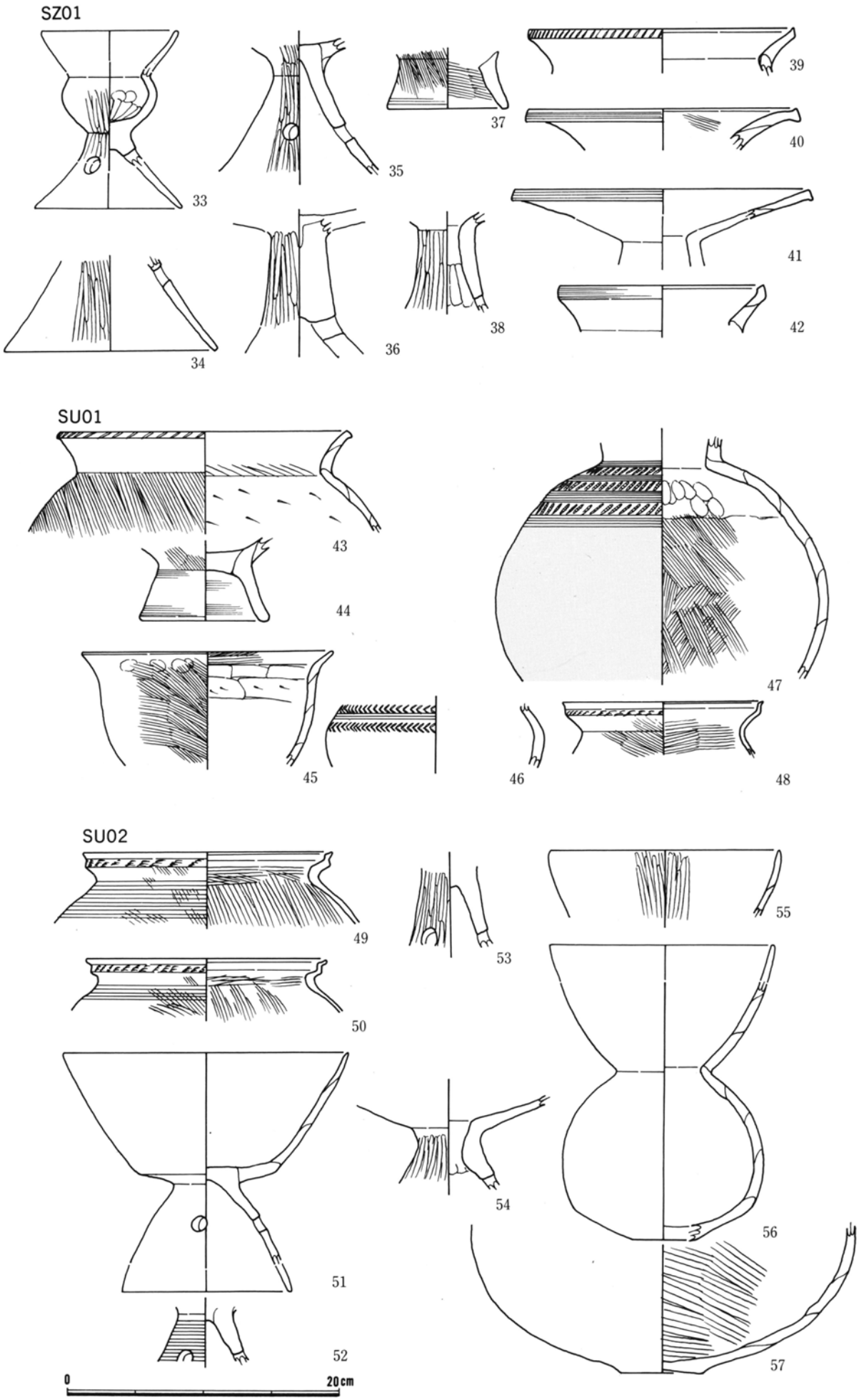


f 地点―2・3・4・5・6・9・11・14・16・17・18
g 地点―12・19
h 地点―1・7・8・10・13・15

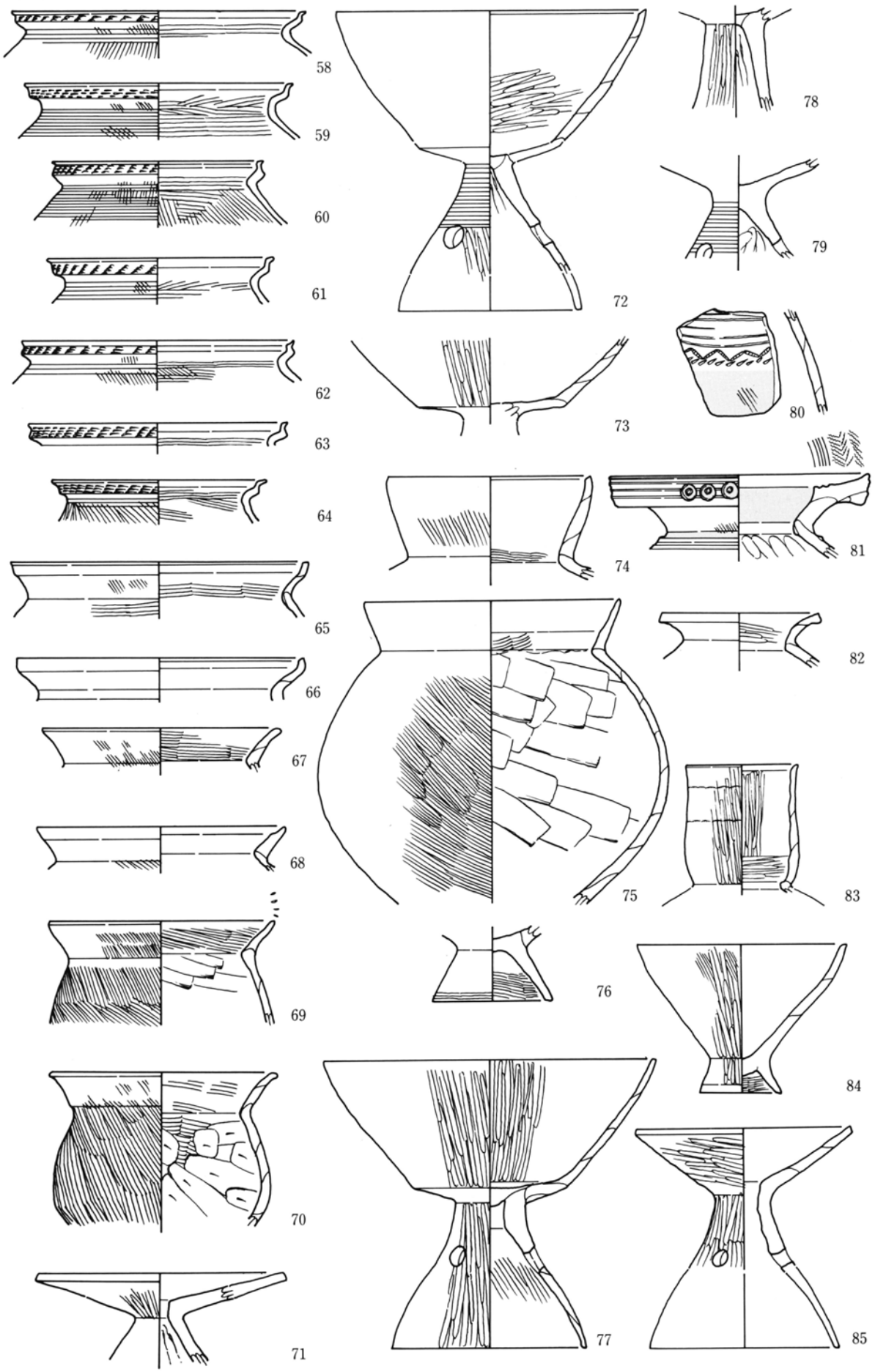
SZ01



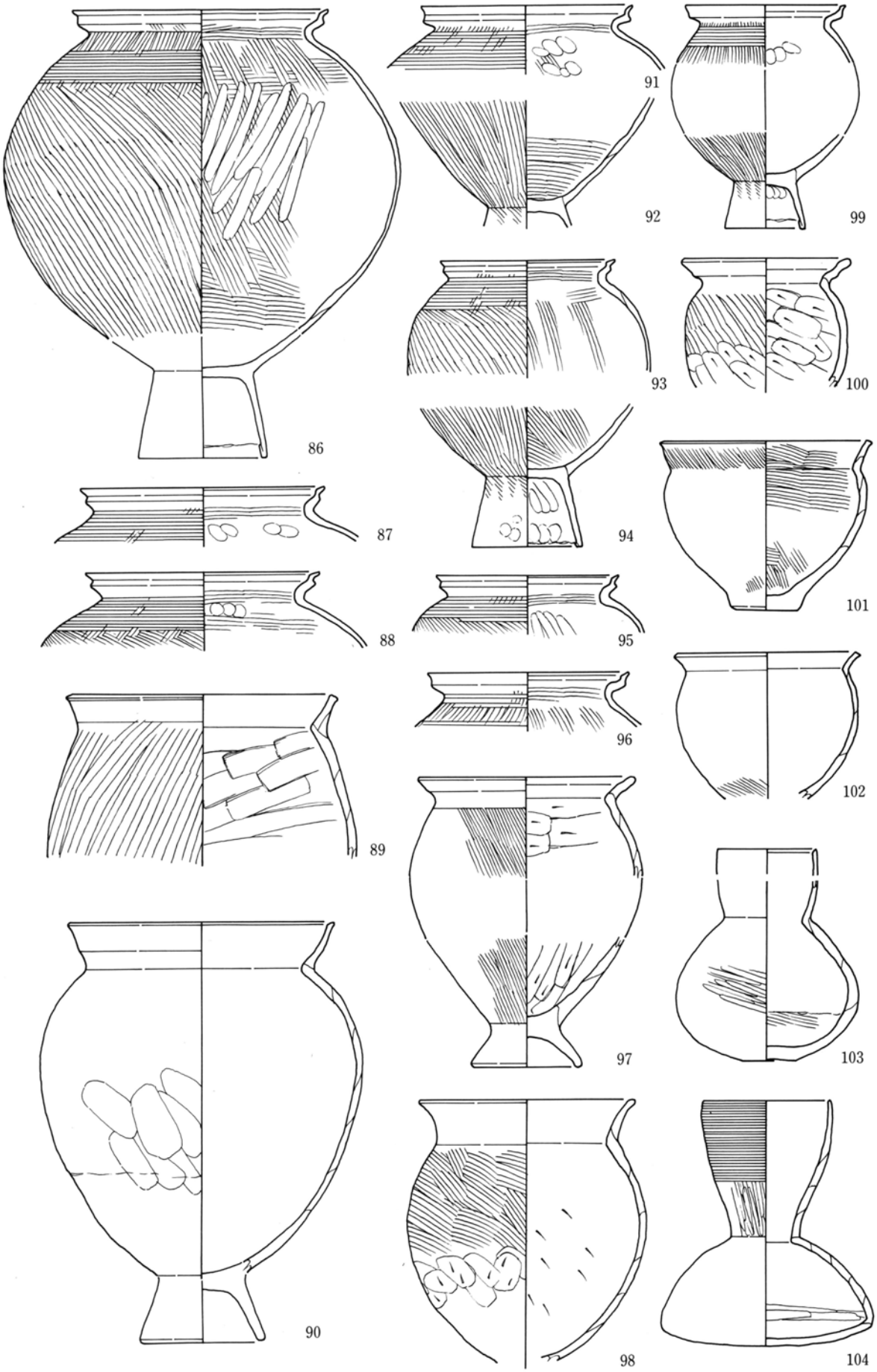
図版 7


SZ01
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
SU01
43
44
45
46
47
48
SU02
49
50
51
52
53
54
55
56
57
0
20cm

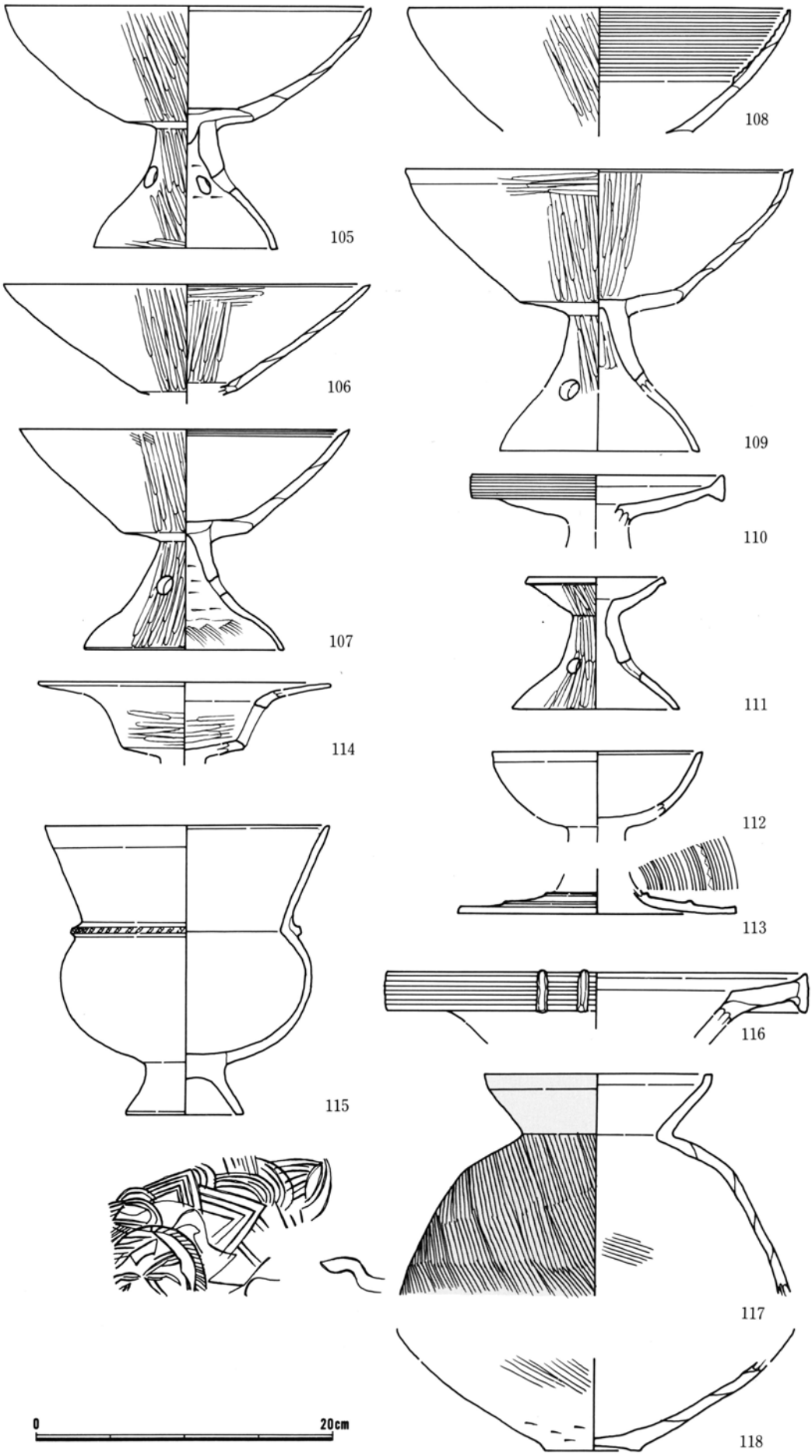
SZ04


58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85

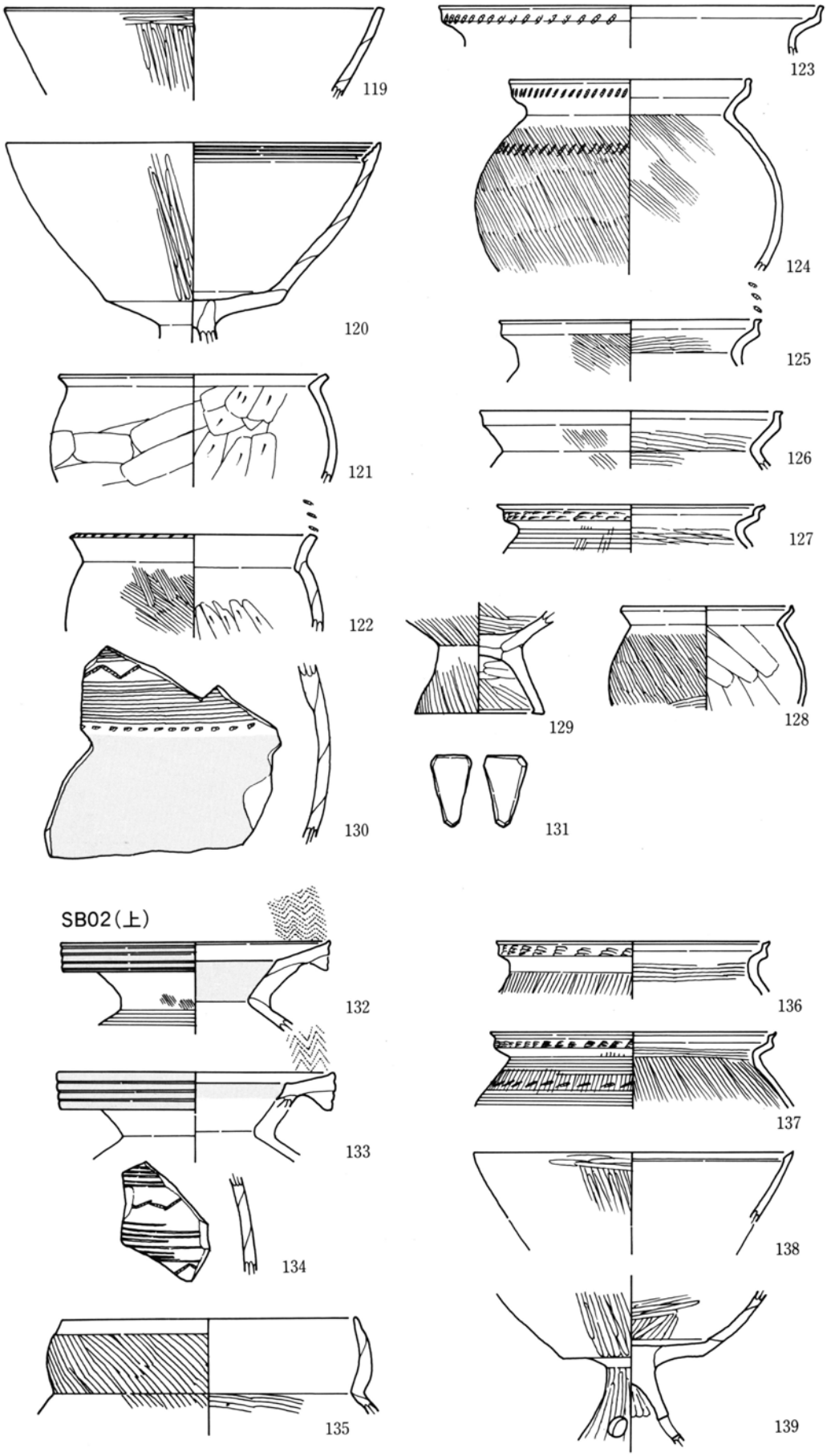
SZ02



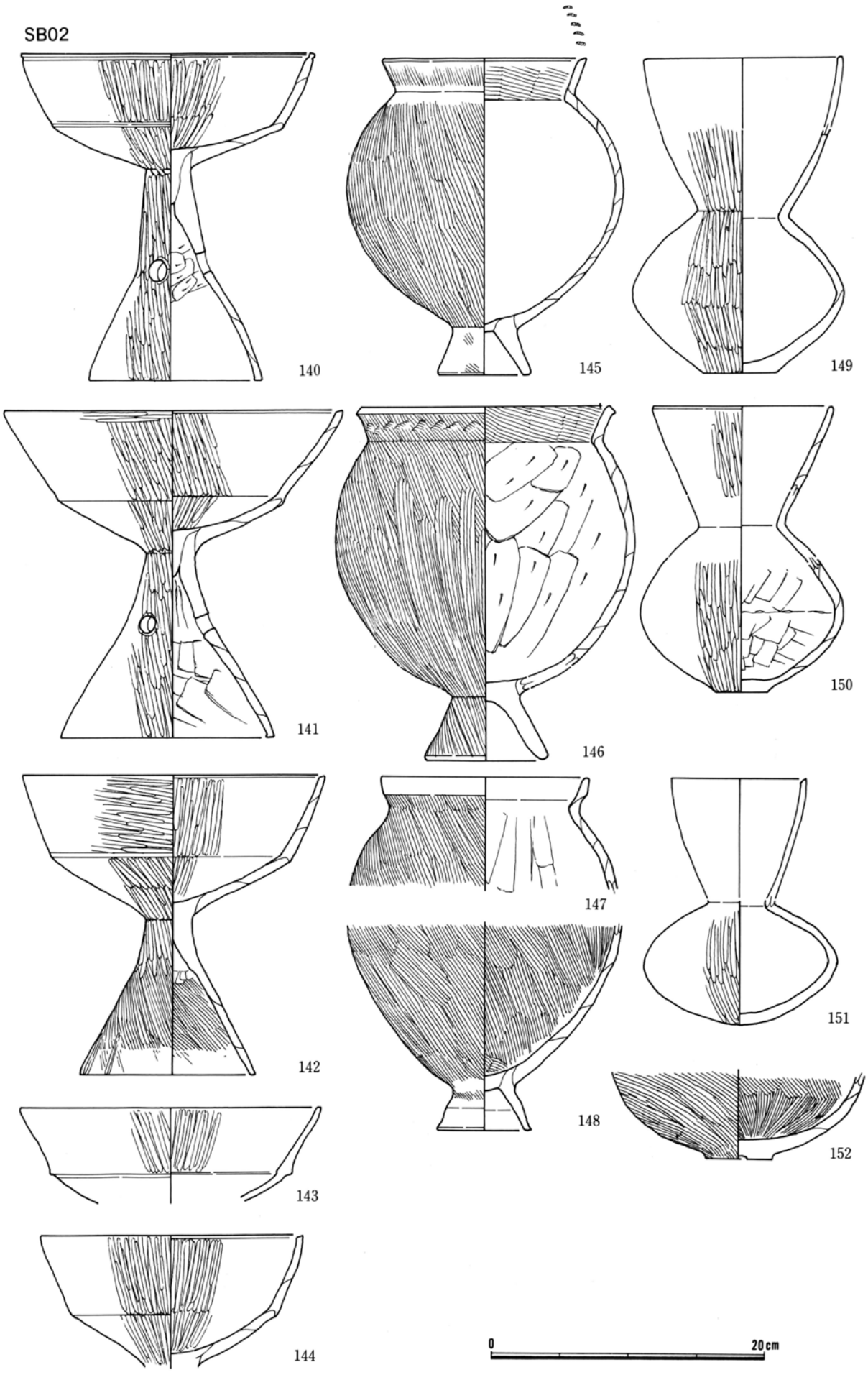
SZ02



SB01

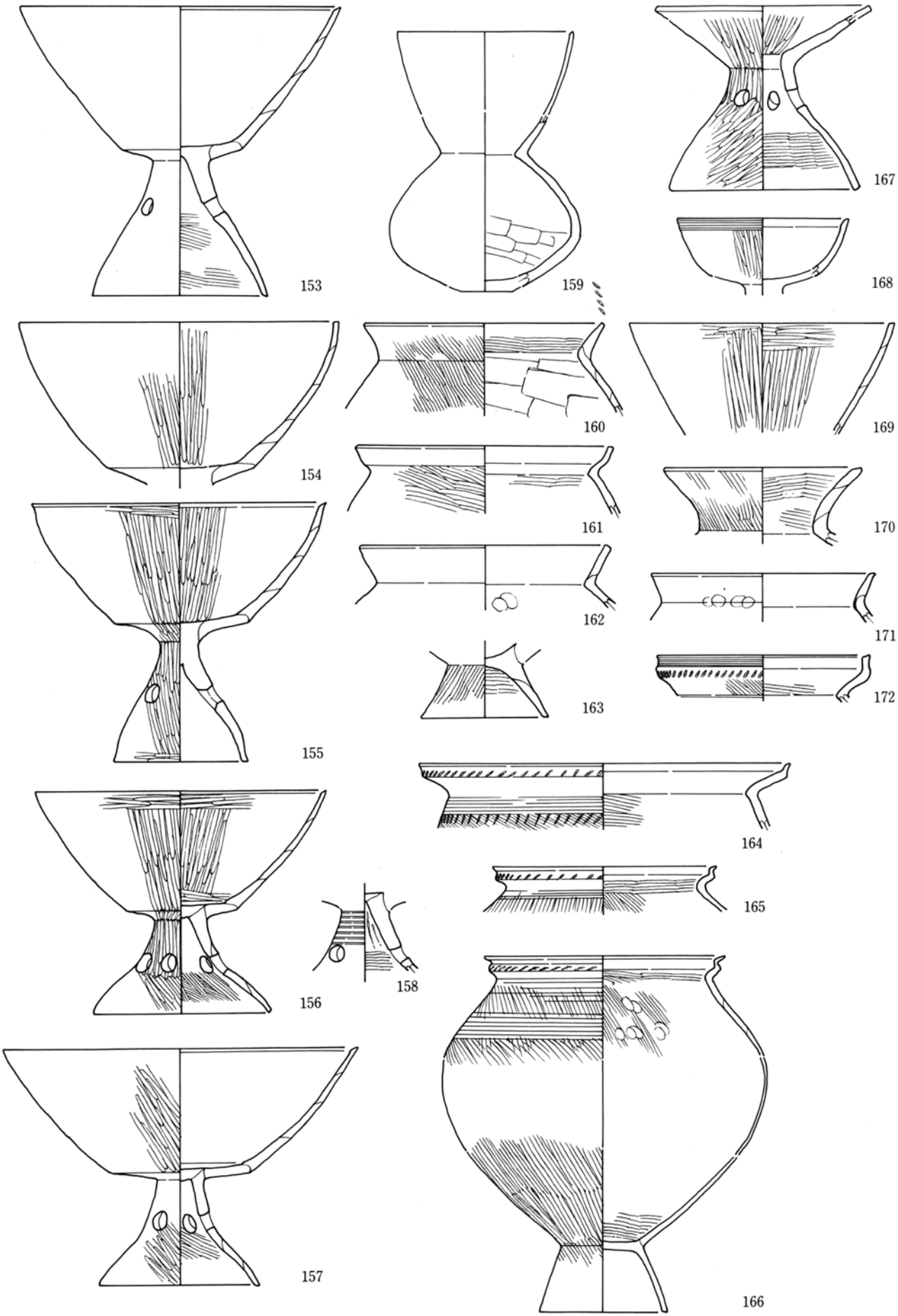

119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
SB02(上)
132
133
134
135
136
137
138
139

SB02

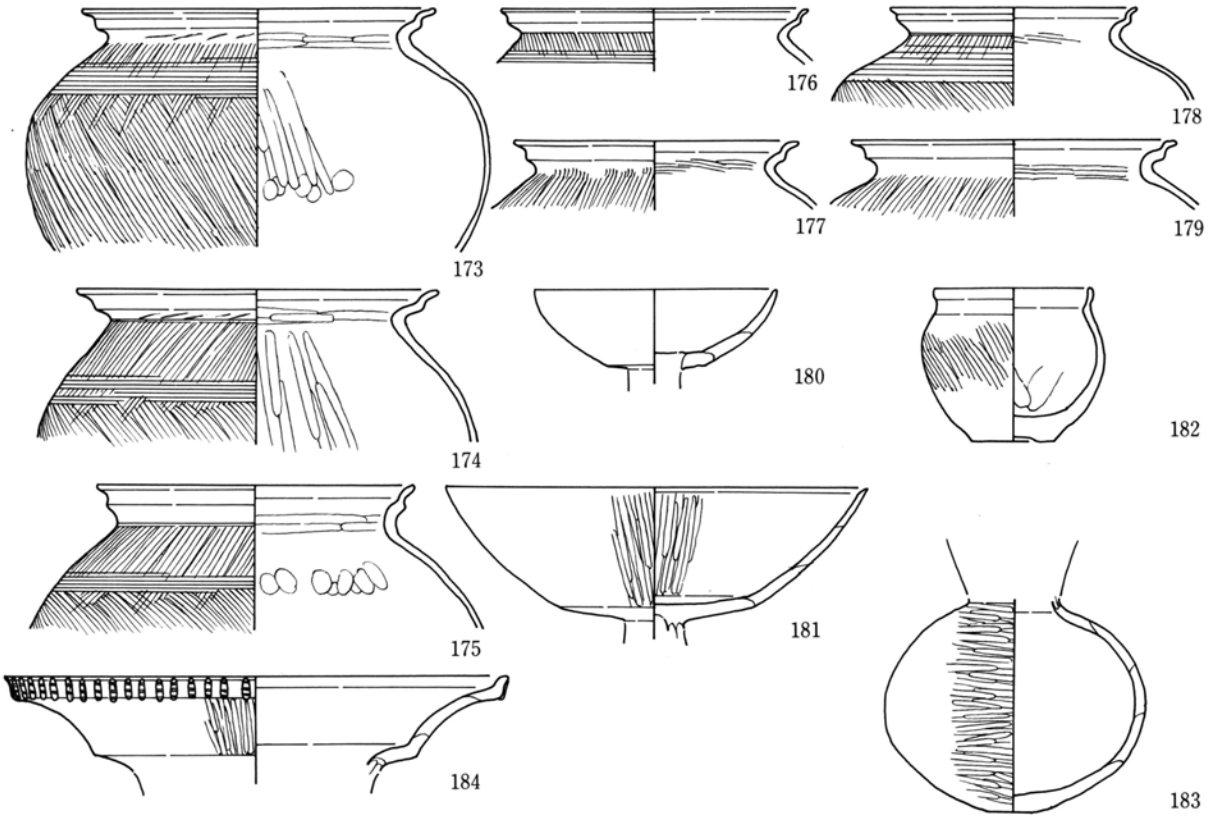


図版13

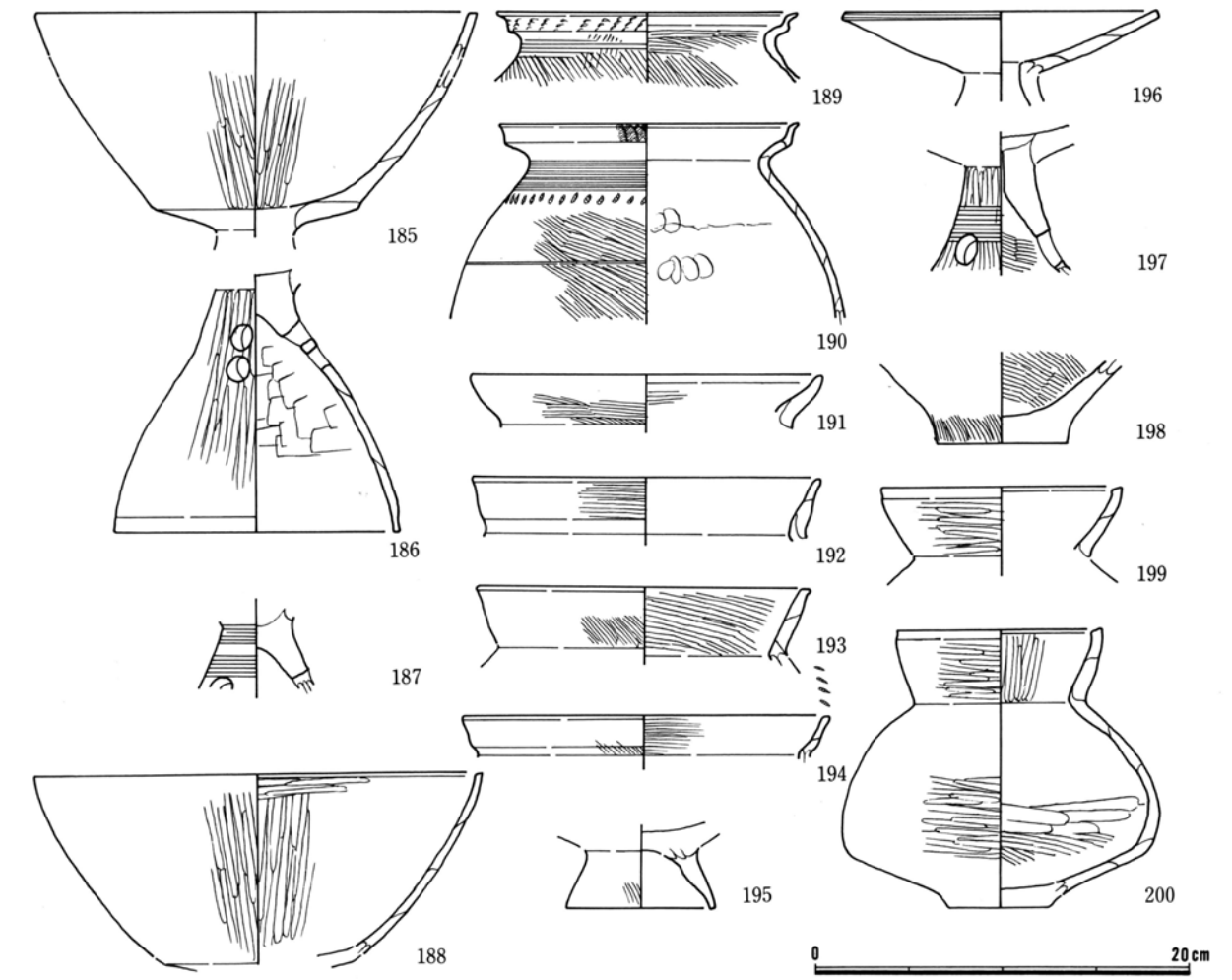
SB03

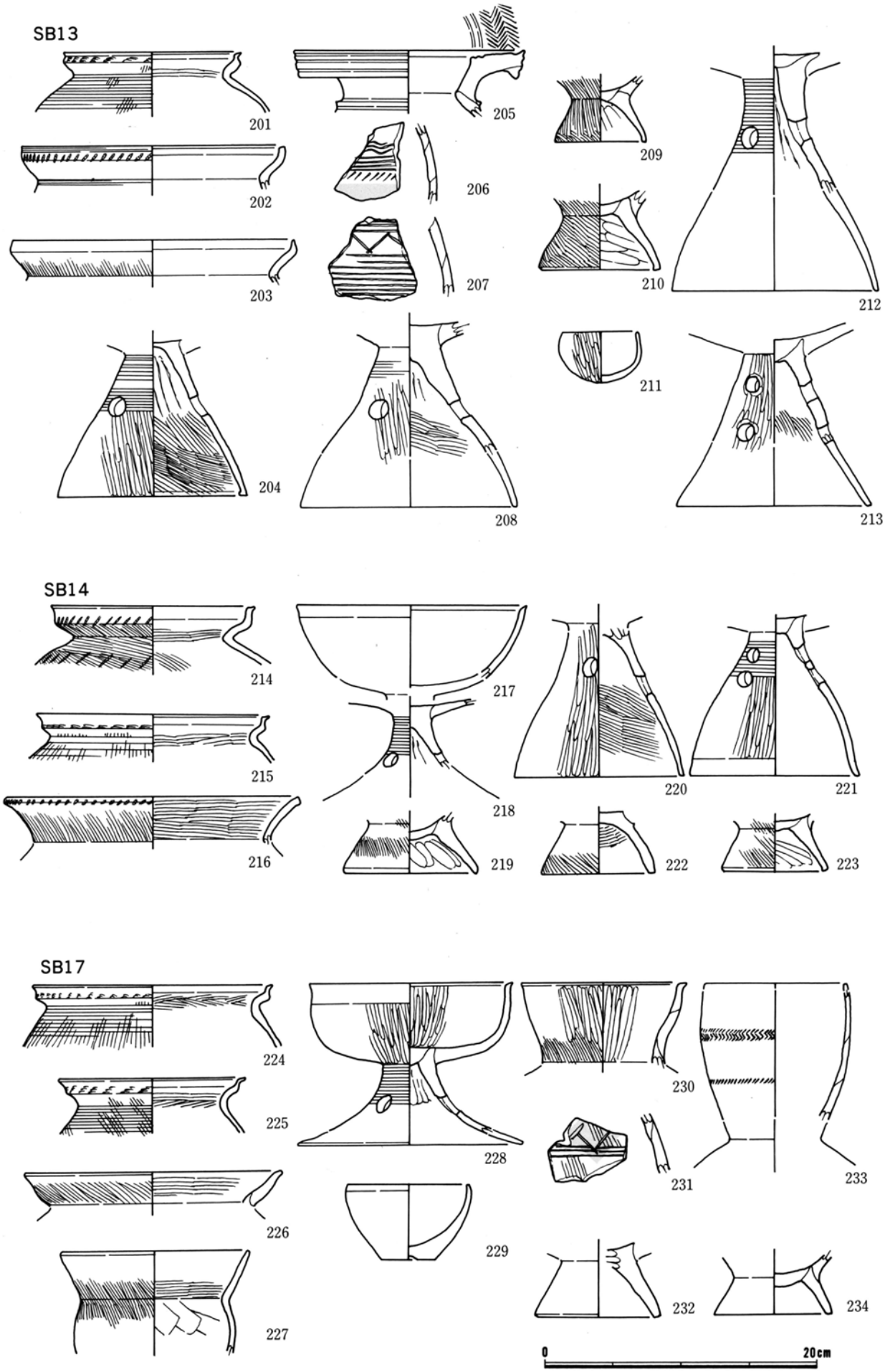

153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172

SB06

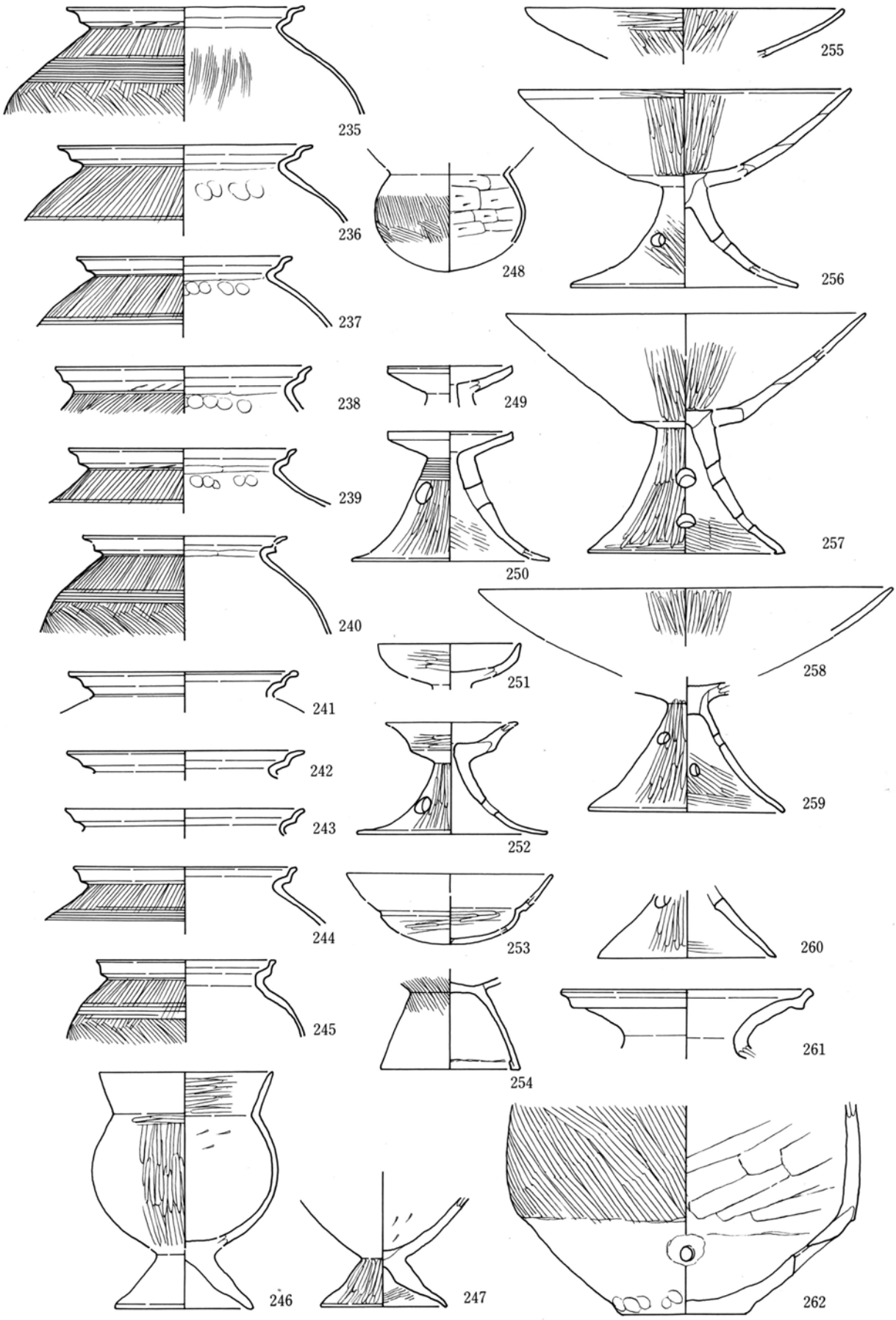

173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184

SB10

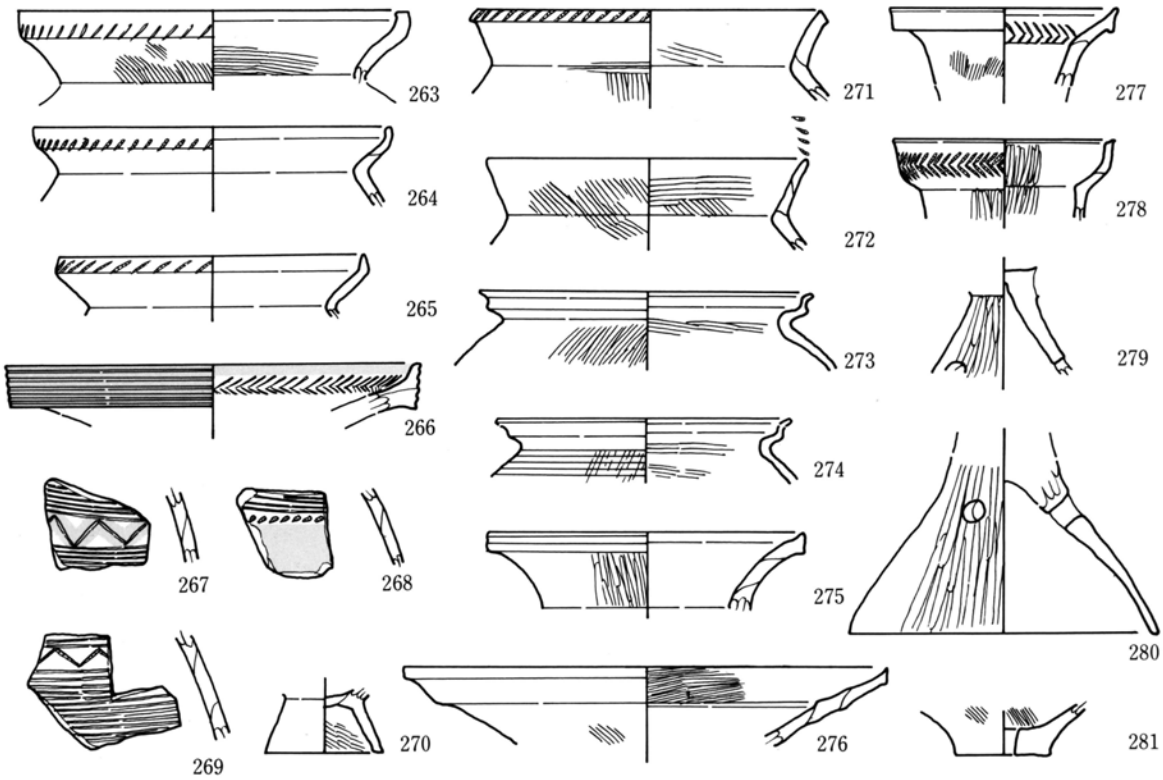

185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
0
20cm


SB13
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
SB14
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
SB17
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
0
20cm

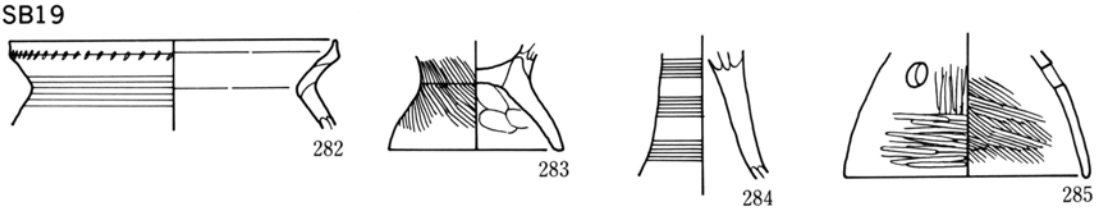
SB12


235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262

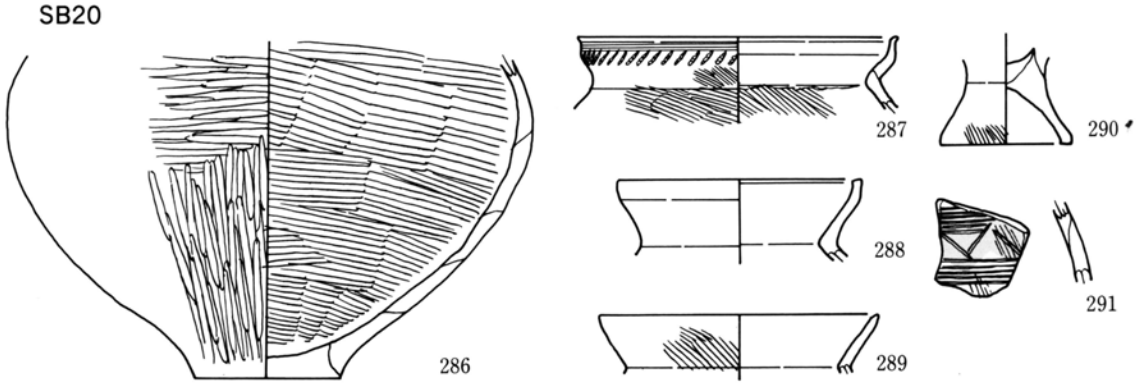
SB18



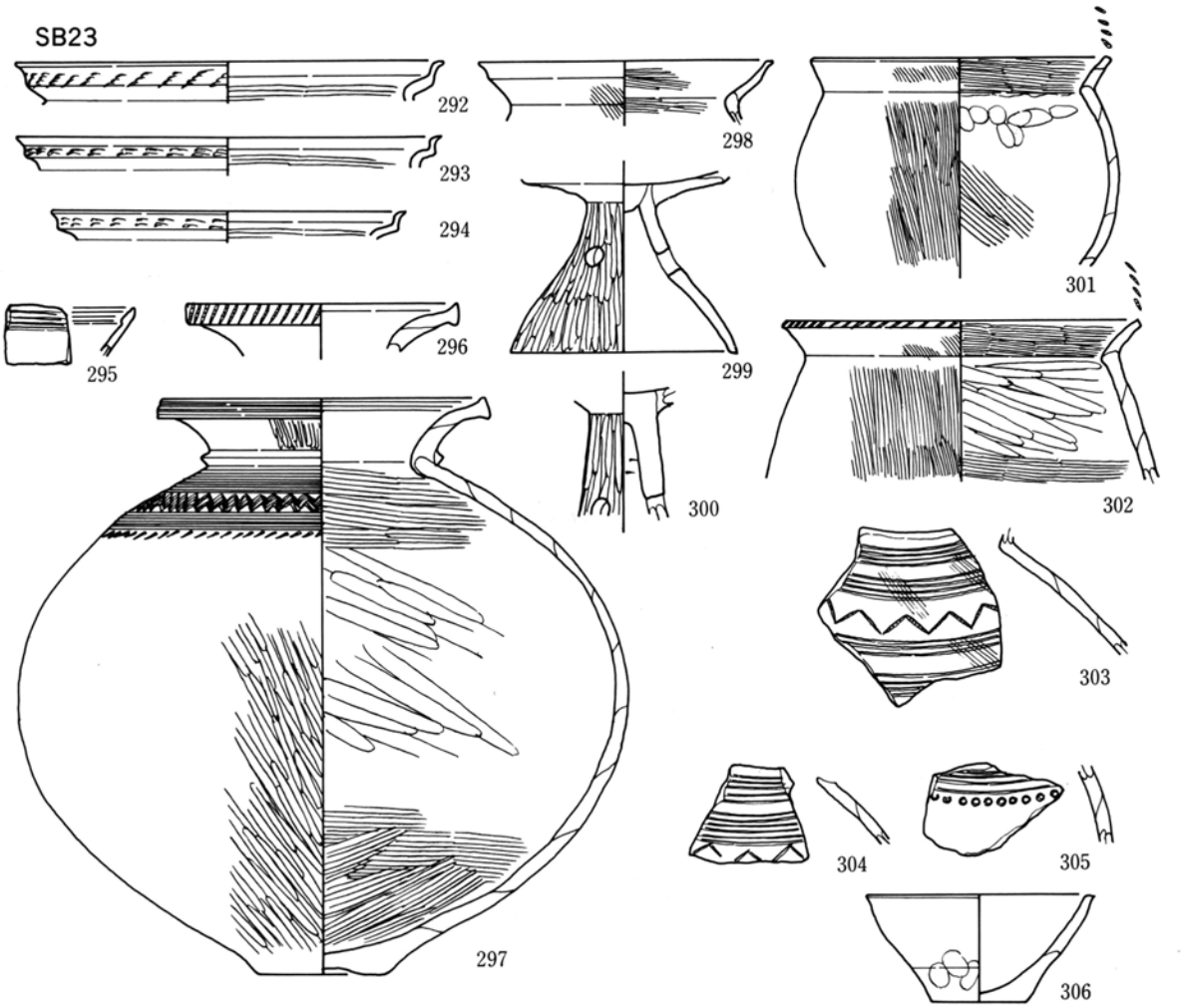
SB19



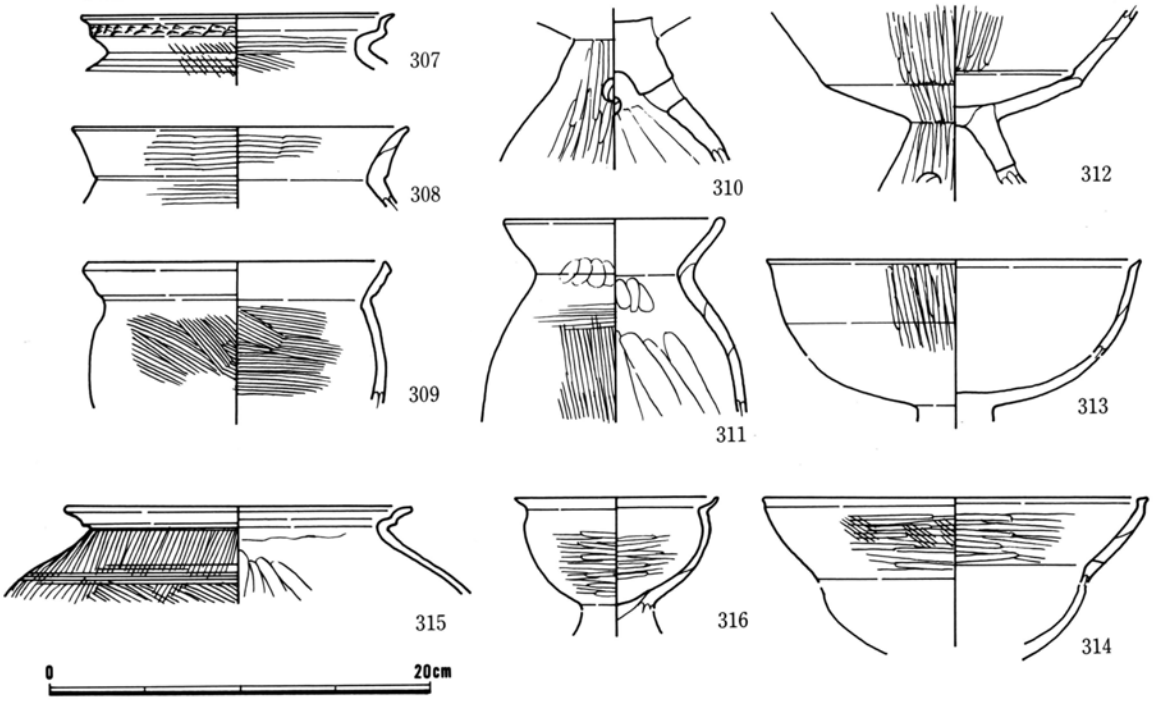
SB20



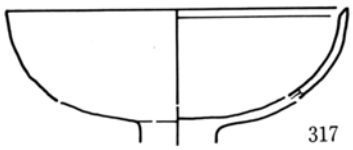
SB23

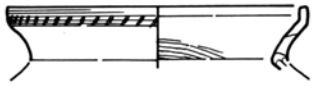

292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306

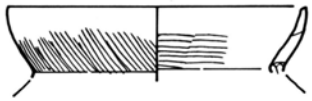
SB24

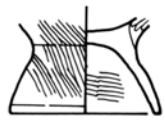

307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
0
20cm

SB26

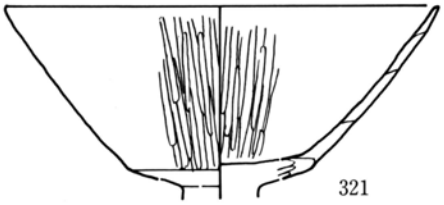

317

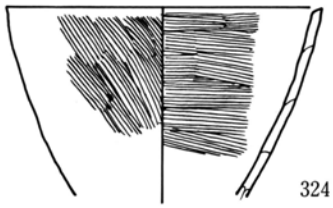

318

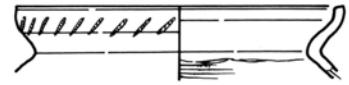

319


320

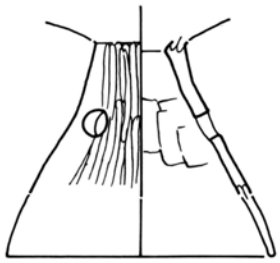
SB27

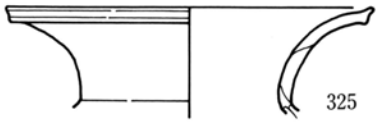

321

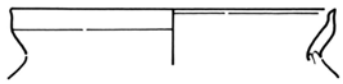

324

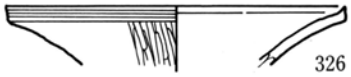

330

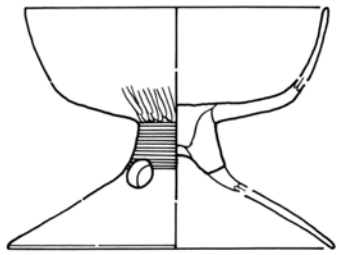
331

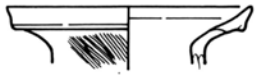

322

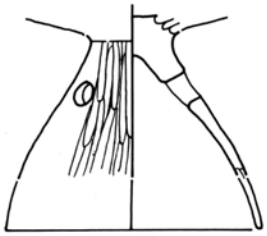

325


332

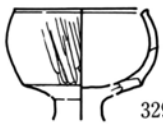

326

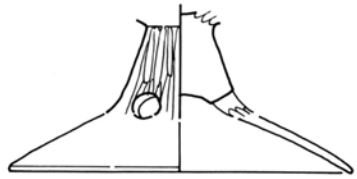

333

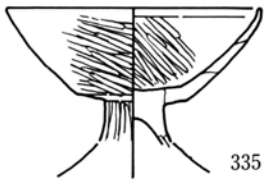

327

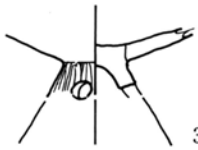

323

328


329


334

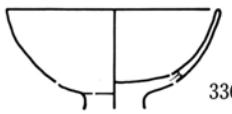

335


339

342

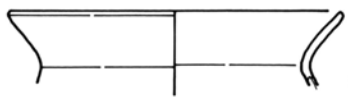
344

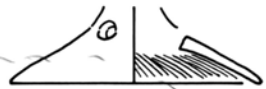
345

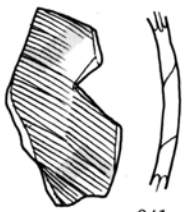

336

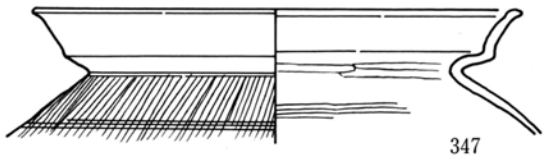
340

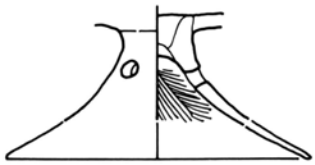
343


346

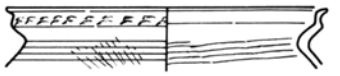

337

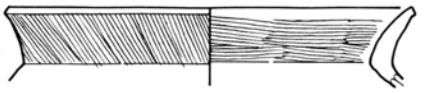

341

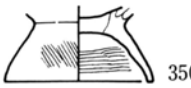

347


338

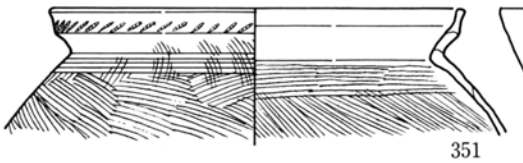
SB29

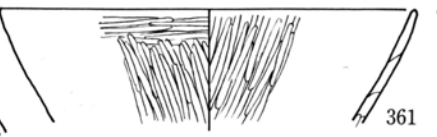

348


349

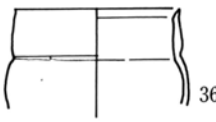

350

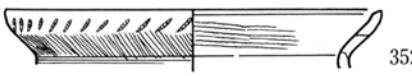
SB30

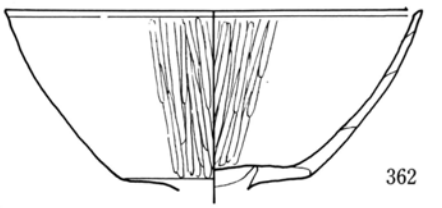

351

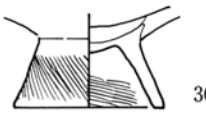

361

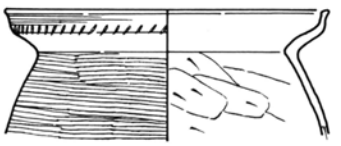
367


368

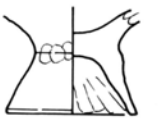

352

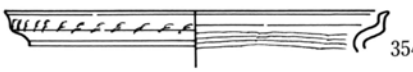

362

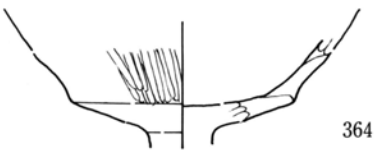

369


353

363

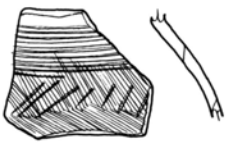

370


354

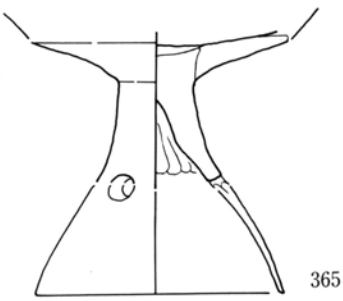

364

371

355

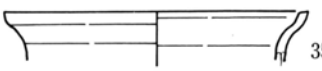

356

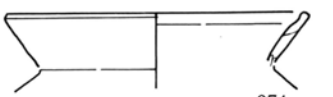
372

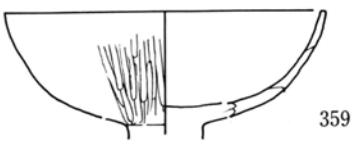

365

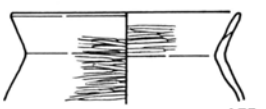
373

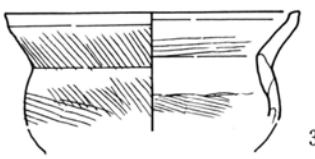
357

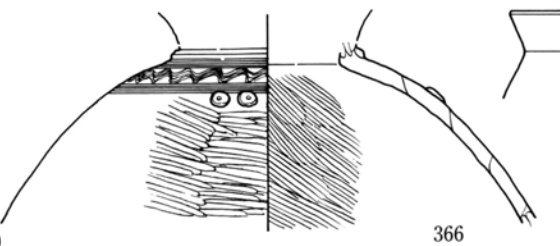

358


374

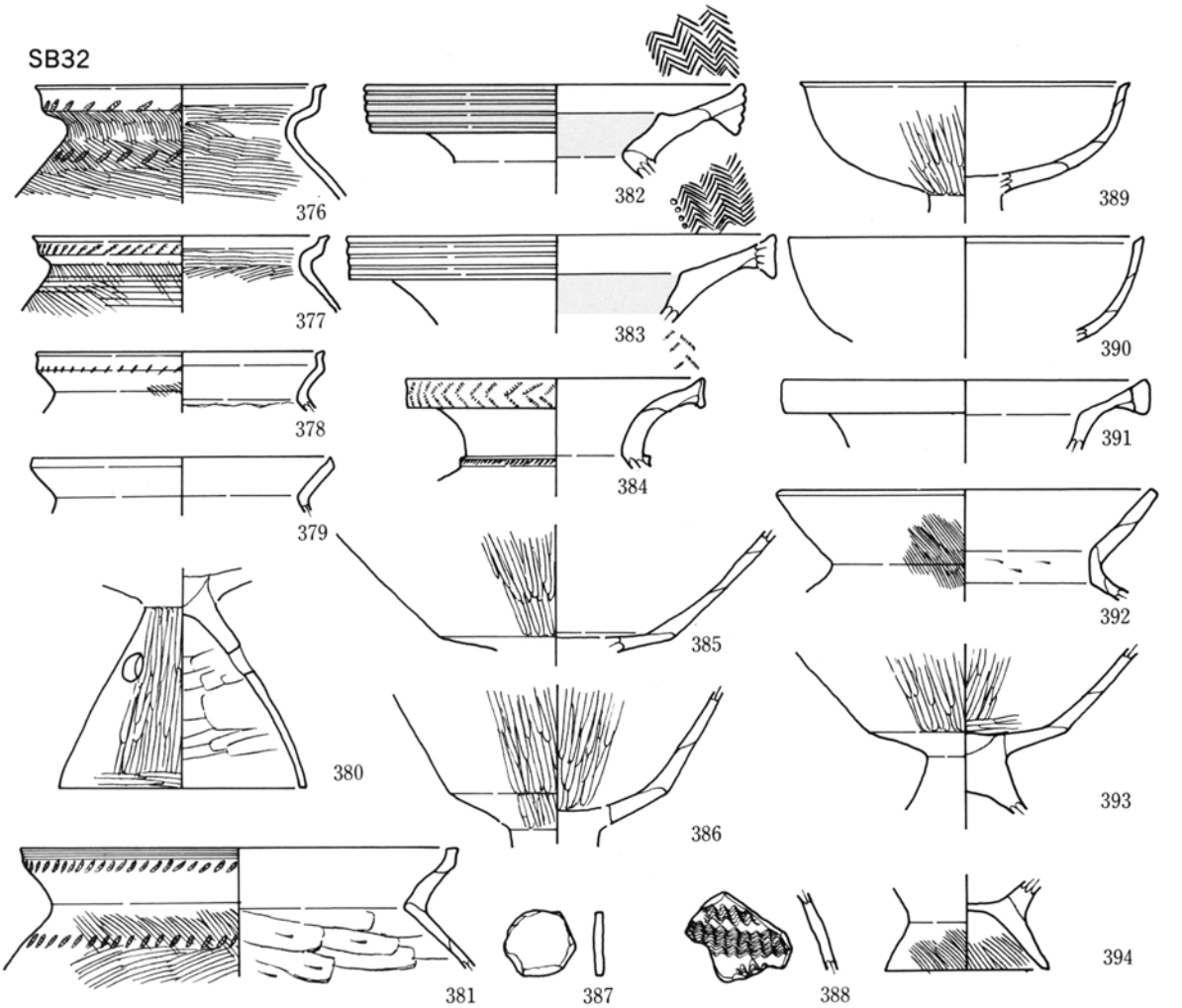

359


375

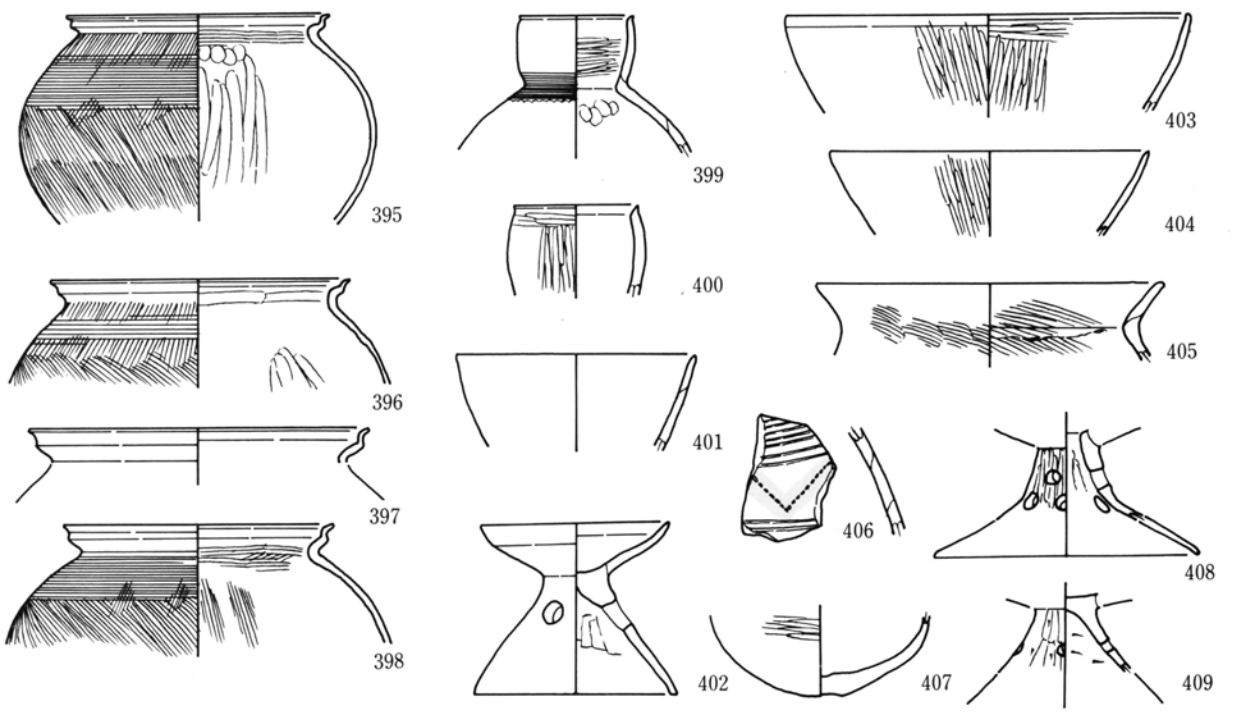

360


366

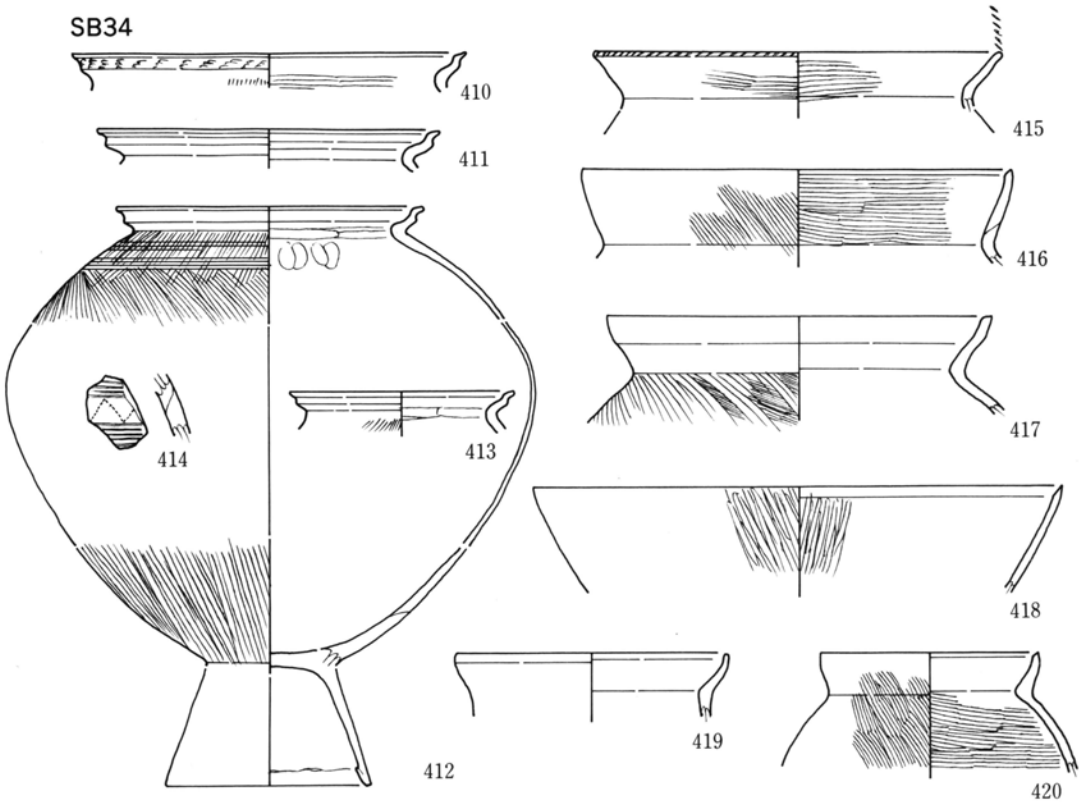
SB32


376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394

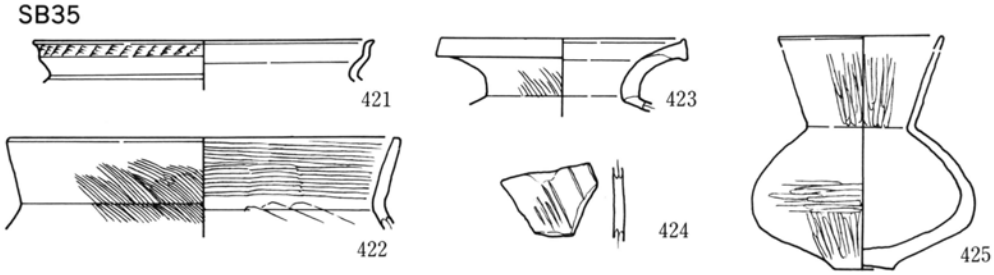
SB33


395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409

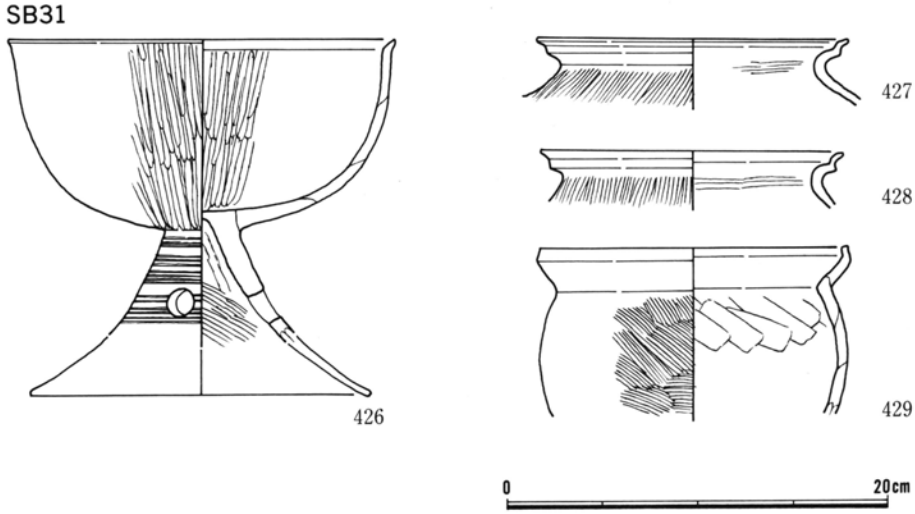
SB34



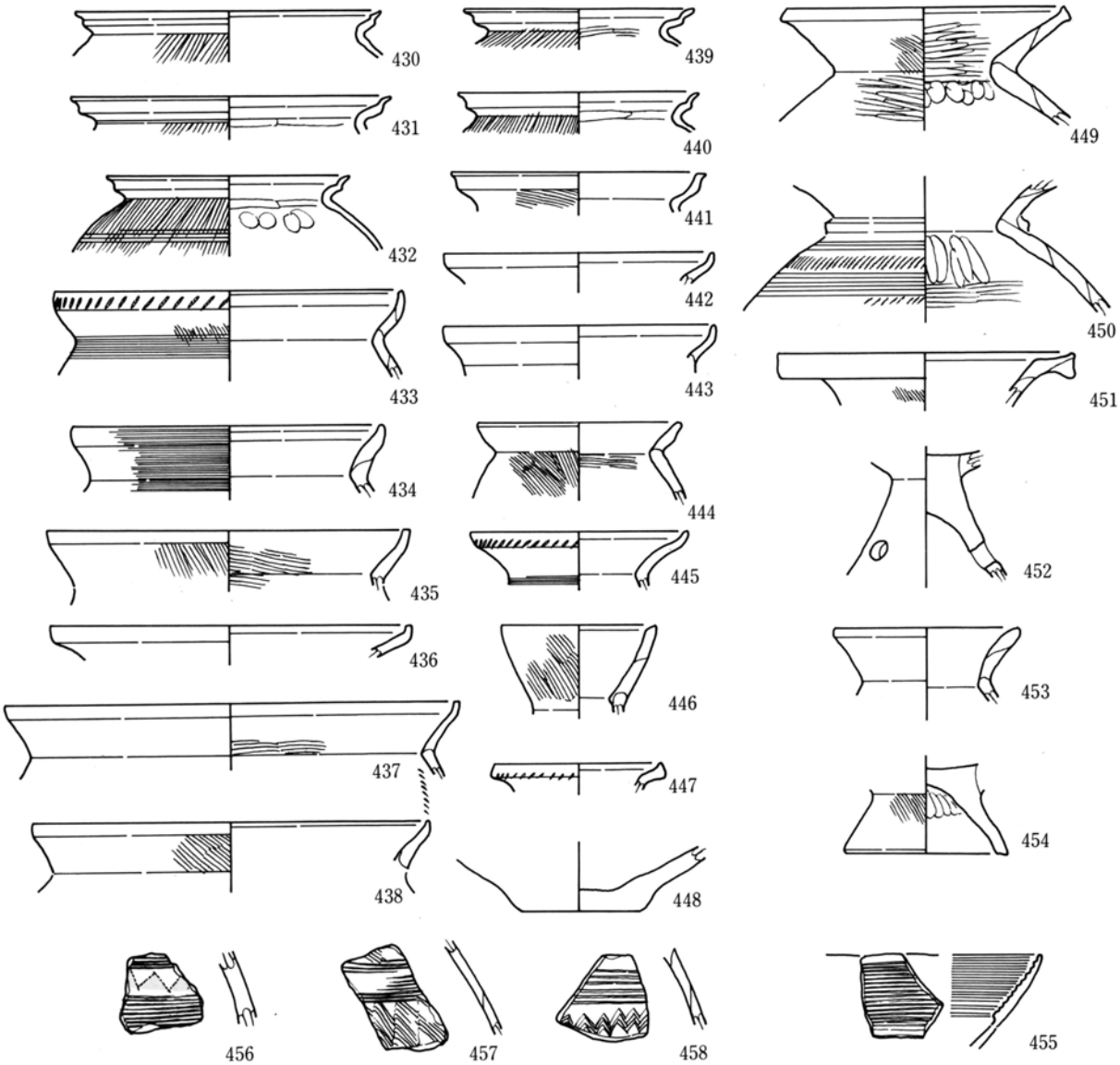
SB35



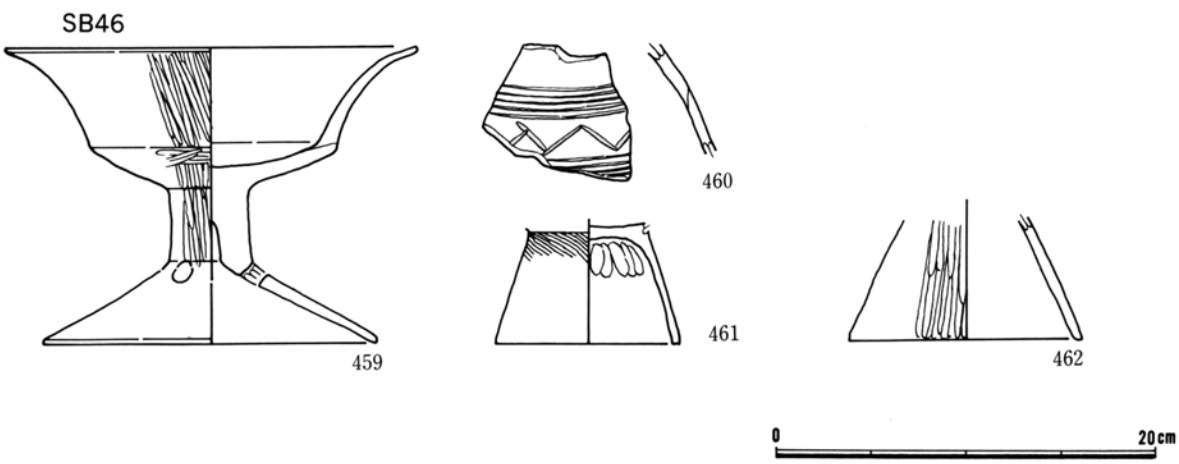
SB31



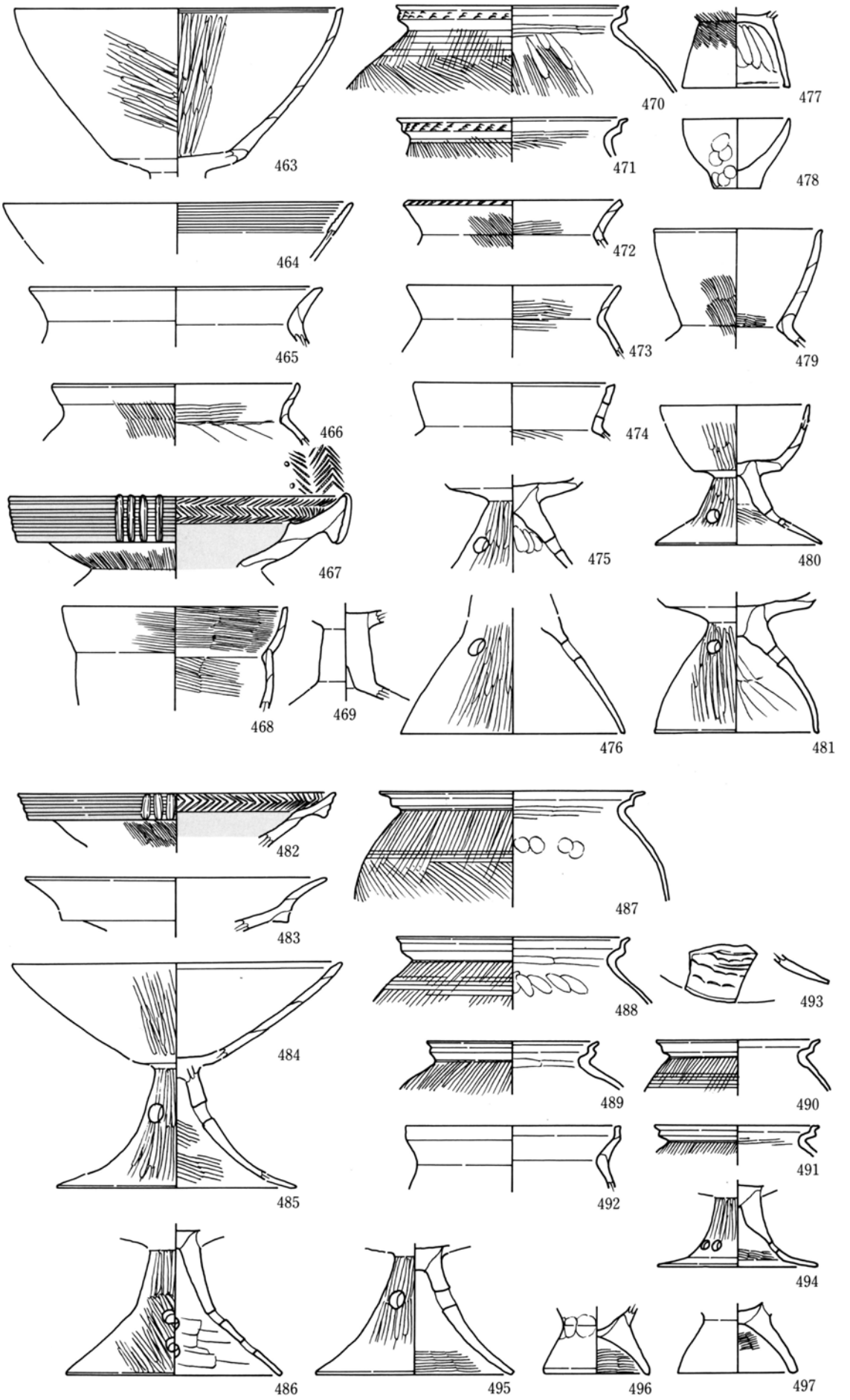
SB38


430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458

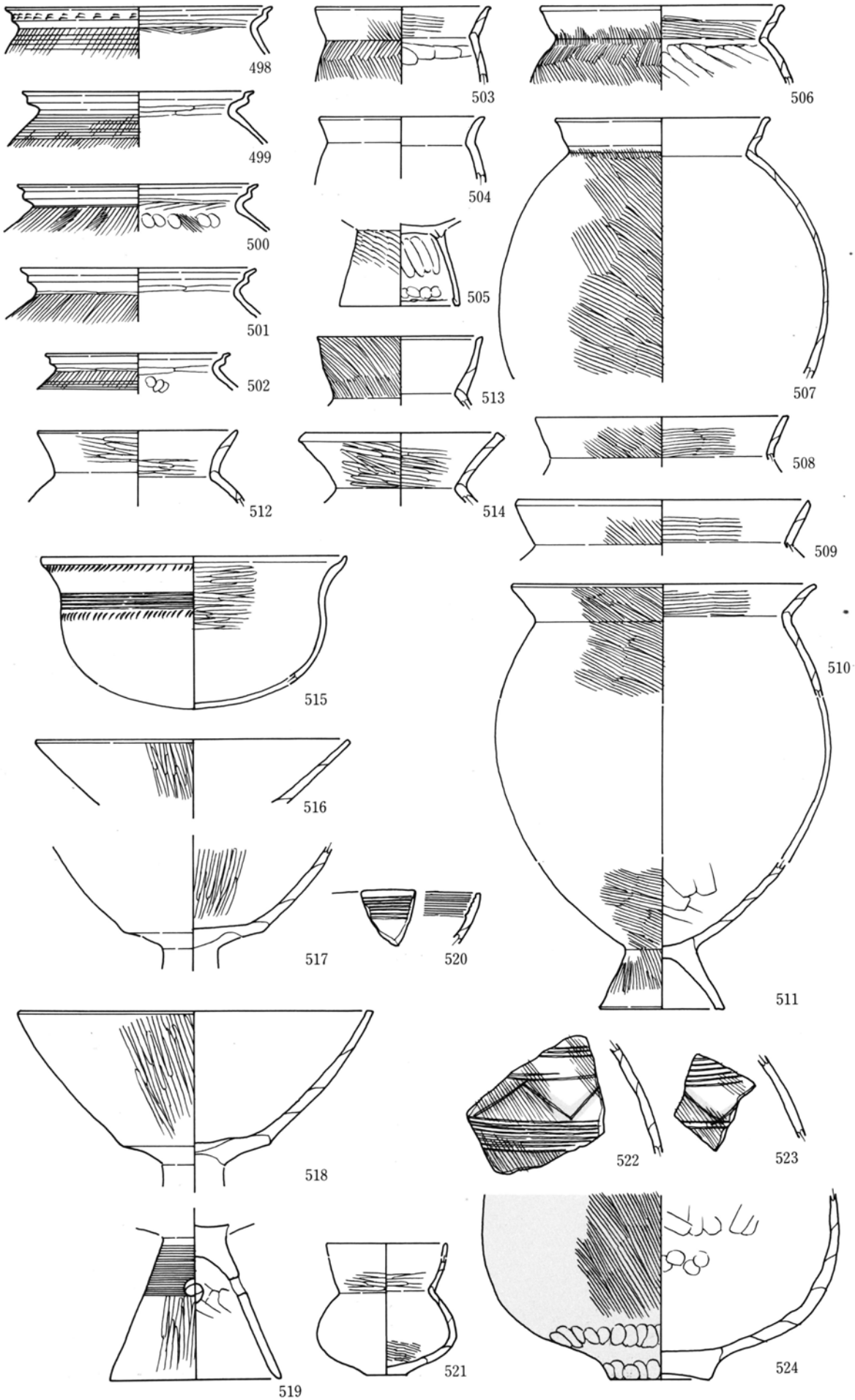
SB46


459
460
461
462
0
20cm

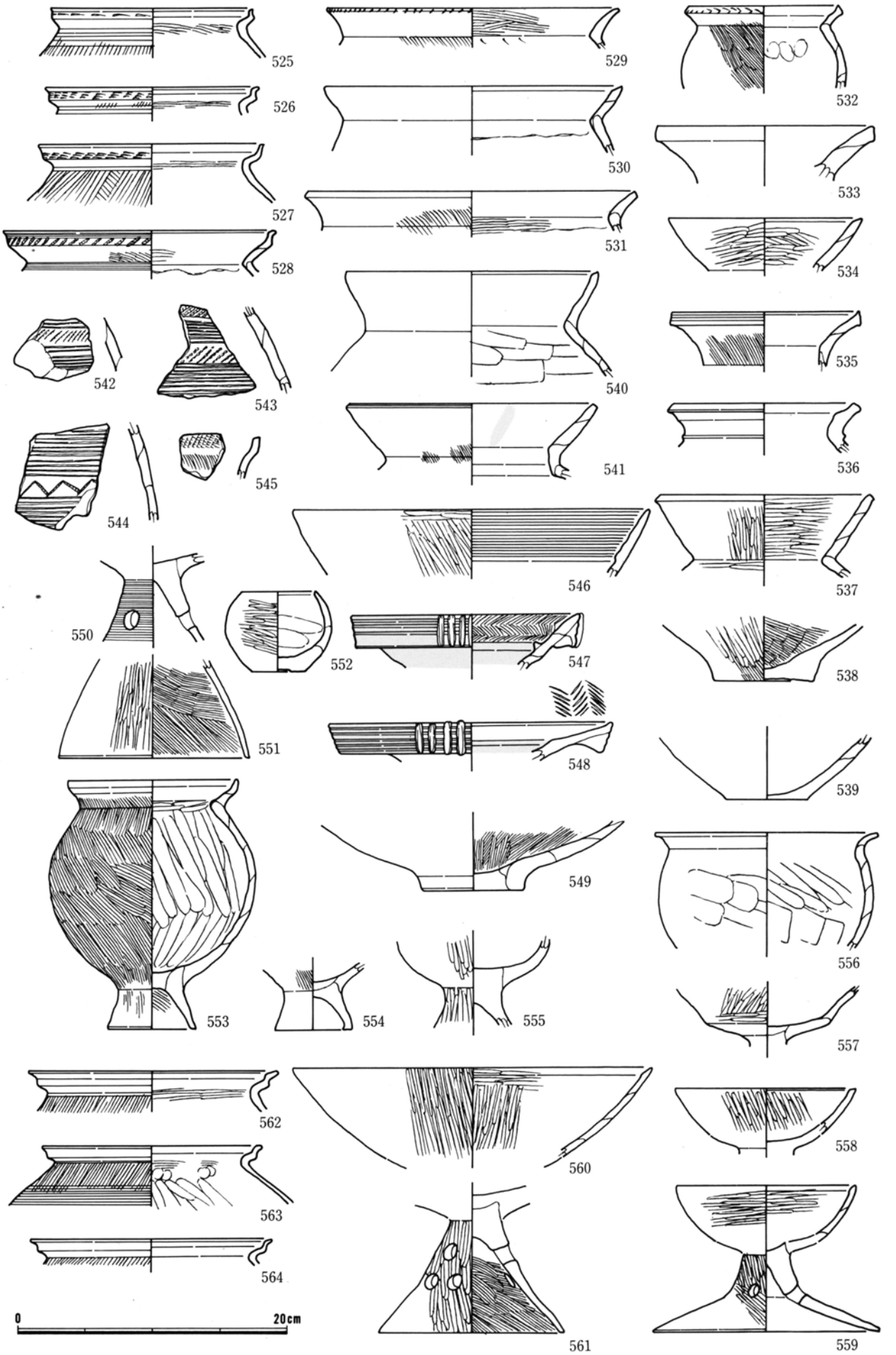
SB39


463
464
465
466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497

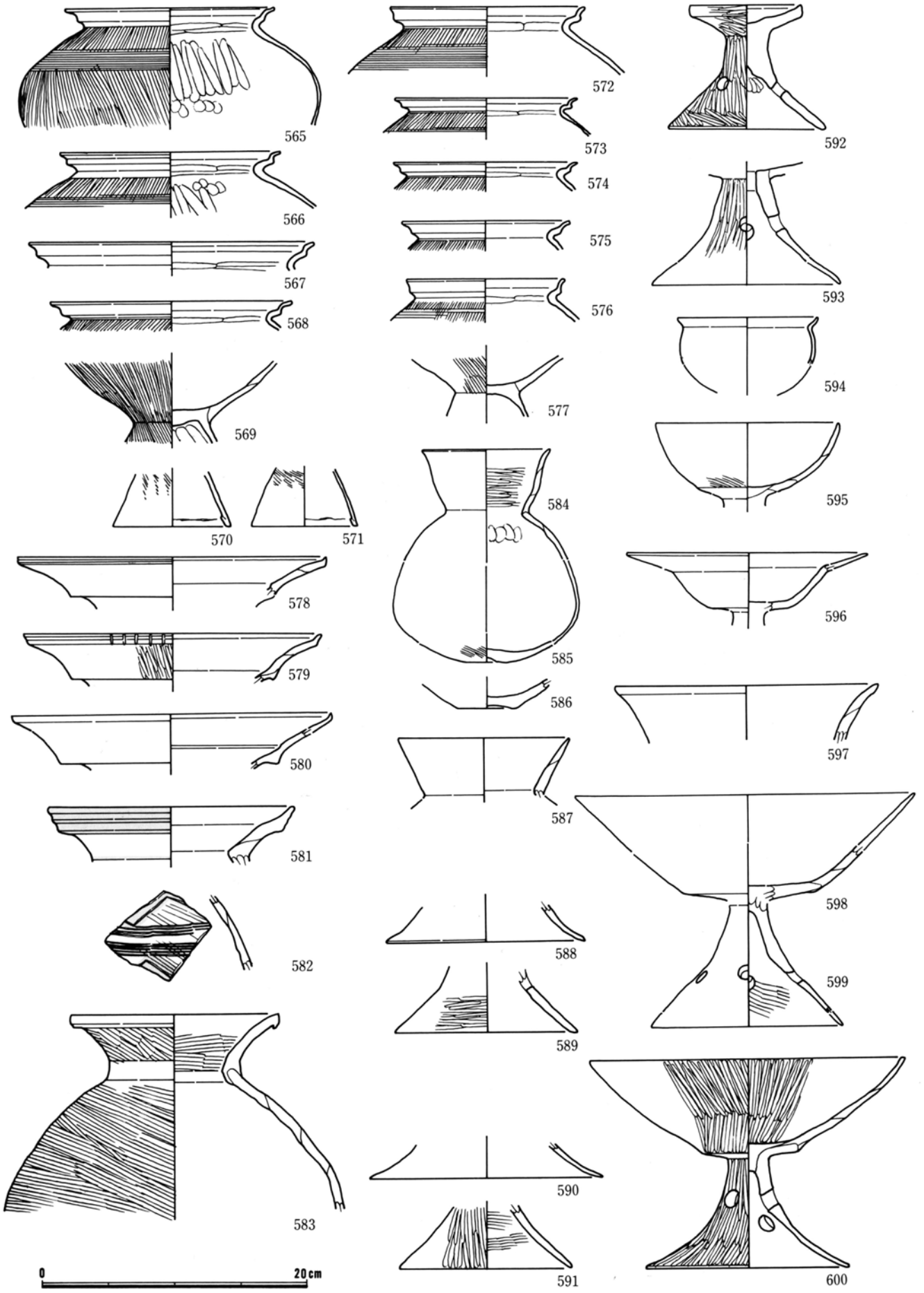
SB40


498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524

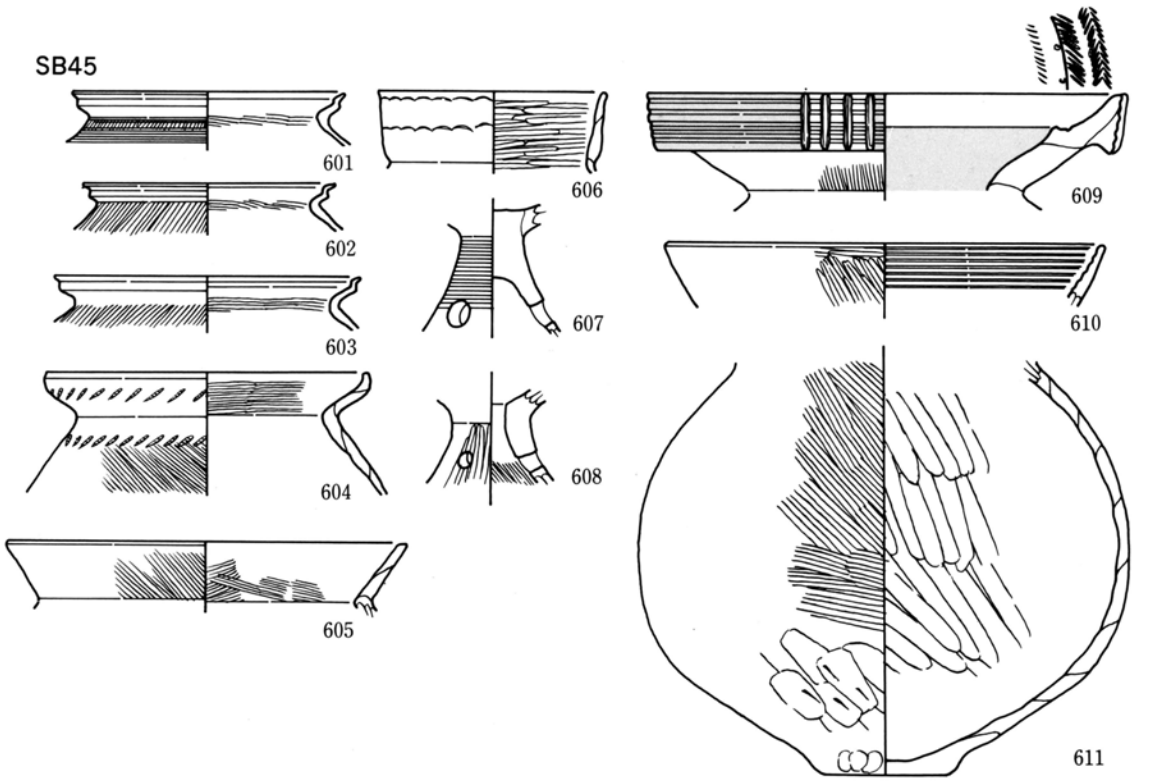
SB41


525
526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562
563
564
0
20cm

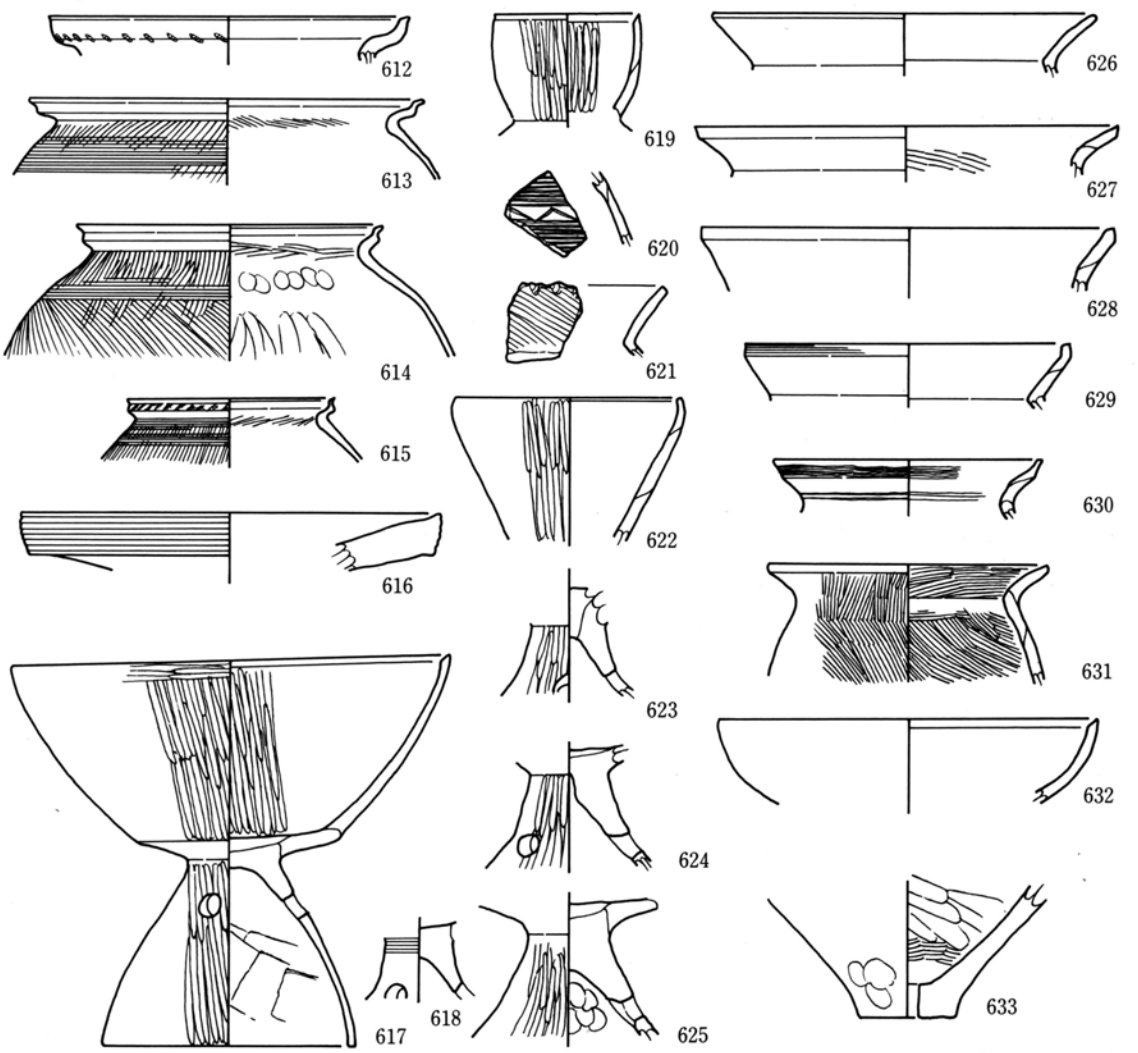
SB45（上）


565
566
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
589
590
591
592
593
594
595
596
597
598
599
600
0
20cm

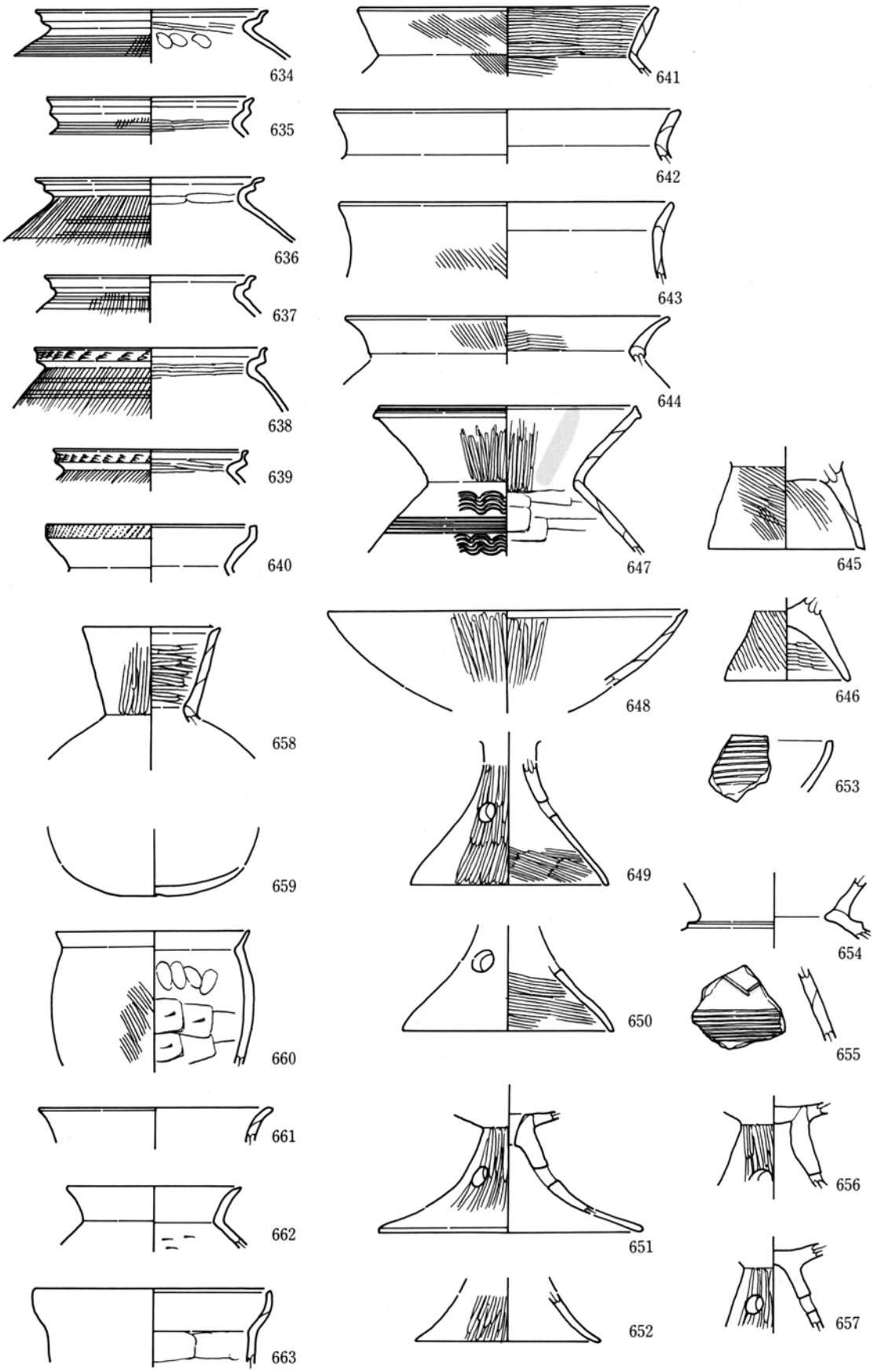
SB45


601
602
603
604
605
606
607
608
609
610
611

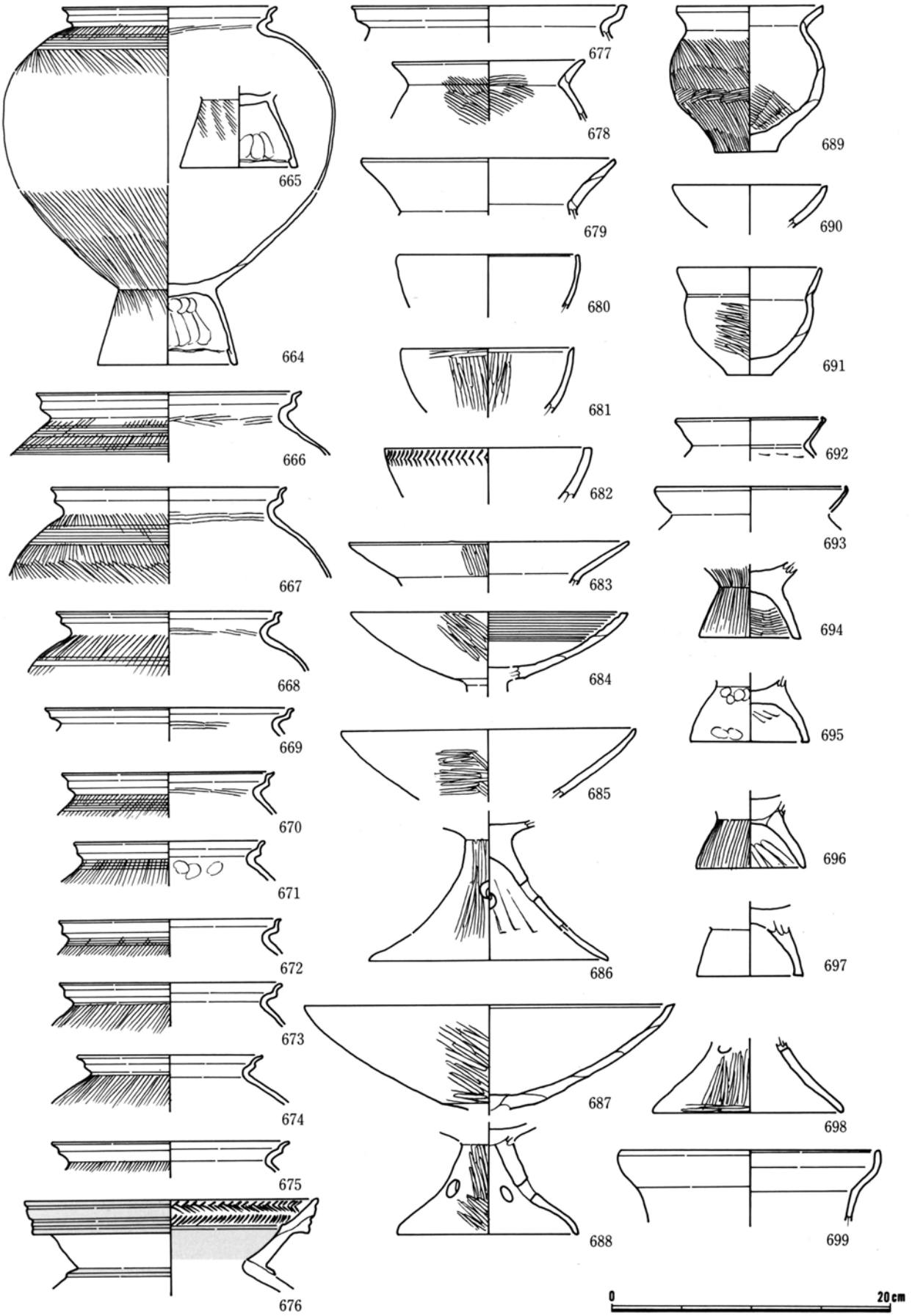
SB48


612
613
614
615
616
617
618
619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
629
630
631
632
633

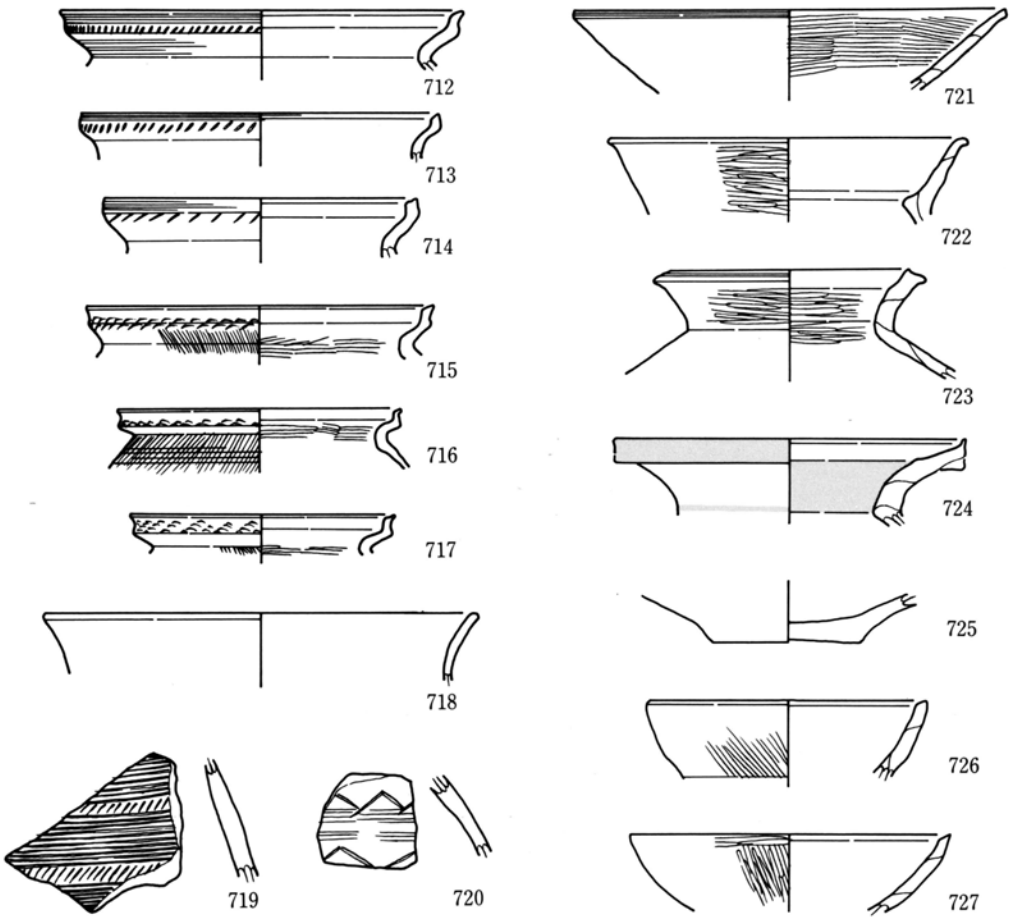
SB49

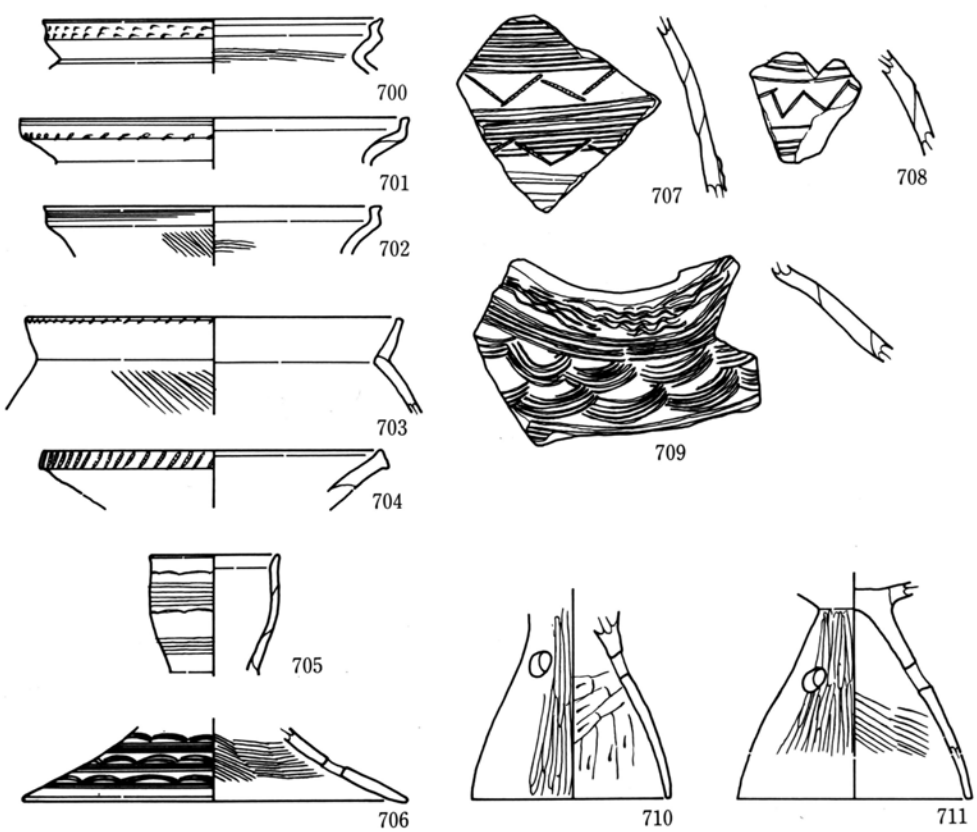

634
635
636
637
638
639
640
641
642
643
644
645
646
647
648
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
660
661
662
663

SB50

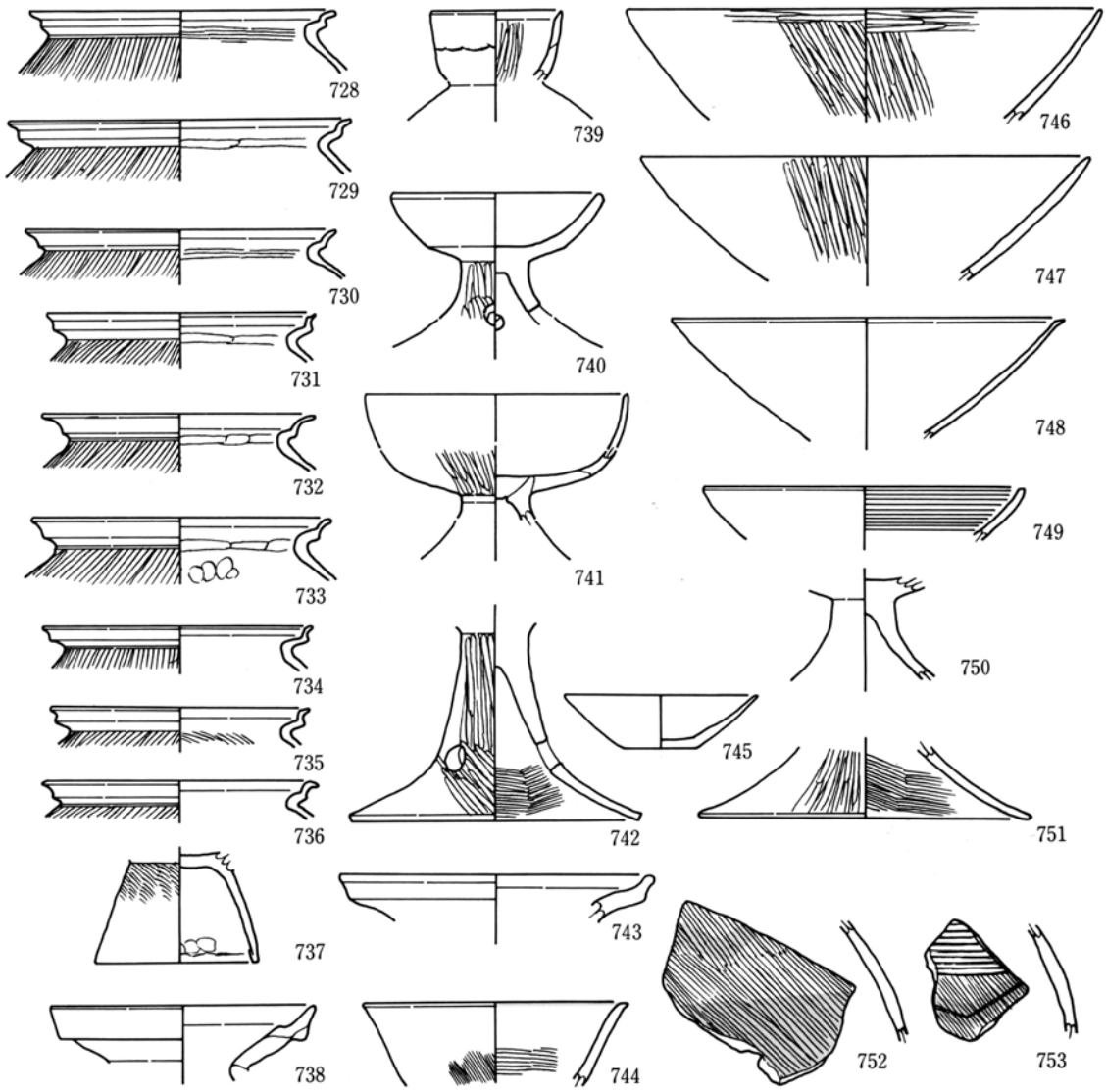

664
665
666
667
668
669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
0
20cm

SB51

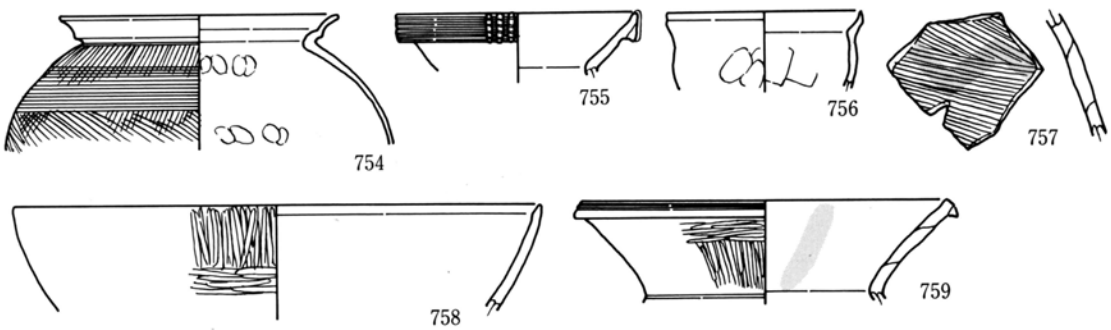

712
713
714
715
716
717
718
719
720
721
722
723
724
725
726
727


700
701
702
703
704
705
706
707
708
709
710
711

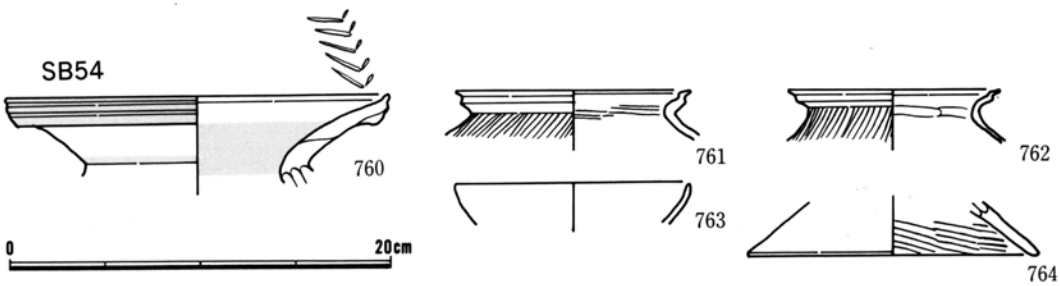
SB51（上）



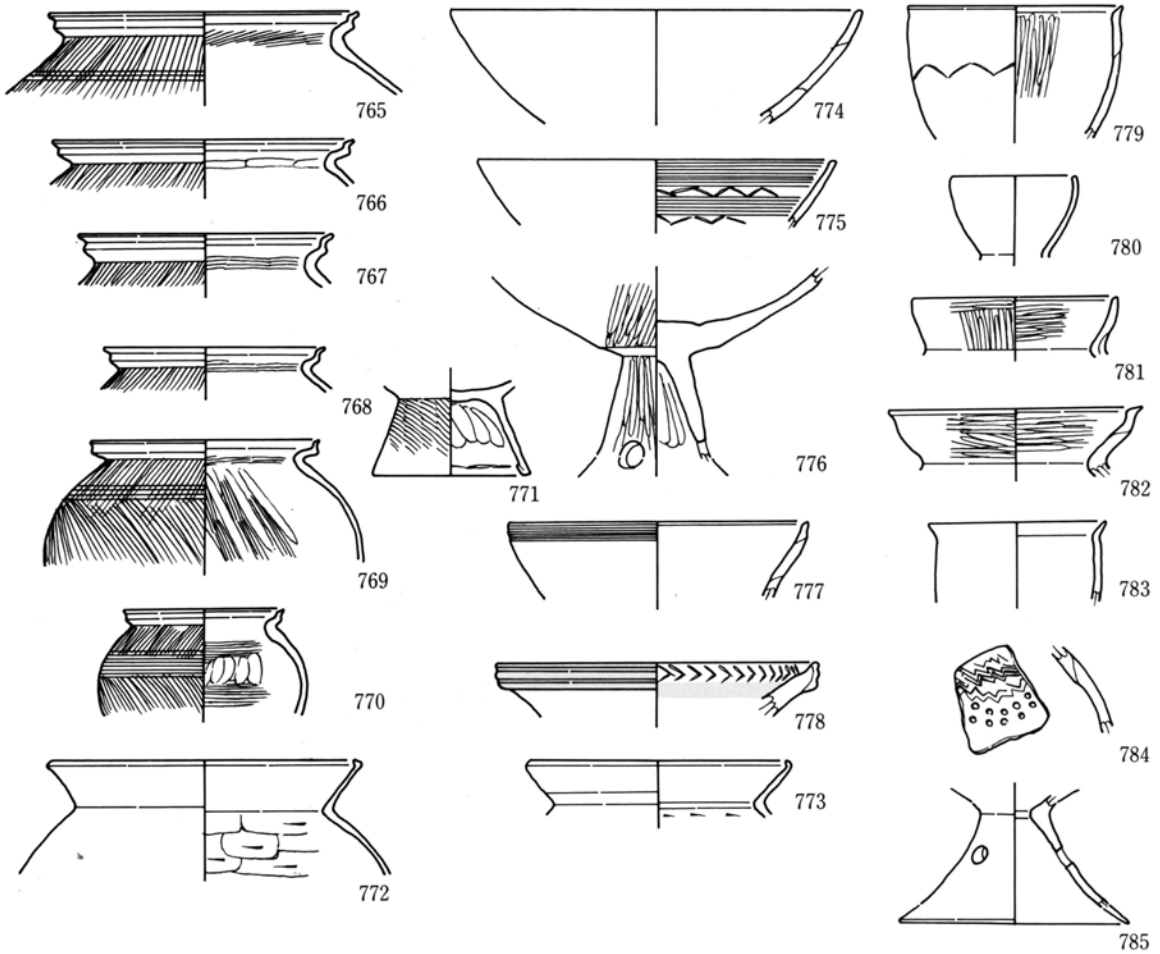
SB53



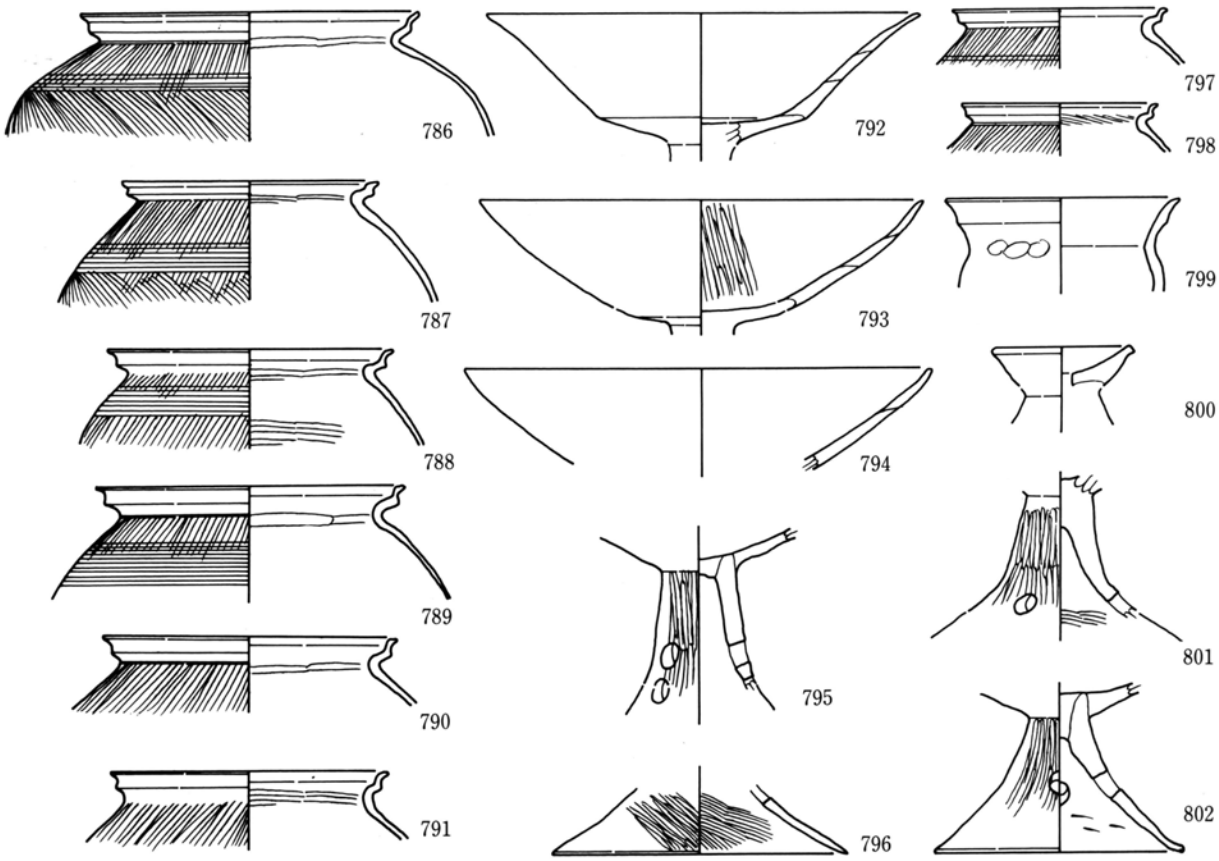
SB54



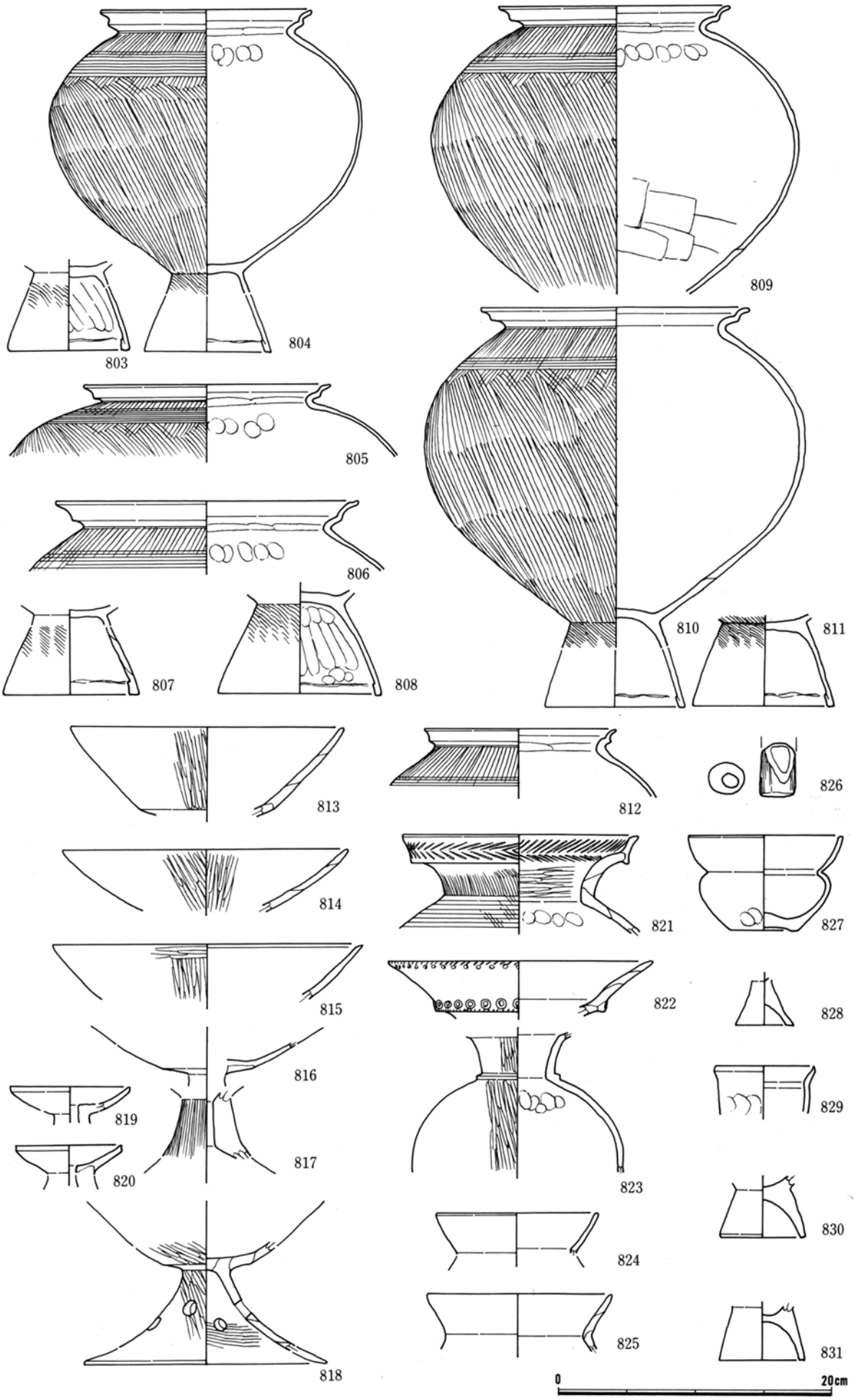
SB52


765
766
767
768
769
770
772
771
774
775
776
777
778
773
779
780
781
782
783
784
785

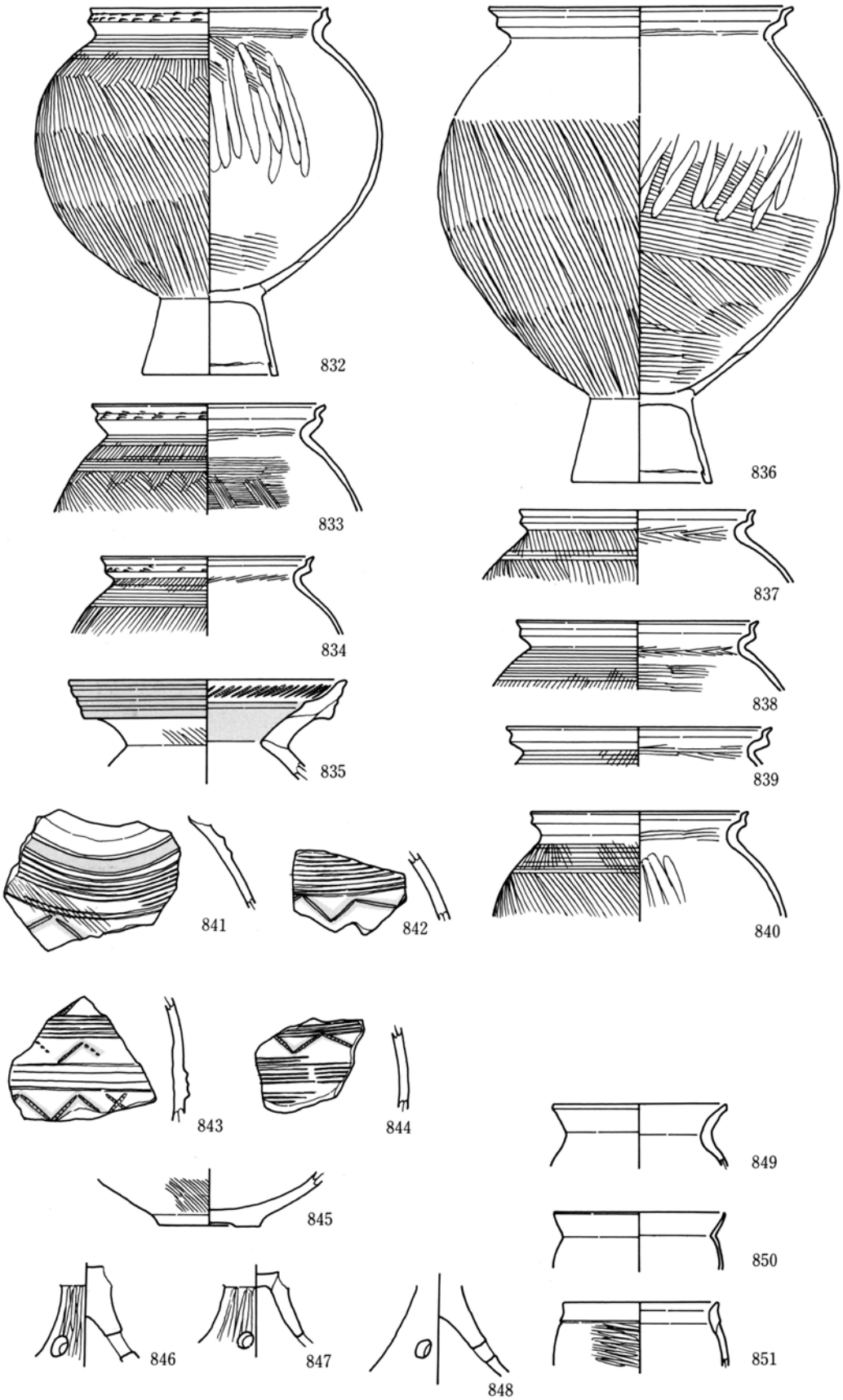
SB55


786
787
788
789
790
791
792
793
794
795
796
797
798
799
800
801
802

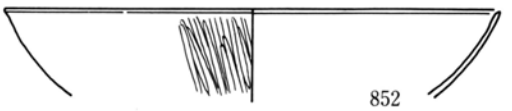
SB56

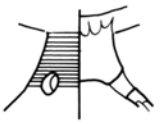

803
804
805
806
807
808
809
810
811
812
813
814
815
816
817
818
819
820
821
822
823
824
825
826
827
828
829
830
831
0
20cm

SB59


832
833
834
835
836
837
838
839
840
841
842
843
844
845
846
847
848
849
850
851

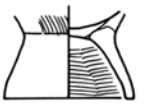
SB63

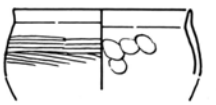

852


853

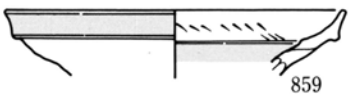
854

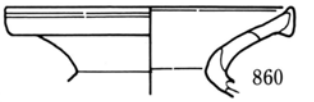
855


856

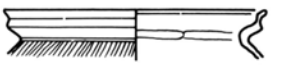

857

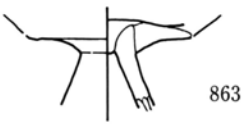
858


859

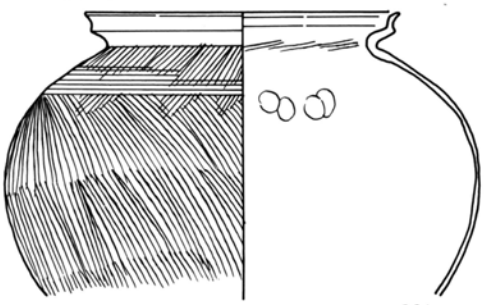

860

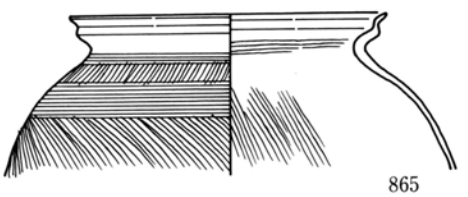
861


862

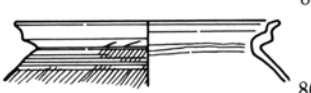

863

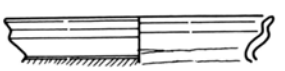
SB64

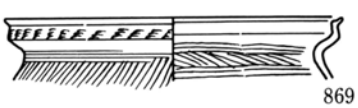

864

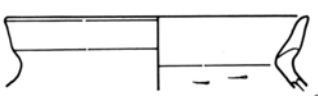

865

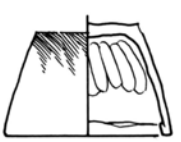
866

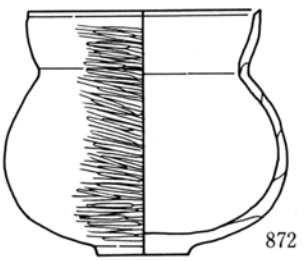

867

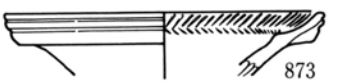

868

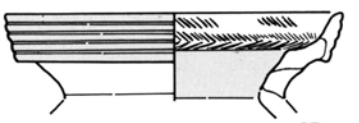

869

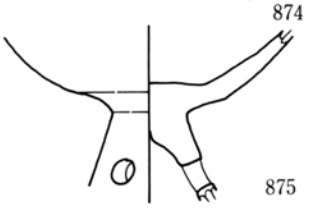

870

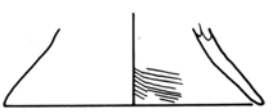

871

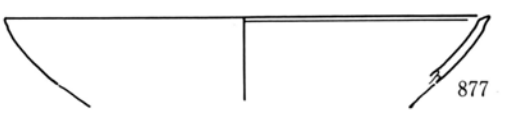

872

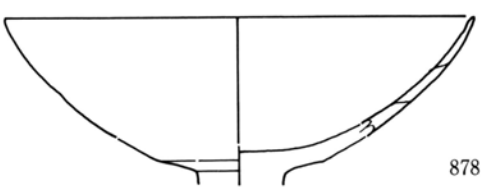

873

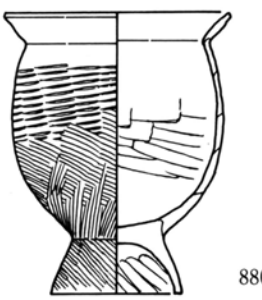

874


875

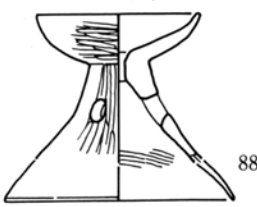

876

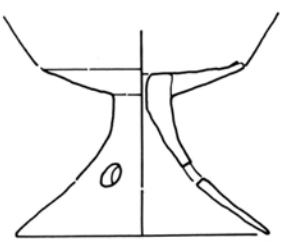

877


878

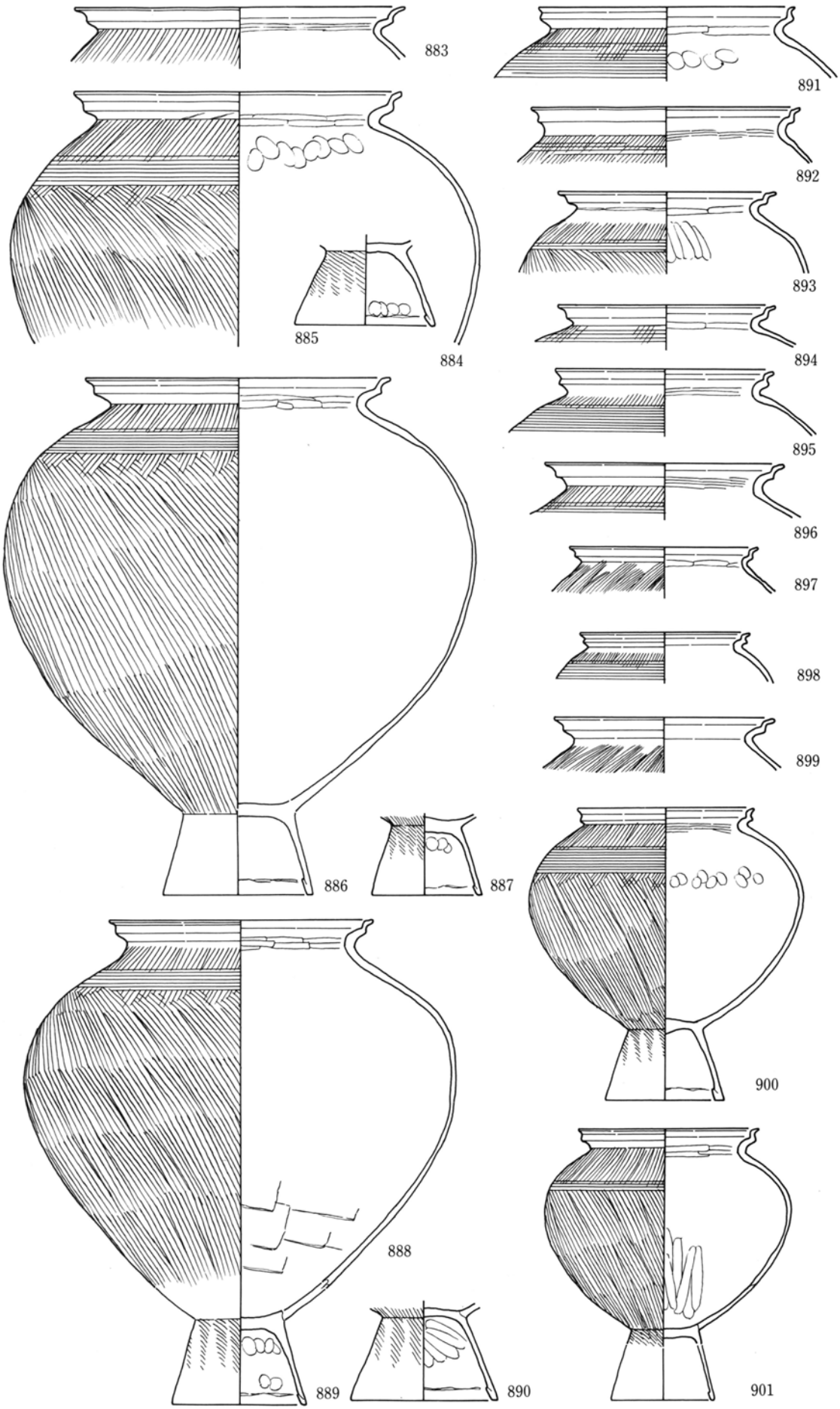

880

881

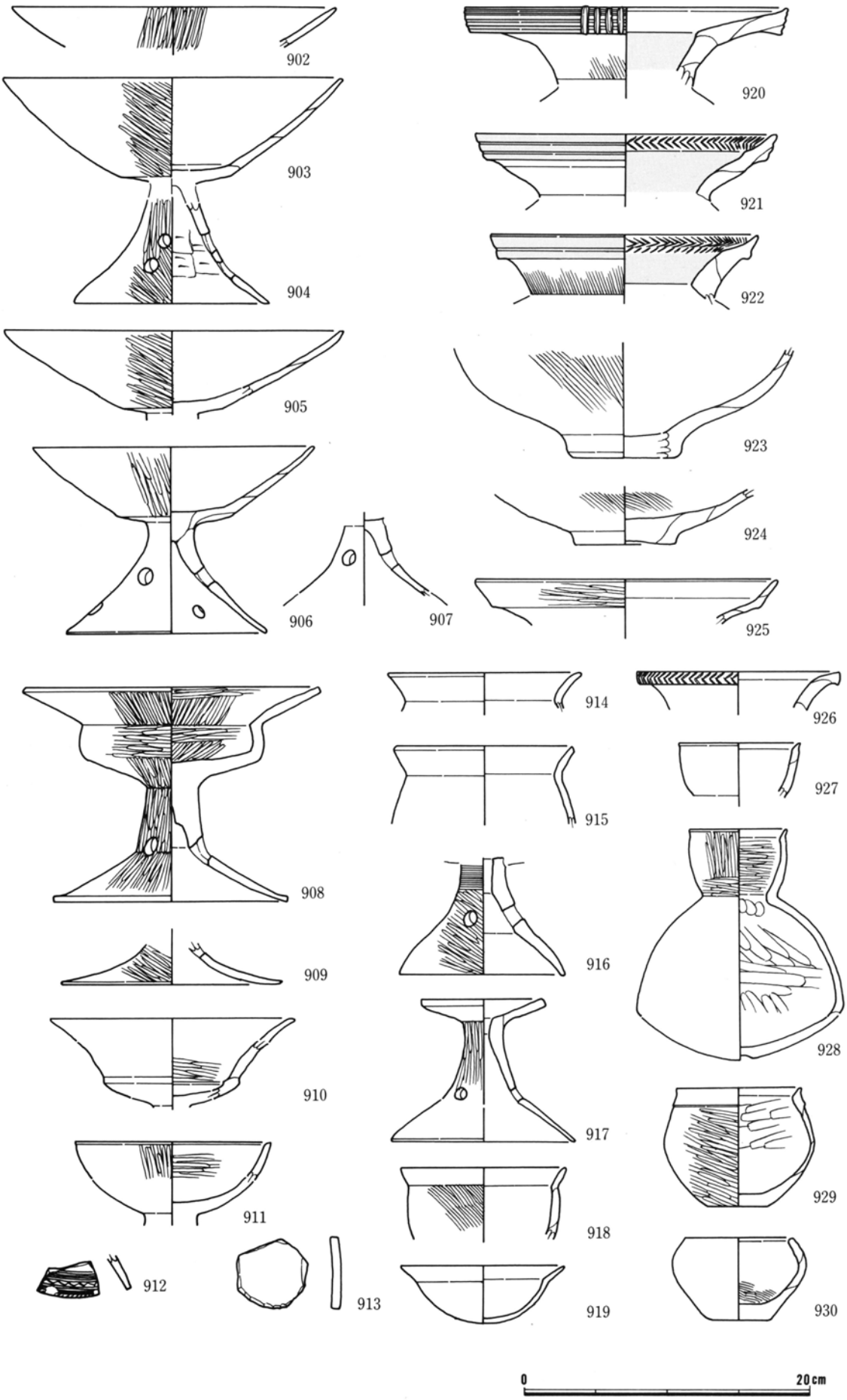

882


879

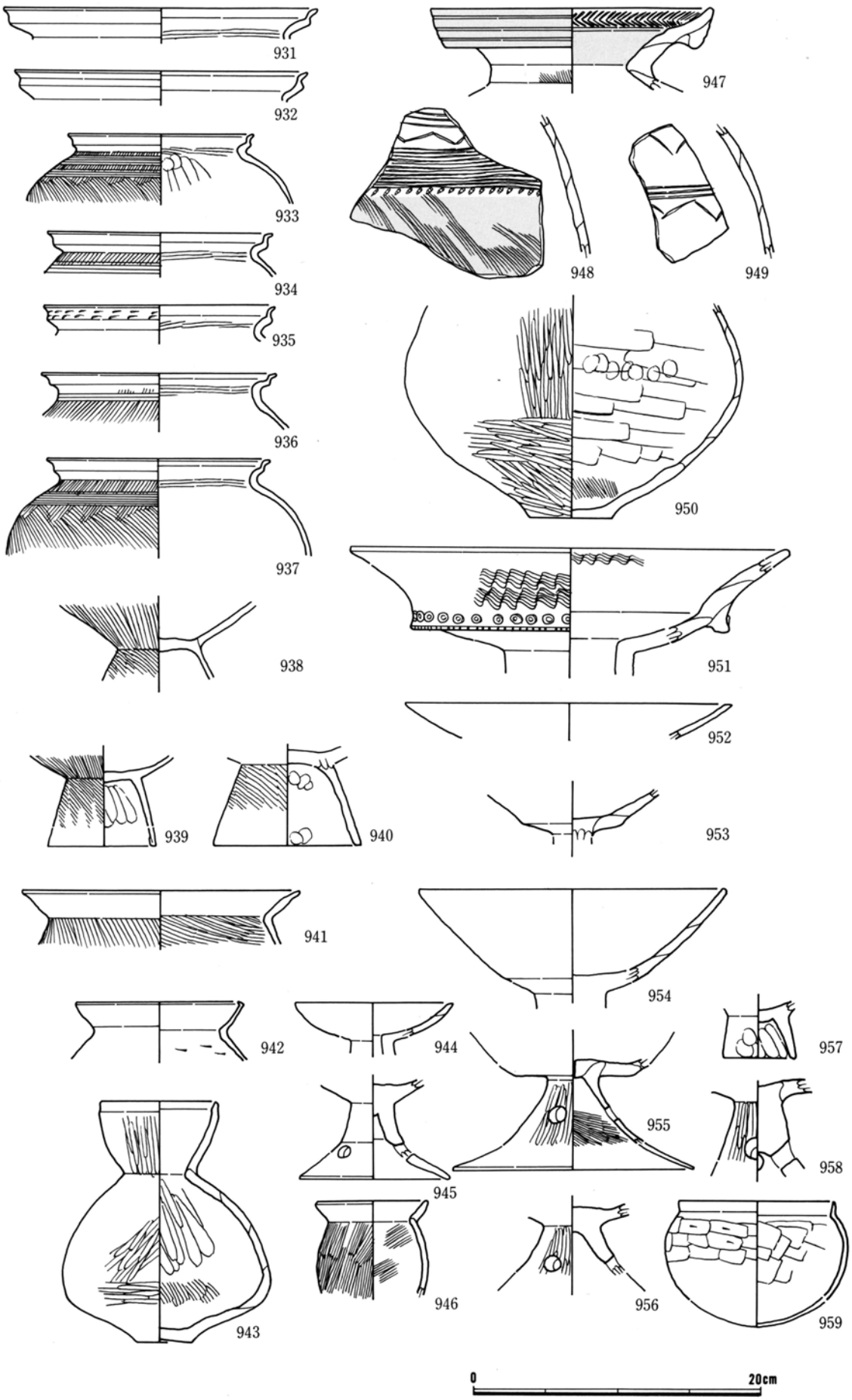
SB60


883
884
885
886
887
888
889
890
891
892
893
894
895
896
897
898
899
900
901

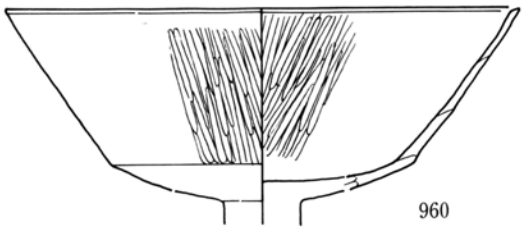
SB60


902
903
904
905
906
907
908
909
910
911
912
913
914
915
916
917
918
919
920
921
922
923
924
925
926
927
928
929
930
0
20cm

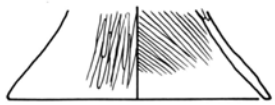
SB65


931
932
933
934
935
936
937
938
939
940
941
942
943
944
945
946
947
948
949
950
951
952
953
954
955
956
957
958
959
0
20cm

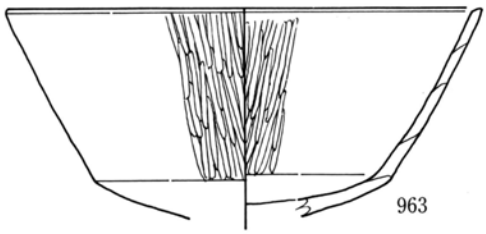
SB66


960

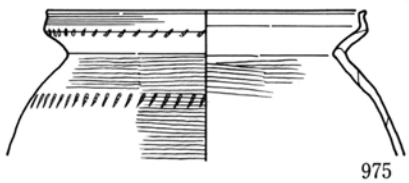
961

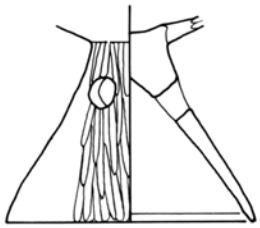

962

SB67

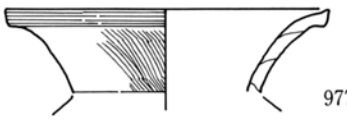

963

974

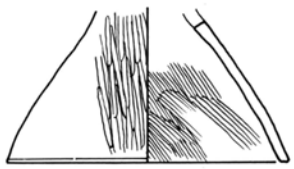

975

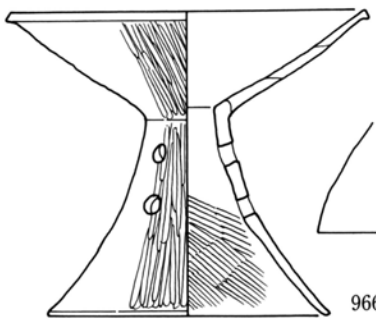

964

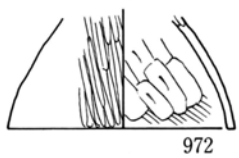
976

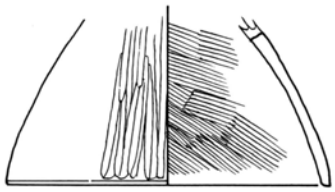

977

965

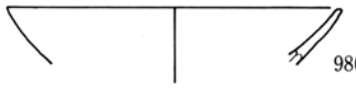

978

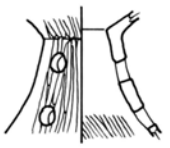

966


972

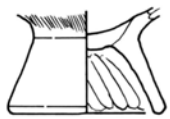

979

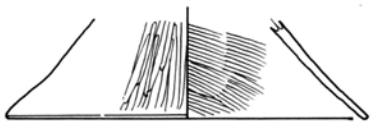
967

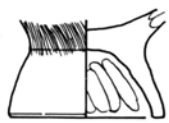

980

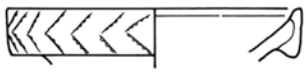

968

973

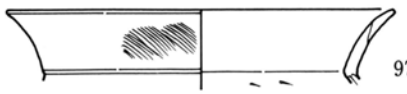

981


969


982

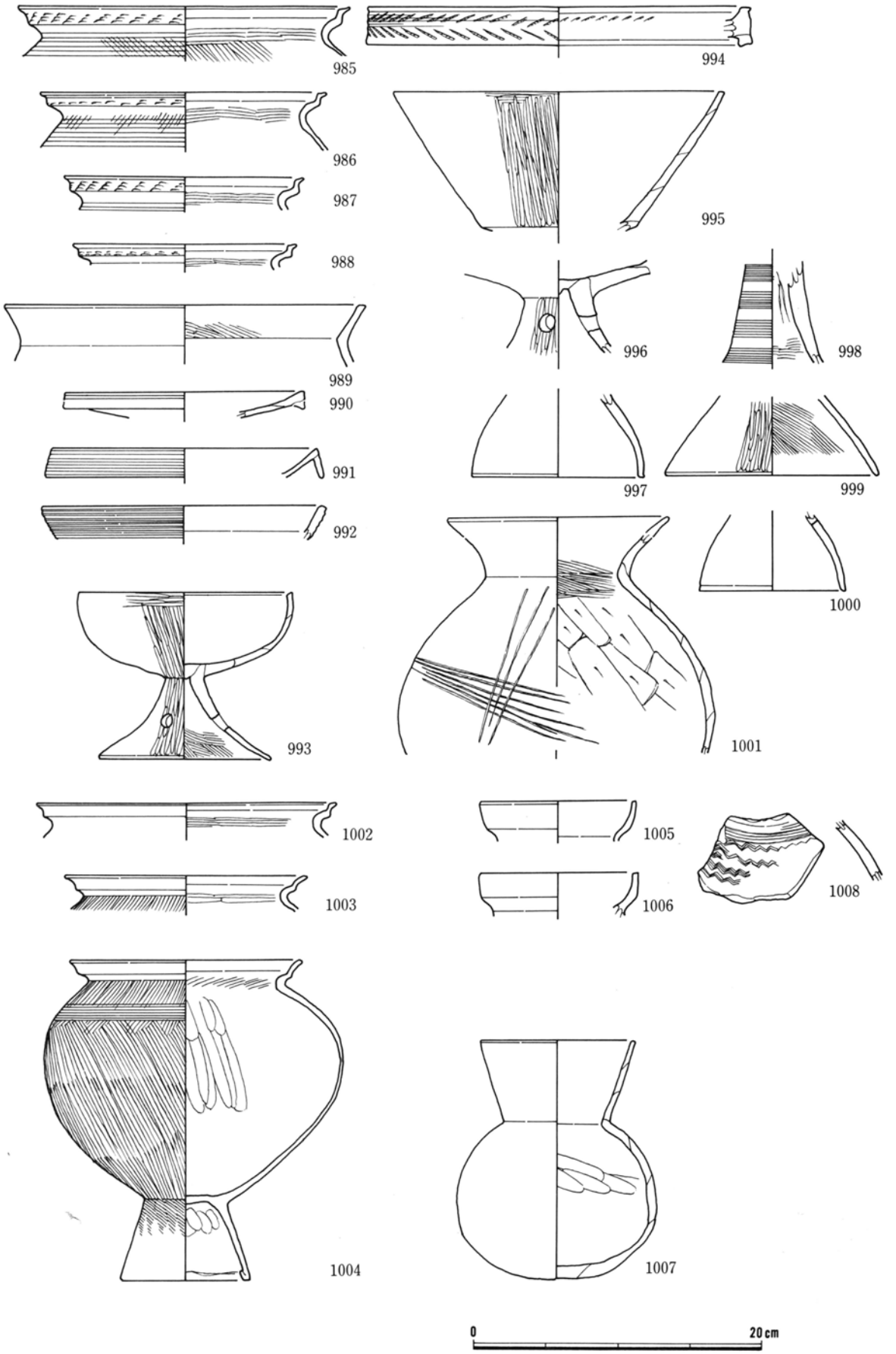

970

983

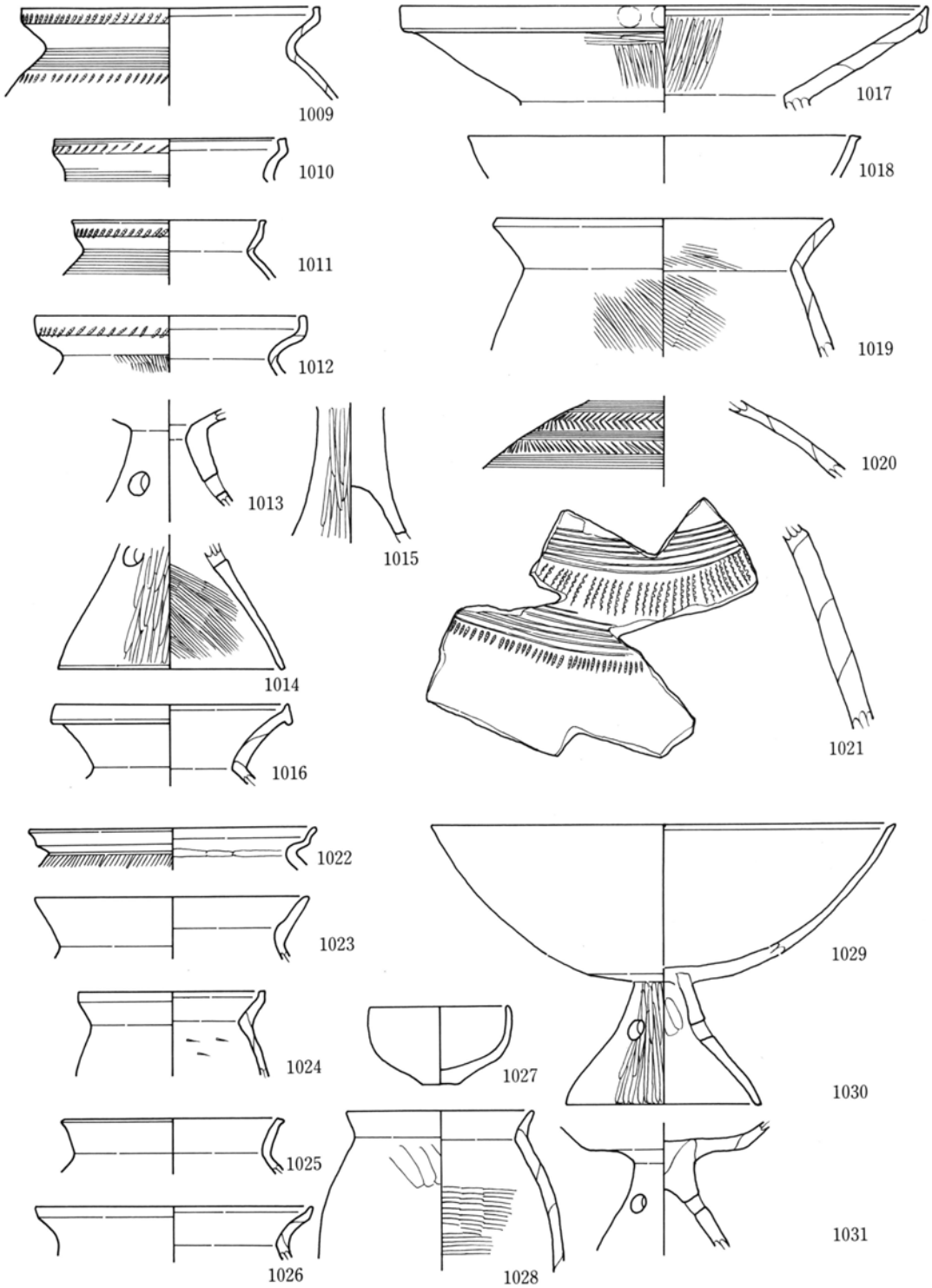

971

984

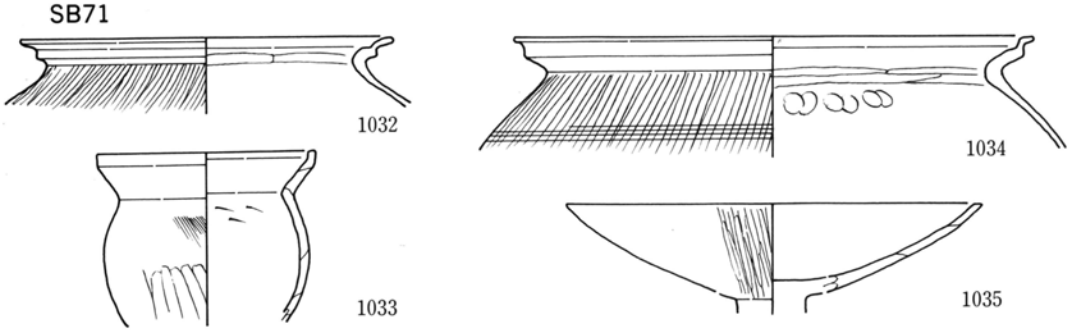
SB68


985
986
987
988
989
990
991
992
993
994
995
996
997
998
999
1000
1001
1002
1003
1004
1005
1006
1007
1008
0
20cm

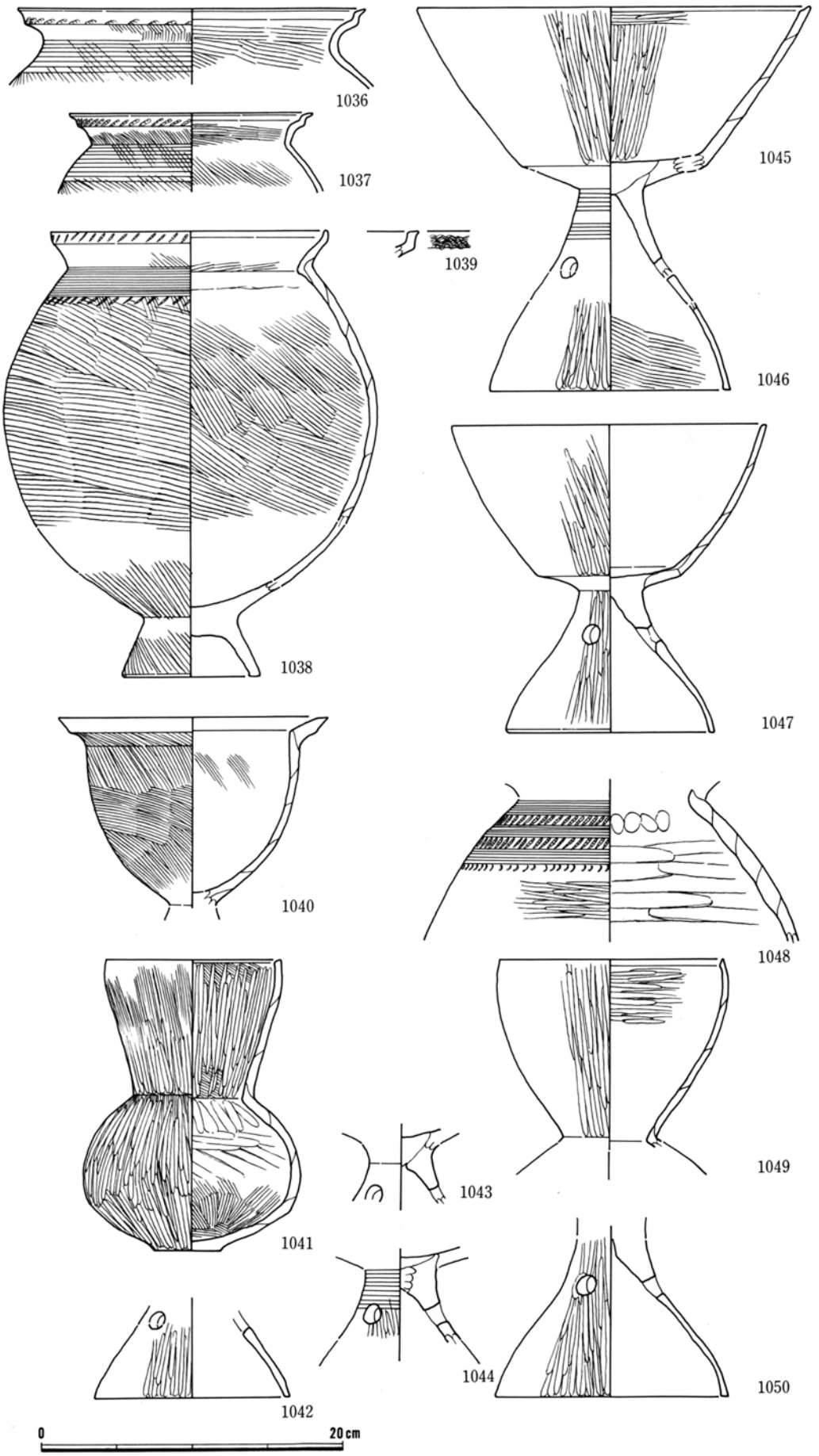
SB69


1009
1010
1011
1012
1013
1014
1015
1016
1017
1018
1019
1020
1021
1022
1023
1024
1025
1026
1027
1028
1029
1030
1031

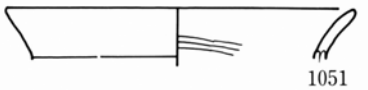
SB71


1032
1033
1034
1035

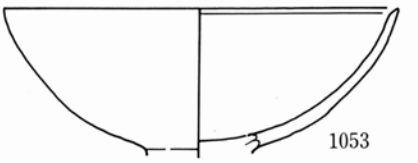
SB75

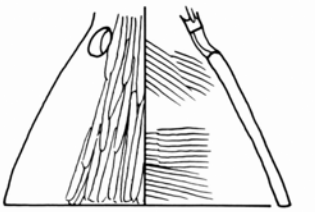

1036
1037
1038
1039
1040
1041
1042
1043
1044
1045
1046
1047
1048
1049
1050
0
20cm

SK26


1051

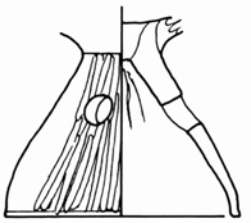
1052

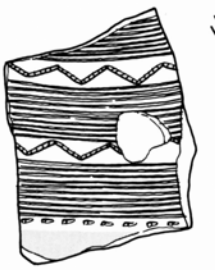

1053


1054

SK29

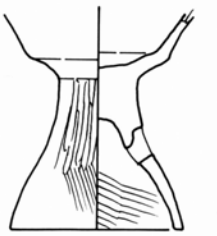
1055


1056

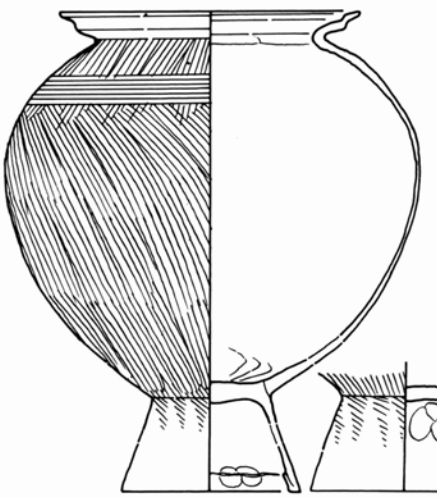


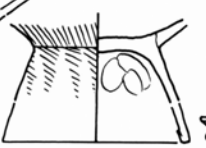
1057

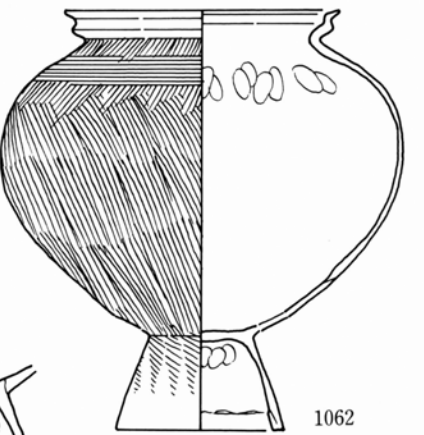
1058


1059

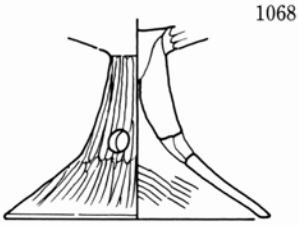
SK30

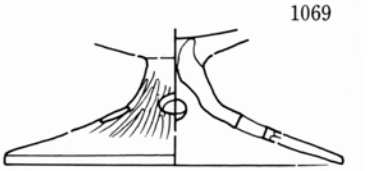

1060

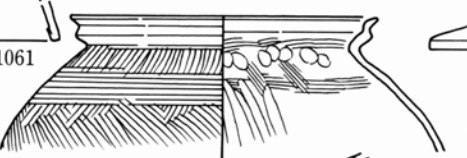

1061

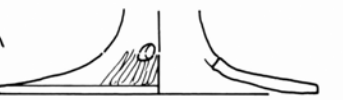

1062

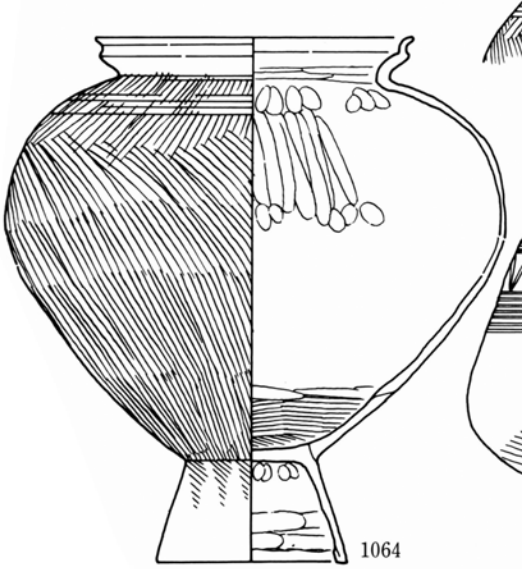
1068

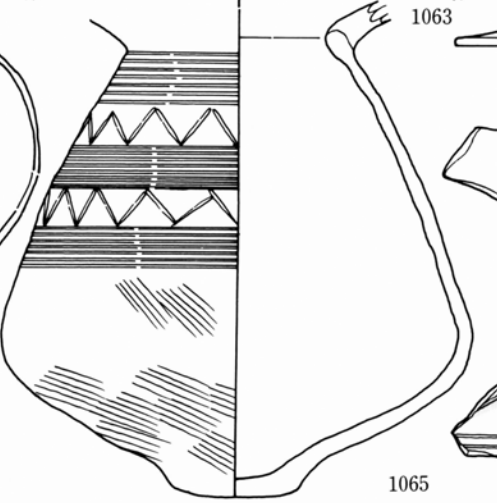

1069


1070


1063


1071

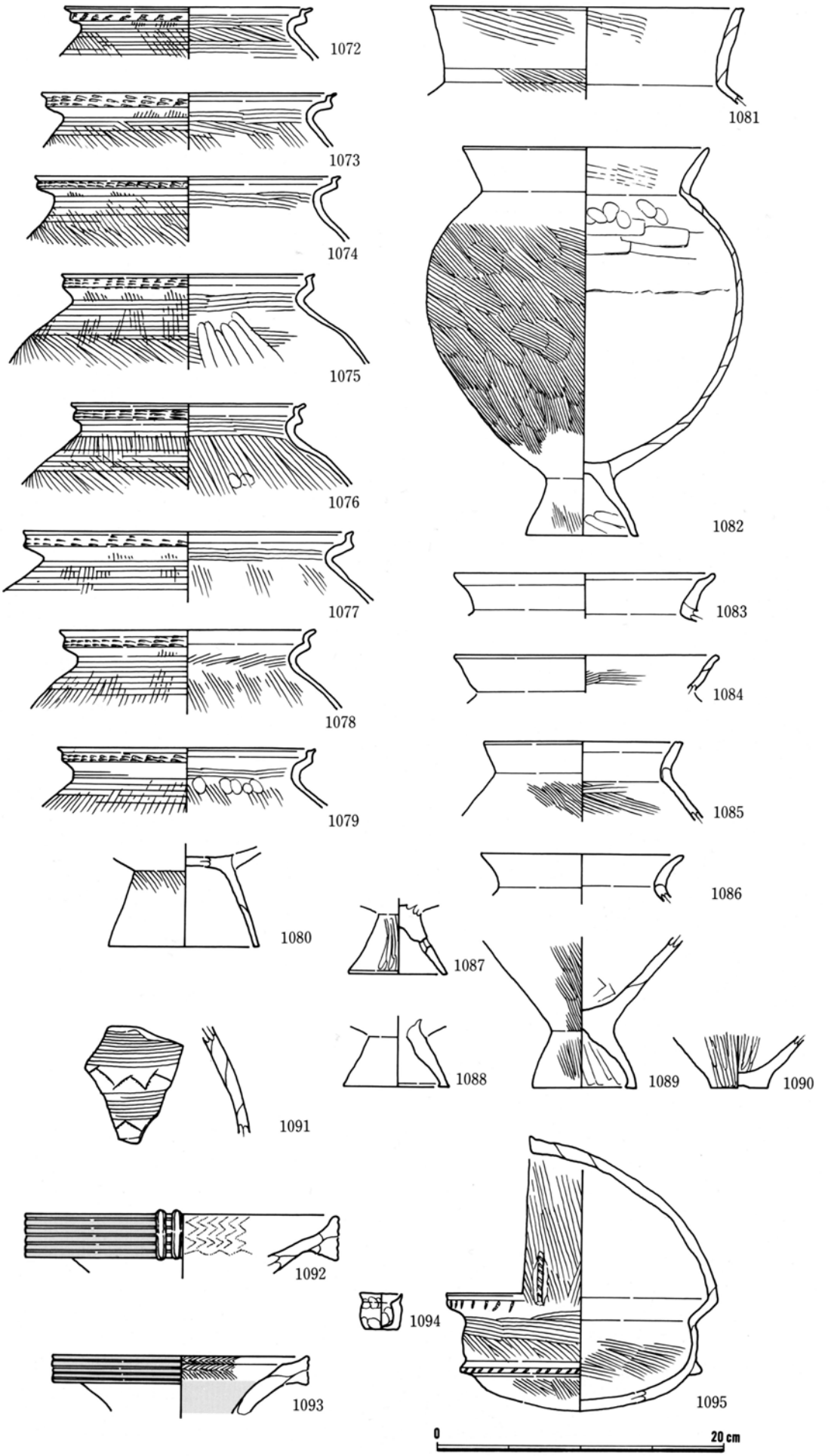

1064


1065

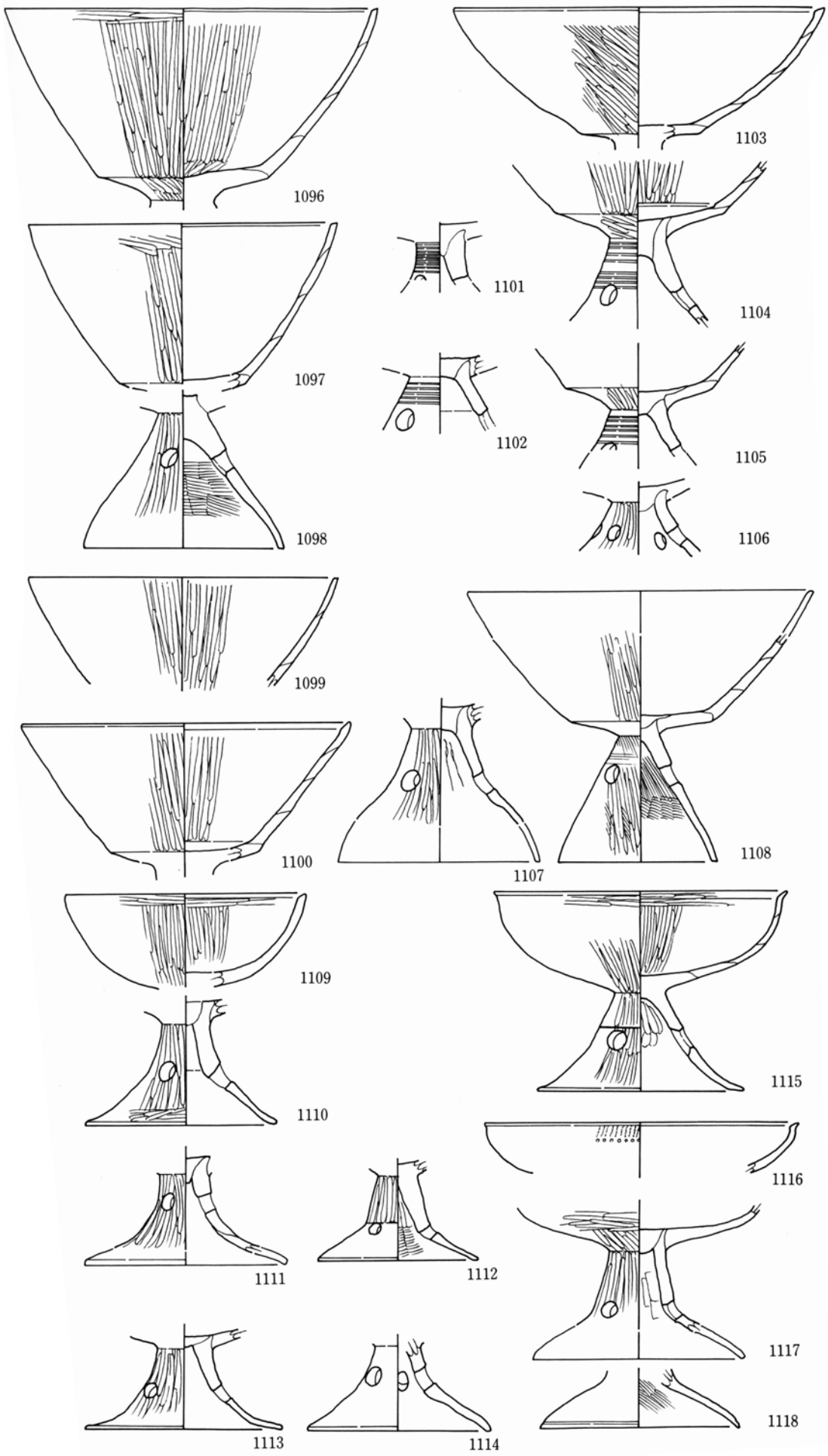
1066

1067

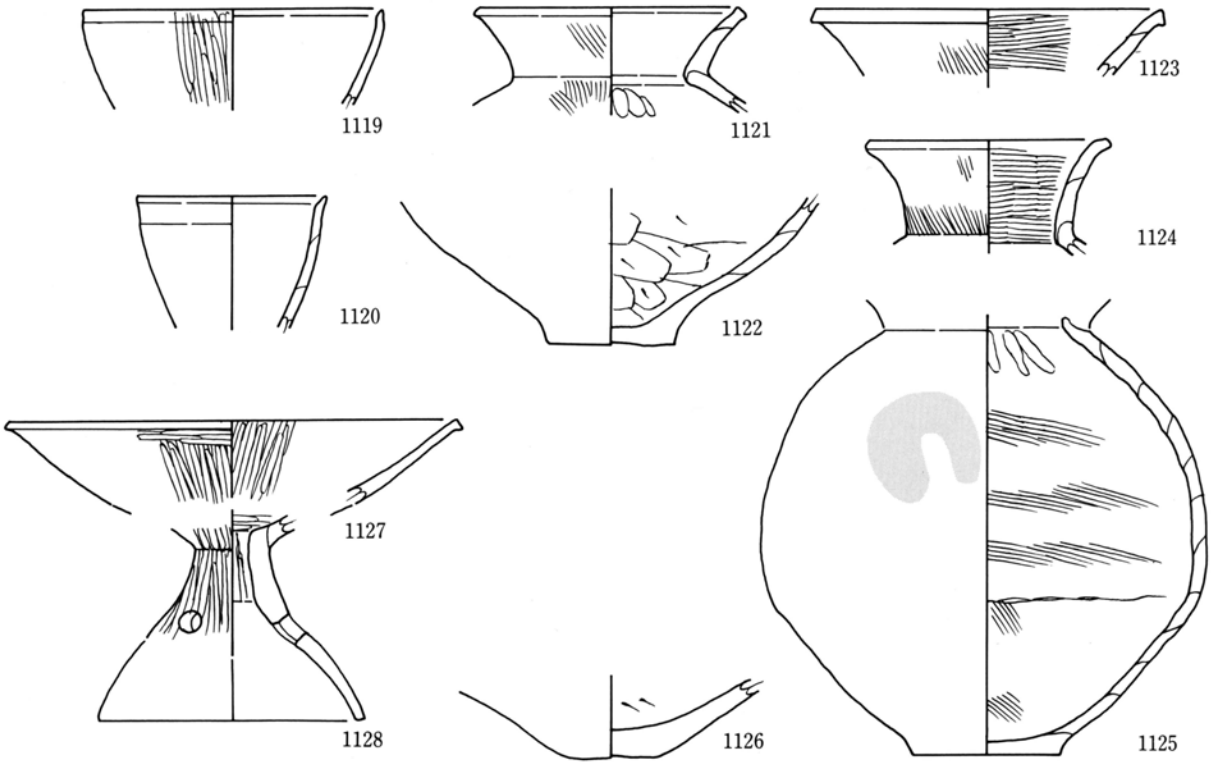
SK50


1072
1073
1074
1075
1076
1077
1078
1079
1080
1081
1082
1083
1084
1085
1086
1087
1088
1089
1090
1091
1092
1093
1094
1095
0
20 cm

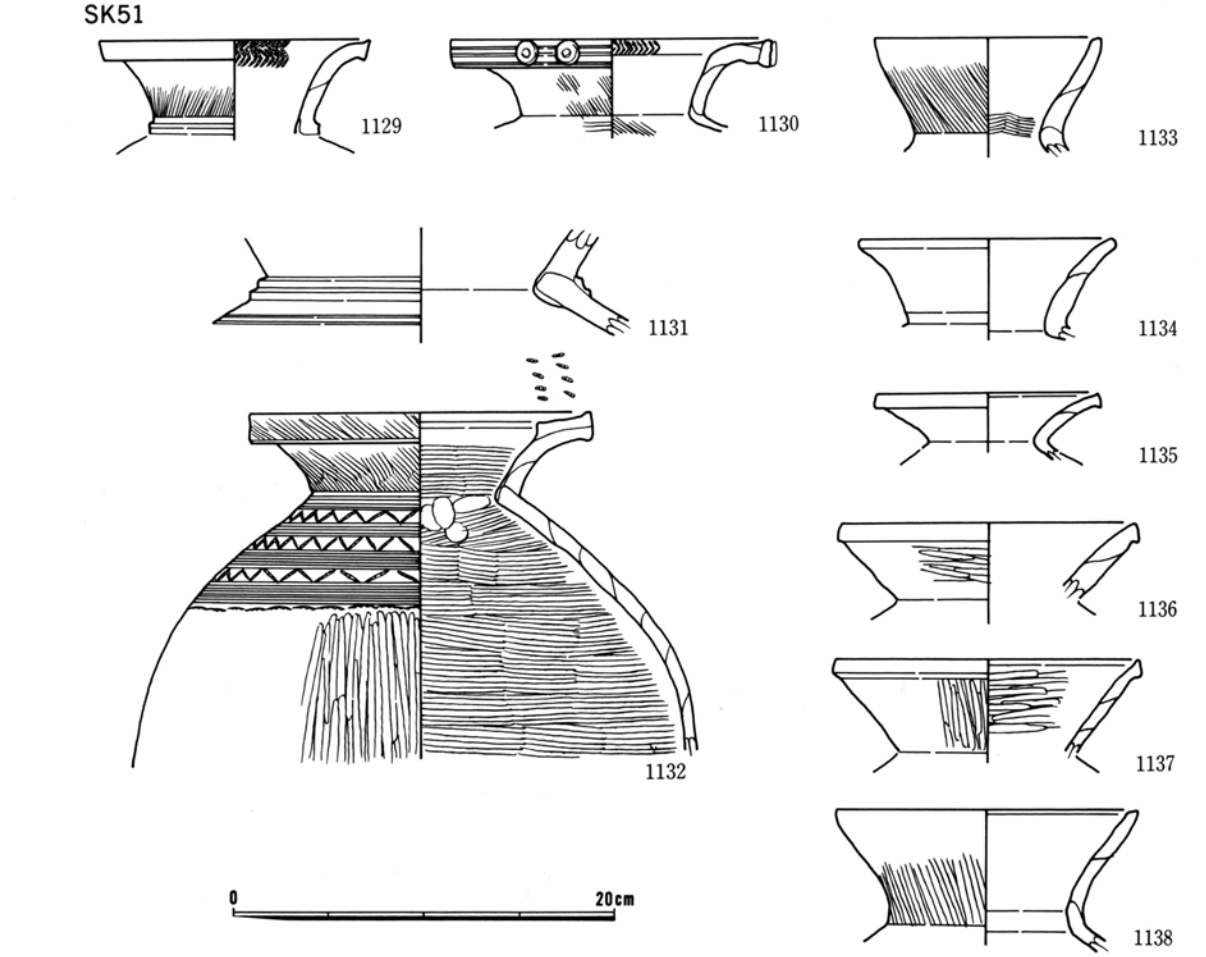
SK50


1096
1103
1101
1104
1097
1102
1105
1098
1106
1099
1100
1107
1108
1109
1115
1110
1116
1111
1112
1117
1113
1114
1118

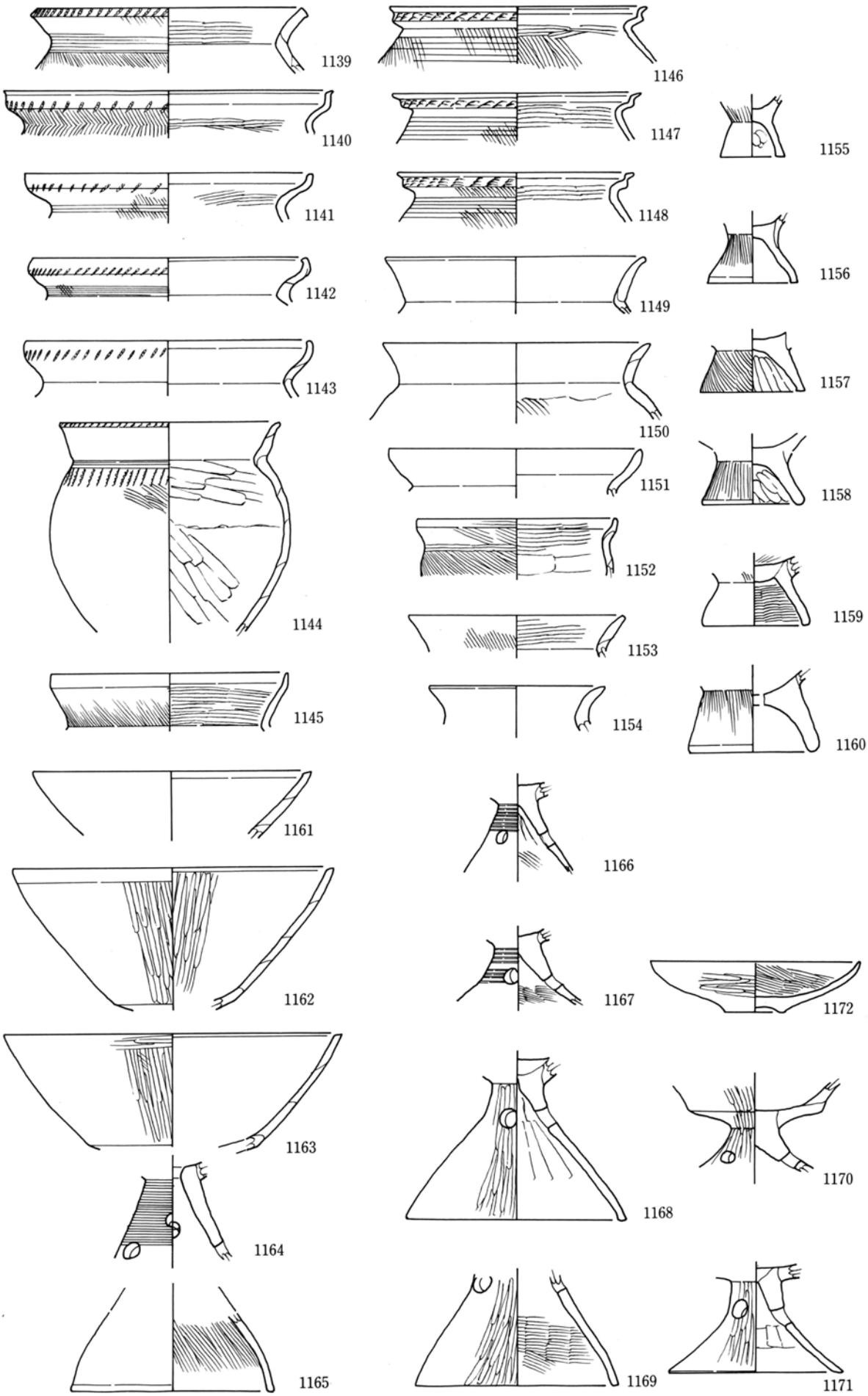
SK50


1119
1121
1123
1124
1120
1122
1127
1128
1126
1125

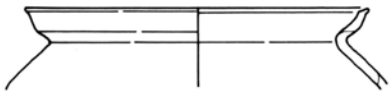
SK51

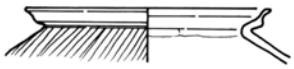

1129
1130
1133
1131
1134
1135
1136
1132
1137
1138
0
20cm

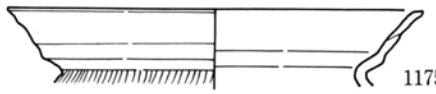
SK51

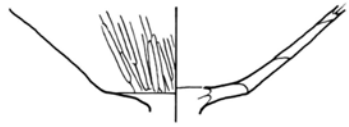

1139
1140
1141
1142
1143
1144
1145
1146
1147
1148
1149
1150
1151
1152
1153
1154
1155
1156
1157
1158
1159
1160
1161
1162
1163
1164
1165
1166
1167
1168
1169
1170
1171
1172

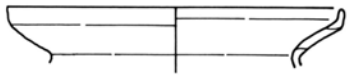
SK18


1173

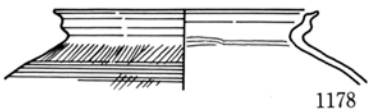

1174

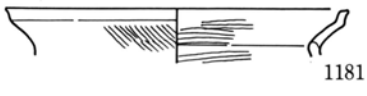

1175

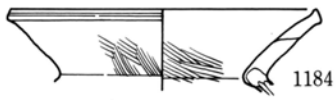

1176

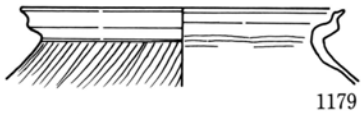

1177

SK19


1178

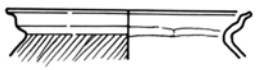

1181

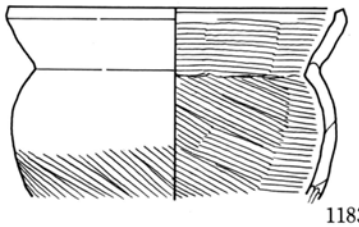

1184


1179

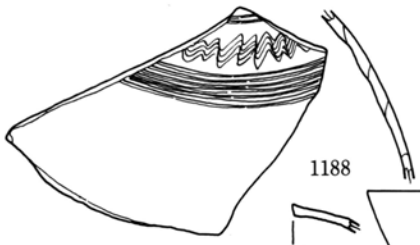
1182

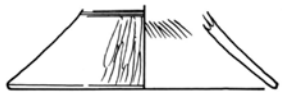
1185


1180

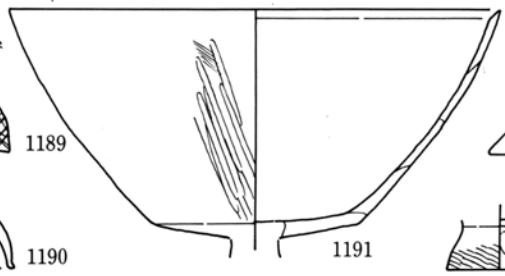

1183

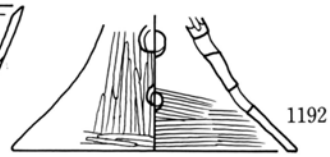
1186

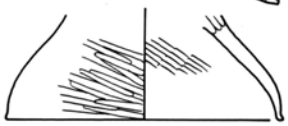

1188


1187

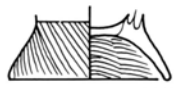
1189


1191

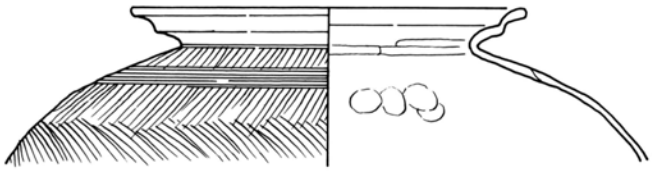

1192

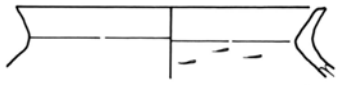

1190

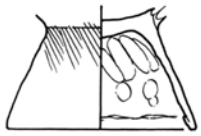
1193

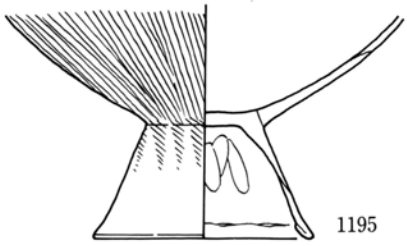

1194

SK20




1197

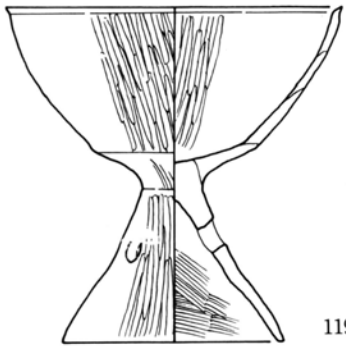

1196


1195

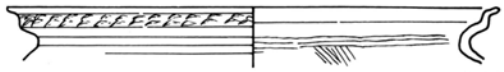
0 20cm

SZ06

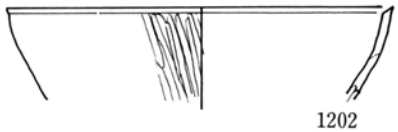
1198

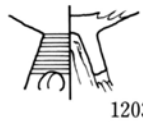

1199

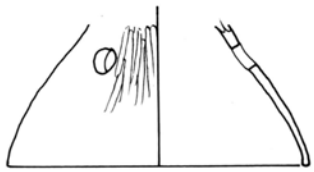
SZ05


1200

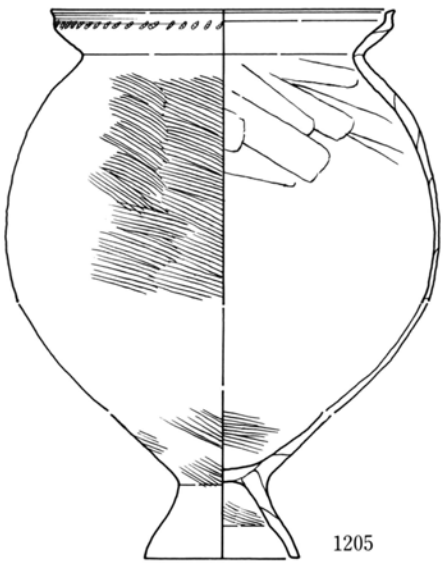
1201


1202

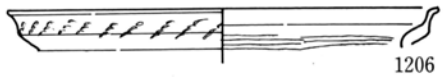

1203

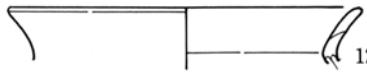

1204

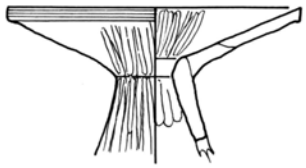
SB22


1205

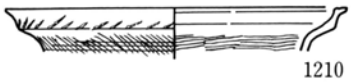
1209

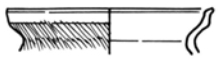

1206

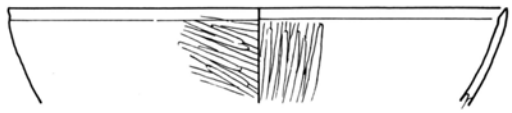

1207

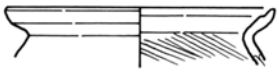

1208

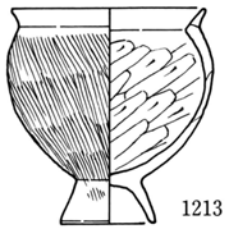
SB16

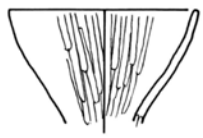

1210


1212

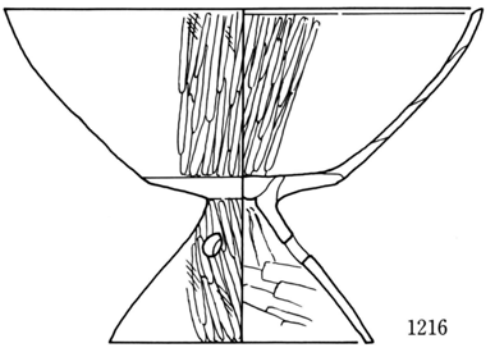

1214

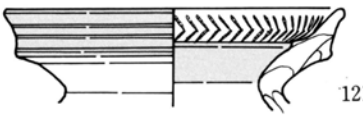

1211

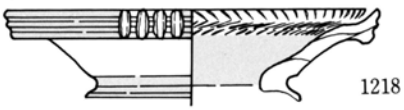

1213

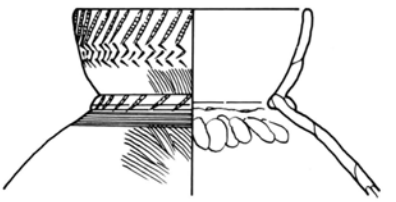

1215

SU03

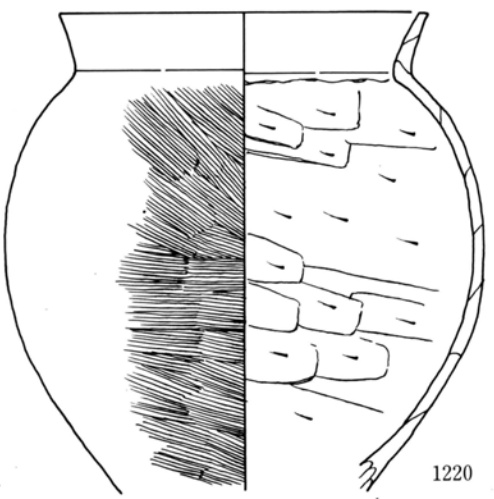

1216

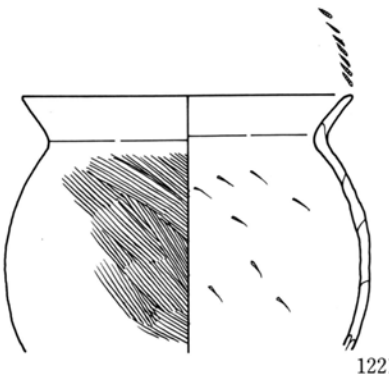

1217

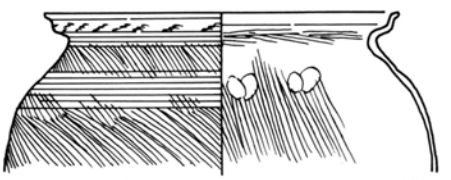

1218

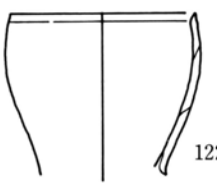

1219

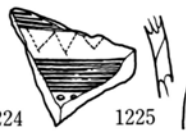
SU04

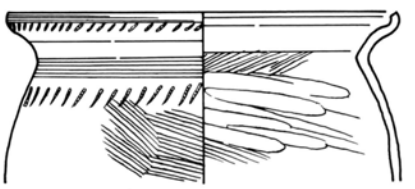

1220


1221

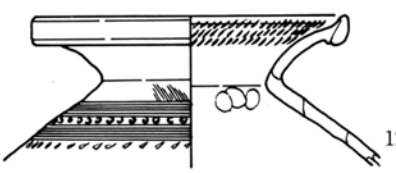

1222

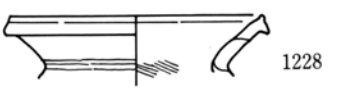

1224

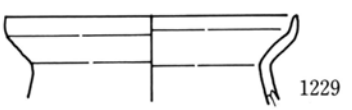

1225

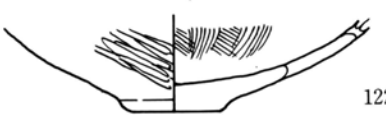

1223

SD09

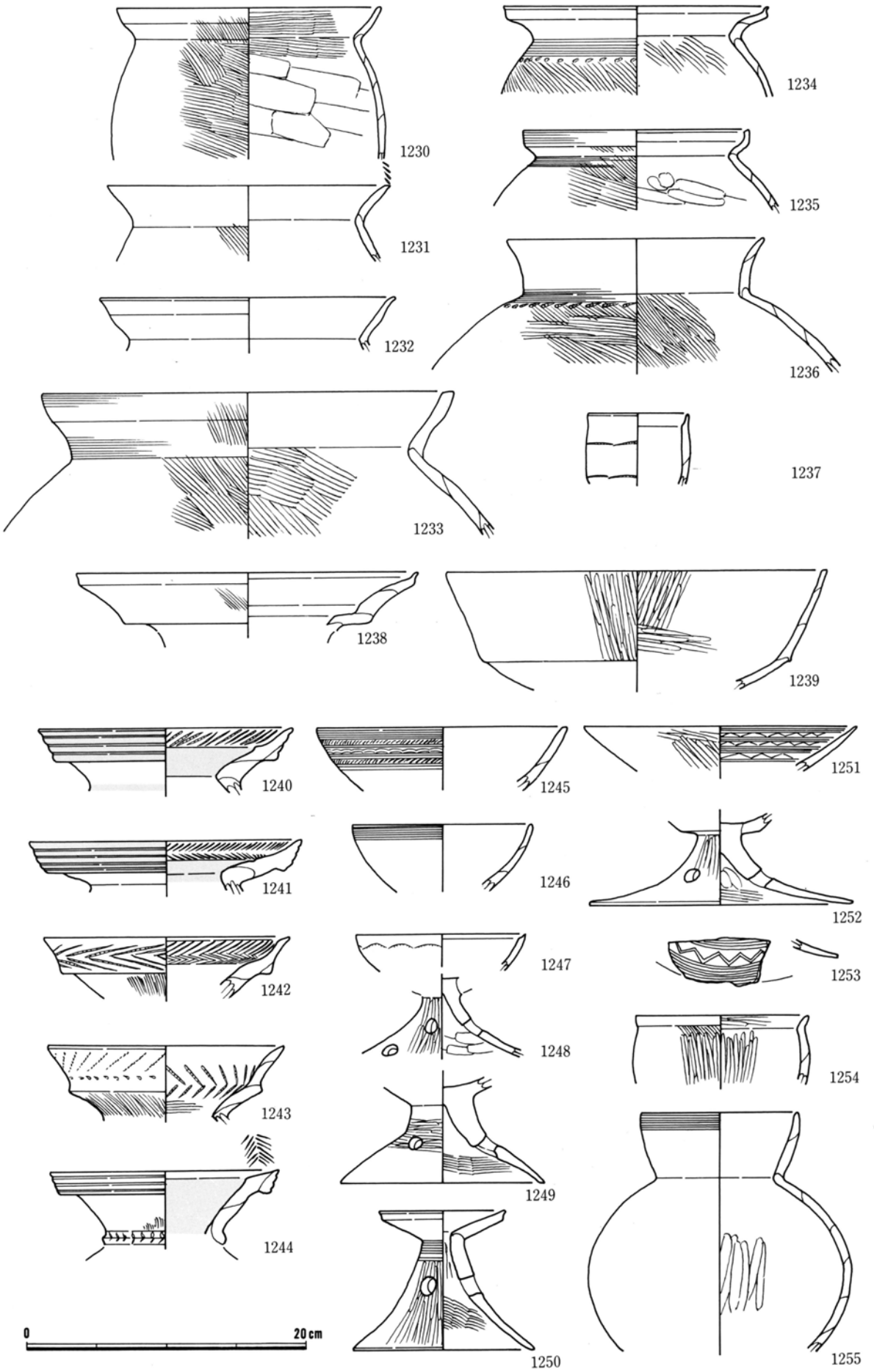

1226


1228


1229


1227

その他


1230
1231
1232
1233
1234
1235
1236
1237
1238
1239
1240
1241
1242
1243
1244
1245
1246
1247
1248
1249
1250
1251
1252
1253
1254
1255
0
20cm

図版53

1．SZ01

北から

2．SZ01

東から

3．SZ01 調査風景

南から

1．SZ02

東から

2．(左)SZ01　北から

3．(右)SZ01　東から

北溝屈曲部
遺物出土状況

SZ01
北溝屈曲部
遺物出土状況

4．(左)22・25

5．(右)21—図版番号

6．(左)砥石（第17図—1）

7．(右)20—図版番号

図版55

1．SB27

北から

2．SB12

西から

3．SK30 遺物出土状況

北から

1．D区調査区全景

北から

2．SB50・51・52
SB39周辺（D区中央）

南から

3．SB53～60周辺

（D区北部）

東から

図版57

1．C区南部

北から

2．SB06・07・08・SK30周辺

（C区南部）

西から

3．SB18・19・20周辺

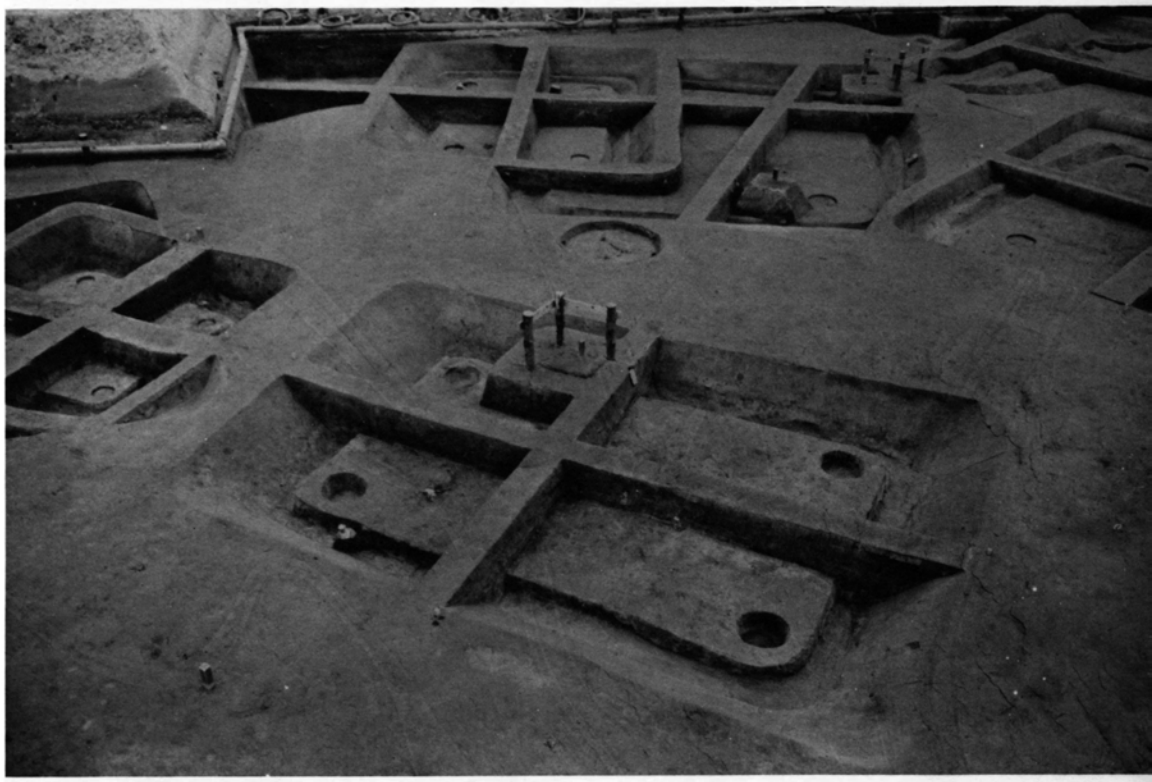
（C区南部）

北から

図版58

1．SB80

（D区南端）
南から



2．SB52

（D区中央）
北から

3．畝状遺構

（D区南部）
南から

図版59

1．SE31（A区）

北から

2．SE32（A区）

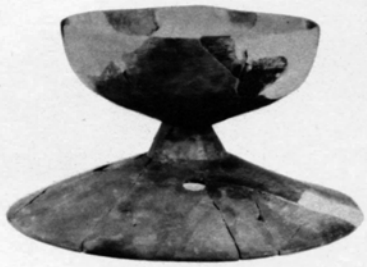
南から

3．井戸・土坑群（E区）

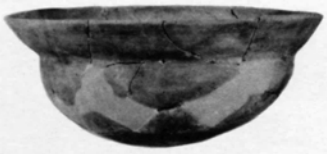
北から

図版60

22



23



25

5

24

26

20

SZ01

1：3

図版61

740

21

480

124

84

77

111

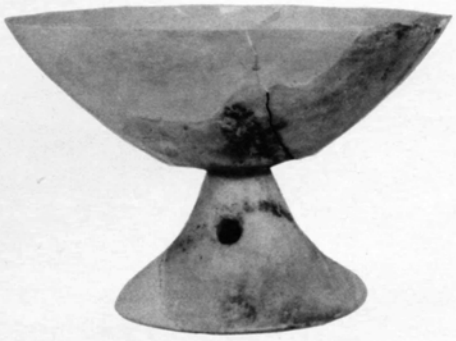
117

SZ01—21
SZ02—111・117
SZ04—84・77
SB01—124
SB39—480
SB51—740

1：3

105

115



107

104

90

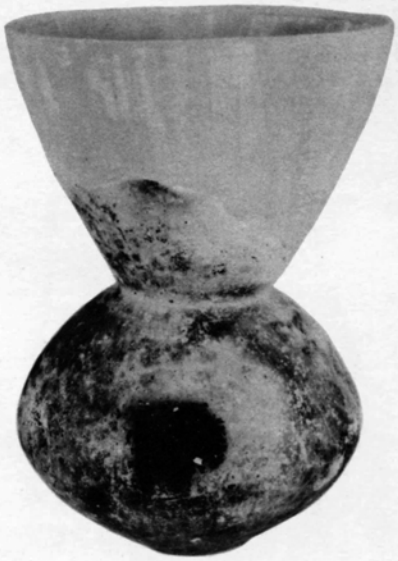
98

101

SZ01

1：3

140



149

141

146

142

145

SB02

1：3

228

167

156

155

157

153

SB17—228

SB03—153
155
156
157
167

1：3

図版65

459

252

250

426

402

182

235

229

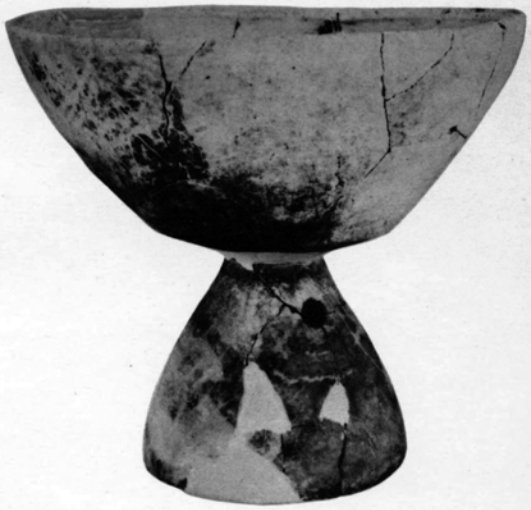
SB06—182
SB12—235
246
250
252
SB17—229
SB27—347
SB31—426
SB33—402
SB46—459
1：3

347

246

図版66

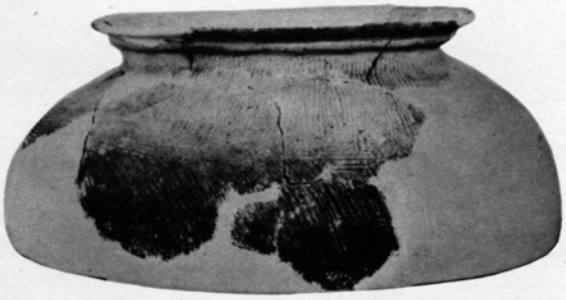
553



617

600

872



565

882

583

592

SB41—553
SB48—617
SB64—872
882
SB45—565
583
592
600

1：3

884

901

888
889

900

886

908

SB60

(左)1：4
(右)1：3

906

928

929

930

1250

1004

993

966

943

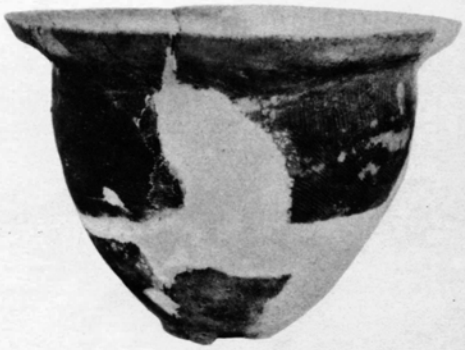
SB60—906
928
929
930
SB65—943
SB67—966
SB68—993
1004
SD11—1250
1：3

図版69

1047

1041

1038



1040

1064

1062

SB75—1038
1040
1041
1047
SK30—1062
1064

1：3

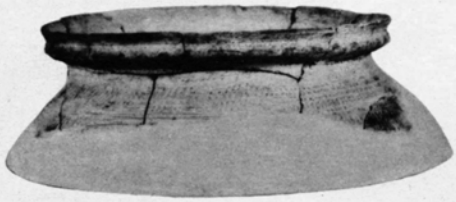
図版70

1108

1095

1115

1199



1078

1219

1082

1216

SK50—1078
1082
1095
1108
1115
SZ06—1199
SU03—1216
1219

1：3

1132

11

12

14

10

SK51—1132
NR01—10
11
12
14
（第19図）

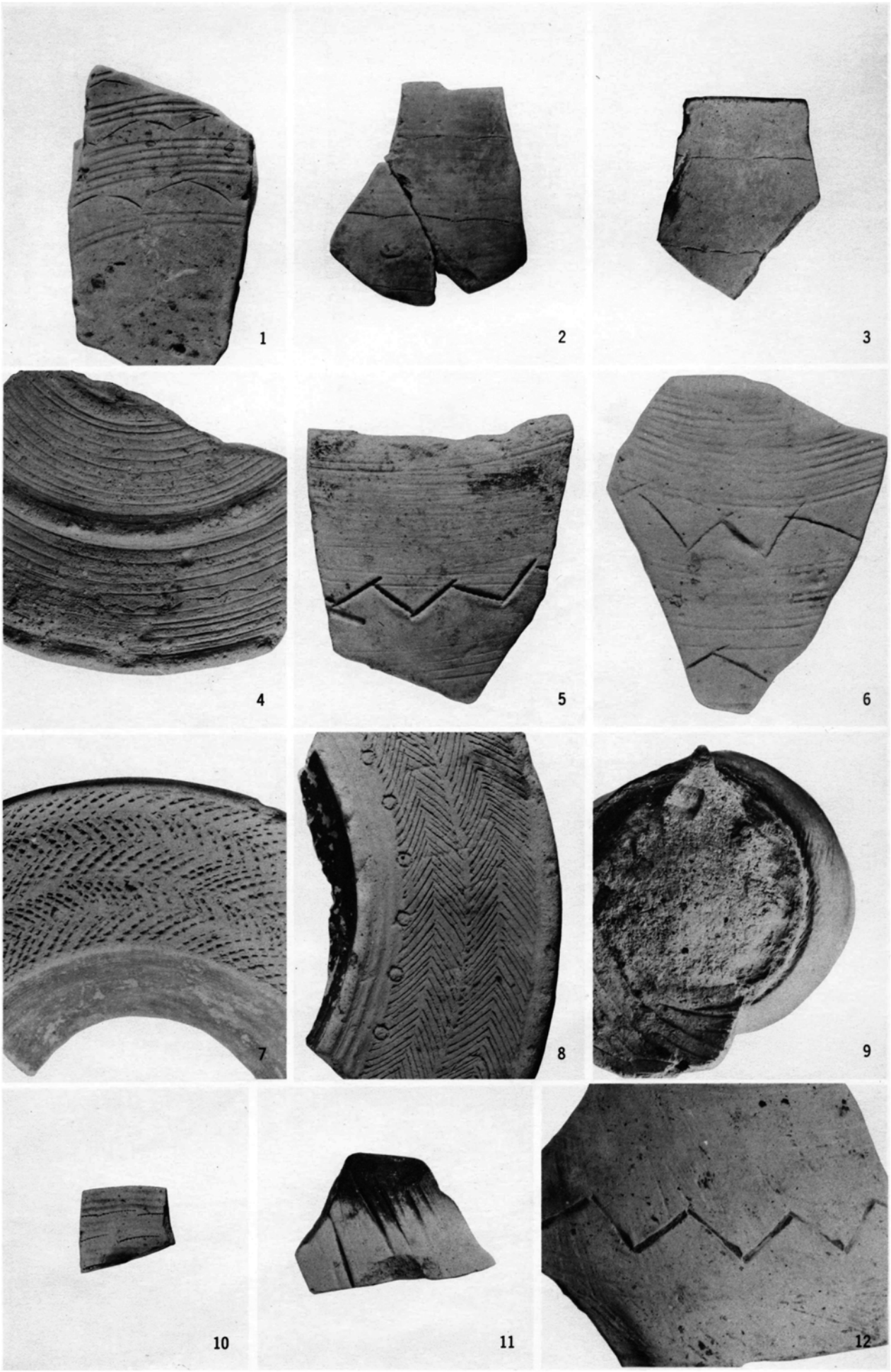
10・14は1：4
他1：3

廻間SB02

廻間Ⅰ式

廻間II式

廻間III式



1・高杯内面文様　2・3壺C（ヒサゴ壺）口頸部外面文様　4・10高杯脚部外面文様　5・6・12壺A（パレス壺）体部上半文様
7・8壺A（パレス壺）口縁内面文様　9・S字甕台部接合面指頭圧痕　11・土器再利用研摩具

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集

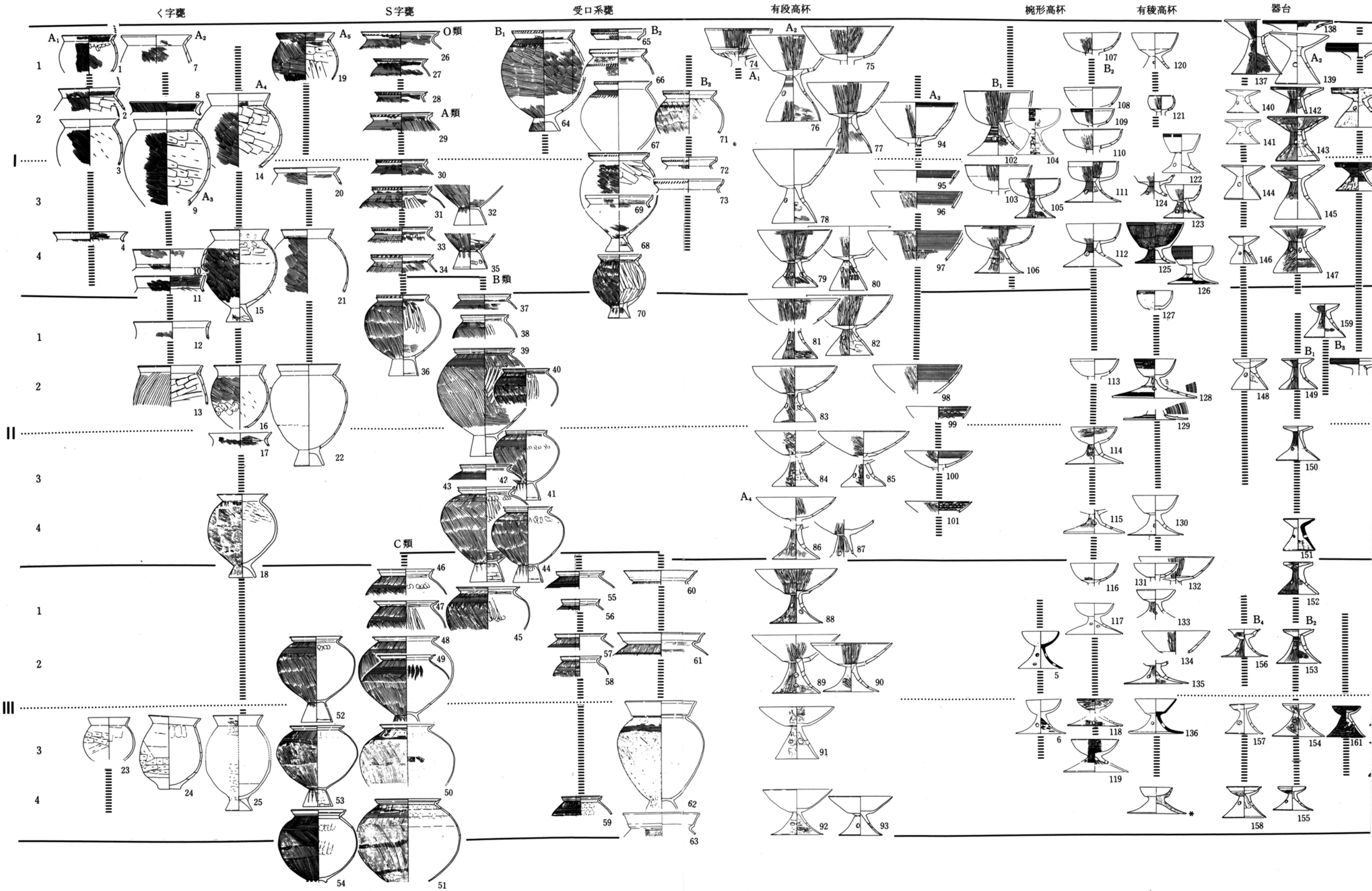
廻　間　遺　跡

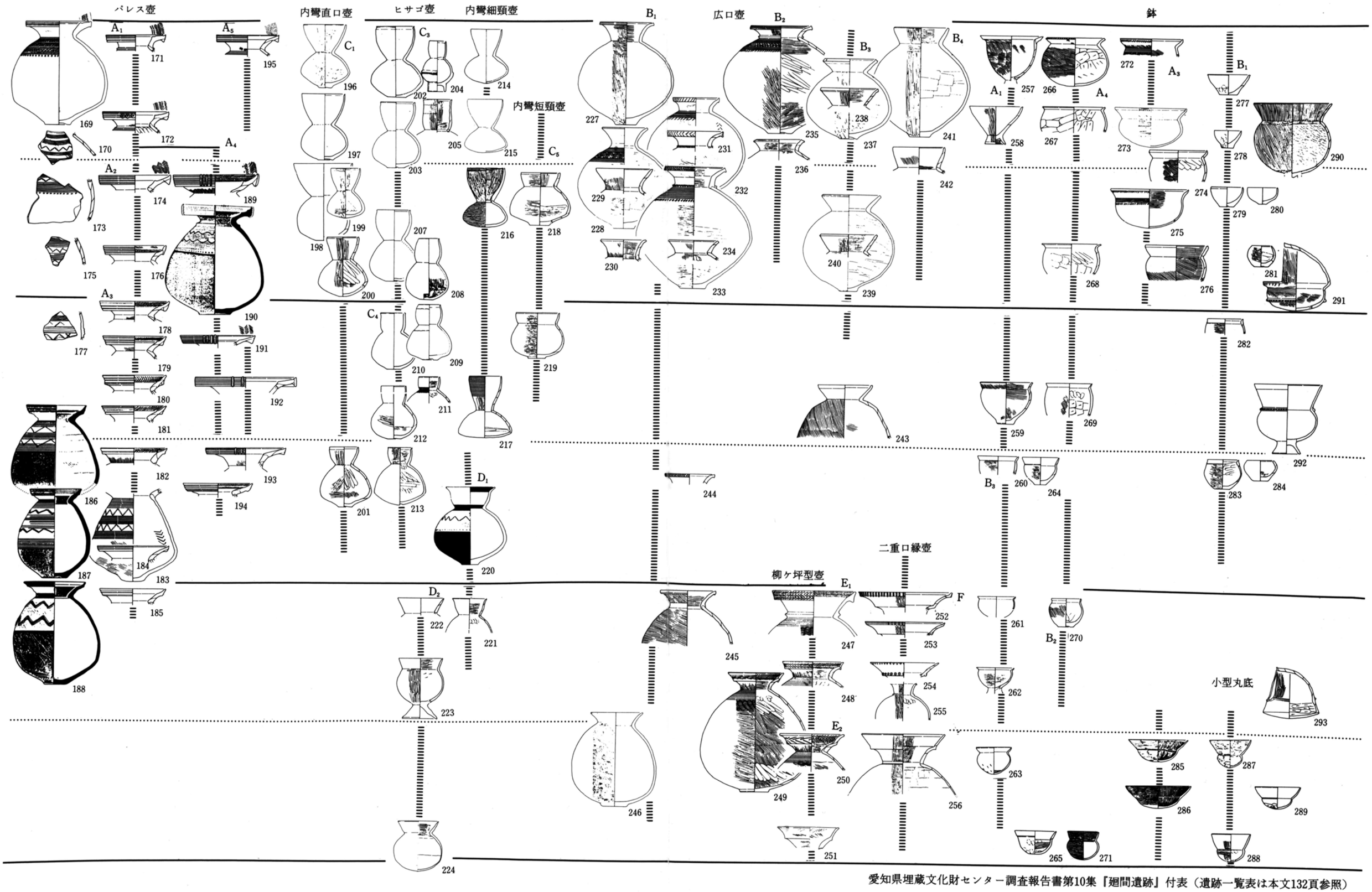
1990年3月31日

編集
発行　財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

印刷　西濃印刷株式会社

廻間式土器編年表





愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集『廻間遺跡』付表（遺跡一覧表は本文132頁参照）